

ようこそマイナス気質  
な転生者がいるAクラ  
スへ

死埜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比較的普通の人生を歩んできた主人公は、ひねくれた考え方を持っていた。

プラスの人生を歩んできたものしかきれいごとを理解できないように、マイナスの人生を歩んできたものことはマイナスの人生を歩まないとわからないのではないか。

その考え方から、マイナスを知りたいと思うようになっていた小坂零こさかれいは、車に轢かれて死んだ。

これは、死んだ彼がマイナスの人生を手に入れながらもマイナスの意味を見つけていくための物語。

8月4日

不定期更新化。それに伴いチラシの裏に移動

# 目次

1 話目	転生	〜原作前ダイジェスト	1
2 話目	入学	―	20
3 話目	初日の話	―	40
4 話目	初日の話	〜舞台裏	57
5 話目	二日目の話	―	79
6 話目	三日目の話	―	106
7 話目	三日目	〜舞台裏	126
8 話目	四月の終わり	―	153
9 話目	五月の初めの日	―	173
10 話目	五月の初めの日	Ⅱ	189
11 話目	五月の中頃のある日	―	206

1 2 話目	五月の中頃	〜舞台裏	221
1 3 話目	六月のある日	―	237
1 4 話目	七月の初め	―	259
1 5 話目	七月の初め	次の日	278
1 6 話目	七月の初め	次の日 Ⅱ	300
幕間	〜七月のある日	―	321
1 7 話目	七月の下旬	―	337
1 8 話目	豪華船旅行	初め	358
1 9 話目	豪華船旅行もとい、特別試験	―	373
一日目	―	―	391
幕間	〜夢の中、泡沫にて	―	391

	20 話目	特別試験	それから		412
	幕間	く泡沫の夢、夜が明けるく			
	425				
	21 話目	特別試験	最終日		453
	22 話目	特別試験	最終日	その後	
469	23 話目	特別試験	最終日	その後Ⅱ	
	幕間	竹本茂は決意する		487	
	24 話目	豪華船旅行	八日目		530
	25 話目	豪華船旅行	十日目		545
	26 話目	豪華船旅行	十日目	その後	560
718	33 話目	特別試験Ⅱ	二日目Ⅲ		
	32 話目	特別試験Ⅱ	二日目Ⅱ		702
	31 話目	特別試験Ⅱ	二日目		683
	幕間	小坂零の考察		665	
647	30 話目	特別試験Ⅱ	一日目Ⅳ		
618	29 話目	特別試験Ⅱ	一日目Ⅲ		
595	28 話目	特別試験Ⅱ	一日目Ⅱ		
	27 話目	特別試験Ⅱ	一日目		580

3  
4  
話目  
特別試験Ⅱ  
最終日  
|

740

# 1話目 転生 ～原作前ダイジェスト～

世界には幸福なことで満ち溢れている。

こういうことをよくファンタジー物のアニメとか、小説とか、映画やラノベなんかで見た、聞いたことがあると思う。

本当にそうか？

紛争地帯の子供や、好きでもないのに自爆テロをしなくてはいけなくなった人に向かって同じことが言えるのか？

そもそも、それはプラスな人生を生きてきた人の価値観だろう。生まれてからマイナスの人生しか歩んでこなかった人間のことを考えたことがあるのか？

私はそう思っていた。思っていたからこそ、マイナスになりたいと思っていた。

生まれてから不自由なく過ごしてきた私は、きれいごとを聞きたびにその裏側に何かあるのか気になってしまふことが増えた。納得できるものも多くあったが、それは私がプラスの人生を歩んできたからではないのかと感ずることも多かつた。

生まれてきた時からマイナスだったら：

私の価値観は大幅に変わっていたのではないか？

そんなことを考えていたある日の大学生活の帰りに、私は赤信号に突っ込んできた車に轢かれた。

私は転生したらしい。

私は0歳5か月ぐらいのある日に前世の記憶とも言えるものを思い出し、自我が芽生えた。とりあえず、生前と同じ男性だったことに安堵した。しかし、両親はいないよう  
で、動くこともろくにできないまま施設のようなところで過ごした。その時から違和感



を感じていた。

昨日施設で世話をしてもらっていたのに、次の日には今日施設に来たばかりのようにして扱われる、というような毎日だった。さらに、私のことを気味悪がり（これは前世の記憶があり、普通の乳児とは変わっていたからかもしれない）1歳にも満たない子供に嫌がらせをする人が日に日に増えていった。そして施設を移すことになり、施設をたらいまわしにされるようになっていった。

これが5歳ぐらいまで続いた。5歳のある日に私はようやく自分の中にある感覚に気付いた。自分の中にある違和感を感じた。前世では全く感じなかったような感覚。誰とも縁をつなげないような、自分自身が鈍になったような気味の悪い感覚。

そして、自分の周りの空気全てがぶった切られているような感覚。

ああ、そうか…

私はマイナス不になったのか。そう考えるととてもしっくりきた。私の考えていたマイナス幸よりもだいたいプラスに近いような気はするが、気質的にマイナスだということな

らばしつくりくる。

生まれて誰からも覚えられず、決して幸福になることはないのだとしたら、これこそがマイナスと言えるのではないだろうか？

前世のプラスの人生とはまるで違うマイナスの人生。私はこれを経験するために生まれてきたのではないか？

しかし、このままではとても生活なんてできない。

毎日、「今日からこの施設でお世話になることになりました、小坂零こさか ぜいと言います。よろしく願います。」っていうのは正直疲れるし、学校に行くことになったらとても困ることになる。

社会人として働くことになっても同じく困るのが目に見えているし、どうにかしてコントロールしないとイケない…せめて、ON、OFFができるようになれば何とかはらずだ。

---

あれから5年過ぎた。

しかし、私はマイナスの気質をコントロールすることが出来ず、いまだに施設にいます。前世の記憶があるから小学校ぐらゐの勉強は正直問題ないだろうと慢心していた結果がこれだ。未だに私はマイナスのコントロールができていない。

誰かれ構わずに縁を切り、周りから孤立するという日々を繰り返している。これのタチの悪いところは毎日縁をつないでから切ることにある。初対面（私からしたら毎日見ている人）と仲良くなつてから、縁を切る。こんなのをもう何年も繰り返している。

正直狂いそうになつたこともある。しかし、私のマイナスがそれを許してくれない。『狂う』という概念からの縁を切つていようように思える。自死しないということすら、マイナスに働く。死なないのではなく死ねない。そんな中でさえ、私の考え方は未だにマイナスにはなつてない。

今の私の考えは昔と変わらず、前世のプラスの人生とはまるで違うマイナスを経験するということに尽きる。マイナスだからダメなのかも知れないと思うと同時に、マイナスにも何か意味があるのかもしれないと考えている。プラスだからマイナスのことがわからなかつたように、マイナスになつたからプラスの時にわからなかつたことがわかるということがあるのかもしれない。

ただ、私の感覚が何か違うといっている。

マイナスの解釈が違うのか…？

プラスが幸せだとしたら、マイナスは不幸。  
プラスが長所だとしたら、マイナスは短所。

…そう考えたら私って幸福の中の不幸とか、短所の中の長所を探していることになるのか。

…大学受験の時の面接を思い出すな。

そうじゃないと感覚が訴えてくる。

ここで止まっているからダメなのか…？

幸せ…不幸…

………短所

…長所……

長所は隠さないが、短所は隠すことが多い…？

なんかそんな気がする。不幸であることをよく不幸自慢とかって言うことがあるけど、本当に不幸なことをさらけ出す人はむしろ気持ち悪がられていると思う。

気心知れた人に言うとかとは違って、誰彼構わず「私は親に捨てられて施設をたらいまわしにされてるんだよね」とかいきなり言われても困るだろうし、何でそういうこと言うのって疑問に思ったりすると思う。

そう考えると、私がマイナスの考え方にならないのは短所を隠そうとしているからな

のか？

でも、自分のマイナスってなんだ…？

今は縁を切ってるのがマイナスだと思うけど、前世ではここまでひどくはなかったし

………

…さてよ。

前世ではここまでひどくなかったってことは前世でも私の短所は変わってないのか…？確かに私は人と仲良くするのが苦手でコミュ障気味だと思ってたけど、縁を自分から切りに行くようなことはしていないと思う。

…本当にそうか？

よく考えたら、自分から独り立ちするといつて家を出て、そのあとの大学生活で私が一回でも家に電話を入れたことがあったか？

…そうだ、思い出せ

友達と高校で別れてから同窓会するとか言っても自分から断っていた。中学の友人とも卒業してからはあつたことがない。

：それだ

もしかして私は盛大な勘違いをしていたのではないか？

友人と呼べるような人がいなくても私はプラスだと思ってた。

しかし、人間としてみてそれが本当にプラスの人間なのか？

私は元からマイナスの気質を持っていたのではないか？

そうか：私は前世から生まれ持ってマイナス気質があつたのだ。それに気付かずにごろごとしていただけで。生まれ変わってからマイナスの気質が大きくなっただけで、元から持っていたのか。

とてもしつくりきた。この感覚は恐らく体が、心が納得している感じ。

自分の中のマイナスを受け入れること。

それがマイナスを操作する方法。

ON、OFFなんてできるわけではない。

自分の存在そのものをONとかOFFとかできないのと同じだ。死ぬか生きるかで、死んだ後に生きることとはできない。

ON、OFFをしたいなら死んでOFFになるしかないということだ。

だけど、マイナスが自分の元々の気質だと自覚した今なら強弱をつけることができるかもしない。

自分の中のマイナスを感じて…その中の剥き出しの鈍のようなマイナスを私の意思でケースに入れる。

…：自分の中のマイナスが収まっていくイメージがする。消えるのではなく、私という外殻に内包されていくイメージ。

結論から言うと私はマイナスの制御に成功した。

と言っても、意識しなければ他の人からすると気持ち悪さが抜けていないみたいだ。しかし、少なくとも次の日になってからもう一度あいさつするというようなことはなくなった。毎日同じ自己紹介をしなくてよくなったというだけでもだいぶ<sup>プラス</sup>的<sup>的</sup>退<sup>成長</sup>化をしたと言える。

マイナスになりたかったというのにいざなってみるとプラス側に戻りたいと思ってしまうあたり、自分の意思が弱いものだと思いきらされる。軽い気持ちでマイナスになりたいと思ってしまったことが間違いだったのだと気づいた反面、マイナスになってマ

イナス側のことも知れてよかったと思っっている自分がいる。

みんなで仲良くと言っている大人が自分には暴力を毎日振るってくる。

子供たちで遊ぶと自分だけ常に一人にされる。

そしてその子供たちからは陰湿ないじめを受けている。

：まあいいや。考えたってどうしようもないし。こういう経験は前までの自分では味わったことのない経験だ。こういう経験をしてみたかったと感じる反面、知らなければよかったと感じることもある。一概に良かったとは言えないが、自分の中のマイナスを知ることができただけでも今の自分は満足している。

そんなことを繰り返して12歳になった。12歳になって初めての施設に移ったが、そこで私は常に意識して全力で自分の中のマイナスを抑えていた。いい加減に中学校



ぐらいでないともまずいと感じたからだ。前世の記憶があるから小学校程度の勉強ならやらなくてもいいと思っていたが、よく考えたらこの学歴社会において小、中学校を出ていないというのはとてもまずいのではないかと思った。

今更かよ、つて思うかもしれないが転生してからマイナスに振り回された結果、明日の食事がもらえるかも怪しい生活＋周囲の人間から常に虐げられる生活を繰り返していたのでそんなことを考えている暇がなかった。いや、マイナスになりたかつた身としてはほほほほ自業自得と言われればそれまでなのだが、これから生きていく身としては学歴が欲しい。

お金が欲しい。

虐げられない住居が欲しいのだ。

そのためにも、中学校を出て全寮制の高校に行く。これが第一目標だ。

そのためには、マイナスを抑えて中学校に通えるようにならないといけない。今の私は、施設で小学校の勉強をしている。成績は優秀で（前世でやっているので当たり前）前ではあるが）来年の4月からは中学校に通う手続きをしてもらう予定だ。

今は10月なのでまだ期間は開いているが、それまで同じ施設の子供たちの勉強や面倒を見るポジションに就いて他の子供の勉強を見ながら自分の勉強をしている。私の悪い噂が施設にも回っているみたいだがマイナスを全力で押さえている今、その噂を信

じる者はこの施設にはほとんどいない。

そのため、私は前世の記憶を生かして自分に都合のいいポジションの維持に成功している。小さい子供たちからは慕われ、中学生たちに交じって勉強をする。

このときに、中学生に教えてもらいながらやることで中学生からは「勉強を必死に教えてもらっている小学生」というポジションを確保している。掃除や洗濯も率先して手伝い、料理も一通り教えてもらった。

このままいけば、私は問題なく中学校に行けると思う。マイナスでも、努力すれば何とかなるんじゃないかという希望が私の中に生まれてきている。

その反面、そうじゃないと嘯き続ける自分もいるが今は無視することにする。転生してファンタジーの世界に行ったのならまだしも、普通に現代社会に転生したのでは学歴があるかないかで大きな差があることは明白だ。

私は、生きたい。

死ねないが、本心から死にたいと思つたことはない。

気が狂いそうになっていた時も、いつそのこと死のうと思つてどこからか出てきた鉈を頭にぶつ刺したが、内心これでは死なないと直感的に感じていた。それで死ぬるならいいやと自棄になつていたのは事実だが、本心から死にたいとは思つていなかった。

…今考えると、何で鉈なんか持つてたんだ私は？

しかも頭にぶっ刺したのに死ななかつたって実は人間辞めてたりするのか？ マイナスになったら打たれ強くなるのか？

そんな馬鹿なことが現実であるのか？

私には関係ない

：まあいいや。そんなことより、とにかく私は施設から追い出されないようにして、中学校に通わなくてはいけない。そして、全寮制の高校に行つた後に就職をして平穩な人生をつかんで見せる。

正直進んでしたくはないことだが、これから生きていくためにも勉強は続けよう。そのついでに体作りもしておこう。中学校に行つたら空手部か柔道部に入つて、マイナスでも普通に生活できるぐらいの力（物理）をつけよう。

転生してからやたら不良に絡まれるようになったし、階段から落ちて怪我をすることとかも増えた。

これもマイナスになったからだとしたら、逃げるぐらいの体力と事故つたときに怪我をしづらいようにしないといけない。痛い思いはあまりしたくないし、金がかかるのも嫌なのだ。

「零一、ご飯作るから手伝ってー」

「今行くー」

食事当番の子に呼ばれたので、これから手伝いをしに行く。将来的に一人暮らしをす

ることを考えると、この手のスキルは持つておいて損はないと思う。

それじゃあ、また今度とか。

そうしているうちに中学校生活も残りわずかになった。

中学生になってから、必死になって勉強した結果今まで学年1位を他の人に渡したことはないぐらいの成績をキープしている。部活は空手部に入つて、地区大会決勝まで進んだが、昼食に買ったお弁当が悪かったらしく腹を壊して辞退する結果となった。やっぱりマイナス的には勝負ごとになると最後の最後で負ける呪いがあるように思える。

クラスではあまり目立つようなことはしていないが、ハブかれるようなポジションにもならなかった。マイナスを抑え続け、学校でマイナスを解放したことは一度しかない。その一度も、人はほとんどいなかった時なので見ている人もほとんどいないと思う。

そんなこんなで中学校生活を過ごしているうちにあつという間に高校受験のシーズンになった。私は頭のいい学校でなかつ、全寮制の学校を探していたら、『高度育成高

等学校』というものを薦められた。

先生曰く、卒業したら好きなどころに就職、進学ができる高校。

友人曰く、そこからならどこでも好きな進路に行ける高校。

嘘か真かはわからないが、施設で世話になっていた身としては国立で頭のいい全寮制の学校を目指していたので願ってもない話だ。

あの施設から、こんな頭のいい高校に行く人がいたんだぞーってなったら寄付が増えるかもしれないし、知名度アップに使えるかもしれない。そうなったらあとから入ってくる子たちが喜ぶだろうし、受けた恩を返すぐらいにはなるだろう。

自分から言いふらすつもりはないが、周りが勝手に騒ぎ立てる分には構わないし、問題ないだろう。

何よりも私に直接関係があるわけじゃないし。

とりあえず、そんなこんなで受験が終わり、無事に合格通知が来た。施設のみんながとても喜んでくれたし、これから会うことは少なくなるから小さい子供たちは泣いていた。

制服代とか、学費とかも、奨学金の他に施設のみんなが用意してくれた時には、前世の私ならとても感動していたと思う。今の私はそれすら特に何とも思わないが、とりあえず表面上はとても感激しているふりをして感謝の気持ちを送っておく。

問題はそんなことじゃなくて、やってきた制服だ。どこかで見たことのある制服だと思ったらこれもしかして前世で見たアニメのキャラクターが着ていたやつとそっくりじゃないか？

確か、『ようこそ実力至上主義の教室へ』とかそんなタイトルのアニメだった気がする。いや、元はラノベだったか？

この世界では前世で見たようなアニメとかラノベとか小説がほとんどなかったけど、まさかこのためなのか？

本当にそうなのか？

自分が持っているマイナスと呼んでいるこの感覚も、今考えたら『めだかボックス』の過負荷<sup>マイナス</sup>とめちやくちや似てるし。ということは、マイナス成長したら鈍を好きなように出せるのか？

何で今の今までこんな重要なことを忘れていたのか。制服を見た瞬間に前世で見た漫画とかラノベとかアニメとかの記憶が一瞬で戻ってきた感じだ。

前世の私はそこそこの漫画とかラノベとか読むオタクと呼ばれても否定できない人間だった。その私が制服を見るまで漫画とかラノベとかのことを一切忘れてるなんて、これもマイナスが関わっているのか？

……考えてもよくわからないし、自分の中の感覚もどうでもいいって言っている気がする。

まあい私には関係ないいや。

どうせ考えたところで今を生きていかなくちやいけないことには変わらないんだし、ここがラノベやアニメの世界だとしても、自分が主人公じゃないとしても、そんなことには関係ない。

文字通り『無冠刑』ナツシングオール。

『めだかボックス』のマイナススキル風にしたらこんな感じ。

ありとあらゆるものが私と無関係になるだけのスキル。

私の本質であり、私の生き方。

誰が何をしてどうしようが関係ない。

私は私という自我を持ち、私として生きていく。

仮にここが「ようこそ実力至上主義の教室へ」の世界だとしても。

仮に主人公が綾小路君？だとしても、私がやることは変わらない。マイナスを知る。プラスを知る。そして自分が納得できる答えを見つけるのだ。

空手部の先生には「歪んでいる」と言われたこともあったが、私は私を変える気はない。自分の在り方を偽るのは理解できるが、自分のやりたいことまで偽る気はない。自分がしたいことをしたいようにやる。

それで誰かが不利益を味わっても知ったことではない。

だって私には関係ないから。

何処まで行つたって人は他人にはなれない。同じ人間がまるつきり同じ空間になつて生活できないように。呼吸のタイミングを合わせても肺活量の違いで吸う空気と吐く空気の量が違うように。勉強だって、同じことを同じだけやれば全人類が覚えるわけじゃないように。双子でも生活環境によつて性格が変わるように。肉親ですら自分の子供を捨てるように。他人と自己はどこまで行つても同じにはなれない。

故に無無冠刑関係



故に<sup>マ</sup>どうでも<sup>イ</sup>いい<sup>ナ</sup>ス

人はどこまでも自分勝手に他人のことを見ない。見たとしても、自分に利益がなかったら無視をするのが人間だ。

私は普通の外郭で身を包みながら過<sup>マイ</sup>負<sup>ナス</sup>荷を隠して生きていく。とところどころ思考が

マイナス寄りになっているが、それはもういい。

私<sup>他の人はどうなってもいい</sup>には関係ないから。

## 2 話目 入学

桜が舞い落ちる季節とはよく言ったものだ。前世で北海道にいたときは「4月とか普通に雪降る日もあるし、何なら吹雪の日もあるけど？」とか思っていたけど、東京にいる今では桜が舞い落ちる季節と言われると納得できる。

はらはらと散っていく桜を見ると、プラス向きな春の季節がやってきたんだと思う。とは言っても、マイナス的には正直どうでもいい感が否めない。むしろ新品の制服に花びらが付いて鬱陶しいまである。

これから通うことになる「高度育成高等学校」は現金の類を一切持つて行つてはいけないそうだ。尤も、施設で暮らしていた私はほとんど現金なんかもつてないし、持つていくものも勉強道具の類と衣服ぐらいいかない。

私は制服が届いてから入学するまでの間にマイナス成長ができないか試みた。が、結局それは達成出来なかった。もし出来ていたのなら、好きに鉈をとり出せるようになって便利なのではないかと思つたのだが、精神的なものを無理に変えるのは今の私では無理だった。裸エプロン先輩みたいに螺子を出す感覚で鉈を出せるんじゃないかと思つたが、今の私ではマイナス的にもつと成長しないとダメなようだ。

施設での居心地を良くしすぎたのが敗因だと思う。今では職員も子供もみんな慕ってくるようになったから負を抑えずにはいられなくなっている。だからといって、入学してからぶっつけ本番で出すのも怖い。

記憶が正しければこの学校、結構な箇所に監視カメラがあるのだ。生徒の行動を見張り、クラスポイントの減点をする用途であったはずだ。その監視カメラにどこからともなく表れた鉋を持っている私が映ろうものなら、もれなく研究所送りは免れないだろう。

そんなことになったらわざわざ勉強してまでこんな学校に来た意味がなくなってしまう。それは避けたいので感情を爆発させないようにしなくてはいけないが、学園物的には感情とかラブコメとかの世界なはずだから抑えきれぬかが心配だ。

そんなことを考えながらバスに揺られていると、前の方からなにやら騒がしい声が聞こえてきた。どうでもいいが、大きい声で言っているため嫌でも耳に入ってくる。

「席を譲ってあげようとは思わないの？」

声の感じからして若い女性といったところだろう。朝っぱらから鬱陶しいことこの上ない。

「君、おばあさんが困っているのが見えないの？」

煩いなと思いつながら前の声のする方を見た。予想通り若いOL風の女性が私と同じ

制服を着た金髪の男子高校生に言っているみたいだ。女性の隣には何となく辛そうなおばあさんが立っている。

露骨に優先席の前で辛そうにしている席譲ってほしいんですアピールでもしているのかな、あのおばあさんは？

笑っちゃうくらい馬鹿らしい。

そんなことを思った。実際辛そうにしているから本当かどうかは知らないが、過負荷<sup>マイナス</sup>な私としてはそんな風に思ってしまう。きれいごとでしかものを見れないなんて正直くそくらえだ。

「実にクレイジーな質問だねえ、レディー」

そんな声が聞こえた。もしかして彼もマイナスなのかと思つたが、そんな雰囲気はまるでしない。むしろ、特別な人間<sup>スペシャル</sup>だと直感的に感じた。自分とはまるで反対なプラスの人間。

しかし、そんな人間が何故そんなことを言うのか興味が湧いた。

「何故この私が、老婆に席を譲らなければならぬんだい？ どこにも理由はないが」

「あなたが座っているのは優先席よ。お年寄りに席を譲るのは当然のことでしょう！」

「理解できないねえ。優先席は優先席であつて、法的な義務はどこにも存在しない。この場を動くかどうか、それは今現在この席を有している私が判断することなのだよ。若

者だから席を譲る？ ははは、実にナンセンスな考え方だ」

…なるほど、そういう考え方もあるのか。プラスの人間というのとはどいつもこいつも道徳的で、倫理的なものとはばかり思っていた。実際、前世の私も社会貢献としてボランティアをした経験がある。

だが、今考えてみたら道徳とか倫理で義務は発生しない。ぱつと見自己中心でマイナスな考え方にも見えなくはないが、正しいことともいえる。

「そ、それが目上の人間に対する態度!？」

「目上とは年上ではなく、立場が上の者をさすのだよ。それに君も私より年上とはいえ、随分と生意気で図々しいと思うが？」

「くっ…あなたは高校生でしょう！大人の言うことは素直に聞きなさい！」

「あ、あの、もういいですから…」

…正論で聞かないから年上であるということを誇示して無理やりいうことを聞かせようとする。気持ち悪い。吐き気がしそうなほど自己中心マイナスな考え方だ。尤も、マイナスの私には誇示するようなものさえないが。まあ普通ノーマルの人間なんてこんなものかと思ったら納得できる。

普通ノーマルか、特別スペシャルか、いるかわからないけど異常性アブノーマルか、過負荷マイナスかでいったら一番怖いのは

私は普通だノーマルと答える。単純に数が多い。それだけで少数の意見というものは封殺できるのが社会だ。

能力面で見たら劣っている普通も、権力と集団の力を利用すれば異常性アブノーマルにさえ勝てるだろう。

「どうやら君よりも老婆の方が物わかりが良いようだ。いやはや、まだまだ日本社会も捨てたものじゃないな。残りの余生を存分に謳歌したまえ」

いい笑顔でそういった彼のことを、私は評価したい。この状況でそんなことを言えるような人間は希少だ。バスという閉鎖空間で、周りは言葉を放たずとも「早く席を譲ってやれ」という空気で満ちている。

そんな中で、自分を曲げずに発言している彼はなかなかの大物だろう。

周りの人間は我関せずとしているが、後ろのほうの席に座っていなかったら前に行つて話してみたいと思うほどには彼は素晴らしいと思う。

それこそ、一步道を外せばこつち側マイナスになるんじゃないかというほどには。

「あの、私もお姉さんの言う通りだと思うな…」

近くにいた同じ制服を着た少女がそういった。ここまできてようやく私は、これが原

作の場面だということに気付いた。確か、高円寺君？と櫛田さん？が主人公に見られる的な場面だった気がする。

というところ、どつかに主人公綾小路君がいることになるが、まあ正直どうでもいいので放置することにする。

もしかしたらマイナスになれるかもしれない人間が、まさか原作登場人物だったとは思わなかった。まあ、原作に出て来るような人間がマイナスになることはないだろうから、私の思い違いということになるだろう。

少し悲しい気もするが、そもそも私以外にマイナスの環境の人間はいても、マイナスの気質を持った人間には未だにあつたことがない。裸エプロン先輩みたく、仲間を増やしてエリートを抹殺と言つても仲間がいらないんじゃない。

そうは言つても、今の私にはエリート抹殺なんてどうでもいいが。

原作の場面だと思つたらなんかどうでもよくなつてきた。とは言つても、これ以外の場面はあまり知らないし、話もあらずじ的なものしか覚えていない。主人公綾小路君は確かDクラスだったと思うが、正直他のクラスになつた場合ほとんど知らないことだらけになると思う。

まあ、そうだとしても私には関係ないか。原作知識だけで生きていけたとしても、詳しく見ていたわけではない上に10年以上前に見たものを全て記憶しているわけでは

ない。

そんなことを考えているうちに前の方がまた騒がしくなったが、今の私はもう前の方に対する興味を失っていた。

今大事なことは、これからの学校生活でどのように振るまうのかだ。

マイナス全開で行くのか、マイナスを抑えたまま生活するのか。全開にした時の利点は、マイナス成長できるかもしれないということ、抑えることに無駄に精神力を使わなくていいことがあげられる。マイナス成長した場合、私は無冠刑ナツシングオイルを好きに使えるようになるかもしれない。

さらに、鉈を裸エプロン先輩の螺子みたいに出せるようになればもう言うことはないだろう。マイナスを抑えるのに、無駄に集中力を割かなくてもいいし、何より素の自分をさらけ出したいと思うところはある。

だが、デメリットが多すぎる。まず、そもそもマイナス成長して無冠刑ナツシングオイルが自在に使えたとしても、私は人間を辞めたいわけじゃないので正直困る。

むしろ、狙われるようなことを避けたい以上マイナスをさらけ出すのも悪手だろう。クラスのみんなから省かれ、いじめにあうのが目に見えている。

中学校の時に部活に出てきて部員を潰していったOBを潰した時にマイナスを解放



したが、十分ぐらいお話しただけで彼は引きこもりになり高校を辞めてしまったそう  
だ。

そんなものを常にさらけ出していたら学校崩壊が起こるだろう。それは私の望むところではない。私は卒業して就職しなくてはならない。学校崩壊を起こした学校を卒業してやってきたなんて言われたら、何を言われたかわかったもんじやない。生活していくうえでそういう面倒なことにはあまりかかわりたくないのが本音だ。

マイナスを持つていても普通に暮らす。

それが私の目標なのだ。

そのためにはどんなに底辺<sup>マイナス</sup>だろうと卒業しなくてはいけない。原作ではAクラスじゃないと望む進路は得られないと言っていたが、個人の成績が優秀ならばある程度のところへは就職や進学ができるはずだ。金銭的に厳しいから、進学はできなくても就職できればとりあえずいい。

もし、国立大学に自力で入学できるだけの学力があれば、奨学金を借りながらの苦学生もできるだろう。無理に大学に行くことに意味があるとは思えないが、いいところの大学に入ればいい就職ができるのはこの世界でも変わらない。

平和に、普通に、マイナスで生きる。

そのためなら私は何でも利用しよう。

そんなことを考えているうちに、バスが停止し、目的地についた。赤いブレザーという、「二次元かよ!？」と言いたくなるような制服の集団が一斉に下車した。

読んでいた側としては、内心テンションが上がっていることを隠しきれない。

学校についた私はとりあえずクラス分けの張り紙を見に行つた。他の赤い連中に合わせて後ろからついて行き、張り紙を確認して自分の名前を探した。

そして私はクラス分けの紙から自分の名前を見つけた。それによるとどうやら私はAクラスになったようだ。原作知識がほとんど絡まないようなところでうれしい反面、私みたいなマイナスがAクラスになれたということに内心ほくそ笑んだ。

マイナスでもやればできるんじゃないだろうかと思えた瞬間だった。

今まで、バットで殴られたり、はきみで太ももを切られたり、鉛筆で手のひらを突き破られたり、熱湯を背中にかけてられたり、殺虫剤を吹きかけられたり、食器を投げられたこともあつたけど、マイナスでもAクラスに入ることぐらいはできるんだと思うとんだか嬉しくなった。

そんなことを考えているうちに教室についた。入つてすぐに、教室内の監視カメラが

あることを見つけた。

よく見ないとわからないような場所や、意識しないとわからないようになってい  
るものがあるが、他人からの悪意にさらされて生きてきた私マイナスにとってはこれぐらいすぐに感  
知できる。

壁の一部の色が違う部分を見ながら、私は頭の中にカメラの場所を入れておくこ  
とにした。

とりあえず周りに合わせて席に座った。一通り周りを見渡すと、個性的な人がいると  
感じた。特に隣の席の銀髪でベレー帽をかぶった特徴的な美少女と、スキンヘッドの真  
面目そうな男が印象に残った。

…あの男とてもプラスな人間な気がする。あくまで雰囲気ですう感じただけだが、堅  
実に何かを積み上げれば何でもうまくいくと思っっているような考え方。そんなものを  
持っているような感じだと私の中のマイナスが訴えてくる。

……気に食わない。

そう思った瞬間、私の中のマイナスが少し漏れた。鉈のようなマイナスが私という外殻から漏れ出す。私の周りの空気が一瞬で別の世界のものと同調するような気配に変わる。私の周りの空気が断ち切れて、細切れになるような錯覚。

それを自覚した瞬間、私はマイナスを急いで封じ込めた。周囲の人間はまず気づかないような刹那の中で起こったはずだが、クラスメイトがみんな鳥肌を立たせているのわかる。

やってしまった…。

そう思った直後、隣のベレー帽をかぶった銀髪の美少女がこつちをめちゃくちゃ見ていた。間違いなく、今の寒気の原因が私だと気付いた様子だ。私は寝るふりをしてそれをやり過ごすことに決めた。

腕を枕代わりにして机に前のめりになると、ふと右側から悪意を感じた。

具体的には路地裏に入った時に、不良が殴りかかってきた時に感じたものと同じものだ。

「!?」

私が咄嗟に身を左側に寄せると、私がいた位置に少女が持つている杖の先端があった。そして少女がこつちを笑顔で見ている。私はその少女の笑顔に笑顔で返すと、また机に向かって寝る体勢を作った。

「っ!？」

今度こそ私の脇腹に杖の先端が刺さった。変な声が出そうになるのをこらえながら少女の方を見ると、とてもいい笑顔で少女がこつちを見ていた。

「ずいぶんと酷いことをするね？」

「一度躲した後にまた寝ようとした方がどうかと思うのですが？」

「いきなり杖でつついてくるような、言語も交わせないような奴と話す気はないと思うただだよ」

私がそう皮肉で返すと、少女は少しむっとした顔になった。

「これは申し訳ありませんでした。私は坂柳有栖さかやなぎありすといいます」

「私の名前は小坂零こさかれいです。それで、どうかした？」

そういうと彼女は少し考えるような顔をした。

「…さっきのはあなたですか？」

直球で聞いてきたか。

少し驚いたが、周りの人を見ると他のクラスメイトと話していてこっちのほうを見えないように見える。

それなら、下手なことをして注目を集めないほうがいいだろう。

「なんのことですか？」

もしかして中二病が抜けていないとか？」

手っ取り早くとぼけることにした。

他の人に聞かれたらめんどうくさいし、馬鹿正直に話す気もない。

「中二病……まあいいです」

そういうと彼女は前を向いてしまった。あわよくば気のせいだったと思ってほしいが、最悪退学してもらえば問題ない。

マイナス全開で話をすればそのうち相手から「私が悪かったです」とか「もうしません」とか言ってくるようになる。それに「私には関係ない」とか「私は悪くない」とつて合わせて心を折りに行くまでがワンセットだ。

裸エプロン先輩の真似だが、それだけで普通の人なら心はあっさり折れてくれる。中学の時に一度実践していることもあり、隣にいる彼女もその例に漏れないだろうと思っていた。

そんなことを考えていると、担任と思わしき先生が教室に入ってきた。短髪のスーツを着た男の先生だ。

「おはよう、Aクラスの諸君。私はAクラス担当の真嶋智也だ。初めに言っておくが、この学校において、学年ごとのクラス替えは無い。卒業まで私が三年間君たちの担任、ということになる」

そう言った後、真嶋先生はこの学校の説明をした。多くの人は配られた資料を見ながら、話を聞いていた。

現金を必要としないポイントシステム。開幕から10万ポイントがもらえるという胡散臭さ全開のあれだ。毎月頭にポイントを支給されることになっているが、10万ポイントが毎月支給されるとは言われていない。

つまり、そういうことだ。

原作でもそうなつてたはず。

故に実力主義の教室。

この説明をしている時にクラスがざわついた。まあそうなるなと思う反面、冷静に考えると頭がおかしいように見える。1クラス40人。それが4クラスで160人。合計1600万円。

高々エリートを育成するのにそんなにお金をつぎ込むことがいいのか理解に苦しむ。

マイナスから搾取したお金はこういう風に使われることになるのかと思うと、裸エプロン先輩がエリート抹殺とか言っていたのもわかる気がする。

しかも、これが毎月入るとか考えているやつらは頭がおかしいとしか思えない。3学年合わせて480人（退学者は考慮しない）。4800万を12か月。5億7600万円。1年間で毎年この額を何もしないで吹き飛ばすって考えるなんて正直馬鹿なんじゃないだろうか。

うまい話には裏があるとはよく言ったものだ。前のプラスの中にいると思っていた私がこの話を聞いたらそっち側にいたかもしれないと思うと鳥肌が立つが、今の私はそんなことは思わない。

善意に騙されて悪意を受けてきた私はすぐに裏のことを考える頭になっている。

そんなこと思っていると、真嶋先生の話が終わったようだ。

スキンヘッドの彼が自己紹介を切り出した。葛城康平というらしい。Aクラスの中で親睦を深めようときれないなことを言っている。

自己紹介の様子を見てみると、坂柳さんの方に固まっている集団と葛城君の方に固まっている集団が見える。早くもグループというものができたのだろう。普通の怖いところはこれだ。すぐに群れを作って他のグループを蹴落とすこと。悪意も善意もな



ただ堕落した集団が善意と悪意を退けるなんて様は割とよくある話だ。

私には関係ないが。

自己紹介をしているクラスメイトをしり目に、他の人に気付かれないように教室から出ようとした。

「小坂君、どこに行くんですか？」

気づかれないうちに出るつもりだったが、坂柳さんに見つかってしまった。席が隣だったから仕方ないといえば仕方ないが、他人との縁がすぐ切れる私を見つけることができたことに驚いた。

いや、よく考えたらさつき話して縁をつないでいたことになるのか？

そう考えると見つかるのも当たり前と言える。特に考えなしに行動していたのが裏目に出ってしまった。

「大勢の前で自己紹介をするのは苦手なんだ。先生にも聞きたいことがあったから抜けようと思ったんだけど……」

とりあえずこう言って教師に用事があったことにしておく。こう言っておけば、用事があったから仕方ないとも取れるし、人見知りだったから仕方ないとも取れるだろう。

「そうだったんですか……。三年間一緒に過ごしていくことになりましたから、自己紹介を  
と思ったのですが……」

彼女はそう儂げな雰囲気を纏って言った。ここで断ると私の心証は最悪になる  
だろう。体の弱い美少女のお願いを断った屑として扱われることになりそうだ。

普通ノーマルならまずここで自己紹介をするんだろう。私マイナスを抑えてなければ全力で返すのだ  
が、そんなことをする意味も特にない。

無価値で無意味で無力で無責任であるとは自覚しているけど、普通ノーマルを取り繕う上では  
そういったものを隠さないといけない。

「……そうしたら、自己紹介を先に済ませてから職員室に行くことにしようと思ったん  
だけど、今してもいいかな？」

「今して、と言つてももう小坂君の番でしたよ。」

「あ、そうだったんだ。じゃあ改めて、私の名前は小坂零つていいいます。中学校では空手  
をやっていたのですが、人見知りなところがあつてこういう大勢の前で話するのが苦  
手です。三年間よろしくお願いします」

私と言いつつ終わると、葛城君が拍手をしてくれた。彼の拍手を皮切りに、クラスのみんな  
が拍手をしてくれる。

なんて気持ち悪い光景だろう。

人見知りな人をここまで善意で辱めることができるなんて。これだから普通ノーマルは怖いんだ。

私はそう思うと同時に職員室に向かって歩いて行った。

---

5月上旬時点

氏名 小坂零 こさかれい

クラス 1年A組

部活動 無所属

誕生日 6月6日

学力 A-

知性 A-

判断力 A-

身体能力 A―

協調性 C―

面接官からのコメント

入学時の成績も非常に高く、諸事情により小学校には通っていない模様だが中学校の成績を見ても問題ないと判断できる。コミュニケーション能力に少しばかり問題があるようだが、一般的な受け答えはできる上にクラスになじんでいるとの報告も来ている。面接時の応答も問題なく、身体能力も空手部の大会で地区大会決勝まで進んだことから問題ないと判断できる。以上のことを踏まえ、Aクラス配属が妥当である。

担任メモ

今のところ坂柳さんと一緒にいることをよく見かけます。他の生徒とは一線を置いているようにも見えますが、これからの人間関係の構築に向けて頑張っている様子なので引き続き経過を見ます。

(備考：  
過負荷マイナス  
『無冠刑』ナッシングオール)

### 3 話目 初日の話

結局職員室に行こうとしたら、どこにあるのかわからなくて帰ってきた。そのことを坂柳さんに話したら笑われた。人が真面目に職員室に行こうとしたのに笑うなんてなんて酷い人なんだ、とか思ったり思わなかったりしたけど、まあどうでもいい。私には関係ない。

「ところで小坂君。この後入学式が終わったら、私達は食事に行こうと思うのですが一緒にいかがですか？」

不意にそんなことを言われた。今このAクラスでは、葛城スキンヘッド同盟と、坂柳病弱少女見守り隊とで別れている。こんな中で私が目の前中身腹黒間違いなしの病弱少女からのお誘いを断つたとなれば、もれなくスキンヘッドになる（偏見）。

第三勢力を作るようなカリスマ性がないのはわかりきっているし、断ると孤立するか、スキンヘッドになるかの二択だ。

…流石にふざけすぎか。まあ、言葉に出さなければどう思っていたって私の自由だ。だから、『私は悪くない』。

「私でよければご一緒しましょう」

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますね」

こんなことを話していたせいで周りのクラスメイトから目を付けられた。私の方を見て「誰だあいつは?」とか、「坂柳さんの恋人か?」などと好き勝手言うてる。こういう悪意ある視線に晒されるのはいつもものかどだから何とも思わないが、これを狙ってやられたのだとしたらタチが悪いな。

そう思いながら横を見ると坂柳さんがこつちを見てにつこり笑った。

その見るものすべてを魅了するような笑顔を見ても気持ち悪いとしか感じられなくなった私は、<sup>マイナス</sup>とりあえず愛想笑いで返した。

面倒くさい入学式が終わった。めちやくちやに乱入してみんなぶっ壊したくなるよ  
うなめんどくささだった。もつとも、そんなことしないしできないが。

「それではみなさん、行きましようか」

「どこの店に行くのかは決めてるのか?」

「来る途中に見つけたファミレスあたりにしようと思ってます」

そんなことを考えているうちに、坂柳さんたちがどこに行くのか話していた。食える物を出してくればどこでもいいと思っている私は、早く終わらないかなとか思いながら彼女たちについて行った。

歩きながら考える。原作ではエリート集団がAクラスになると聞いていたが本当にそうなのかと。

エリートといえばそういうえなくもないが、特別な人間は坂柳さんぐらいしかいない。その彼女も表立って特別なことがあるというよりは、在り方を歪められてこうなつたのではないかというところがある。本来なるはずだった型を壊して当てはまっているような感覚がする。

本当にこんな奴らがエリート集団なのか？

まあそもそも私が混ざっている段階でプラスの集団とは言い難い。私が思うに彼女たちを壊すのはそこまで難しくないだろう。お話すればすぐ壊れてしまいそうな感じがある。というより、何もしなくてもそのうち下り落ちていきそうですらある。

張りぼてのリーダーになんちやってラスボス、この二人以外は頭がいいだけの凡人と大差ないように見える

主人公補正が入った主人公にマークされたら一瞬で崩壊することになるだろう。

それこそ、裸エプロン先輩が露出狂生徒会長に負けたように。



世の中には勝てない人種が存在する。

スペシャル

特別ぐらいじやアフノーマル主人公には勝てない。

マイナス

過負荷はそもそも勝てない。

まあ、マイナスの私がAクラスにいる以上、下り落ちていくのは確定事項のようなものか。

「…小坂君？」

この中で私はどうすればよいのか。マイナスであることを隠しても、最後の最後で必ず負けることは去年の空手の大会で思い知った。

かといって、このまま主人公に何もできずに轢き殺されるのも癪だ。マイナスの私としては裸エプロン先輩みたいに、主人公に一泡吹かせられるようになりたい。

「小坂君？…聞こえてないみたいですね」

裸エプロン先輩みたいに心の底から勝ちを渴望しているわけではない。前世では普通に勝っていた私は勝利の味を知っている。

生まれてからは敗北ばかり味わってきたが、勝利の味を知っている以上、無理に勝ちに行く気はない。虚しい勝利に興味はない。得るなら、完全にプラスの人間を叩き潰したと思える勝利が欲しい。

だけど、それさえ無理に欲しいとは思わない。だからこそ困っているのだ。私はこのAクラスで何をしたいのか。マイナスの価値とは、学校生活で見つけられるのか。

他人を蹴落としていく様を見たいのか、蹴落とされる自分を見たいのか、蹴落とされるクラスメイトを見たいのか。上に行きたいと思うこともあるかもしれないが、今の自分にはそんなことはどうでもいいこととしか思えない。

「小坂君！」

私はそう言われて肩を軽く叩かれた。そこでやっと自分がファミレスにしていることを理解した。どうやら私は周りに合わせて考え事をしながら歩いていたせいで、ファミレスに入つてことにすら気づかなかつたみたいだ。

「ごめん、考え事をしてて気づかなかつた」

そう言っつてとりあえず頭を下げた。

「みなさん注文が決まったのですが小坂君だけ反応がなかったので呼びかけても返事がなかったので心配しました」

「ごめんごめん、ファミレスに来たことがなかったんでちよつといろいろ慣れなくて…」  
これは本当だ。私は転生してからファミレスに来たことはない。施設にいたときにはいくような機会がなかったし、中学校に入ってからもお金がかかるような付き合いは全部断つてきた。

「ファミレスに行ったことがないってマジか?!」

クラスの男子が声を大きくして言ってくる。他のクラスメイトも興味津々でこつちを見てくる。その中には馬鹿にしたような視線も交じっていてそれがむしろ心地よい。「大したことではないのですが、物心ついたときから施設暮らしだったので行く機会がなかったんです」

そう言っつた瞬間、周囲の温度が少し下がった気がした。

「施設暮らし…ですか?」

かろうじて坂柳さんが沈黙を破った。

「はい。0歳の時にはすでに捨てられていたそうなので高校は全寮制のところを探しました。その都合で小学校にも通えなかったので施設で勉強しましたけど、そこまで

不自由な生活は送ってませんよ」

「0歳で…」

なんか口を開くたびにどんどん空気が重くなっている気がする。別にこれぐらい大したことじゃないし、制服をめくった中にある傷に比べたらどこもたいしたようなことではないのに周りの人の視線が、「坂柳さんに近づく男」から、「かわいいそうな環境で過ごした人」になっているように思う。

ここで自分を出したら一気に評価が「得体のしれない気持ち悪い男」に変わるんだろうとか、意味のないことを考えていた。

でもよく考えたら、私はマイナスのことを知りたいたいと思ってマイナスになったからわかるけど、今まで普通に生きてきたプラス側の人たちからすれば十分不幸かわいそうなのか。

そう考えると失敗してしまったと実感した。

思考の海から急に引きずり出されたせいで、咄嗟に変なことを言ってしまった罰なのかもしれない。

まあ、私には関係ないそんなことどうでもいいけど。

「まあ、そんなに気にしないで。同じクラスメイトなんだからさ。とりあえず、そのメニュー？、を借りてもいい？」

「おっ…おっ…」

渡されたメニューに目を通す。

大体1000ポイントぐらいのものが多かった。

「ふむふむ…とりあえず、このハンバーグセットにするよ。」

…そんなに緊張しなくていいよ。これじゃあ楽しい親睦会がお通夜じゃないか」

「あ…無遠慮なことを聞いて悪かった」

そう言っただけにさつき聞いてきた男子は頭を下げた。別に謝罪が欲しかったわけではないが、ここでこの謝罪を受け取っておくのが一番丸く収まる気がした。

「気にしない気にしない。こっちもこんなに空気を重くしてしまうとは思わなかったから、お相子ってことで」

そう言っただけで頭を下げる。とりあえず謝罪しておく。この謝罪で周りの空気が和らいだのを感じた。

軽い雰囲気を出して上辺だけでも謝っておけば、勝手に解決したと思ってくれるんだから扱いやすい人間だと思おう。普通の人間ならばそうなるも仕方ないが。

そんなやり取りをして、注文をしてもらい料理がくるまで周りのクラスメートと話すことになった。

「小坂って坂柳さんという関係なんだ？」

「ただ席が隣になっただけの間柄だよ」

案の定こんなことを聞かれる。

他の人たちもそれに便乗していろいろ聞いてくる。

「でも、坂柳さんが直接呼びかけてたでしょ？」

ほんとはどっかで知り合ってたんじゃないかなーってみんな思ってるんだよ」

「中学校が同じだったわけじゃないし、当然施設で会った覚えもない。だから、今日が初対面で間違いないはず。

……もしかしてどっかで会ってたりしてた？」

そう言つて坂柳さんの方を見る。自分に向いていた視線が一斉に坂柳さんの方に向く。

ターゲットを移していくのは常套手段だ。自分が目立たないためにはこういうことから始めないといけない。

「いえ、初対面ですよ。ただ、少し面白そうなものを持っている雰囲気だったので声をかけただけです」

そんな意味深なことを言ってくる。間違いなく少し漏らしたマイナスのせいなんだろうが、わざわざ言う必要もないだろう。

「そんな面白い人間じゃないと思うけど。空手部だったけど結局地区予選落ちだった

し」

「いえ、そういうことではなくもつと根本的なものです」

「根本的なこと？」

意外と勘がいいのかもしれない。いや、特別ならスベンヤルこれぐらいは当たり前か。

そんなこと思っていると料理が運ばれてきた。坂柳さんが乾杯の音頭を取り、さつきの話は有耶無耶にされていきながら食事になった。ここのファミレスの料理は結構おいしい。少なくとも、自分が作る物よりもとてもおいしく感じる。他人が作ったもののほうがおいしいとかいうやつなのかもしれない。

そんなことを思いながら5分ぐらいで私の食器は空になった。小さい頃、まだマイナスのコントロールができていなかった頃は食事をよく奪われることがあったため早く食べる癖がついてしまっていた。その結果、他の人がまだ半分も食べていないのにもう食事を終えてしまっている。

とりあえず思考を廻らせよう。時間が余っているならこれからのことについて少しでも多く考えを廻らす必要がある。

今この場には、坂柳さんについてきている人が14人くらい。私含めたら15人。これが今の坂柳派ということになるんだろう。

スキンヘッドにはなりたくないからとりあえずこつちに來たけど、このまま彼女について行つても結局主人公綾小路君に皆殺しにされるような気がする。彼の性格的にはあまりAクラスには興味がないみたいだったけど、彼の周りの人間はAクラスに興味津々な人が多い。彼がそれに触発されてAクラスを目指すことになるかもしれないし、そもそもこの病弱少女坂柳さんが彼を挑発することも十分に考えられる。

そうなるとマイナスの私はどこかで潰されるのが目に見えている。今の私は普通の皮をかぶっているし、何より根本的にマイナスだ。圧倒的プラス主人公に勝てるはずがない。

さつきまでは一泡吹かせたいとか思っていたが冷静に考えるとそれすら難しい気がしてきた。何より私は相手を嵌めることがあまり得意じゃない。壊すことは割と簡単にできるが、相手を嵌めて社会的に潰すとすると難しいものがある。そんなことするくらいなら物理的に殺したくなるような脳筋だし（殺せるとは言つてない）、普通の私は下手なことをやると相手に報復されかねない。

過負荷全開ならそもそも何もしたところで相手が覚えていられないし、彼との縁そのものを切つてしまえば彼は私に会うことができなくなるだろう。

だが、それじゃあ勝利とは言えない。

勝つたことさえ他の人が知ることができないというのに、それがどうして勝利と言えようか。勝ちたいとそこまで渴望してはいないが、虚しい勝利を手に入れようとも思わ



ない。

そう考えると、彼とは直接関わらないでいくスタイルが一番合っていると思う。出来れば接触して恩を売っていくのが一番かもしれないがそれはそれでリスキーな気もする。

「すみません、少し話があるのですがよろしいでしょうか？」

そんな言葉で思考を現実に戻す。坂柳さんが言ったらしく、気が付いたらみんな食事を終えて彼女を見ている。

「話って何？ 坂柳さん」

「これからのことをお話しようと思って……楽しい雰囲気の水を差すようになるのですがよろしいでしょうか？」

そう彼女が言うのと雑談していた人も静かになり、真剣に彼女のほうを向いた。

みんな今日のことについて疑問を持っていたみたいだ。これからのことの話となるとみんなふざけたような雰囲気はなくなった。

冷静に考えていきなり「入学おめでとうございまーす。10万円どーん」なんてされて疑われないわけがないだろう。こういう自分の利害にだけは敏感な姿勢は好感が持てる。実に人間らしくて、実に前向きだ。

「まず、疑問に思った方も多いと思うのですが、私達は今日いきなり10万円分もの大金を一人ずつもらいました」

「うん、そうだね」

「いきなり10万円分もくれるなんて太っ腹な学校だと思ったけど、やつぱなんかおかしいよな」

「しかも、このポイントが毎月1日に振り込まれることになっています、何かおかしいと思いませんか？

ねえ、小坂君？」

そういうと彼女はこっちを向いた。何故ここで私に振るんだ？

もしかして私がこのシステムを知っていることを知っているのか？

いや、原作知識を漏らした覚えはないからそれはない…。

そう考えると、さつき漏らしたマイナスの影響か？

さつきの雰囲気を漏らした時にとつさに隠したせいでとつともない威圧感を隠している人間だと思っっているとか？

…そんな気がしてきた。

確かに、咄嗟に隠したせいでマイナスの持つ威圧感だけが漏れて、それを感じ取った

としたら納得できる。クラスでやけに突っかかってきたのもこの大物（笑）が自分に敵対しないかを確かめたかったんだろう。彼女は自分でクラスをまとめ上げようとしていることから説明がつく。

とりあえずみんながこつちを見て早く言えという空気になっているので、さつさと終わらせよう。

幸いなことに原作知識とも呼べるものがある以上、私の推理は答えを見ながら解いているようなものだ。

「あくまで私の考えだけいいかい？」

「ええ、もちろんです」

「まあ、まず来月も10万ポイントが入るわけじゃないってことだろう。毎月ポイントが1日に入ると言っていたけど、10万ポイントが毎月入るとは聞いてない。さつき職員室に行こうとしたときにいろいろ聞きたかったんだけど結局聞けずじまいだから確信できてないけどね」

私の言葉に周りのクラスメイトが感心したように見えた。恐らく、さつきの協調性のない行動の裏にはこんなことを考えていたのかということに感心しているのだろう。

「ついでに言うと、さつきの教室には見えづらいように隠されていたが監視カメラがいくつかあった。恐らく、授業中の様子を探るためのものだと思う」

「監視カメラ!?」

さつき私に謝った男子（竹本というらしい）が声を荒げた。常識的に考えれば授業をする教室に監視カメラがあるなんて普通の高校では考えられないだろう。

しかし、この学校は普通とはかけ離れている。

「教室だけじゃない。ここに来る途中も結構な頻度でみつけたし、この店の中にも監視カメラを見つけた。恐らく、マイナスな行動をした人間を特定してそのクラスのポイントから引いて行つて残った分が来月のポイントになるという感じだと思います」

「クラス？ 個人じゃなくて？」

「個人単位で監視するには膨大な人手がかかる。管理も生徒一人につき一人の職員が必要になるだろう。行動を機械で判断するような技術ができているとは思えないし、それをこの学校に試験的に採用している可能性も現実的じゃない。

しかし、クラスごとなら個人で見ると見るよりも人手はかからない上に、クラスの中で一人が問題を起こすと他の人に迷惑をかけるので拘束力が増します」

あくまで予想ですがね。と付け加えると坂柳さんが満足そうにうなずいてこつちを見た。

「素晴らしいです。小坂君、満点を差し上げます」

「ありがとう。坂柳さんも同じ考えってことでもいいのか？」

「はい、私も恐らくそうだろうと思つています」

「なるほどー…」

「よく監視カメラなんてわかつたな！」

「よく見てれば結構簡単にわかるよ？」

意識的に壁の色とか見てると違つてるところが見えてくるし」

「それもすごいけど、あれだけの説明でよくわかつたね？」

「あくまで予想だからね。来月になつてクラス全員の支給されるポイントが減つていたら、恐らくこの考えであつてると思う」

「じゃあ明日クラスのみんなに教えようぜ！

そうしたら、来月にも10万ポイントが入るんだろ？」

確かにそうなるが、その考え方ではポイントが減らなかつたときに答え合わせができるかわからない。何より、隣の坂柳病弱腹黒少女さんが許すとは思えない。

「いえ、それはやめてください」

「？ 坂柳さんなんで？」

「それで授業中にみんなが真面目に授業を受けてしまうと減点基準が何なのかわからなくなつてしまいます。皆さんにはこのことを頭に入れてもらつて実践してほしいのですが他の人にはまだ言つてほしくないんです」

私かこれを利用してあのスキンヘッド禿を蹴落としにかかるとはボンクラどもは黙って言うことを聞け。

なんていう副音声で聞こえてきたが多分気のせいだろう。病弱腹黒系美少女なんて現実にいるわけないよね？

いや、ここはラノベが基準となつていような世界だったか。そう考えるといてもおかしくない気がしてきた。

そんなことを考えていたら、坂柳さんがこつちに近づいて耳元でこうささやいた。

「あとで二人きりで話があります」

彼女はそういうとこつちを見てにつこり笑った。

その歪んだ笑顔の方が美しいと思つた私は、やっぱりどこまでも私マイナスなのだと思つた。

## 4話目 初日の話 〈舞台裏〉

時刻はもう少しで7時になるといったところで、だんだんと暗くなってくる時間になった。ファミレスで解散した後、私は坂柳さんに連れられて人気のない公園のような場所にやってきた。

ぱつと見人氣がなくて、監視カメラの位置からも死角となっていて場所だ。初日からよくこんな場所見つけたなと感心する反面、結構な距離を移動したので坂柳さんは少し辛そうにしている。

「大丈夫？」

「すみません…少し休めば大丈夫です」

「それ大丈夫じゃない時のやつだから。この後も軽い買い出しぐらいしかすることないし、ゆっくりね」

「すみません…」

そういうと彼女はしゃがみこんだ。病弱少女は見た目だけではなかったようで、本当に辛そうにしている。可哀想だなーと思う自分と、早く要件を言えよという自分がいる。

さつきは軽い買い出しをしたいといったが、ホームセンターに行きたい私は早く切り上げてほしかった。ホームセンターは結構早い時間で閉まるし、時間があれば家電量販店に行つて録音機も買いたい。この学校を生き抜く上では感度のいい録音機は必須と言つてもいいだろう。

相手の発言を脅しにする、相手の脅しを脅しにする。

そんな感じで汎用性が高い録音機はこれからの学校生活では必須品と言つてもいい。問題があるとしたら、不幸な事故で録音機がすぐ壊れないかということか。

割とよくあることだから本当に困る。

中学校の時も階段から転げ落ちた回数は両手の指の数じゃ足りないし、給食で食中毒になるときは必ず私になる。不幸な事故だと言われればそれまでだけど、それが高頻度で起こるからマイナスなのだ。

「お待たせしました。もう大丈夫です」

そう言うのと坂柳さんは杖を突いて立ち上がり、こちらを見据えてにつこり笑つた。あたりは暗くなつているのに対して、彼女の綺麗な銀髪が街灯に照らされよく映える。

「それじゃあ本題に入ろうか」

「ええ、それでは、あなたは何者なんです？」

小坂零さん？」



「君を殺すために送りこまれた刺客、とても言ったら君は満足するのかな？」

そう言うのと彼女はにっこり笑っていた笑顔から急に能面のように無表情になった。  
「ふざけないでもらえますか？」

「…まあいいや、結論から言うとなだの高校生だよ。ちよつと虐待されたぐらいの」  
私の言葉で彼女は露骨に顔をしかめた。端正な顔が歪んでいる様がむしろかわいく見える。

嘘は言っていない。過負荷マイナスで前世の記憶があることを除けば私はただの高校生だ。

「…嘘は言っていないみたいですね」

「真実も言っていないけどね」

「ツ!!」

「そんなに睨まないでよ、可愛いそっちの方が可愛いよ顔が台無しだよ？」

嘘を虚実で、真実を虚無で着飾る。別に本当のことを話すつもりもないし、話したところでも何かできるとも思えない。

完璧そうに見える彼女は完璧そうに見えるだけのただの特別だ。スペシャル

しかもプラスというよりはマイナス寄り。

いや、寄っているだけでどうやってもマイナスまでもっていくのは無理そうだし、綾小路君主人公に勝てるような人材ではない。主人公というのは圧倒的なプラスの持ち主がほ

とんどだ。ダークヒーローっぼいやつでも根っこの思想がプラスのやつばっかだ。

そんな主人公相手に壊れた人形じゃ勝てない。

まあ、会ったこともないやつと比べられるのもかわいそうで、哀れで、実に滑稽で、とても助けたくなくなる。

…ああ、なるほど。

裸エプロン先輩が言っていた弱いものと愚か者の味方ってこういうことか。マイナスだから壊れた人形の味方をしたくなるってことか。自分と同じようなものには味方したくなるっていう同族感とか、そういう感じかな？

まあ、この子坂脚さんの場合は愚か者の方に入れておこう。

「そんなに警戒しなくてもいいよ。君と敵対するつもりもないし」

「…理由を聞いてもよろしいですか？」

「君とは敵対するより仲良くしておいた方が楽そうだと思っただけだよ。それに君と敵対することになったら必然的に孤立するか、葛城君の方に身を寄せるしかなくなるし」

「Aクラスは私と彼で二分されることになりそうですね」

「そういうこと。君はAクラスを支配細めしていくんだろ？」

私は変なことではないから好きにするといいいよ」

「…あなたは私の味方ですか？」

それとも敵ですか？」

「別に敵対したところで大したことはできないってわかっているとと思うけど？」

これは本心だ。

私はあくまでマイナス側の人間だし、彼女に敵対したところで最後に負けるのは目に見えている。むしろ何でここまで彼女が私のことを警戒しているのかがわからない。多少威圧感が強かったぐらいでも私のカリスマ性が低いことはさっきのレストランでお察しだったと思うのだが。

「さっきの説明の時にうわの空で聞きながらにも関わらずあそこまでの推理ができること、見えにくい位置の監視カメラの場所を一目で把握できるその能力、そして何よりも教室で一瞬だけ漏れた威圧感。」

これらを考えるとあなたをが敵対することは脅威になると思いましたが、その辺りはどうですか？」

…なるほど一理あるかもしれない。

威圧感のことに関してはちよつと昂つて失敗したと思つたが、説明をきちんと聞いて

いなかったこととか、監視カメラのこととかは特に考えてなかったな。

説明に關しては前世の記憶と照らし合わせるだけだったから、もつときちんと聞いておけばここまで睨まれなかったのかと反省しよう。監視カメラの方は仕方ない。人の視線とかに敏感になってしまったせいで、監視カメラとか盗聴器の類にも気を付けるようになったってしまったのが全て悪い。

『だから私は悪くない』

「では改めてお聞きしますが、あなたは私の味方ですか？敵ですか？」

「味方だよ。私は坂柳有栖愚者の方に味方する」

結局こうするのが一番早いと感じた。変なことを言つて下手に警戒させるよりはこんな感じで下に下つた風にするのが早いだろう。

「理由を聞いても？」

「単純に私のデメリットがほとんどない。葛城君の方よりは坂柳さんの方が人愚者を引つ張つていく素質があるように見えた。

ああ、でも派閥に入るつもりはないよ。『坂柳派のく』なんて前置詞が付いたら動きづらくなる。下手なことをしようとは思わないけどね」

「…わかりました。とりあえずそういうことにしておきます」

とりあえず納得してもらえたようだ。

実際、下手に事を起こす気もないが病弱少女見守り隊坂柳グールに入つて他の派閥との争いに巻き込まれたくない。

私の関係ないところで勝手にやつてほしい。

「そんなわけで派閥には入らないけど、坂柳さんの味方をする助っ人ポジションだと思つてくれればいいよ」

「わかりました。私の方から呼び出すことがあつたらお願いしますね?」

「何もなかったらちやんと行くようにするし、そこまで変なこともするつもりないから。比較的平和に平穩にがモットーだからね」

「とてもそうは思えませんけどね」

私がつこり笑つて彼女の方を見ると、彼女もがつこり笑つてこっちを見てきた。雰囲気柔らかくする笑顔ではなく、相手を攻撃するような笑顔。

…何でこんな攻撃的になつているんだろう。

初日からこんななめんどくさくなるなんて思わなかった。このままだとこれから先の学校生活が思いやられる。

「じゃあ帰ろつか……って言いたいんだけど大丈夫？

ここから結構距離あるよ？」

「……………」

そう言うのと彼女の表情がまた固まった。ここから寮までは歩いて15分程度かかる。彼女は杖をつきながら歩いているのもう少しかかるだろう。来てすぐにしゃがみ込んで息を整えていた少女が変えるには少しきついように思う。

「嫌じゃなかったら背負って行こうか？」

ホームセンターとかにも寄りたかったけど時間も遅いから明日行くことにしたし」

私の言葉に、彼女は少し考えるような顔をした。まあ、冷静に考えて今日あったばかりの男におんぶされながら帰るなんて普通嫌だろう。

「……それではお願いできませんか？」

それでも自力で帰るのは厳しいと判断したのか、彼女は申し訳なさそうにそう言った。

私はそれを聞くと彼女の前に立ち、後ろを向いてしゃがんだ。彼女は私の背中に乗ったのを確認し、彼女を落とさないように手をまわして寮の方に向かって行った。

既に日は落ち、辺りは街灯の明かりがなければ足元ぐらいいしか見えない程度には暗

かった。そんな中私は、背中に少女を乗せながら歩くというなかなかできない体験をしていた。

「…すみません。呼び出したのにもかかわらず送ってもらって」

「気にしないでいいよ。美少女を背に乗つけて帰るなんてなかなかできない体験だね」

「美少女…?」

「坂柳さんのことだよ。初対面で見たとときも可愛いって思ってたし、さつきも少し見惚れるぐらい可愛かったよ?」

私の言葉に返事はなかった。言っただけから、ナンパみたいなのを言ってしまったと後悔したが、彼女が全く反応を見せなかったから少し緊張してしまっている。

もしかして褒められることになれていないのだろうか?

私も蔑まれることは数あれど、褒められるようなことは中学校に入る前はあまりなかったから気持ちはわからなくもない。

実際、初めて褒められた時には何を言えればいいのかわからなくなって固まってしまったのはいい思い出だ。前世でもよく考えたら人からお世辞を言われることはあっても褒められるようなことは少なかった。

その後、彼女は黙ったきりだった。私も特に話すようなこともなかった。それで寮につくまで二人の間に会話はなかった。

そうして寮にもう少しでつきそうになったので、私は彼女を下すことにした。しゃがんで、腕を離して彼女を下す体勢を作った。

「坂柳さん、そろそろ寮につくから降りてほしいんだけど」

「…」

声をかけたはずなのだが、返事は返ってこない。美少女をおんぶしながら寮に入った日には、初日から彼女を作ったチャラ男という認識になってしまおうと思った私は困った。しかも、それがAクラス1の美少女と言ってもいい坂柳さんと来たら明日から私はハブにされること間違いなしだ。

とりあえず坂柳さんにもう一度手を回して回した手を揺することで、坂柳さんに気付



いてもらおうと思った私は軽く腕を揺すって彼女を揺らした。

「おーい、坂柳さーん」

「!、こ、小坂くん、ど、どうしました!?!」

お前がどうした。

なんかめちやくちやテンパっていて顔が赤い。もしかして本当に褒められたことがなかったのかも知れない。ちよつと褒めただけでこんなにテンパるなんて予想もしてなかったの逆で申し訳なつてくるレベルだった。

まさか彼女に限って、私のキザなセリフに照れているなんてことはないだろう。

あんなことを言った事実を自覚したら死にたくなつてきた。

「どうしたも何も、もう寮に着くから人目がないうちに降りてもらおうと思ったんだけど」

「す、すいません、今降ります!」

そういうと彼女は慌てて私の背中から降りた。

しかし、テンパったまま降りた彼女は杖を使わないで降りたため、そのまま体勢を崩してしまった。そのまま彼女は私の背中に頭をぶつけるような形になってしまい、私の背中に軽い衝撃が走った。

「…!?!」

「本当に大丈夫？」

ぶつかった彼女は急いで杖を使って立ち上がった。私が彼女が離れたのを確認してから、彼女の方を見るとそこには耳まで真っ赤になった彼女の姿があった。

「も、申し訳ありません！」

「そんなに気にしてないから気にしなくていいよ？」

「私はこれで失礼します！」

彼女は気持ち急ぎ目で寮の方に入ってしまった。

杖をついている彼女からすれば、かなり早めのペースであることからよっぽど恥ずかしくなかったのだろう。

何で私はこんな青春ラブコメみたいなことをしているんだろうか。もつともこれで私がイケメンだったら映えたんだろうけど、不細工と美少女のラブコメとか誰得だよ。

そんなことを考えながら私は、コンビニによって軽く日用品を買ってから寮に戻ることにした。

寮の自室に戻った私は部屋で悶絶していた。

今日1日のことを振り返っていたのだが、失敗点や、さっきのラブコメみたいなことを思い出していたらだんだん自分が恥ずかしくなってきた。

まず、何故マイナスを漏らしてしまったのか。これは本当にやらかしたとしか言えない。

原因の理由付けはいくらでもできる。高校生活でどっちの立場にしようか迷っていたとか、ムカついたやつを見たから威圧して俺 T U E E 感を味わってみたかったとか、私が普通の人間じゃないことを誇示したいと思ったとか、別に少しぐらい漏れても問題ないだろうと思ったとか。

問題大ありだよ!!  
馬鹿か私は!!!

何がどつちにしようか迷ってた、私は過<sup>マイナス</sup>負荷を隠すって決めたんだろうが！  
ムカついたやつを見たからとかふざけてんのか!?

どんだけ煽り耐性ないんだ私は、こんなだつたら隠しきれるところかマイナス全開だつてあり得るだろうが！

俺TUEEEとかふざけてんのか!?

そんなのを手に入れて何が面白いんだ!?

私が見たいことはそういうことじゃないだろ！

普通の人間じゃないことを誇示したいとか馬鹿じゃないのか!?

私は普通の皮を被るって決めてきたんだらうが！

…あー、死にたい。

穴があつたら入りたいとか通り越して自分の首を鉈で切り落としたい。何でホームセンターによらなかつたんだらう？

こういう時のために鉈が欲しかったのに。

こんな意志の弱いまままで高校三年間過ごしきれるとは思えない。

信じられるか？

これまだ入学初日なんだぜ？

はははワロス。

いろいろ忘れてたネットスラングまで出てくる上に、テンションが上がりすぎておかしくなるくらいには落ち込んでいた。

現に今この部屋の中に監視カメラの類がないことを確認してからはマイナス全開中だ。

自分の中にマイナスを抑える感覚で常に抑えているけど、ここまで垂れ流しにしているのはすごく久しぶりだからとても心が軽い。言うならば、今の私が一番素に近い私ということになるだろう。

元々のマイナスの気質を抑えて普通ノーマルまで抑え込んでいるんだから、めだかボックスを読んだ人にはどれぐらい大変なことかわかってもらえると思う。

具体的にいうと、常に自分の服の内ポケットに刺き出しのナイフを入れているようなものだ。激しい心の揺れで、服という自分を突き破って出てしまいかもしれない。それを必死になって自分という服を分厚くすることで、隠している感じだ。

突然人が訪ねてくるようなことになったら困るが、そんなことは滅多にないだろう。だからマイナスを垂れ流しにしても問題はないと思っている。幸いにも、私の部屋

は角地で右隣にしか住人はいない。

こんな奥にわざわざ来るような人も多いはずがないので、私はマイナスを抑えることをせずに伸び伸びと自室で過ごすことができるって寸法だ。実際、マイナスを垂れ流しているからこの部屋には入りたくないって普通の人間なら感じるだろうという打算もある。

…あー。

今思えば教室を出たのも思いつきり悪手だったな。

病弱<sup>坂</sup>少女<sup>柳</sup>見守<sup>ル</sup>り隊<sup>ブ</sup>の連中には理由を言っただけど、他の人達からすれば結局私は協調性のない独りよがりな子供にしか見えない。何より普通<sup>ノーマル</sup>の皮を自分で剥がしに行くスタイルとか、ほんと一貫性がなさすぎる。

一度決めたことが揺らぎまくってる。そのせいであとで振り返った時に、それまでの行動全てが悪手にしか見えない。

今考えると、考えすぎてファミレスについたときに気付かなかったうえに、咄嗟に

言ったことのせいでお通夜にしてしまったことも、完全に身の上話を聞いてほしいような感じの吐き気のするような奴になっていた自分が気持ち悪い。

誰彼構わず「私は親に捨てられて施設をたらいまわしにされてるんだよね」とかいきなり言われても困るだろうし、つて前に考えていたのに自分から言いふらすとか救いようのない馬鹿だな私は！

さっきの坂柳さんとの問答だって、あんな回りくどいこと言わずにさっさとあなたの傘下に入りますってだけ言っておけばよかったのに！

無駄に相手に警戒心を持たせるとかアホすぎて救いようがない。

何が助っ人ポジションだ、お前の頭を早く助けてやれよ！

そんなもって、最後にはあのラブコメモードキですか。



私みたいなマイナスがあんな気持ち悪いことして何になるっていうんだ。

鈍感系主人公じゃないんだから帰り際に寮に戻った時も耳まで真っ赤だったのは見えてたし、可愛かったけども私がここに来たのはそういうのが目的じゃないだろ！

そもそも、初日に女の子を背負って帰るとかどこの漫画の主人公だよ！

なんで私は今日あつたばつかの女の子に可愛いとかな言ってるんだよ！

気持ち悪いにもほどがある…！

あのポンコツ美少女も、話し合いの場所移すにしてももつと近いところにしろよ！

移動するだけでグロッキーとか何やってんだよ！

そんなんだから私になんちやってラスボスとか言われるんだよ！

そんなことを思いながら私はベットの足を転がり続けていた。

決して口には出していないが、やらかしたことが多すぎてすでに泣きそうになっていた。

今泣くぞ、すぐ泣くぞ、ほら泣くぞ。

そう思っていた私の頬には冷たい雫が垂れていた。

いや、最後の方は有栖ちゃんの悪口になっているが。∴坂柳さんっていうと強者感があるけど、有栖ちゃんっていうとポンコツ感がやばい。

今度から心の中では有栖ちゃんって呼ぶことにしよう。それだけで、シリアスな雰囲気が出ない。気が台無しになりそう。

皆を支配して裏工作を進める坂柳さん。

スキンヘッドと敵対する坂柳さん。

他の人を陰から操って嗤っている坂柳さん。

皆をまとめて裏工作をする有栖ちゃん。  
スキンヘッド相手にかみつく有栖ちゃん。  
他の人を陰から操って笑っている有栖ちゃん。

うわあ。これだけでめっちゃくちゃ印象が違うぞ。

Aクラスを陰で支配する裏ボスのラスボス感から一気にボンコツ可愛いマスコットに早変わりだ。

Aクラスのメインマスコットキャラクター有栖ちゃん！

寝よう。今の私は疲れているんだ。

## 5話目 二日目の話

あー…辛い。

昨日のことを考えると辛い。

昨日のことは忘れよう。正直思い出すたびに恥ずかしすぎて、憂鬱すぎて辛い。

昨日に戻れたら、自分をぶん殴ってでも奇行を止めさせなければいけない。

だが、そんな現実逃避をしたところで悪戯に時間が過ぎていくだけだ。そろそろ起きないと授業に間に合わない。ベッドの上でもう少し目を瞑っていたいけど、現実を直視しないといけない時間だ。

そう思つて私は目を開けたが、そこに映つたものは今にも落ちそうなくらいに切り刻まれたように見える天井だった。

…知らない天井だ。

いや、マジでなんだこれ。

私の周りの空気が目に見えるレベルで切り刻まれてるように見える。

そのせいで天井が切り刻まれて今にも落ちそうな錯覚がする。

…もしかして、これマイナス垂れ流しにして寝た影響なのかもしれない。

裸エプロン先輩のは周りの空気が螺子曲がるほどのマイナスだったけど、私の場合は周りの空気がぶっ鉋切られるほどのマイナスってどこか？

ていうか、私ってマイナスこんなに強かったっけ？

昨日の自己嫌悪でマイナス成長したとかなのか？

あ、感覚がそうだって言ってる。

よく考えたら、私のマイナスって自己主張が激しい。マイナスのことに關しては間違ってる時には感覚で教えてくるところとか過保護としか思えない。

それに助けられることが多いから悪いことばかりじゃないし、むしろいいことなんだけど過保護な母親が常にいるような感じは気持ち悪い。

…これもしかして、こっちの世界じゃないない親代わりになろうとしてるのか？

凄く合っているような感覚が来た。

ここまで自己主張の激しいマイナスがあるなんて初めて知ったけど、スキルが親代わりとか悲しすぎるにもほどがあるだろう。

でも私にはそれがお似合いなのかもしれない。『転生』なんてしてまで生にしがみついている身だ。

…無冠<sup>ナツシゲオール</sup>刑は無関係っていうこと。

つまり、私以外は関係ないっていう私の在り方。

要するに私自身ともいえる。そう考えると私のマイナスが意思を持っていてもおかしくはないのかもしれない。

原作の『めだかボックス』では、そんなことはなかったが、だって、彼<sup>無冠刑</sup>？は私そのものなんだから。

あ、そう考えると過保護というよりは自分が死にたくないから仕方なく教えているような感じなのか？

親代わりっていうのも寂しさを紛らわすというよりは、負<sup>マイナス</sup>の側面の使い方に口出しす

るっていう感じの意味な気がしてきた。

…あれ？

間違えてる？

いや、合つてるとも間違つてるとも言つてこない感覚だこれ。黙秘を決め込まれてる。

なんか少し違つてことか？

私には関係ない。  
まあいいや。

勢いでマイナスを垂れ流しにしていたけど一度制御に成功しているし、直接人にあつているわけじゃないから『縁』が切れるほど過<sup>マイナス</sup>負荷が暴走していない。

そうじゃないと、中学時代に一度他の部員と自己紹介をやり直す羽目になっているはずだから問題ないだろう。

最悪切れてたらもう一回自己紹介からやり直すだけだ。

とりあえず、朝食を食べて教室に行こう。そんなもつて、放課後にはホームセンターと家電量販店。それに携帯を買わないといけない。元の持ち物が少ないからポイントを駆使して必要なものをかき集める必要がある。ポイントを極力使わないようにしないといけないから、これからは無料コーナーにお世話になることになる。



施設で料理を手伝っておいたおかげである程度の料理はできるし、最悪火を通せば大體のものは食べられる。それで腹を壊すこともあるかもしれないが、もうマイナスの一环としてあきらめることにした。

それを考えると胃薬とかも必要だな。

風邪薬とかも一通り揃えておく必要がある。

しかも、この学校はポイントでテストの点数すら買うことのできる学校だったはず。それを考えると必要なものを最低限集めて残りは貯めておく必要がある。

ポイントの価値は人を動かすことも簡単だということにもある以上、無駄遣いはできない。

Aクラスは優秀な人間の集まりで初月は殆どポイントを落としていなかったはずだが、それでもなくなるときは一瞬なのが世の常だ。

まあ、そんなことを考えると自然と自炊せざるを得なくなるから学校方針としては間違っていないだろう。

その分人を信じてマイナスに成長しそうだとは思うが。

とりあえず昨日コンビニの無料コーナーからもらってきた卵と食パンを焼いて目玉焼きとトーストもどきにして食べよう。

トースターはないけど、フライパンは二枚あるから何とかなるはず。

油って偉大だということを思い出した朝食だった。フライパンに卵がくつついて、黄身が崩れた目玉焼きをトーストもどきに乗つけて食べた。

まづくはなかったんだけど、油とかバターとかの偉大さを思い知らされた。

目玉焼きを剥がすだけなのに、ここまで失敗するとは思わなかった。

とりあえず洗いや物は済んだし、準備も無事にしたから教室に向かうことにしよう。マインナスを内側に閉じ込める感覚を忘れない。

精神的に負担がかかるが、垂れ流しにしたまま教室に入ろうものならいじめ発生間違いない。

最悪Aクラス全滅エンドが見える。

そんな訳で教室に入るとすでに隣の席には有栖ちゃんが座っていた。

…吹き出すな…耐えるんだ。

そう自分に言い聞かせた。

『有栖ちゃん』って吹き出しを付けるだけで一気に沸点が下がる。

昨日の帰り際のポンコツ具合を見たせいでなおさらやばい。病弱腹黒ポンコツ系美少女とか属性盛りすぎだ。顔が良い分、昨日の件が相まって尚更残念美人に見えてきた。

可愛い？

それは認めるが、マスコットキャラクター的な可愛さを裏ボス系ラスボスっぽいやつが持つてたらそれだけでシリウスが台無しになると思わないか？

あ、安心な人外さんはマスコットになっても可愛いのか？

でも、新しいイイの不可逆の英雄さんがマスコットの可愛さをもつてポンコツ系だったら皆困ると思うんだけど。

敵対する方も「え、こんなポンコツとラスボス戦しなくちやいけないの俺？」みたいな感じになると思う。

まあ、私は間違つても主人公側にはならないから関係ないか。

裸エプロン先輩みたいにポコポコにされた後ならワンチャンあるかもしれないけど、綾小路君この主人公つて確か目立ちたくないタイプの人のはずだし、そんな熱い青春漫画みたにはならないだろう。

とりあえず昨日のことにはあまり触れないようにして挨拶をしよう。

あれは私と彼女だけの秘密つてことで。

「おはよう、坂柳さん」

「おはようございます、小坂君」

よかった。ちゃんとラスボスの皮を被れてる有栖ちゃんを見て少し安心した。

昨日帰ったままのポンコツ可愛いマスコット系キャラクター有栖ちゃんはもういない。  
い。

また、私のことを覚えていることから、寝る時ぐらいはマイナスリを出してても問題なラッス

いことを確認できた。

もしこれで覚えてなかったら面倒なことになっていたが、そんなことはないみたいで安心した。

「昨日は申し訳ありませんでした。送ってもらってとても助かりました。」

「気にしなくていいよ。困ったときはお互いさまってことで」

「そう言ってくれると助かります」

やっぱり昨日は入学初日でいろいろ大変だったんだろう。その心労が祟って帰りの最後におかしくなっちゃったただけなんだ。

…そうに違いない。

「昨日あの後何かあったのー?」

近くにいて私と有栖ちゃんの会話を聞いていたクラスメイトが話しかけてきた。あの後の話は、私と有栖ちゃんの二人だけでしていたので気になってるのだろう。

「あの後、ちよつと話し込んだら遅くなっちゃってね。もう辺りも暗かったから坂柳さんを送って帰ったんだよ」

「小坂、坂柳さんと二人で帰ったのか!?!」

「いいなー。私も一緒に帰りたいな」

クラスメイト達が次々に絡んでくる。昨日の失敗を取り戻すためにもクラスに馴染むにはいい機会だ。

…あれ？

有栖ちゃん？

何で顔赤くしてるの？

さっきまでのラスボス感が消えて一気にポンコツ臭のするマスコットキャラに早変わりしてるけど大丈夫？

そんな調子でこのクラスを支配しようとか本当にできるの？

お兄さん心配になってきたよ？

「そういえば、小坂君とは連絡先の交換してなかった気がするー」

「確かにそうだな、今交換しないか？」

おー……

これがコミュ力。Aクラスの本領発揮つてところなのか？

だが、残念なことに今の私はまだ携帯電話をもっていない。

「明日でもいい？」

「今携帯持ってないから」

「あれ、携帯忘れたの？」

「寮において来てしまったみたいで、ポケットに入れ忘れたのに今気づいた」

「それじゃあしかたないな、明日交換するか！」

今話している二人は昨日一緒にご飯を食べたメンバーの人ではない。私達の話聞いて、昨日一緒にご飯を食べたメンバーはこつちを可愛そうなものを見る目で見てい

る。

私が施設暮らしで携帯電話と『縁』がなかったことを察している人たちだ。

さつきまで、有栖ちゃんのことを聞きたそうにしていた人に紛れていたが、携帯の話になった途端に離れていった。

…やっぱり昨日施設暮らしのことを話したのは失敗だったとつくづく思った。

クラスに馴染もうにも、昨日言ってしまったことが相手と自分との距離を広げている。まあこれは仕方ない。

もうどうやっても取り返しのつかないような事態だし、むしろこれを利用して孤立するルートに入ることも考えたほうがいいかもしれない。

…さてよ、下手に孤立するよりもスキ<sup>葛</sup>ンヘッ<sup>城</sup>ト同<sup>ル</sup>盟<sup>ブ</sup>とポ<sup>坂</sup>ンコ<sup>柳</sup>ツ美<sup>グ</sup>少女<sup>ル</sup>守<sup>ル</sup>り隊<sup>ブ</sup>の間で胡麻を擦る役目をすれればいいんじゃないか？

ついでに孤立気味な子たちとも関われるし、あのポ<sup>有</sup>ンコ<sup>栖</sup>ツ美<sup>ち</sup>少女<sup>ん</sup>がどう思っているかは知らないが、Aクラス内で内部分裂して破裂した後はどうするのかって考えているのか？

退学させるならまだしも、そうじゃないんなら不確定分子を内部に抱え続けることになるぞ？

ポ<sup>坂</sup>ンコ<sup>柳</sup>ツ美<sup>グ</sup>少女<sup>ル</sup>守<sup>ル</sup>り隊<sup>ブ</sup>の支持率が100%になったところで、内部で不平不満を持っている人たちが分裂したり、他のクラスに寝返ったりする可能性も十分あり得る。

Aクラス内部で、もう有栖ちゃんには勝てないけど散っていった葛城君の恨みを喰らえー、みたいな感じで情報を垂れ流しの横流しされたら最悪な事態になる可能性がある。

それを考えると、私がするべきことはみんな仲良く喧嘩はやめましょうっていう方針にすることじゃないか？

間を持つ形になれば、お互いに変なことを言っても正論ですり合わせる事ができるし、何よりもAクラスは初動が強いんだから下手に内部分裂を起こさないほうがいい。



…一番の問題はそれを私がやるのかっていうところだが。

別にそこまでする義理もない。エリートを見るとムカつくようになっているのは変わらないし、むしろ前よりもムカつく感じはある。

だけど、こいつらは自己の利益だけで動く愚か者たちだ。

どうせ頑張っても、最終的に抜かれるんならマイナスを抑える都合上最も平和的に済ませたほうがいいのではないか？

最後に負けたとしてもみんな最後まで頑張りましたって言えば君たちは本望だろう？

…：そう考えたらやる気が出てきた。

私は自分の席から離れて席に戻っていく生徒を眺めながら、とりあえず明日クラス全員の連絡先を登録するところから始めようと思い、授業に身を任せた。

それからは何事もなく終わった。

授業はオリエンテーション的なもので基本的な説明と基礎的なものしかやらなかった。昨日一緒に食事をしていたメンバーは真面目に授業を受けていたが、他のクラスメイトが少し騒がしかった時があった。

その時に、教師の動きが一瞬止まったのを私は見逃さなかった。

隣の彼女もこつちを見てきたので頷いておいた。彼女は頭が良いからこれだけで伝わるだろう。これで彼女の立場はAクラスでスタートダッシュを切り、他人を纏める優秀な指導者といったところだろう。

葛城君は騒がしい人たちを注意しているみたいだが、まだシステムのなことには気づいていないみたいだ。この段階でどつちの指導者が勝っているかなんてお察しだが、指

導者が優秀だろうが無能だろうが他のクラス愚スメイト者が付いてこないんじゃないや話にならない。

逆にいうと、指導者が多少劣っていても集団の人数が多ければ何とかなってしまうのが社会だ。

一番困るのは何も考えてないで流されるだけ流されて騙されたっていう連中だけど、Aクラスにはそういう人は少なそうだ。

そう思いたい。

そんなことを考えているうちに、放課後になった。

今日の私はいろいろと買い出しに行くところがあるので教室を出ようとしたが、その前に有栖ちゃんに話しかけられた。

「どこに行くんですか、小坂君？」

「昨日いろいろ買えなかったものを買ってこようと思うんだ。結構回るから、話は明日でもいいかな？」

何時になるかわからないし」

「そういうことですか。仕方ありませんね」

心なしかしよんぼりしているように見える。

困ったぞ、普通に可愛い。かといってここで私が頭を撫でようものなら気持ち悪かられるのは目に見えている。

そんな勇気が私にあるわけもない。

少しの罪悪感を感じながら、私は教室を出て真っ先にホームセンターに向かった。

ホームセンターに行ったが、鉈がおいてなかった。

シヨックが大きすぎて、もう帰りたくなっていた。

何でホームセンターなのに鉈がおいてないんだよ！

何のためのホームセンターだよ！

心の中で声を大にして叫んだ。心の中だけで済ませているあたり、冷静さを見失っているわけではないと思いたい。

だが冷静さを取り戻したら今、鉈を売っていたとしても買う人がいないというよりは使いどころがないと言われればそれまでだ。確かに学校内はよく整備されており、鉈を

使つて切り拓くような場所はまずない。

むしろ、制度の都合でピリピリしやすい雰囲気の中で凶器認定まっしぐらの鉈を置いてある方がおかしいのかもしれない。

：それでもシヨックだった。

私がマイナスを感じたとき、自分自身が鉈になつたような感覚を味わつた。それ以来、私は鉈に親近感を持つている。

今日、私は中学生の時には買えなかつた鉈をようやく買えると思つて、サンタのプレゼントを待つ子供のような気持ちで過ごしてきたというのにこれはいくら何でもあんまりじゃないだろうか。取り寄せてもらうことも考えたが、履歴で残ると何のために買ったのか問い詰められたら答えづらいつらいと思ひ困つてしまつた。

手段を択ばなければ買うこともできたのだろうが、私は泣く泣くホームセンターを後にした。

次に向かつたのは家電量販店だ。

パラパラと人が散らばっているような感じで、ゲームを買う人も見える。こんな貴重なポイントをゲームに使つて大丈夫か？ とか思ひながら、恐らくこの学校の仕組みに

ついてまだわかっていないであろう同じ新入生をスルーして目当ての場所に行った。

録音機も欲しかったが先に時間がかかると困るので携帯電話を買うことにした。店員を呼び、説明を受けてとりあえず通話し放題のプランにする。

これで毎月4000ポイントが飛ぶことになるが、これで手に入る情報というものはそれ以上の価値があるだろうと確信している。

私は思ったより早く終わったことに喜び、録音機を探しに行った。

録音機は売っていたのだが、どれがいいものなのかよくわからなかったため適当に4種類買うことにした。全て、小型の手のひらサイズのものだが種類がばらばらなのでどれを使っても私のものだとばれにくく、はずれが紛れていてもリカバリーが効くようにした。

全部でおよそ20000ポイント。結構掛かった気がするが、初期投資として諦めた。

次に向かうところは、ドラッグストアだ。

一般的な風邪薬や胃薬、下痢止めなどを一通りそろえておきたい。空手の決勝で戦わ

ずして負けたのはいい思い出だ。マイナスなのに今日は運良く勝ち進めているなーと思つたら、最後の最後に爆弾を落とされたあの絶望感を私は忘れない。上げて落とすなんてこともあるのかと少し感心したけど、殺意の方が圧倒的に上回っている。

そんなことを思い出しながら、ドラッグストアで薬を見繕った。胃薬、胃腸薬、風邪薬、下痢止め、消毒薬、包帯、絆創膏、目薬、軟膏、頭痛薬、睡眠薬を一通りかごに入れてレジに向かうと、レジの店員が少し引き攣った笑みを浮かべながら会計をしてくれた。

全部でおよそ5000ポイント。

必要経費だから仕方ない、私は自分にそう言い聞かせた。

最後に向かったのはスーパーだ。

目当ては無料食材と調味料。調味料まで無料であればいいが、油とかは普通に買わないといけないんじゃないかと思う。なくても最悪何とかなるし、牛脂とかおいてたらそれを食べたい。

私は調味料どころか、普通にサラダ油が無料コーナーにあることに戦慄していた。

バターまであったときは思わず二度見してしまった。食料関連はかなり緩く設定されているみたいだ。おかげで自炊が捗るなー、とか思いながら消化できる分の食材をかごに入れた。

ついでにフライパンも新しいのに変えておこう。あのフライパン結構ポロポロだったし、前の人が使ったものをいつまでも使うのはなんか嫌だ。

衛生的にもあまり好ましくない。

あ、お弁当箱買うの忘れてた。明日からポイント消費を抑えるために、お昼はお弁当にしようと思ってたことをすっかり忘れていた。

そうして私はお弁当箱をかごに入れ、一通りの買い物済ませた。

全部で2000ポイント(フライパンは2枚、その他日用品込)。これで今日使ったポイントは全部で29000ポイントぐらい。昨日の食事で1000ポイントちよつと使ったから、残りは大体70000ポイントぐらい。

必要経費としてはこれぐらいは仕方ないと思おう。

これからの生活でどれぐらい切り詰められるかがカギだ。

そんなことを考えながら私は買い物袋を両手に持ち、寮に帰った。



夕食を済ませた私は少し体を動かしたくなって、寮を出て人気のない場所に来た。

さつき思い出したことだが、実は今日部活の説明会というものが放課後にあつたらしい。買い出しのことで頭がいっぱいになっていたためすっかり行き損ねてしまったが、体を動かす場所が欲しいと思っっている私には少しの後悔があつた。

だが、大会で結果を残せればクラスポイントが入るとはいえ、私のことだから最後の最後で負けるのが目に見えている。

2年生の時の大会なんて行く途中で車に突っ込まれて、急いで躲したら足をねん挫して出られなくなったなんてこともあつた。あの時は前世の最後を思い出して酷く狼狽えたことを覚えている。

しかも、これからのクラスでの立ち回りを考えると放課後に部活動に入りながらクラスで動くのはとても難しそうだ。それを考えると、少し残念ではあるが空手部に入るのは諦めたほうがいだろう。

そう思った私は開いている時間に基礎的な鍛錬だけをすることにした。

走り込み、筋トレ、空手の基本的な型の復習、後は漫画の知識を思い出した時に思い出してきた技を再現できないか試してみたい。

男なら一度くらいあるのではないだろうか？

格闘漫画の技を実際にやってみたいと。

せっかく空手で鍛えているという下地があるんだから、時間があって心に余裕があるときにはいろいろな挑戦してみるべきだと思う。

私は覚えている中で頭の中でイメージがしやすかった、刃牙のマツハ突きを試そうと思った。

そう思った私は走り込みと筋トレ、基礎的な型の復習をした後にマツハ突きの練習を始めた。

体の関節に回転を加えながら、手に全ての力を込めて振る。

足首の関節の回転をひざの関節へ、膝から腰へ、腰から胴へ、胴から肩へ……嫌な感

触がした。

……めっちゃくちや難しい。

分かりきっていたことではある。

ここバトル漫画の世界じゃないし、カタルシスが楽しい学園ものだったのはわかってるけどね、まさか一回振り抜くだけで肩が外れるとか思わなかった。

関節に回転をかけて手の方に持っていくまでの流れをきちんとしないと、貯めた力が変なところに行ってしまう。

それで肩に回転力などの力が集まってしまったから外れてしまったみたいだ。理論だけでしかわかってないことをいきなり全力でやるもんじゃないうってことだな。

ていうか、これ一歩間違えてたら普通に肩が壊れてたんじゃね？

何で最初から全力でやろうとしたんだ、馬鹿か私は。

…これはかなり厳しそうだ。痛かったけど肩をはめ直した。

今日はこの辺にして、続きは後日に回そう。こんな肩の具合で続けたら最悪取り返しのつかないことになりかねないし、まだジンジンするから正直やりたくない。

まあ、本気で習得できるとも思っていないし気軽にやろう。そもそも完全版が完成した場合は私の腕が内部から破裂するとか言う恐ろしい技だった気もするし、先端がマッハ

を超えるなんて言う突きを人体にやったら即死不可避で私が豚箱行きだ。

…ていうか、体鍛えたほうがいいって思ってたけどやりすぎじゃないかこれ？

カタルシスメインなんだから体鍛えたところで部活に入らないんなら大して変わらないだろう。現に話的にも敵対することになるAクラスで一番優秀そうな有栖ちゃん  
は病弱体質だし、別に体鍛える必要なのではなからうか。

…だけど、せっかく付けた筋肉を落とすのももつたいないか。

全身汗まみれになっていた私は、汗を流すために寮の自室に戻った。

シャワーを浴び、勉強の復習を軽くしてから、携帯の初期設定をしていなかったことを思い出しベッドでゴロゴロしながら初期設定を済ませることにした。

初期設定を進めながら考える、私は明日何をするべきか。

本当にあの二人の間に入って間を取り持つことをするのか？

裸エプロン同盟もとい、裸Yシャツ同盟を作って彼女たちと敵対する姿勢を作り、私

を倒させるために二人が団結するっていう方が楽な気もしてきた。

問題としては私には裸エプロン先輩みたいに人望がないことと、有栖ちゃんに勝手なことはしないといった手前第三勢力なんて作ろうものなら怒られるの間違いなしってところか。

まあ、怒られるに関してはどうでもいいけど、私についてくるような人がいないのも事実だし、一人で二人どころかAクラス全員の相手をするのは手に余る。マイナスだからつてのもあるけど、そもそも私にそういうものは向いてない。

基本的に利己的で個人主義な私がグループを作るなんてまずできないだろう。

だが、私個人じゃ彼らと敵対できるほどの力はない。

…過負荷を抑えることなんてやめて、気持ち悪さ全開にすれば二人が手を取り合わざるを得なくなるか？

いや、そんなことをしたら間違いなく主人公にも目を付けられることになりうるし、

私の歯止めが利かなくなるのも目に見えている。

そうだったら、私は学校を卒業できなくなる可能性の方が高くなる。

とりあえずこの学校に入った目的は卒業することなんだから、そこを履き違いないようにしないといけない。

よし、やっぱり明日はクラスメイト全員の連絡先を手に入れて葛城君と仲良くなることから始めよう。

派閥に入らないにしても仲良くなる分には嫌がられないだろうし、昨日今日と様子を見てみただけではできるだけみんな仲良く、強制はしないよみたいなタイプの人間だ。

擦り寄ってくる人を蔑ろにしないことは目に見えているからそこまで難しくはないだろう。

私は心の中でスキ<sup>葛</sup>ン<sup>城</sup>ヘツ<sup>ル</sup>ド<sup>ル</sup>ト<sup>ル</sup>同盟<sup>プ</sup>って思っていたことを謝る必要があるかもしれない。独断と偏見がよくないことだったのはわかっていたはずだが、高校生になってからセッションがおかしくなっていたのだろう。

そういうことにしておかないと、私の心が勝手に痛んで死んでしまいそうだ。

そんなことを考えているうちに初期設定も終わったし、今日はもう寝ることにしよう。

明日こそ、連絡先を増やすために頑張らないといけないしやることはいっぱいある。裏目になることもあるかもしれないが、動かないで文字通り轢き殺されるなんてマネは前世だけで十分だった。

## 6 話目 三日目の話

我々は、大人も子供も、利口も馬鹿も、貧者も富者も、死においては平等である。

この言葉はロレンハーゲンの言葉だ。教育者であり、牧師であった彼の言葉だが、果たして本当にそうなのだろうか？

乞食の命と貴族の命が同じと言っても貴族には納得ができないだろうし、乞食ですら自分の命にそこまでの価値はないと言うかもしれない。

そもそも平等とは何だ？

事象として訪れることはすべて平等なのか？

そこに価値の違いがないなんて本当に言えるのか？

マイナスに生きてきた人間とプラスに生きてきた人間の死が本当に価値が同じものと言えるのか？

誰にも看取られることなく、道端で死んでいった乞食と親族に囲まれてみんなが嘆き悲しんで死んでいった有名人の死が果たして同じ価値なのか？



そして何より、自分の死と他人の死が同じ平等だなんて誰が信じるんだ？

自分が死ぬことで他の人間1000人が助かるとした時に、自分とその1000人の価値は平等なのか？

他の人からすれば1000人をとるべきだと声を大きくして言うだろうが、自分の番が来た時に本当にそう言えるのか？

生きるときと死ぬときは平等なんて口当たりの良いことばっか言っていて、そこにある価値の違いにまで目を向けたことがあるのか？

まあ、そんなことは関係ないけど。

昨日買ったスマホのアラームに設定した時間の5分前に目を覚ました私は、お弁当の準備をしていた。少し多めに作って、残った分を朝食にするつもりだ。

今日ではできるだけ早く教室に行って連絡先の交換をし、クラスメイトとの交流を深め

なくてはいけない。結局、自分にできるのは間に入る中間管理職モドキみたいなことぐらいしかできないと気づいた今、それならそれなりに楽しくやろうと思っっている自分もいる。

二回目の高校生活だ。どうせなら愉しもう。

サクツと朝食を食べ終えた私は授業を受ける準備をして、スマホを忘れずに持って教室に向かった。

教室に着いたが、人は殆どいない。既に教室にいるのは、葛城君と他数名の人しかないなかつた。

「おはようございます」

そう挨拶をするとみんな挨拶を返してくる。軽く良い雰囲気になったところで葛城君のところに向かった。

「おはよう葛城君、小坂零っていいいます」

「おはよう、小坂。何か用か？」

「同じ男子同士だし、零って呼んでよ。」

「この前はちよつと抜けようとしたけどクラスメイトだし仲良くしようと思つてね」

「そういうことなら俺も康平でいい。よろしくな零」

そう言つて康平は私に手を出した。私はそれに握手で返すと、他の人たちも次々に私に挨拶と自己紹介をしてくる。この前の自己紹介の時に抜けたのにもかかわらず、みんな仲良くしようとしてくれるのでとてもやりやすかった。

「昨日は携帯置いてきちやつたから連絡先交換できなかつたけど、今日はちゃんと持ってきたからみんなと交換しようと思つたんだ。

康平のも教えて欲しいんだけど、いいかい？」

「構わない」

そう言つて康平と連絡先を交換した後、流れで居た人の連絡先をどんどん交換していった。少しづつ人も増えてきたので、新しく来た人にも突撃して連絡先を交換してまわる。孤立気味な人たちも話しかければきちんと返してくれる上に、ちゃんと連絡先を交換してくれるからとてもやりやすかった。

一昨日一緒にご飯を食べたメンバーとも交換した。最初は少し驚かれたが、昨日買ってきたことをこつそり伝えるとみんな笑顔で連絡先を交換してくれた。

…こういう時、頭の良い人間は自分を良い人だと見せようとするから基本的に拒まない。

そう思っていたのは正解だったみたいだ。途中でやってきた有栖ちゃんとも連絡先を交換した。

「あれ、Aクラスのグループチャットってまだないの？」

「仲間内のチャットはあるみたいですけど、クラス全体のチャットはまだないみたいですね」

有栖ちゃんからグループチャットに招待されたのに、人数が15人しかいないことに気づいたので聞いてみたが、なんと、Aクラスのグループチャットがまだないということを知った。恐らく、グループごとで分けたのを作っているせいでクラス全体のものを不要に感じたのだろう。孤立気味な人はいったいどうしているんだろうか。

…これはチャンスだ。

ここで私が全員の連絡先を交換したことを活かしてAクラスのグループチャットを作って、クラスの中の立ち位置を確定させる。

協調性のない変なやつから、クラス全体に気が向くまとめ役に早変わりだ。

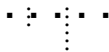
これで、康平と有栖ちゃんがぶつかって私が纏めたとしてもそこまで不思議がられずに行けるだろう。

そう思った私は真つ先に『Aクラス』という名前のグループチャットを立ち上げ、そこに今日連絡先を交換した皆を招待した。

『いきなりグループチャットを立ち上げた上に、皆さんを招待してしまい申し訳ありません。Aクラス全体のグループチャットがないということでしたので、クラス全員の連絡網として作りました。入りたくない方がいらつしやったら退会していただいて構いませんし、強制もしません。私がリーダーを気取る気もありませんので、皆さんご自由に使ってくださいると幸いです』

『そんな気にしなくていいよ。Aクラス全体のグループチャットが欲しかったのは事実だし、タイミングを逃しちやつてたからむしろありがたいよ』

『そんな堅苦しくなくていいぜ？俺もこういうの欲しいって思ってたし』



よし、全員入った上に誰も退会していない。

やっぱり、こういう感じで無理やり招待しておけば断りづらいし抜けづらいって思ったのは正解みたいだ。これで今日の目標の大多数が達成できた。

こういう頭だけいい連中っていうのは自分の利害計算をするから扱い方を覚えておけば簡単に制御できる。それに、クラスの雰囲気が必要な仲良くといい感じに進んでいる入学初期辺りに、このポジションをとれたのは大きい。

わかりやすくオセロで言うなら、四つ角の一つを取ることができたようなものだ。

人見知りだということを言っておいたのも、人見知りなのにみんなと連絡先を交換してグループを立ち上げたという見方をされれば良い評価になる。

まあ、人見知りに関しては初対面の人には人見知りをするってことにしておこう。あの時に咄嗟に言ったことだ。信じている人もそうはいないだろう。

「小坂君、ちょっといいですか?」

そう言われて私は隣の有栖ちゃんの方を見る。

「どうかしたか?」

「今日のお昼ご一緒しませんか?」

少しお話があまりまして…」

「私はお弁当作ってきたんだけど、坂柳さんは?」

「私は食堂でと思つていたのですが、それだとちよつと困りましたね」

確かにお弁当を食堂で食べていたらあまりいい目では見られないだろう。

だが、有栖ちゃんの体のことを考えると利用できるかもしれない。

「坂柳さんを利用するみたいで悪いけど、私が買いに行つて坂柳さんには席を取つておいてもらう形にしたらどうだろう？」

杖を持ったままトレイを貰つて座るのも、一人でやると大変かもしれない」

「確かにそうしてもらつたととても助かりますが、よろしいのですか？」

「私が利用してゐるようなものだから、気にしなくていいよ」

ようなではなくて利用しているだけだが。彼女の付き添いで食堂に来たと見られれば私が弁当を広げてても特に何も言われないうし、私自身も有栖ちゃんとはお話ししたいことがある。

「ありがとうございます。そうしていただけると助かります」

彼女がにつこりと笑顔を浮かべていることから、嫌々ではないのだろうとは思ふ。

それと同時に、それすらも演技なのかもしれないと思う自分がいた。

有栖ちゃんから食事に誘われたことでクラスメイトがいろいろ聞いてきたが、先生が入つてきた瞬間にはみんな席に戻つていた。こういう無駄なスペースがAクラスと言われる所以なのかもしれない。



そうしているうちに、お昼になった。休み時間にも問い詰められたが適当に流した私は、有栖ちゃんと二人で食堂に来ていた。

「すみません、私に合わせてもらって」

「一緒に食事するって言ったからね。置いていくなんてことはしないよ」  
杖をついている彼女は歩く速度が少し遅い。

当たり前といえば当たり前だし、一緒に行くといった手前置いて行ったなんてなったらどうなるかわかったもんじゃない。

「ありがとうございます」

「そんな礼を言うほどのことじゃないよ。私を買ってくるけど何がいい？」

「それでは日替わり定食でお願いします」

そう言うのと彼女は私に学生証カードを渡そうとした。恐らく、これで買ってきてほしいということだろう。

買ってくるのは当たり前だが、ここでは私に奢られてもらう。少しでも話し合いの時に情が移るようになっておいた方が後々楽になるだろうと思つてだ。

「私が奢るからしまつていいよ」

「それは嬉しいですが、買つてきてもらうのにさらに奢つてもらうなんて」

「一緒にご飯を食べさせてもらうお礼つてことで、一人飯より二人で食べたほうがおいしいしね」

私はそう言つて食券を買に行つた。有栖ちゃんを席に座らせてから来たので、私の分の席もちやんととつてくれるだろう。一応彼女の席の隣に弁当を置いてきたので他の人が座るようなことはないはずだ。

そうして私は日替わり定食を受け取り、彼女のいる席に戻つた。彼女のいる席は食堂の角に近いような場所で、あまり大きな声じやなければ他の人には会話が聞こえなさそうな場所をチョイスしたつもりだ。

「ほい、日替わり定食」

「ありがとうございます、小坂君。助かりました」

「気にしない気にしない。まあ、私も弁当出すから話は食べてからにしよう」

そう言つて私は置いておいた弁当を出した。ご飯に、ザンギ（鶏の唐揚げ）、卵焼きに

ほうれんそうのお浸しといったテンプレのようなお弁当だ。

私の中でお弁当の王道だと思うメニニューにしたつもりだ。高校生活最初のお弁当ということもあり、前世から得意だったものにした。

「いただきます」

上辺だけだとしても言うておくことに越したことはないだろう。礼儀ができていくかということはこういうところから判断されることも少なくない。

今の私のキャラクターを作るにはこういうことをちまちま積み上げていくことも必要だと、自分に言い聞かせる。

5分程度で食べ終わった。

私は食べるのが早いので話をするにはもう少し待たなくてはいけないだろう。

心なしか有栖ちゃんが急いで食べているような気がするが、気のせいだと思いたい。別に強制して早く食べさせているつもりはないのだ。

これからの話し合いについて考える。

まずこれからどうするかということ、何で今日こんなに活発に交流を深めようとしたのかを聞かれるだろうから、それに対しては素直に答えていいと思う。

ただ、葛城グループを潰した後はどうするのかということに関してはこういうもしかしたら他の人に聞かれているかもしれない場所で聞きたくない。一応聞かれなさそう

な場所に陣取ってはいはいるが、もしかしたらということを考えると下手なことをすると自分の首を絞めることになる。

考えているうちに、有栖ちゃんも食べ終わったみたいだ。

：うん、やっぱり心の中でも坂柳さんに戻そう。

有栖ちゃんって言うてるととても締まらない。

名前呼びなんて心の中でしかできないからしていたが、いざやって続けてみても虚しくなるだけだった。

「お待たせしました。それでは本題に入ってもよろしいでしょうか？」

そう言うのと彼女の纏っている雰囲気が変わった。

病弱で儂そうな少女のそれから、陰で人を操り身も心も掌握するような女王のそれに。

こんなラスボスチックな雰囲気を出せるなら、それを常に保ってくれとか思いつつ私は彼女にこう返した。

「構わないよ。大体予想もついている」

「では早速、まず今日いきなり動いたのはなぜか聞いてもよろしいですか？」

予想通りの質問がやってきた。

まあ、一昨日敵対しないと断っていたのにも関わらずいきなりアグレッシブにみんな

と交流を深めてクラスのグループチャットを立ち上げるなんてしたら、喧嘩売ってんのかって思われるのも無理はない。

「簡単にいうとクラスの全員と繋がりが欲しかったから。それとこれからの自分のクラス内での立ち位置を決めたから、その立場取りをしに行くためにせざるを得なかったって言うのが正しいかな？」

「とうとう?」

「これからのAクラスは坂柳さんのグループと康平のグループで分かれそうだと思うからね。孤立気味な人を拾い上げて二つのグループを間を取り持つ人が必要だと思うた。」

クラスの中が常にギスギスしてたら、間に挟まれた人たちがなにするかわからない。それを拾い上げる必要があると思った」

「…なるほど。確かにそういうことも考えられますね」

そう言うのと彼女は少し考え込むような表情をした。自分がクラスを掌握しきれば問題ないと思っていたのか、孤立気味のクラスメイトのことはそこまで考えていなかったのか、それともほかに何か考えがあったが私が邪魔してしまったのか。

そんなことを考えたが、何れにしろ私には彼女の表情からそこまで読み取ることはできない。そして彼女は考えるのをやめてこちらを見た。

「…わかりました。変に勘ぐってしまったことを謝罪します」

「…まあ仕方ないか」

「まだ信用できるかどうかの判断がついていなかったもので、警戒することは当たり前だと思えますが？」

警戒心が高いことは立派だが、そういう警戒心は一昨日の帰りにもきちんと保ってほしかった。

入学初日で内心浮かれてたとかなら可愛いんだけど、そんなことしたら本当にポンコツが定着してしまう。

少なくとも私の頭の中では暫く定着していた。

「まあ、敵対しないよーって言ってた人間がいきなりクラスを纏めようとしたらそうなるもおおかしくないか。

もう一度と宣言しておくけど、私はあなたと事を構える気はない。面倒だし」

「…その理由はどうかと思いますが、わかりました」

「面倒っていうのは結構大事だと私は思うよ。手間をかけるってことは、その分のリソースを使うってことだ。

それは時間だったり、体力だったりするわけで、下手な気苦労をするよりはしない方がいいと思わないかい？」

私がそう言うのと納得したように彼女は頷いた。

本当のところは面倒つてのもあるけど、Aクラス全体が落ち目になるようなことにしないために最低限の根回しを兼ねている。

何もなければAクラスは優秀な人間の集まりのはずだ。

故に敗北条件もわかりきっている。

Aクラスが内部分裂をすること。

これが一番の敗北条件であることはもう疑いようがない。

まあ、主人公綾小路君がいる以上Dクラスには普通に潰されることもあり得るが、それ以外で敗北するとしたら内部分裂が一番早いだろう。Bクラスあたりに抜かれましたってなるのが一番怖い。

既にAクラスは二分されている。

詳しく分けければその他がいるが、主に坂柳グループと葛城グループで分かれてしまっ

ている。彼女は優秀だから、クラスを掌握した後もある程度はAクラスを引つ張っているだろう。

それでもって、最後に綾小路君主人公に轢き殺されると。

独裁政権を立てたい坂柳さんには悪いが、このままいくと独裁政権を立てた後に転がり落ちてみんなから虐められるかわいそうな有栖ちゃんの図が見える。

まあ、そうならないように手を打ってはいいる。

一度愚か者認定をしてしまったせいとか、彼女に肩入れしている部分がある。もしかしたらこれが、『ぬゑ強固過ぎる仲間意識』になるのかもしれない。

何が何でも彼女を勝たせるとまでは思っていないが、負けないでほしいと思っっている自分も確かにいた。

どうせマイナスだから勝てないのはわかっている。

坂柳さんをAクラスに居ると言うだけで、それにつき合わせてしまうことも。

だが、あの人ほどじゃないけど負け戦なら百戦錬磨の自信がある。

「放課後に二人つきりで話したいんだけど、どっか良い場所ないかな？」



「それでは私の部屋はどうですか？

誰かに聞かれる恐れもありませんし」

…女の子の部屋に行くのはちよつと抵抗がある。

ホイホイ男を自分の部屋に呼ぶなど言いたい。ノンケだつてかまわないう喰つちまう男だつているだろう。

「流石にそれは恥ずかしいな。他の人に見られて変な噂を立てられると困るし」

「それもそうですが、他に良い場所はあまり思いつきませんか？

小坂君からしたらカフェとかも嫌がるでしょうし」

「まあ、食堂の人目につき辛いところでも話したくないようなことだから、外で話すのはもつての外だね」

「そうなるよ、他の場所が見当たらないのですけど…」

確かに、全く人目につかないような場所というのは広い学校内といえほとんどないだろう。そう考えると確かに坂柳さんの部屋が安全ではある。

…よし、少し卑怯な手だけどまた彼女の先天性疾患を利用してもらおう。

「二つ思いついたんだけど、嫌だつたら断つてくれていいから。不快にさせるかもしれないし」

「構いません。言ってください」

「学校帰りに荷物持ちとして私が付いて行けば、そのまま部屋に上がって話しても不思議じゃないと思った」

「……」

「嫌だったら言ってくれ。身体的特徴を利用してやろうとしているような非人間のという言葉だ」

「…嫌ではありませんよ。確かに合理的ですし、学校帰りに教材を持って帰るのは大変に思うところもありますから」

先天性疾患とは生まれつきのものだったか？

名前的にはそうだが、そうだとしたら彼女からすればこれがあるのが当たり前で、今私が言ったことも手伝ってくれるようなことに聞こえたのかもしれない。

実際は私が彼女の先天性疾患を利用して部屋に上がろうとしているのにも関わらずだ。

文字にしたら最悪なやつだなこれ。自覚したら、気分も最悪マイナスになってきた。

それを表には出さないで、私は彼女の顔を見た。彼女もここで話すようなことはないのか、食器を片付ける準備をしていた。

「それじゃあ、そろそろ行くか。授業がもうそろそろ始まるし」

「ええ、では行きましょう。放課後もよろしくお願いしますね」

そう言つて彼女はこちらに向かつてにつこり笑つた。

その笑顔が余りにも儂くて、きれいで、美しく、思わずその笑顔ブラスを苦悶マイナスの顔にさせ  
てしまいましたと思つた。

これだから私は最悪マイナスなのだろう。

## 7 話目 三日目 舞台裏

人間は負けたら終わりなのではない。辞めたら終わりなのだ。

この言葉はリチャード・M・ニクソンという人物の言葉だ。アメリカ合衆国の第37代大統領だった彼のセリフだが、過負荷マイナスそのものを表しているとも言える。

過負荷マイナスは基本的に勝つことがとても難しい。

試合に勝ったとしても勝負には負ける。

過負荷マイナスの本質としては負の方向に根っこがあるので当然と言えば当然だが、そこで全てを投げ出して勝負事そのものを辞めるようなことはほとんどしない。

マイナスだろうが、プラスだろうが勝ちたいという願望はそうそう変わるものではないし、負け続けているからこそ勝利を渴望する部分がマイナスにはある。

その勝利も、貰い物の勝利ではなく全身全霊で勝負をしてプラスにいる人間を打ち負かしたいという願望が強い。

過負荷マイナスの人間はプラスにいる人間に対して恨みや嫉妬、怒りや憎しみなどの感情が大半を占めているが、その中には切望や憧れ、そして諦観が混ざっているのかもしれない。諦めきれないからこそ、どんなに負けることがわかっていても、勝てないと知っても、

自分の望むような結果にならないことを知っていてもプラスの人間に勝負を挑むことを辞めないのだ。

負け続けているのだから、負けたら終わりなんかじゃないことはわかりきっているのだ。

それじゃあ、勝利を知っている過<sup>マイナス</sup>負荷は、どうなるのか。

生前、普通の勝利を手にしてきた過<sup>マイナス</sup>負荷が過<sup>マイナス</sup>負荷成長して勝てなくなつたところで、

勝利を切望するだろうか？ 憧れるだろうか？

マイナスを知りたかったからという理由だけでマイナスになった彼が本当に勝利を  
求めるのだろうか？

どう思ふかは人それぞれだ。

強いて言うのなら、真実というものは理屈だけで決められることではない。

---

放課後になった。

私は坂柳さんの荷物持ちとして彼女を寮の自室に送っていくことになった。その時

にクラスメイトに絡まれたりしたが、坂柳さんの鶴の一声で一斉に散っていった。

絡まれた時も邪険にするのではなくクラスメイトと会話をすることを忘れず、少しでも交流を深めようとするポーズをとる。

中身のない会話でも交流を深める程度には役立つし、クラス全体で結束してます感を出すためにはクラスの雰囲気を少しでも良いものにしておく必要がある。

孤立気味の人たちが、このクラスに対して嫌悪感を持たないように誘導しなくてはいけないからだ。

休み時間などの開いている時間にもさりげなく声をかけるのを忘れないようにするのがコツだ。

この時期にボツチの人で、心の底から人が嫌いな人はそう多くはないだろう。ただ、話しかけるタイミングとか友達を作るタイミングを逃しただけだ。

だから、私みたいな人でもある程度受け入れて話をしてくれる。

それでいて、プライベートな付き合いにはあまりしない。深く関わるとそれからトラブルに巻き込まれることになるし、それによってクラスの団結に罅が入っていくことは好ましくない。

坂柳さんとはある程度仕方ないと割り切っているが、後で間に挟まって胡麻をするこ  
とになる以上あまり偏りすぎてもいけないかもしれない。

彼女が私を見逃してくれれば、という但し書きが付くが。

まあ、まだ三年間は一緒に学校生活を送る仲だ。

嫌でも話さなくてはいけなくなるだろう。

問題としてはそのうち私がハブかれるんじゃないかっていうことだが、中学校時代にはクラスのみんな全員と一定の仲は保っていたから大丈夫だと信じた。友達と呼べるような人間はいなかったが友人と呼べる人間は多かった。

それは逆にいうと踏み込んだような仲にはならなかったということにもなるが、クラスで結束するぐらいのことにそこまで踏み込んだ仲になる必要もないだろう。

「着きましたよ」

彼女の言葉で思考の海から現実に取り戻される。

どうやら彼女の後ろを付いて歩いていたら、考えているうちに彼女の部屋に着いたらしい。彼女が既に部屋のロックを開けて中に入るように促している。私はそれに従って部屋に入った。



「荷物はそこに置いておいてください」

私は言われたとおり荷物を下して、彼女の部屋を軽く見渡した。彼女の部屋は入学したばかりだからなのかは知らないが、物はあまり多くない。床にはカーペットが敷かれており、その上に机と椅子がある。

恐らく自室で食事をする時に使う場所なのだろう。また、近くには教科書や参考書、小説などが入った本棚があり、その近くにベッドがある。そして、備え付けのクロージャーゼットがあり、ぱつと見てわかる物はそれぐらいだ。

「とりあえず、そこに座ってください」

そう言われて私は机に誘導された。反対側には坂柳さんが座る。そうしているころには、彼女から出る威圧感がなかなかすごいことになっていた。

ジョジョみたいにゴゴゴゴみたい擬音が聞こえてくると錯覚するぐらいの威圧感を放っている彼女からは、とても教室にいる時の儂げな少女と同一人物とは思えない。気の弱い人が見たら裸足で逃げ出してしまいそうな、威圧感を放つ裏ボスの姿がそこにはあった。さっきの食堂でも雰囲気が変わっていたが、それとは比較にならないほどの威圧感をさらけ出している。

こんなに威圧感を出して何がしたいんだろうか？

概ね交渉を優位に進めるとか、相手の心を折りやすくするとかそういうものなのだろう

うけど、みんながみんなそうだとは思わないほうがいいのに。

特に私マイナスみたいなのにそんなことをしても大して効果はない。それぐらいで折れるような心ならこんなところにいない。

「それじゃあ早速だけどいいかい?」

「ええ、あまり時間をかけて他の人に気付かれでもしたら、後が大変ですからね」

彼女の言う通り、あまり遅くまでこの部屋にいと出た後が大変だろう。

出たところを他の生徒に見られたら何を言われたものかわかったもんじゃやない。変な噂で私の動きが制限されたり、注目を集めるようなことは御免だ。

そう思った私はいきなり本題を切り出した。

「今日私がクラスのグループチャットを立ち上げた件とも関係あるんだが、君は葛城グループを潰した後はどうするつもりだい?」

「:…どうする、と言いますと?」

「力のなくなつた葛城グループをどうするかって話。全員退学させるならまだしも、嫌がらせにAクラスの情報を横流しされたら面倒だろ?」

その辺はどう考えてる?」

私が一番気になっているところはここだ。

クラス全体を掌握すると言っても個人の感情まで完全に制御することのできる人間

はいないと私は思っている。制度や権利で縛れば、その人の行動を制限することはできない。し、思考を読むこともできるだろう。

しかし、感情を制御することはできない。

本人でさえ感情の爆発を抑えられないことがあるのに他の人がどうしてそれを制御できるのだろうか？

「例えば私にクラスを掌握されたことに反発したとしても、自分がAクラスに居たい以上Aクラスそのものに仇をなすようなことはあまりしてこないと思いますよ」

「確かに理屈でいえばそうだろう。だが、君は負けた人間が何をしたいと思うかをまるであつていない。

屈辱を味わった人間は、自分がどうなろうと復讐したいと思うこともある。みんながみんなとは言わないがね」

そう言うのと彼女の雰囲気が変わった。

ただ、圧迫感を出すような威圧感から怒気を孕んだそれへと変化したのだ。私は直感的に彼女が昔誰かに負けたことがあるのだろうということ察した。

それも、適当に流せるようなものじゃない決定的な敗北なのだろう。そうでなければ、こんなに怒気を孕ませた空気にはならなかったはずだ。

「なんだ、君も敗北を味わったことがあるのか。それも決定的な敗北を」  
「ツ!!」

「ああ、答えなくていいよ。君のその雰囲気だけで大体察せるから」

「そう言うとな彼女は害虫を嘔み潰したような表情でこちらを睨んだ。本人も知られたくなかつた過去なのだろう。」

「その表情が哀れで、滑稽で、愉快でとてもかわいいもので、ついもつと壊したくなつてしまう衝動が生まれてしまいそうだった。」

「…あなたは…一体何なんですか？」

「私はただの過負荷<sup>私</sup>だよ。ちよつと人とは反対側の普通の人間さ」

「反対側…?」

「言つてもわからないと思うし言う気はないよ」

「マイナスだのプラスだの話をするつもりはない。」

「私自身自分のマイナスな感覚に勝手に名前を付けてスキルっぽく呼んでいるだけで、スキルとして発現しているわけじゃないと思つている。」

「なにせ、それを判断してくれる人がいない。あくまで、前世の記憶にあつた漫画の知識に当てはめて自分の性質の理解をしているつもりになっているだけだ。これが、本当にそうなのか。私の中にある感覚が本当に過負荷<sup>マイナス</sup>なのかなんてことは私にもわからない」

い。

私の思いに勝手に反応を示す段階で、『めだかボックス』のそれとは違う可能性だつてある。

だから私は、恐らくこうなんじやないかという推測とこうだつたらいいなつていう願望によるものに過ぎないのだ。妄想とか、中二病とか言われればそれまでだが、教えてくれる人がいない以上、私はこうするしかない。

まあ、私にそこまでは関係重要なことじゃない。

「まあ、だからさ、人って何をするかわからないんだよ。

復讐のために自分を殺すことができるやつもいれば、ただ面白そうだから他人を壊したくなるやつもいるし、新しいものを見つげるためなら他人なんてどうなつてもいいと思うような奴もいる。そんな人間の感情つてのはどうしようもなく厄介で、本人にも制御しきれないものなんだよ。

理性ではやってはいけないと思つても復讐心が勝つて人をあつけなく殺すことだつてあるし、殺しちやいけないと思つても殺した時の充実感を思い出して殺したりするんだ。そんな感情を他人が簡単に推し量れるわけないじゃないか」

「…確かに一理ありますが、そうしたらあなたはどうしたいのですか？」

葛城君にクラスを掌握してもらおう方がいいって思ってるのですか？」

「そういうわけじゃない。彼はこの学校について疑問を持つてはいるけどまだシステム的なことには気づいていない様子だし、指導者としては君の方が優秀なのはわかりきっている」

「でしたら、一体どうしようというのですか？」

「単純な話、二人が仲良くすればいい。すぐにはできなくても、クラス全体でまとまったほうが方針を決めやすいのも事実だしね」

私がそう言うのと彼女は少し考えるような姿勢をとった。私の話を聞いて思うところがあったのかもしれない。これを機に、一気に畳みかけてみることにする。

「別に全面的に仲良くなんてする必要はないし、意見の対立があっても仕方ないとは思う。ただ、ぶつけ合うだけでクラスの雰囲気が悪くし続けるのは孤立気味な人にとっては大ストレスだし、そうじゃない派閥の間でも緊張感が生まれる。」

「そうやって競い合っていくことも大切だけど、蹴落としあうようなことばかりじゃあ内部分裂は免れないだろう」

「…」

「Aクラスが負ける要因なんて、例外がなければ内部分裂をすることが一番大きいこと

はわかつてるだろ？

既に内部分裂が始まっているようなものなんだから、どこかで手を打つ必要がある。君が指導者をやつていくことに不満はないけど、あまり独裁的にやつていくと不平不満が溜まって最後には見もしなかつた弱者に足をすくわれることになるかもしれないよ？」

私がそういうと彼女は考え込んでしまった。恐らく、入学当初に自分のプランとは異なつた考えなのでいろいろ考えているのだろう。

こうした場合はメリットやデメリットを考えるとところからまず始まるだろう。

メリットはわかりやすくクラス全体の団結力が上がつてみんなのやる気の上昇が狙えたり、情報操作が楽になるということ。また、孤立気味な人を掬い上げ、そう言う人たちの行動にも目を光らせることができること。明確な内部分裂を起こす前にクラス全体でまとまるといふところだろう。

ではデメリットは何か。

まず、指導者が二人いることで内部分裂の危険性を孕むこと。すでに二分しているグループを今から一つにしたところで、本人たちは良くても周りにいる人達まで納得する

とは限らない。そして、全体でまとまった場合に起こる一番の問題として情報の横流しをするものが出た場合に誰がしたのかわかりづらくなるというものがある。

グループ全体で話し合うと言えは聞こえはいいが、そこで出た情報は皆が共有することになる。そのうちだれか一人が漏らすようなことになれば、誰が流したのかわからなくなるような魔女裁判的雰囲気になってクラスの団結は崩壊するだろう。

…あれ？

これってデメリットが結構無視できないのではないかな？

いや、まさかそんな馬鹿なことあるはずが……

…冷静に考えなおしてみたら、デメリットのほうが大きい気がしてきた。

坂柳さんが纏めきれぬならこのままでもいいんじゃないか。そのためには孤立気味



な人を全部擲り上げる必要があるけど、それさえできれば康平たちを打ち負かして因縁を残さないようにすれば問題はないのか。

だが、康平を打ち負かすとすると、どうしても後を引く様な形は避けられないだろう。……だからその因縁を残さないようにするためにはどうするのかという話だ。

………因縁そのものの『縁』を切るとか？

いや、そんな便利なことができるものじゃないし無理やりやろうものなら間違いない、また誰からも忘れ去られることになる。

流石にあれは結構きついで勘弁願いたい。

そもそも私の過<sup>無冠刑</sup>負荷はそんなに小回りの利く便利なものではない。そんなものだったら、過<sup>マイナス</sup>負荷なんて名付けられない。

それに、ファンタジーやメルヘンの世界じゃないんだ。

学園物の世界でそんな掟<sup>超能力</sup>破り染みたことをして何になるんだ。

ゲームをやるのに、ゲーム機壊して「このゲームに勝った」とか言つて楽しいわけがない。

一時的な破壊衝動が満たされたところで、『ゲーム』そのものからは逃げたも同然だ。そんな無価値な勝利に何の意味があるんだ？

「…考えがまとまりました」

考えているうちに結構時間がたっていたような気がするが、私は彼女の言葉で意識を現実に戻した。とりあえず、自分でもどつちがいいのかわからなくなってきたので彼女の答えを聞くことにした。

「私は、このままクラスの掌握を進めます」

彼女は私を見据えてそう宣言した。

そこには、さっきの迷いきって考え込んでいた少女の姿はなく、自分に自信をもつてそう言いきった少女の姿があった。

「確かに、このまま行ったら葛城君との衝突は免れないでしょう。ですが、私なら彼を退けることはできます。それに、私にもこの学校に来た目的があります。私は私のやり方で彼に勝ちたい」

そう言った少女の瞳は覚悟と決意に満ちたとても輝かしいものだった。

前世の私でも出来なかつた顔。

今の私では絶対にできないようなその顔に思わず私は魅入ってしまった。

「クラスにとつてのメリットデメリットもどちらが良いのか微妙なところです。しかし、これには私自身のメリットデメリットを考えていない。

私の目的を果たすためには、私がクラスの掌握する必要があります。ですから、私は葛城君と衝突することも構いません。あなたと衝突しようとも必ず退けて私が勝ちます」

そう私に宣言した彼女の姿に私は心を打たれた。

私に向かって宣言する様が実にプラス向きで、前に彼女はマイナス側の人間だなんて評価した私は自分が見当違いのものしか見ていないことに気付かされた。

…ああ、なんてきれいなんだ。

顔がじゃない、容姿がじゃない、その覚悟に満ち溢れた目、これこそが人間の真に美しい姿なのだろう。

…私が転生してまで手に入れたかったものはそういうものなんじゃないのか？

プラスだろうが、マイナスだろうが本当に変わらない人間のらしいものを見つけたかったんじゃないのか？

…私は何のために生きているんだ？

この学校に来た理由は卒業するためだ。それは疑いようもない。

だが、私がそうまでして本当に欲しかったものはいったい何なんだ？

平穏な生活なのか？

怠惰な日常なのか？

それで本当にいいのか？

私がこの世界に転生した理由は本当にそんな日常を求めたからなのか？

違うだろ！

ただ、生きているだけでいいなら転生する前でも味わえただろ！

転生して欲しかったものまで手に入れて本当にしたいことがただ普通に生きるなんてことがあるか！

それで本当に満足するなら転生なんかする必要なかっただろ！

私が本当に見たかったものは過負荷<sup>マイナス</sup>でも括弧つけて自分の生き方を見つけたあの人みたいなかつこよさとか、目の前のこの子の覚悟ある目とか、そういうものを見つけたかったんじゃないのか!?

マイナスの人生になったから前の人生とは違うところを見ることができた。

本当にそれだけでいいのか!?

転生してそれだけ知れば満足なのか!?

それなら、中学校を卒業するまでに死んでも変わらかったんじゃないのか!?

…そうだよ。

私はこういうものが本当は欲しかったんだ。

自分の全てを賭けてでも戦うような覚悟とか、自分だけの生き方とか、そういう輝か

「しいものを元の『小坂零』は欲していたんだ。  
転生した今になってようやくわかった。」

私は『物語』に参加したかったのだ。

そしてその『物語』で、マイナスだろうがプラスに負けないぐらいカッコつけて生きていくことができるっていうことを証明したい。

マイナスに生まれても、人の持つ真に美しいものというものがあるということを証明したいんだ。マイナスの人間だからで済ませて終わらせて言い訳していた、今までの自分を本当は変えたかったんだ。

「…はあ、また勝てなかった」

私はあの人の決まり文句をつぶやいた。

別に勝負をしていたわけじゃない。だが、私が今感じている圧倒的な敗北感、それと同じぐらいの感謝と敬意を表すのにこれ以上ふさわしい言葉はないだろう。

私が尊敬しているあの先輩のセリフを言うなんて烏澁がましいことかもしれないが、それでも言わずにはいられなかった。

「わかったよ、坂柳さん。君のしたいようにするといい」

「…いいんですか？」

小坂君の言うことと反対のことをすることになりますよ？」

「好きにしているよ。私も好きにすることにしたから」

「好きに…ですか？」

「君の顔を見て、私が本当にしたかったことを思い出したんだ。だからお礼を言わせてほしい。君のおかげで本当に大切なことを見つけることができた。本当にありがとう」

そう言つて私は頭を下げた。

彼女からすれば突然変なことを言つてきて困惑しているかもしれないが、私にはとても大切なことを教えてくれた彼女にたいしてこうしないと気が済まなかった。そしてだからこそ、私は彼女に伝えたいことがあった。

「そして、それを見つけたからこそ君に宣言するよ、坂柳有栖さん。」



私はあなたに勝ちたい。あなたが私の知らない誰かに打ち勝ちたいように、私はあなたに勝ちたくなかった」

私はそう言つて彼女を見据えた。

先ほど彼女が私に向かつて宣言したように、私も同じく彼女に向けて宣言した。私の覚悟を彼女に伝えるために、私の感謝を彼女に伝えるために。

「…わかりました。その勝負受けて立ちます」

彼女はそう言つてこつちを見て笑つた。その笑顔がとても美しく、それと同時に心が熱く燃えているように感じる。

「ありがとう、君ならそう言うと思つたよ」

「こちらこそ、あなたとは何れ雌雄を決する必要があると思つてましたから構いません。それで、どのような勝負にするんですか？」

彼女のこの問いに対して、私の答えは決まっている。

「勝負のルールは一つだけ、負けたと思つた方の負けだ」

「負けたと思つた方の…ですか？」

「そう、たとえばどんなにボロボロになつたとしても負けたと思わなかつた限り勝負は続く。負けたと相手に思わせたほうの勝ちだ」

最悪、お互いに意地を張り合つて一生終わらないように見えるこのルール。

だけど、それをこなしてこそ真の勝利だと言えるのだろう。あの『負完全』な先輩が、主人公との勝負でこのルールを用いたように。

だからこそ、私は彼女にこのルールで勝負を挑む。たとえ勝てないとしても、この勝負そのものに意味があると私は確信している。

「…わかりました。それで構いません。それで期限はいつまでにしますか？」

「そんな短期間で決められるようなものでもないし、卒業まででいいんじゃないか？」

「勝負したいと言ったけど、そんなすぐに決着を求めているわけじゃないからね。高校生活の全部の期間を使つての長丁場だよ」

そう言つて私は彼女を見た。

確かに長い期間だろう。だが、短期決戦で勝てると思えない。長丁場のグダグダにもつていけないと勝つどころか勝負になりもしないだろう。私は勝てるとは思つてない。

だが、全力で勝ちに行く。生まれて初めての全身全霊を彼女にぶつけるのだ。そうした先に私の求めている答えが見つかるかと確信している。

「わかりました。私はそれで構いません」

「うん。じゃあ、これからよろしく、坂柳さん」

「ええ、こちらこそ、小坂君」

そう言つて私は握手をするために手を出した。彼女もそれに応えるように手を伸ばす。私はほんのちよつとのマイナスを出しながら、彼女は圧倒的威圧感を放ちながら。彼女の威圧感に吞まれていく感覚で眉を顰めるが、彼女も気持ち悪そうに眉を顰めてゐる。

思わず彼女は握手する手を引つ込めそうになるが、踏みとどまって握手を返してくれ  
た。

「…それがあなたの素ですか」

「気持ち悪いだろう？」

「これでも抑えているんだ」

全開放するようなことをする気はないが、彼女の前では素の自分を出したくなつた。  
正々堂々なんて言う気はない。

だが勝負を挑んだ以上、彼女には私のことを少し知ってもらいたかつた。何も知らな

いまま私に勝たれても私の望むものは得られないと直感的に思ったから。

「確かに気持ち悪いです」

「その面と向かつて言われるとちよつとショックだな」

「でも少し嬉しいですよ。本当の小坂君を見つけた気がしたので」

…無自覚なのか計算してやっているのか、どっちにしてもタチが悪い。そう言うことには耐性がないから、そういうことを本当に嬉しそうな笑顔で言われると勘違いしそうだ。

ただでさえ過<sup>マイナス</sup>負荷は惚れっぼいというのに。

「まあ、他の人にはこんな姿見せられないからね。クラスではまず見せないようにしてるし」

「…というと、この小坂君を知っているのは私だけということですか」

「この学校ではそうなるね。昔施設にいたときは抑え方わかんなくて垂れ流しにしてたけど」

そう言うのと彼女は顔を顰めた。

今の抑えている状態でさえ気持ち悪いと感じるのに、こんなものを常に全開で出していたら他人がどう思うのか想像していたのだろう。

「垂れ流し…それ大丈夫だったんですか？」

「ダメだったから虐待されたんだよ。服の下は結構グロいから人には見せられないね」

そう言うのと彼女は少し悲しそうな顔をしてこつちを見た。

同情しているのだろう。だが、そんなことは今の私にはもう関係ない。体に傷が残ろうが、私は私だ。勝負をするに困るような疼くほどの古傷でもない。

「…私と二人でいる時には、このままにしておいてください」

「いいのかい？ 正直気持ち悪いだろう？」

「確かに気分はよくありません。ですが勝負を受けた以上、私はあなたから逃げるような真似をする気はありません」

これには正直驚いた。

勝負を吹っ掛けた今だからこの状態になっているが、本来こんな状態を見せる気はさらさらなかった。普通の人間マイナスというか、同類の人間以外が今の私といたら気持ち悪くなるのは当たり前だ。

そんな私を真つ向から受け止めて勝負にこたえようとする姿勢が私には好ましかった。

「そういうことならそうさせてもらおう」

「ええ、そうしてください。私はあなたの全てを受け止めてあなたに敗北を認めさせます」

「それじゃあ、私は私らしく、私なりのやり方であなたに敗北を認めさせることにしよう」

そう言ってお互いに笑いあう。前の威圧するような笑顔じゃなくて、相手の挑戦に対する不敵な笑み。

「ふふ、その時を楽しみにしてますね」

「ああ、私も楽しみにしてる。それじゃあ、また明日とか！」

そう言っただけで私は彼女の部屋を出た。

これから私は彼女と戦うのだ。生まれて初めての全身全霊をかけて私は戦う。

その先に勝利がないことを半ば確信しながらも、私は勝負を挑む。

無意味で、無価値で、無関係で、無責任なマイナスだとしても、その人生に意味と価値があることを信じて、私は人生で初めての全力を彼女にぶつけるのだ。

## 8話目 四月の終わり

人生には、全てをなくしても、それに値するような何かがあるんじゃないだろうか

これは『風とライオン』という映画に出てくる言葉だ。全てをなくしたとしても、それに値するような何かが人生にはあると信じる。

そういう生き方をできるかできないかでは、人の人生というものはまた変わるのだから。

人生の全てを失ったと嘆く人と、人生の全てを失ったからこそ何かを得ることができたのかもしれないと考える人ではどっちの方が早く立ち直れるかわかりきっているだろう。

もつとも、元から何も持っていないというマイナスの人間もいる。

そういう人は、果たして人生の全てといった場合どのぐらいのものが該当することになるのか。

そして、それに値するようなものを果たして見つけられることができるのだろうか。

それは、マイナスの本人にしかわからないのかもしれないし、本人にすらわからないのかもしれない。

では、マイナスの彼はどうかだろうか。

人生を一度全てなくした彼は果たしてそれに値するようなものを見つけたのだろうか？



…あるいは、見つけれなかったからこそ彼は転生したのかもしれない。

坂柳さんに宣戦布告してから約3週間経った。

彼女は宣言通り派閥を着実に増やしている。

その中で私は彼女の派閥どころか、どの派閥にも入ることをしなかった。

私は私個人の力で彼女坂柳有栖に勝ちたい。

青臭いかもしれないが、彼女に勝負を申し込んだ以上、私自身の手で彼女を下したかった。

そう思ったからこそ、クラスでの立ち位置はどつちつかずのコウモリと言えるようなものになっている。しかし、逆にいうと誰とでも話はできる程度の人脈は作っており、先生から見たらポッチに見えるかもしれないが今のところ不満はない。

不満があるとしたら、派閥に入っていないのにもかかわらず坂柳さんが昼食の誘いに來ることだ。

最初の一週間でクラスメイトは茶化すのをやめ、二週間目には彼女が根回ししたのか、それが普通になっていた。

そんな青春ラブコメの一ページになりそうな昼食時だが、その実態はお互いの腹の探り合いだった。

これからどうやって相手に負けを認めさせようか。

言葉には出さないが、お互いにそれを頭に入れながら談笑していた。

クラスメイト曰く、楽しそうに話していると思っていたけど目が笑ってなかったと評価されている。

試しに一度断ろうとしたが、その時の彼女の泣きそうな表情を見た病弱少女見守り隊坂柳の橋本君に睨まれてからはもう諦めた。私だけに見えるように笑っていたことから嘘

泣きであることはわかりきっていたが、彼女の派閥の人間を動かすにはそれで十分だった。

橋本君の眼光もやばかったが、泣いているフリをしている坂柳さんを見た神室さんが何とも言えない表情になっていたのが印象的だった。

気がついたら神室さんと橋本君は坂柳さんの側近みたいな立場になっていて、彼女の下には常に坂柳グループの人がついていて。恐らく彼女の体のことも踏まえてのものだろう。

最近では食堂に行くのが面倒になったため、坂柳さんの分までお弁当を作るのが日課になっていった。

教室で食べるようになったため、移動する手間やトレイを運ぶ手間がなくなった。

ただ、食費は無料コーナーのおかげで殆どかかっていないので問題ないが、時折クラスメイト以外の人が教室の外から見てくるのが煩わしい。

現在、私のクラス内での立ち位置は大分怪しいものになっていった。

坂柳グループからすれば何で派閥に入らないのか不思議に思われているし、葛城グループからすれば坂柳さんと繋がっていると悪く思われて邪険に扱われる。

尤も、康平とは普通に会話もするどころか何かとよく話しているので葛城グループの人も困っているのだろう。真面目な彼は基本的に私の相談も聞いてくれるし、彼から相談されることもある。

私の相談は大したものと言っているわけではないが、恐らく彼も大したものを相談しているわけではないだろう。

戸塚が軽率な行動が多くて困っているという相談を受けたことがあったが、とりあえず呼び出して話しても説教と思われかねないし、注意を促していつて少しづつ改善させていくようにしたらと言っておいた。

その後どうなっているのかは、私の与り知らぬところだ。

中立組には二つの派閥のどちらかに入っていると思われているせいか、入学初期ほど親しく話すことはなかった。

：予想通りコウモリできていることを喜ぶべきか、胡麻をすることに失敗していることを嘆くべきか。

まあマイナスの私だから何れはこうなると思つてたけど、まさか私のせいじゃなくて坂柳さんが絡んでくるからこうなるとは思わなかった。

昼食と一緒に食べるだけで、これほどの影響があるとは思わなかった私の失敗だ。

これも勝負の一環だというなら甘んじて受け入れよう。私が彼女とした勝負はそ

ういう勝負だ。お互いの全部をぶつけ合う様な勝負を私は望んでいた。

彼女はそれに応えてくれているから、持てる物を上手く使って私を攻撃しているのだろう。

私もそれに応えられるようにしないとイケないが、既に外堀を埋められ始めていて手遅れ感もある。

今更、一人で食べるから、と言うのはなかなか難しいような気がする。

だから、これに関しては諦めよう。敗北を認めなければ敗北でない以上、マイナスの私はいくつかの分野で敗北することは避けられない。

であれば、何か一つの分野で坂柳さんに圧倒的敗北感を味あわせるしかない。

嘘をついてはいけないというルールがない以上、敗北を認めたことを相手に自己申告しない限りこの勝負は終わらない。だからいくつか負けたところで私には関係ない。

最後に勝てばいいのだから。

まだ二年以上あるこの高校生活で私は私のためにこの勝負に勝つ。

考えているうちに担任の真嶋先生が教室に入ってきた。私は適当に話をしていた茂

君（竹本君の下の名前）との話を打ち切つて、そつちを見る。他のクラスメイト達も席に座つて、話を聞く姿勢を作つてゐる。

この光景もすっかり慣れてしまつた。リーダー格の二人がしつかりしているからだろう。他の人がそれに引つ張られている。そして、先生が教室に入った直後にチャイムが鳴つた。授業開始を告げるチャイムだ。

「全員揃つてゐるな。今日は小テストを受けてもらう。今後の参考資料にするだけのもので、成績表に影響は出ないから安心するといい」

テストと聞いて少し緊張感が高まつた雰囲気だったが、成績に関係ないという言葉も聞いてそれが和らいだ気がした。成績にはということとはクラスポイントとかに影響が出るということだろう。隣の席を見ると、坂柳さんが頷いた。

それを見て、まともにやらないといけないテストの類だと感じ取ると同時に他に気付いている人が、康平ぐらいしかいないことに気付いた。Aクラスというのは本当に優秀な人間が集まつているクラスなのかと不安に感じると同時に、もしかしたら学校側の基準が私の想像しているものと違う可能性があることに思い至つた。

私は大体のあらずじと本当に最初の方ぐらいしか『ようこそ実力至上主義の教室へ』という話を知らない。そのため、主人公含む不良品と称された生徒がDクラスで、優秀な生徒がAクラスに固まつてゐるということは知つてゐる。

…よく考えたら、主人公がDクラスにいるっておかしくないか？

たしか、主人公は結構な切れ者で優秀な人間だったという記憶がある。入試の時にわざとテストの点数を落としたのかもしれない。十年以上は前の記憶になってしまおうので、見たところ自体が最初の方だけだったということ差し引いても覚えているものが少なすぎた。

そんなことを考えているうちにテストの問題が配られてきた。1科目4問の全部で20問各5点で100点満点の問題だが、ぱつと見たところ最後の問題だけやたら難しそうだ。

とりあえず、最初の方の問題はとても簡単なので10分足らずで終わらせる。中学校の復習問題みたいな問題だったので、きちんと勉強を積み上げてきた今の私にはそこまでする問題になるようなものじゃない。

問題は、ラスト3問だ。

今までやってきた勉強の範囲とはとても違うものだが、前世で大学にまで進んでいた今の私にはそこまで脅威になるようなものじゃない。それでも前世で大学生だった身としては、これぐらいの高校3年生レベルの問題で躓く様なことはない。

…こう言ってはいるが、中学校時代に高校の範囲も一通り思い出しながら勉強していたので助かった。正直このレベルの応用問題となると、中学校に入る前の私では解くことはできなかつただろう。

大学生だつたとはいえ、専門的な科目ばかりで基礎科目に関しては抜けているところも多かつた。中学校に通わないで、いきなり高校生になつていたら間違ひなくわからなかつたであろう問題だ。

他の人たちもだんだん手が止まっていくな様子を感じる。ペンを動かす音がだんだん止まっているのだ。隣の坂柳さんはすらすら解いているし、康平も問題なさそうにしているが、他の生徒の大半はもう手を止めていた。

私もすでにラスト3問を解き終えたのですでに手を止めている。他の人が手を止めている時とほぼ同時に終わらせたが、恐らく間違ひはないだろう。

私は軽く見直しをすると、チャイムが鳴るまで他のクラスメイトの観察をすることにしました。

手を止めて背筋を伸ばしている人、手を止めて眠たそうにあくびをしている人、必死に最後の問題に取り組んでいるのか机にかじりついている人、問題を解くペースが遅い



のかそれとも最後の問題をすらすら解けているのか考える様子もなく手を動かしている人と様々だ。

隣の少女は手を止めているので、問題の見直しをしているのだろう。紙が軽く動く様  
なこすれるような音が聞こえてくる。

段々静かになっていく教室で、時計の音だけが響く様な静寂の中テストの時間に終わりが来た。チャイムが鳴り、テスト用紙を後ろから集め、真嶋先生に渡す。もらった先生はそのまま教室を後にした。

「最後の方の問題難しかったな」

「私最後まで分かんなかったー」

そんな会話があちらこちらで聞こえてくる。

私もそれには同意だ。なぜ、入学してまだ1か月も経っていないこの時期に高校三年生の応用問題を混ぜてきたのか、まあ恐らく試しているのだろう。どのぐらいの学力があるのか、もしくはこの問題を解ける人がどのぐらいいるのか。

「小坂君はどうでしたか？」

「多分全部あつてと思うよ。高校3年の応用問題レベルのが混ざつてとは思わなかったけど」

「高校3年の応用問題!？」

私の話したことが聞こえたらしく、近くにいた吉田君がそう叫んだ。その声を聴いてクラス全体がざわついていた。無理もないだろう、入学してまだ1か月も経っていない時期にそんな問題をテストに混ぜる方がどうかしてる。

「それは本当ですか？」

「記憶違いじゃなければっていうのが付くけど、中学の時に高校の範囲を一通りやったから多分あつてると思う」

「そうですか……」

そう言うのと坂柳さんはまた何か考え始めた。

恐らく、何故そんな問題が混ざっていたのかを考えているんだろう。

「にしても、零すごいな！」

あの問題全部できたんだろ？」

「中学校の時にもう高校の勉強を終わらせたって本当!？」

「終わらせたんじゃないやなくて、あくまで一通り流してやっただけだね。きつちりやったわけじゃないから覚えていないところもあるし、今回は前にやってたところと少し似てた部分があつたからできただけだよ」

嘘は言っていない。

実際に中学の時に高校の応用問題の一部に手を出した時に類似した部分があった問題があったからそこまで手間取らなかったし、中学校の時に一通りやったというのはあくまで高校の範囲の問題を全部解いてみたというだけだ。

忘れているところの復習をしたりはしたが、ほとんど個人でやったので終わらせたりは言えない。家庭の事情を知っている先生に頼み込んで問題を作ってもらったりしたのはいい思い出だ。

そのせいで、当時のクラスメイト達からいくつか妬みを買っていたのも私は忘れていない。

良い子ぶってる、がり勉野郎、と言った陰口は少なからずあった。

過負荷マイナスを抑えていたし、それなりに仲のいいように見える友人がいたから表だって出ていなかったただけなのは理解している。

「それでもすごいよ！ あの問題私全く分かんなかったし」

「俺も最後の方はほとんどできなかった。あれどうやるんだ？」

「じゃあ、次の授業始まっちゃうから放課後にでも解説するけど聞きたい人いるー？」

そう言っただけでクラスを見渡すとほとんどの人が手を挙げた。坂柳さんや康平まで手を挙げているところを見て、挙げなかったクラスの全員が手を挙げた。

…ここまでするとは思わなかったから少し驚いた。孤立気味な人たちまでしかり手を挙げていることもそう。それだけ、解けなかったことが悔しかったのだろうか？

「そうしたら、放課後にこの教室で解説するけどいいかな？」

黒板とか使つてわかりやすくするつもりだけど、あまりやったことないから勝手がわかんないし」

「そこまで気にしなくていいですよ。私も答えに確信を持てなかったので解説してくれるというなら助かりますから」

坂柳さんがそう言うのとクラスの全員が頷いた。放課後に特に予定を入れてなかったからそこまで問題はないが、こうなるとは思わなかったので少し驚いた。

もしかして、私の位置取りが功をなしたのだろうか。

坂柳グループの人も、葛城グループの人もどちらのリーダーとも仲良くしている私の勉強講座でお互いのリーダーが出るなら自分たちもと思ったのかもしれない。孤立気味の人も周りに合わせたのか、それとも同じ孤立気味組の私からの解説なら聞いてみたいと思つたのだろうか？

いや、これは自意識過剰もいいところだろう。

…こんな感じで団結力を高めていければそこまで落ちていくこともないんだろうな

と思いながら、坂柳さんがクラス掌握を進めている段階で分裂することは確定かと思うと少し残念な気もしていた。

放課後に勉強会：と言うよりは、今回のテストの高難易度問題解説講座なるものを開いた私は黒板を使ってラスト3つの問題を解説していた。

教壇に立つて問題と答えを書きながら解説していると、この学校の先生がいかに教えるのが上手か思い知らされていく気がする。私には教職は向いていないようだ。

全体に向かって黒板を使いながら解説していたが、ほとんどの人には理解できなかつたみたいでみんなポカーンとしている。まあ、高校3年の内容がわかっている前提の問題なんて軽く解説したぐらいじゃ今の一年生にはわからないだろう。

そう思った私はすでに理解していそうな坂柳さんと康平を呼び出して二人にも解説をしてもらうことにした。最終的に、坂柳さんと康平が自分のグループの人に解説する役回りになって、残った孤立気味な人には私が個人的に解説するような形になった。

そうやって、ほとんどの生徒が答えを理解したところで解散した。私も解説しているうちにお腹が減ったのでたい焼きでも買いに行こうと思つて教室を後にした。

「どこに行くんですか？」

背後からそう言われたので振り返つてみると坂柳さんがこっちを見ていた。隣には橋本君と神室さんがいる。お気に入りの二人なのか、よく二人を連れてある歩いているのを目にするので珍しい光景ではない。

「ちよつと小腹が減つたからたい焼きでも買いに行こうと思つただけで一緒に行く？」

「よろしいんですか？」

「別に一人で食べようが4人で食べようが大した問題じゃないだろ？」

「…ちよつと待つて、何で私達まで入つての？」

二人で行けばいいじゃん」

神室さんが不機嫌そうにそう言った。彼女は何か弱みを握られて坂柳さんに協力しているのだろう。もしくは徹底的に打ち負かされて仕方なく従っているのかもしれない。

少なくとも、忠誠心の欠片もないことが容易に窺えた。

「別に強制するつもりはないよ。来たければくればいいし、来たくなければ帰ればいい」

「…ッ」

私の言葉に、彼女は無言で睨んで返す。

坂柳さんが帰れと言わない以上、帰ることが許されないことを知っているくせにと  
言ったところだろう。別に私自身の本心から来ても来なくてもいいと言っているのだ  
が、帰れない彼女からすれば嫌味にしか聞こえないのだと思う。

「ま、立ち話もなんだし行こうか。橋本君もそれでいい?」

「ああ、坂柳さんが良いというならついて行こう」

「相変わらずだね、そんな生き方で辛くないの?」

「俺はこれでいい」

…なんか拗らせてそうな気もするけどまあいい。

別に彼女の戦力を削ぐことにそこまで意味があるわけじゃないし、彼に対する興味も  
ない。

そして、私達はたい焼きを買ってベンチに座った。左から、私、坂柳さん、橋本君、神  
室さんの順だ。私と神室さんはクリームたい焼きを、残りの二人は餡子の詰まったたい  
焼きだ。

「それで、何か用でもあったの?」

「今日の勉強会の話です。何が目的で開いたのか聞いてもよろしいですか？」

「特に理由なんてないよ。話が飛び火しなかつたらあんな面倒くさいの開かなかつたしね」

そう言つてたい焼きを握る。たい焼きの頭が裂けて中からクリームが出てくる。裂け目から吸うようにして中身を吸い出すと萎んだたい焼きを齧つた。

指についたクリームをなめながら話の続きをしようと思つて彼女たちの方を見ると、坂柳さんの顔が引きつっていた。橋本君は気持ち悪いものを見るような目で、神室さんは理解したくないようなものを見る目でこちらを見てくる。

…裸エプロン先輩の食べ方よりはだいぶきれいに食べたはずなのだが、それでも見たくないようなものにしてしまったみたいだ。

少し反省すると同時に、これぐらいで嫌な顔をするなよと思つている自分がいた。

「まあ、そんなわけだからこれに関しては何かに理由はないんだ。

したくてしようと思つたわけでもないし、例の勝負のための布石とかでもないから気にしなくていいよ。それに、君は負けたなんて思つてないだろう？」

「ええ、私の答えでも回答に間違いはありませんでしたし、この程度で負けたなんて思つてません」



「じゃあ、それでいいんだよ。負けてないって嘘をついてもいい。この勝負は負けたと認めない限り終わらないんだから」

そう、この勝負は負けを認めて相手に宣言するまで終わらない。今回、私が解説をするために坂柳さんに問題を解説したが、その程度で負けを認められてはこっちも困る。相手に完全に負けたと思わせて認めさせることが私の言う勝利なのだから。

「だから、君はいくら負けたとしてもいい。負けを認めて私に宣言しなければ勝負は終わらない」

「そういうことですか。これは確かに長丁場になりそうですね」

「そういうこと、だからそんなに気にしなくていいよ。勝負しているとはいっても同じクラスメイトなんだしそこまでギスギスしても面白くないしね」

「わかりました。そういうことなら少し安心しました」  
「おや、もう負ける算段が付いたのかい？」

そう不敵に笑いかける。坂柳さんの隣にいる橋本君が睨んでくるが気にしない。

「いえ、下手に揚げ足をとって勝負を終わらせるようなことにならなくてよかったです。私に負けはありませぬ」

そう言って彼女も笑い返してくる。

「そう、それでいい。だからこそ私はあなたに勝つ」

「いいえ、私が勝ちます」

彼女の威圧感に吞まれていくような錯覚を味わう。他の二人がいるため、私は何もしない。だが、それでも私は彼女から目を離さない。

「望むところだ」

そう言つて私はベンチから立つた。私達の雰囲気を押されたような感じになつている神室さんと橋本君を後目に、私は彼女に背を向けた。そして最近言うことに慣れてきた彼のセリフを使う。

「それじゃあ、また明日とか」

そう言つて私は寮の自室に歸つた。

日が落ちてきて、涼しい風が吹き抜ける。

それは、私の今の心を表しているようにも思えた。

## 9 話目 五月の初めの日

たとえ今日負けても、人生は続くのさ。

これはミロスラフ・メチージュというプロテニス選手の言葉だ。

一度負けても、二度負けても、死なない限り人生は続く。

だから、過<sup>マイナス</sup>負荷たちは勝負を挑むのだ。そこに勝利がないとしても人生は続いていくから。

勝利することだけが人生ではないことを知っているから。

負けることが全ての終わりじゃないから。

勝負することにも意味があるのだと思うから。

だからこそ、過<sup>マイナス</sup>負荷になった彼は挑んだのだろう。

絶対的強者である少女との勝負を。

そこに彼の求めるものが見つかると信じて。

5月になった。

朝、目が覚めた私は思ったより早く目が覚めてしまったことに気付き、ランニングをすることにした。

走りやすい服装に着替えて、軽く走った後にシャワーを浴びて時間を調整して私はお弁当二人分と朝食を作ることにした。

そんな時、ふと今日がポイントの支給日であったことを思い出す。

弁当を包み終え、朝食を食べた私は携帯を確認してポイントを見た。そこまで使っていないかったので6万ポイントぐらい残っているはずだったのに、ポイントが15万ポイントを超えていた。予定通り月頭の今日がポイントの支給日だったのでだろう。

それに、10万ポイント増えていないことから坂柳さんの仮説が正しかったこともわかる。勿論、私の仮説も正しかったことになるが私は原作知識なる物があったので答え合わせのようなものだろう。

何も知らないはずの彼女がこれだけのヒントでよくこんな仮説を思い付いたと思うと彼女がいかに優秀であるかを思い知らされる。増えているポイントは9万4千ポイント。100で割ったら940。恐らくそれが今のクラスポイントなのだろう。

今のところ、消耗品の類は一通り揃えたから残りを使うとしたら交渉ぐらいだろうか。ポイントで何でも買えると称している学校だが、私の求めているものはそういうものではない。

だが、人を使うためにこのポイントを使うのが楽であることは事実なので貯めておいて損はないだろう。

そういえば、グループチャットの方はどうなっているのだろうか？

この前作ってからあまり見ていないけど、何か動きがあるのかもしれない。

そう思ってみてみたが、Aクラスのグループチャットは全く動いていなかった。こんなことなら前に坂柳さんに入れられたグループに入っておけばよかったと後悔した。前に招待されていたが、その後Aクラス全体のグループチャットを作ったため、招待されたのを断ったのだ。そこで、坂柳派になるなら入っていたが、中立に居ようと思っていた私は招待されたものの入らなかつた。

しかし、彼女がクラスを掌握する以上、彼女のグループでは積極的に動いても全体のグループの方にはその情報が流れてこない。それによる利点もあるが今の私にはそれ

がデメリットになつてゐる。

まあ、教室に行つて他の人と直接話せば解決するだろう。データに残つて後で見れるようなものよりも、後で誰が言ったかわからないような状況が起こりうる教室のほうがいいのかもしれない。

そう思った私はとりあえず教室に行つてみようと思ひ、寮の自室を後にした。

「おはよー」

「おはようございます、小坂君」

教室に入ると既にほとんどの生徒が集まっていた。ランニングをしてシャワーを浴びて時間調整をしたつもりが少し遅く来てしまつたらしい。とりあえず挨拶をすると、隣の席の坂柳さんが返してくる。それを皮切りに他の人とも挨拶を交わしていく。

「ポイントが振り込まれてたけど少し減つてたな」

「ええ、そうですね。私とあなたの予想通りに」

二人でにつこり笑いあふ。

周りにいた人は寒気がしたのか少し体を震わせた。葛城君はこっちを見て、橋本君は私を睨んでいる。

そうしているうちに、手に筒状のポスターを持った真嶋先生が教室に入ってきた。

それに合わせてクラスメイト達が席に座る。

「全員そろっているな。さて、今日はポイントの支給日だったわけだが10万ポイント入っていないかったことは気づいていると思う」

そう言うのと真嶋先生は黒板に向かってA B C Dと縦に書き、その横に数字を記入していった。

A 9 4 0

B 6 5 0

C 4 9 0

D 0

予想通りの点数が記載されていたことにとりあえず安堵した。私というイレギュラーのせいでポイントが大幅に変動していたらどうしようかと思っていたが、どうやら

杞憂で済んだみたいだ。

「この数字はクラス全体の評価と取ってもらって構わない。つまり、君たちAクラスは940点分の評価をされているというわけだ。それに100を掛け合わせた数値がプライベートポイントとして君たちに支給されることになっている」

まあ、予想通りと言ったところだろう。最初の1日ぐらいだけ、多少の私語や眠たさうにしていた生徒が見られたが、坂柳さんのところはそんな人初日からいなかっただし、康平のところの人も康平が一度注意したら直していた。

孤立気味な人がそんな目立つようなことをするわけもないし、表面上は優秀なAクラスならこんなものだろう。

まあ、こつから落ちていけないことを祈らなければいけないが。

「二年の最初のこの時期で、歴代のAクラスの中でもここまで点数を残したクラスはほとんどいない。今年のAクラスは優秀な生徒が多いようだ」

へー…

まあ、まだ1か月目だ。ここから下り落ちていく可能性は大いにある。

何せ、3年間これを守り続けなくてはいけなくなるのだ。学校側も、差を縮めさせるような何かをすることが考えられる。

「そしてこのクラスポイントがそのままクラスのランクになる。仮に君たちが今回65



0未満のクラスポイントしか残せていなかった場合は、君たちはBクラスになっていたということだ」

これを聞いて他のクラスメイトもこの学校のクラス分けの意味を知っただろう。そして自分が優秀な人間だと評価されたことも。

そんなもの、本当に優秀な人間の前では全く自慢にならないのに。

「また、この学校が望む就職先や進学先を保障するのはAクラスの人間だけだ。君たちがAクラスではなくなったとき、その恩恵を受けられなくなるということをお忘れな」

この言葉で、一気にクラスに緊張が走った。好きな就職先や進学先を保証してくれるという謳い文句があり、それに釣られてきたものも多いはずだ。だからこそ、今の真嶋先生の言葉はショックが大きかった。

「真嶋先生、一つ質問があるのですがよろしいですか？」

私はそう言つて手を挙げた。周りからの視線が突き刺さるが気にしない。これからのことを考えて、どっちの派閥にも入らない以上下手に下げられないためにもこういう場所で発言しておくべきだと思った。

…そのせいでさらに目立っているような気もするが、多少は諦めよう。

「いいぞ、小坂。質問を許可しよう」

「では早速、この前の小テストの結果は成績表には反映されないと聞きましたが、今回のクラスポイントには関わっていますか？」

小テストをした時に、成績表には反映されないと聞いていたのでこつちに反映されるのかと思った。しかし、クラスポイントが全体で減っていたのでどうなっているのかわからなくなってしまうていた。このクラスは真面目にやっている人が多かったが、あまり関係なかったのだろうか？

「いい質問だ小坂。あの小テストは成績には反映されていないが、あまりにもやる気が認められない場合や、点数が著しく悪い場合に限りクラスポイントに一部反映される。今回ではこのクラスは下がることがなかったが、Dクラスでは下がったと言ったところだな」

なるほど、小テストを頑張ってもプラスになることはないが、あまりふざけているとマイナスになっていたということか。Dクラスのクラスポイントがやたら低いと思ったらこういうこともあったのか。

…いや、あのクラスの場合これがないでも0点は免れそうにないが。

「ありがとうございます真嶋先生。ついでに一つよろしいですか？」

「時間もあまりないから、最後の質問になるがいいだろう」

「では、中間考査でクラスの成績が優秀だった場合クラスポイントは増えますか？」

「鋭いな。そうだ。小坂の言う通り中間考査での成績が優秀であればあるほどクラスポイントも増加する」

まあ、予想通りと言えば予想通りだ。一般的にはテストで優劣を競うことがわかりやすいし、計算式を組み立てていけば計算もしやすい。それでいて、学生のやる気向上にもつながるんだからやらない手はないだろう。

「では最後に先日の小テストの結果を発表する。満点のものが2人もいただけでなく、平均点は86点と非常に優秀なものだった。今回の赤点ラインは44点だ。今回のテストで赤点をとつても関係はないが、考査で赤点をとつたものは即退学になるから覚悟しておくように」

言いながら真嶋先生は手に持っていたポスター状の筒を広げて黒板に張り出した。小テストの結果を書いたそれを黒板に貼って、真嶋先生は教室を出ていった。結果を見ると一番上に私と坂柳さんの名前が書いてある。点数は満点だった。

そして当然クラスは騒然となる。甘い謳い文句で誘われていざ入ってみた学校がふたを開けてみれば実力主義の敗者必滅なんという地獄とも言える環境だったなんて知ったらこうなつても仕方ないだろう。

「坂柳さんの言う通りだったね！」

「葛城君が注意してくれたおかげだな！」

「小テストちゃんやっつてて良かった〜」  
「やっぱり、坂柳さんと小坂くんが満点だね！」

両方の派閥ができて、露骨に敵対しているのがわかる。どっちかと言うと坂柳派の方の声が多いかみたいだ。

人数的には大差なさそうだけど小テストで満点を取っていたのが大きいのだろう。私達の一つ下に康平の名前がある。十分すごいはずだが、満点が二人いることを考えると少し見劣りしてしまっている。

そんな中で、私は真嶋先生に話をするべく教室を出ようとした。

「どこへ行くのですか？ 小坂君」

どこかでデジャブを感じながら、私は坂柳さんに呼び止められた。

『魔王からは逃げられない』という言葉が頭によぎったが、あながち間違いではないかもしれないなどと場違いなことを考えていた。

「真嶋先生に質問をしに行こうと思ってるね」

「さっき聞いただけでは足りないんですか？」

「他にも知りたいことはいっぱいあるさ。君もそうだろうか？」

そうやって私は彼女の方を見た。彼女の周りには坂柳派の人間が集まっているが、そ

の中で彼女は他の誰にも目をくれず私を見ている。私たちの雰囲気当てられて、だんだんクラス全体が静かになっていくのを感じる。

「そつちよりもクラスで話すことの方が今は大事だと思いますが、そのところは どう思いますか？」

「そう思つてはいたけれど、話し合うような雰囲気じゃなかった。こんなわいわい騒いでるような空気で話し合うような気はしなかったよ」

「それには同意しますが、今ならいいのではないですか？」

葛城君もこれからの A クラスの方針を決めたほうがいいと思つてゐるみたいですし、  
そう彼女が康平の方を見ると、康平がこつちにやつてきた。

「話に混ぜられてもいいか？」

俺もこれからのクラスの方針をどうするのか決めたいと思つていたところだ」

「こちらこそお手柔らかにお願いしますね」

「坂柳さんがいいつて言つてるんならいいんじゃないかな？」

私にはそんな権利ないから」

そう言ううと康平は私達の前に立つた。クラスメイトは坂柳派、葛城派で分かれ、孤立気味の人が自分の席を動いていない感じだ。私は何でここにいるんだろうと思ひながら、他のクラスメイトの誰も私がいることを指摘しない。

ここにきてようやく、自分がこのクラスでここにも周りも文句を言わないという事実に気付いた。

「とりあえずこれからのクラスの方針だけど、ぶつちやめんどくさいし好きなようにやらせるんじゃないのか？」

「ダメだ（です）」

流石にダメだったか。

正直なところ、私がクラス方針に大きく口を出す気はなかったので丸投げしたかったのだが、坂柳さんも康平も私を逃がそうとしてくれない。

「私としてはこれから積極的にポイントを取りに行こうと思います。現状維持のままではBクラスあたりに抜かされることも考えられますから」

「俺は現状維持をするべきだと思う。不用意に動いてクラスポイントを減らすような危険を冒すよりは現状のクラスポイントを守っていくことの方が重要だと思う」

「うわあ、見事に対極だね。なんてめんどくさい」

そう言った私は思わずため息をついた。彼女たちの意見が違ったとわかった瞬間、坂柳派と葛城派の空気が露骨に悪くなっているのを感じるし、それに合わせて孤立気味の人たちが顔を顰めたのも確認できた。予想はしていたが、まさかここまで二人の意見が割れるとは思わなかった。

「今のまだ状況がわかっていない状態だからこそ、先手を打っておくべきではないですか？」

「それで最初から間違えていたら、その先にある損害を最初から抱えていくことになると思わないか？」

「現状維持だけでは事態が好転することはないと思いますが？」

「無駄に危険を冒しに行つて落ちていくよりはましだと思うが？」

二人の間で火花が散っているような幻覚が見える。漫画だったら確実に火花を散らしているだろう。周りの人がおろおろしているのがわかる。自分たちのリーダーが真正面からぶつかり合っているのを見て不安なんだろう。

「そのままいつても平行線のままだし、他の人が困ってるからその辺にしといたほうがいいと思うけど……」

「それでは小坂君はどっちのほうがいいと思いますか？」

私と葛城君の意見と

「そうだな。このまま話し合っても決着がつかない可能性が高い。零の意見を聞かせてくれないか？」

そう言うと二人とも私の方を見た。

ちよつとまで、ここで私に振るのか。

しかも、他のクラスメイトが「もちろん坂柳さんだよなあ？」という目と、「葛城君に決まつてるよなあ？」と言う目でこつちを見てくる。

クラスメイト全員の視線が私に集まっているが、私は内心パニックに陥っていた。

そんなことを考えているうちにチャイムが鳴った。

そろそろ授業が始まる時間だ。

「とりあえず、続きは放課後つてことでどうかな？ 時間も時間だし、切羽詰まつて答えを出すほど早まつてもないだろう？」

私も一度よく考えてから結論を出したいし」

「わかりました。続きは放課後に」

「構わない。こういうことは一度じっくり考えてることも必要だろう」

そう言つて二人とも席に戻つた。それを見て、他のクラスメイト達も自分席に戻る。

：助かつた。正直こんなことになるとは思つていなかった。何で誰も私に回された時に反対しないんだ。

坂柳さんが悪いのはわかつている。今も隣で邪悪な笑みを浮かべてることから、彼女の私に対する一種の攻撃であることはわかりきつてい

る。それに気付いた茂がドン引きしてるのが見えた。



どちらかと言うと坂柳派の彼がドン引きしているなんて相当だろう。初日から話をした茂は、実を言うと坂柳派の人間とは言い難い微妙な立ち位置にいる。元々ボツチ氣質だったのか、一応坂柳派と呼ばれる程度の位置にいる彼だが、入学初日以降坂柳派の人間たちと絡んでいるところはあまり見ない。

逆に、私とは比較的仲が良いが、一線を引いた友人関係を私が取る傾向にあった。そのため自分から呼び捨てでいいと言われないうえ、君かさん付けで呼んでいたが、ついに彼からも呼び捨てでいいと言われたので呼び捨てで呼び合う仲になった。

人柄もよく、結構話しやすいしノリもいい彼がどうしてクラスで浮いているのかが私にはあまりわからない。この前の解説会をした時も私が個人的に教えて回った時の一人でもあった。

…現実逃避はこの辺にしておこう。さっきの話し合いは結局放課後に持ち越されただけで、私が追い詰められ気味なのは変わらない。どっちの選択をしても印象を悪くするし、新しい提案を単純に出すのも厳しいだろう。

リーダー格の二人を正論で言いくるめられても、他の人たちが付いてくるかはまた別問題だ。

適当に言うことなんてもつてのほかだろう。さっきは丸投げにしようとしたが、そん

なことを繰り返し言ったら袋叩きにされるのは目に見えている。

もしかして本当にこうなることを予想して私にキラーパスをしたのだろうか？

だとしたら、これは『攻撃』だ。別に坂柳さんの意見を否定させるためのものじゃないが、こんな形で吹っ掛けられた以上、下手な真似はできない。

これも勝負の一環だということだろう。

だから私は、授業中の時間を使って放課後のことを考えなくてはいけない。どうやって、坂柳さんと康平の意見を肯定して否定するか、クラスの方針をどうするかのカギとなるだろう。とりあえず、まだ放課後まで時間はあるから、この現状を何とかすることだけ考えよう。

後は野となれ山となれ。

どうせ結果は最低だ。マイナス

## 10 話目 五月の初めの日 II

放課後になった。昼休みにいつもと変わらず坂柳さんと昼食をとっていたら、葛城グループの人たちに鬼のような形相で睨まれた。

もしかしなくても、朝の件のことが尾を引いているのだろう。

それを察して笑顔を浮かべる坂柳さんはほんと小悪魔っぽくて可愛く見える。だが、それがただの可愛いだけの笑顔ではないことを、私は当然理解していた。

笑顔が邪悪に見える私は心が汚れているからなのか？

それとも、彼女が小悪魔の皮をかぶった大魔王だからなのか？

私には判断しきれないことだが、少なくとも坂柳さんの斜め後ろにいた茂はドン引きしていた。

そして昼休みには他愛ない会話をして朝の件にはお互い触れなかった。葛城派もいたし、下手に触れて肩入れしてると思われなくなかったからだ。それを踏まえてか、珍しく教室で食事をとる人が多かった。

監視をするという名目もあるのだろうが、いきなり昼休みに話し合いが始まる可能性も考えてののだろうか。

だが、私も坂柳さんも康平も、その話題を出すことはなかった。

昼休みを終えた後の授業が終わった。HRが終わった後だが、教室から出ようとする者は誰もいない。そんな中で私は教壇の方に足を進めた。それに釣られて康平と坂柳さんが同じように教壇に立つ。

「それじゃあ朝の続きをやつていこうと思うんだけど、康平が現状維持で坂柳さんが積極的にポイントを取りに行きたいっていう位置取りでいいかな？」

「ええ、その通りです」

「こちらも同じくだ」

それを聞いて、黒板に大きく『葛城 現状維持』と『坂柳 積極的』と書く。

「まあ、正直どつちでもいいんだけどね」

「それはどういうことですか？」

私の呟きに坂柳さんが反応した。

「ここで下手に言うともまずいのは分かっているので用意しておいた回答を答える。」

「まだ情報量が少ないから、できることが少ないということだ。クラスの方針を固めるにしてももうちよつと情報が欲しいと思わないか？」

「確かにそれは一理ある。しかし、どつちつかずで進めていくのもクラスの団結力を落とすことになると思うが、そこはどう考える？」

「別にこのまま何も決めないって言ってるわけじゃないんだ。とりあえずは情報が欲しいってことはわかってももらえたんだけど皆いいかい？」

そう言つてクラスに確認をとるポーズをする。ほとんど全員が、頷いていることを確認する。まだわからないことが多すぎるといふのは、みんなが思っていることだろう。

「そこで、簡単でいいんだけど他のクラスについて知っている人はいないかな？ 他のクラスがどういふ動きをしているのかもクラスの方針を決める上では大切だと思うんだ」

「他のクラスの出方を窺う……と言ふことですか？」

「自分を貫くことも時には大切だ。しかし、一番簡単なのはメタを張つてポツコポツコにすることだからね。じゃんけんでグーを出す傾向の強い人間にパーを出し続けたほうが勝率が高いのはわかりきってるだろう？」

それには坂柳さんも同意なのかしつかり頷いた。

「そうしたら今日のところは方針を決めないということになるのか？」

「いや、今ある程度決めたいところもあるし、せつかく部活に出ないで残つてくれている人もいるんだから基本的なところは決めたい。だから、他のクラスのことを知っている人がいたら教えてほしい。ねえ坂柳さん？」

そう言つて、私は彼女の方を見た。

私の予想では彼女は既に他のクラスの情報を集めている。あの日に言ったことが嘘でないのなら、彼女が言う相手とは少なくともこのクラスにはいないと予測できる。

そもそも、彼女がすぐにでも統一できるようなAクラスに彼女が勝ちたいと思うような人材はいないだろう。

そうすると、敵は同じ学年の他のクラスに居る確率が高い。学年が違うことも考えられるが、それなら彼女は生徒会にでも入っているだろう。生徒会の権限を利用して他の学年に手を出すようなやり方ぐらいじゃないと、学年が違うなら勝負になるような事態はなかなかないだろう。

直接対決するために準備期間でクラスを纏めておくにしても自分が落ちていかないうちに、他のクラスの内情をある程度知っていると思った。

だからさっきの仕返しに軽いジャブを打ち込んだ。

「なぜ私の方を見ているんです？」

「坂柳さんなら他のクラスの偵察ぐらいもう終わらせてるだろ？ 君はそういう人間だ。勝つために打てる手段はあらかじめ打っているだろう？」

「…流石ですね、その通りです。確かに私は他のクラスの情報を大雑把にですが持っています」

それを聞いてクラスが少し沸いた。

「流石坂柳さん！」

「どんな手で調べたんだ？」

そんな感じの声が教室のあちこちから聞こえてくる。しかし、あまりうるさいと話が進まないのだから私は両手で声を下げてもらおうようなポーズをとった。それを見て、すぐに静かになるのだから流石Aクラスと言ったところなのだろう。

「ですが、あまり信用しすぎないでくださいね。今もあつている確信はないので」

「坂柳さんが嘘の情報を言うような人だとは思わないから、私はそれを聞いてから判断したい。他の人も問題ある人はいるかい？」

いるにしてもそれなりの理由を述べてもらうけど」

そう言うとうと教室が静かになった。葛城派からすれば反対したいところもあるのだろうが、こんな空気の中で敵対するのは無理があると思つたのだろう。

「康平もいいかい？」

「ああ、俺も他のクラスについて調べてなかったからちようどいいと思つていた」

「そんなに期待されると困つてしまうので、あまり信じすぎないでくださいね。今日のことと変わっている可能性もあるので」

彼女がそう言っている間に私は黒板に、『Bクラス』『Cクラス』『Dクラス』と書いた。まず、Bクラスですが一之瀬さんと言う方がクラスの代表になっているみたいです。

クラス全体で団結しているような印象で、クラスの団結力が強く、クラス全体でAクラスを目指していくような感じだと思います」

それを聞いて『Bクラス』と書いた下に、『一之瀬 クラス代表』と書き、さらにその下に『団結重視』と書いた。原作のBクラスとCクラスのことは全然わかんないから漢字があっているか不安だ。

「次にCクラスですが、このクラスのリーダーは龍園君と言う方らしいです。Cクラス全体であまり情報がなく、どのようにリーダーになっているのかは不明です。クラスを独裁的に支配しているという話ですが確証はありません」

次に『Cクラス』と書いた下に、同じように『龍園 リーダー』『独裁主義』と書いた。「最後にDクラスですが、クラス全体をまとめているのは平田君と榎田さんと言う方みたいです。ですが、クラス全体で孤立気味の人が多いうえに、4月はクラス全体で墮落しきっていた様子でそれがクラスポイントに表れています」

『Dクラス』と書いた下に『平田 榎田』『よくわからない』と書いた。

「ちよつとまつて、Dクラスのところなんで最後そうなってるの?」

沢田さんがそう言うと、他のクラスメイトも同感なのか頷いている。確かに、BクラスもCクラスもそれぞれの方針が決まっているように見えるが、Dクラスの情報として



はまとめている人と墮落していることしかわからない。だから、これからどうなるか『よくわからない』と言う意味で書いたのだが、言葉が足りなかったみたいだ。

「Dクラスは今崖っぷちの状態だから、正直なところ他のクラスに比べて前情報が一番通用しないクラスと言えると思う。これからも墮落しきった様子だったら見るまでもないが、これからどうなるのがわからなかったからそう書いておいた」

「あくなるほどー。追い詰められてるから逆にどうなるかわからないってことね」  
「そういうこと。正直セオリィ通りにやってきそうなBクラスより怖いまである」

何よりもDクラスには主人公綾小路君がいるし、前にチラッてみた高円寺君もポテンシャルがやばかったはずだ。

「でも所詮はDクラスだろ？俺たちAクラスの敵じゃないって！葛城君だっているんだし」

そう言ったのは戸塚君だ。葛城君の側近みたいなポジションにいる彼は正直小物臭がするし、あまり得意ではないが、ここで一度釘をさしておくべきだろう。

そういうえば康平が少し手を焼いているように漏らしていたのが彼だと言うことも思いついた。

「そう言っている時が一番怖い。慢心した結果見向きもしなかった雑魚に殺されるのは物語の王道だろ？だからこそ、Dクラスを蔑ろにしたくない」

「確かにそうですね。予想しづらいという意味では総合力があるBクラスよりも注意したほうがいいかもしれません」

坂柳さんも私に乗ったのを見て、戸塚君は顔を顰めて引き下がった。康平がよく言ってくれたと言っているようにも見えたが、恐らく私の気のせいだろう。

でも、今Dクラスの対策を立てるのは正直無理だ。さつきも言ったとおり何してくるか予想が付かない上に、綾小路君主人公がいる以上何をしてくるのかわからない。

「…よし、Dクラスはいったん無視しよう」

「さつきまで蔑ろにしないって言ってなかったか!？」

戸塚君にツッコまれた。他の人たちも同じようなことを思っているのかこっちを蔑みの目で見ているのを感じる。

「いや、蔑ろにしないとは言ったけど今対策を立てられるような状態でもないだろう？」

だから、Dクラスに関してはいったん様子を見ることにする」

そう言うのと納得したのか戸塚君はそれ以上突っ込まなかった。

紛らわしいようなことを言ってしまったことを、後で謝罪しようかと思いつながら続ける。

「さて、ここまで見たらわかる通り、Cクラスは独裁。Bクラスは民主制と言ったところだろう。無理やり上がってくるとしたらCクラスだな」

「ええ、周りを気にしないで無理やり動いてくるとしたらCクラスですね」

「それには同意だ。Bクラスはクラスメイトの意見を聞かなくてはいけない以上、いきなり勝負をかけることはないだろうからな」

他のクラスメイトも何となく理解したのか頷いたり、メモしたりしている子もいる。

「それで、結局どうするんだ？」

他のクラスの動きを見てから考えようと書いていたが、どうするつもりだ？」

「私も小坂君がどっちにするのか気になります」

「…私の考えだし、クラス全体に強制するようなことじゃないって初めに言っておくよ」

私がそう前置きを言うと、坂柳さんも康平も私の方を見て頷いた。クラスの中で緊張感が増しているのがわかる。

「まず結論から言うと、私は康平と同じ現状維持でいいと思う」

「理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「理由としては3つほど、1つ目に現状この学校の仕組みを手探りで探している状態が残っている以上、下手に動くメリットが少ない。中間考査でポイントが加算されるかもしれないと言っても、他の評価基準がまだ完全にはわかってないからね。」

2つ目にCクラスが急に動いてきたら怖いのが、それでもBクラスを挟んでいる以上Aクラスまで牙を届かせることはほとんどできないということ。

3つ目に単純に時期じゃない。そのうちそういう方向にシフトしていくならともかく、5月の頭のこの時期に無理矢理動いても大した結果は得られないと思った。他のクラスの手札も少ないが、こっちの手札も少ない以上でできることが限られすぎていると思っただけだ」

「……」

「もちろんあくまで現状だし、状況が変わったら方向を変えてみるのも手だとは思っただけで、それは今じゃなくていいと思う」

そう言う彼女がこっちを見たまま動かない。私と坂柳さんの睨み合いにクラス全体の雰囲気が悪くなっていくのを感じるが、私は私の考えを言っているだけなので彼女にここまで睨まれる謂れはない。

「だから、クラスの方針としては現状維持でいいと思う。その方がみんな無理して頑張ろうとしなくて済むからね。…それを踏まえて私は坂柳さんにお願ひがある」

「…内容によりませんがとりあえず言ってみてください」

私は彼女が無碍にするような姿勢を取らなかったことに内心喜んだ。

彼女の意見を蹴るような形になったが、彼女を敗者に仕立て上げるつもりはなかった。た。

このままだと、私が葛城派に入ったようにも思われるし、坂柳さんを無理矢理Aクラ

スから蹴落としたとなつては彼女の動きがわからなくなつてしまふ。

だから、彼女にはこのクラスで彼女たちの役割を作ることで一方的に否定された敗者というレッテルを張つてはいけない。

そうなつたら、彼女は康平を本格的に蹴落としにかかるだろう。

その後の動きが、私にはまるで予想もできない。見えるところで動いてくれるならまだしも、見えないところで動かれすぎると彼女の動向を窺えなくなつてしまふ。

そればかりは、勝負をしている身としては好ましくない状況になることを理解していた。

「坂柳さん……いや、坂柳さんたちには他のクラスの動向を探つてほしいんだ。ほら、Cクラスが動いたときにすぐに話し合いをできるようにさ」

「……それをして私に何のメリットが？」

「嫌なら断つてくれてもいいんだけど、積極的に他を潰すようなことになつた時にそういうことを知っていた人たちが意見を出してくれたらやりやすいと思うんだ」

「……そう言うことですか」

今ここで私が言っているのは、今は康平の方針にクラスの意思を纏めてほしいというお願いに近い。その代わり、他のクラスが危険な動きをしていて対処しなくちゃならな

くなった時には坂柳さんのしたいようにやっていいということだ。

こうすれば、彼女がすぐに康平を潰すようなことはしないだろう。何せ、彼女がAクラスを取り仕切る前に、他のクラスの動向を探れるアドバンテージはそれなりに大きい。

『Aクラスリーダーの坂柳』と『Aクラスの坂柳』とでは他のクラスからの警戒度は全く違うものになる。

その上、クラス全体で協力している風にもできるだろう。

「康平もそれでいいかな？ 嫌なら嫌って言うてくれて構わないんだけど」

「俺はそれでいい。確かに今の状況では現状維持をするべきだと思ってるが、状況が変わったらどうなるかわからん。」

それならば、そのために坂柳が独自に動くということもある程度は許容するべきだと思っただ」

「そう言うことでしたら私も構いません。クラスの方針としては少し残念ですが、私の意見も尊重してください。小坂君の言う通りにしようと思います」

…二人の言葉に、私は自分があたかもAクラスのリーダー格に数えられていることに頭を抱えた。

さつき坂柳さんに巻き込まれなかったら私は間違いなく座ってる側の人間なんだと、

茂の方を見て思わず睨んだ。

こんな前に立って目立つようなことは本当はしたくないのだ。

クラスの皆もそんな目でこつちを見ないでほしい。睨んでいるはずの茂も、「よくあの二人をまとめたな」みたいに、感心するような目で見ないでくれ。

私はこんなことをしたくて、この学校に来たわけじゃないのだ。

ただ、坂柳さんに勝ちたいと思っただけなのにどうしてこうなってしまったのだろうか。

外面を取り繕いながら、私はこの話し合いを締めることにした。

「それじゃあ、とりあえずは下手に動かないで現状維持つてことにしようと思うんだけど賛成の人は手を挙げてほしい」

そう言うと、坂柳さんと康平が真っ先に手を挙げた。それに続いてクラスのほとんど人間が手を挙げる。数えるまでもなく過半数を超えていることを確認した私は皆に手を下させた。

「賛成多数なので、Aクラスの方針としては『とりあえず現状維持で他のクラスに目を光らせる方針』で行こうと思います。」

放課後まで教室に残って参加してくれてありがとう！」

そう言って私は頭を下げた。

放課後で参加を強制してはいないのに、部活にもいかないで教室に全員が残ってくれたことを考えるとある程度の誠意は見せるべきだと思ったからだ。

「じゃあ、そういうわけで、これからは解散して自由にしていよいよ。部活がある人達は部活へどうぞ、話し合いに参加してくれてありがとうございました」

そう言うのと康平と坂柳さんが拍手をした。

それにつられてクラス全体から拍手が聞こえる。

それに少し驚きながら、私はもう一度頭を下げた。

---

その後は特に何事もなく解散した。



坂柳さんは私に話したいことがあったみたいだが、私はこれからの『私の方針』について考えたかったので寮の自室に戻った。

また今度話し合いをする約束をしてしまったことに、私は気を重くしていた。

今日の話し合いの結果も過程も、全てにおいて私の理想からかけ離れたものになってしまった。

その現実を受け止めきれなくて、私はベッドに突っ伏していた。

ベッドの柔らかさを感じながら、このミスをどのようにしてリカバリーするかについて考えを巡らせていた。

何にしても情報が足りない。

特に、綾小路君主人公がいるDクラスの情報が少しでもほしい。

有ったところで轢き殺されそうな気はするが、少しでも情報がほしいところだ。

とりあえず、今回の話し合いで決めたことが裏目にならないければいいが、私もいい加減覚悟を決める必要があるかもしれない。

綾小路君主人公と関わる覚悟を。

彼に敵対するような姿勢をとるつもりはないが、いい加減彼を見ないふりをして進めていくことも限界に感じてきた。

Aクラスである以上、いずれ彼に追われるようになることは避けられないだろうし、彼のやる気がないとしてもDクラスのポテンシャルを侮る気はこれっぽっちもなかった。それに、何よりも彼女と戦う上で私だけで戦うのは厳しい。

かといって、Aクラスの人に協力をしてもらうことは厳しいだろう。そう考えると他のクラスでなおかつ利害関係をはっきりさせやすいDクラスの人たちが扱いやすいように思える。

それに一旦無視すると言った以上、AクラスがDクラスを攻撃するようなことはまずない。

あの会議で私がDクラスを無視すると言ってそういう雰囲気にもって行って、クラスからの同意を得た以上は坂柳さんも康平もDクラスを攻撃するようなことはしないだろう。

問題としては坂柳さんに各クラスの動向を探るようお願いしたことだが、私はどこの派閥にも属していない。だから、私が個人的に関わることはそこまで問題じゃないだろう。

坂柳さんだけの視点じゃなくて私も独自に探りを入れたかつたとしてもいえば問題ないだろう。

問題は彼女本人が見逃してくれるかということだ。今日みたいに、放課後に何かと彼

女に呼ばれることも多いし、昼休みは基本的に一緒に昼食をとっている。彼女の分も作っている以上、昼食時に仕掛けることはできないだろうし、放課後もなんだかんだ康平から相談を受けたり、最近だと茂に勉強を教えたこともあった。

そんな中で私がどうやって時間を作るかが問題だ。中間考査の時期を見て、図書館に入り浸ってみるのも手かもしれない。他のクラスの人の動向も見れるかもしれないし、一応テスト前には範囲の大雑把な復習もしたいし、高校の範囲の問題にも一通り手を付きたい。

出来れば大学受験問題にも手を出し始めたいところだ。坂柳さん彼女と勝負をしている以上、時間は有限だし、個人で戦っている私とは違って彼女はしもべお友達がいる。その差を縮めるためには、直接的な動きが少なそうなテスト期間に缶詰めになって勉強するしかないだろう。

そう考えた私は、結局問題が何も解決していないのではないかと言うことに気付き、考えるのもめんどくさくなってそのまま意識を落とすとした。

# 11 話目 五月の中頃のある日

5月も中頃になった。

あれからは特に何事も起こらずに予定通りことが進んでいる。朝弁当を作り、授業を受け、昼休みに坂柳さんと昼食をとり、その後にはクラスメイトに勉強について聞かれ、放課後には図書室に籠って勉強をする：そんな毎日を繰り返している。

時々、外に出て体を動かした後にマツハ突きの練習をしたり、康平が呼びかける放課後の話し合いに参加したりもしているが、その話し合いも私は自分の席に座って全て康平たちが進めている。それに、テスト期間が近い今はそれもほとんどなくなっている。

勉強会にも誘われたが、大学受験の問題をやっていたり、高校3年生の範囲をやっている時間の方が増えたので行かなくなった。テスト範囲の問題に関しては一度変更があつたが、変更前も変更した後も全て覚えていたものだったので対して問題はなかった。そのため、聞きたいことがあつたら昼休みの食事が終わったころに来てもらうことにした。

必然的に、放課後にクラスメイトと関わる時間が減った代わりに昼休みに関わる時間が増えた。

元よりそこまで関わるようになつてもりはなかったのだが、この前の解説会とクラスの話し合いで司会をやったことがあったのもう諦めた。

どうにかクラスで目立たないためにしようと思つたのだが、康平と坂柳さんが絡んでくるとどうしても無理だと言うことに気付いたので諦めてしまった。

ここが『ようこそ実力至上主義の教室へ』の世界だとしても、私はここで生きている人間だということは今一度自覚しないといけないかもしれない。

この世界は私の知る『ようこそ実力至上主義の教室へ』の世界だ。だが、この世界は『ようこそ実力至上主義の教室へ』だとしても、生きている人物はキャラクターじゃない。紙の上の文字や、動く絵と声を入れたようなものじゃない。

触ろうとしたら触れる『人』がいる世界で、触れようとしても触れられない二次元の世界じゃない。

そういうところが私には足りない気がする。なんだかんだで主人公綾小路君に会いたい反面、主人公だから会いたくないと思つている自分がある。実際に会つたこともないのに、主人公だから私とは違うとてもプラス向きの人間なんだと勝手に思っている。

ラノベの主人公なんだからどんだけ捻くれていたとしても、どうせ根っこは善人に近いもので、どうなつても最後には勝つような奴だという風に思っている。

それが『物語』だから。

そういう彼被小路君が活躍するための舞台世界だから。

まだ私にはこの感覚が抜けていない。坂柳さんに勝負を申し込んだときに、啖呵を切ったくせにこの有様だ。この学校に入ってから、友人関係と呼べる人が増えてだいぶプラス寄りになってきたと思っている。初日のマイナス成長があったが、中学校時代の目立たない位置取りをすることや施設時代の虐待されているとも受け取れる環境にいたせいで、必然的にマイナス方面に成長していた時よりも遥かにプラス向きになっていると思う。

過負荷マイナスは幸せを感じると少しずつプラス寄りになっていく、みたいなのがあったはずだ。尤も、私が過負荷マイナスと呼んでいるこれが本当にそれなのかはわからないが、性的には似たようなものだろう。だから、プラスの環境にいたら影響されてしまうのも仕方ない。

元から素質があつたのかもしれないとはいえ、後天的に覚醒したもののは違いないのだから。

だが、落ち着いて思考が少しプラス寄りになった今となつては、この『物語』の中の世界私には関係ないと云うのがとてつもない足枷になっている。どうやっても勝てないからどうでもいいやっつていう考えで終わらせられない以上、どうにかしてその意識を変えた

手っ取り早くは原作をブレイクすることなのだが、そもそも原作自体あまり知らない私はどうすれば原作ブレイクできるのかわからない。

既に原作ブレイクを達成しているのか？

それとも綾小路君を殺害しないと変わらないのか？

思考を少しマイナス向きに戻すべきか？

：思考が物騒な方向になってきた。

まあ、私がいる以上原作そのままもないだろう。異分子がいる以上どうやっても元通りにはいかないだろう。

どっちにしろ思い通りに行かないことの方がいつも通りじゃないか。

負けても、勝てなくても、潰されても、壊されても、苦しんでも、痛くても、きつくても、殴られても、虐待されても、間違っているても、汚くても…

へらへら笑えよ。それが過<sup>わた</sup>負<sup>た</sup>荷<sup>し</sup>だろ？ 『小坂零』。

どうせこの世界がどんな形だろうと私の思い通りに何でもなるような世界になるわけないのだから。

そんなことを考えながら図書館で勉強していた。つい先ほどまで教室で昼食をとっていた私は、図書館に来ていた。

昨日の私は青本と呼ばれる、『この世界の』大学の過去問題集に取り組んでいた。その中で、どうしてもわからない問題があったので図書館にやってきて、答えの手掛かりになるような本を探しに来ていたのだ。

手っ取り早く坂柳さんにも聞いてみたのだが、生憎彼女もまだやっていない範囲だったようで、むしろ私が解けたら教えてほしいと返されてしまった。

青本：前世では赤本だったのでなんかパチモン感が凄まじいが、学校で取り寄せたらちゃんと用意してくれるのでとても重宝している。

私が最終的にAクラスに居られることはまずないだろうから、自力で国立大学あたりに行かないことには私が大学に行くことは不可能だろう。尤も、学力だけなら今でもそれなりの大学に入れるが、特待生制度があるところに入ってできるだけお金を浮かせなければ大学生になるのは無理だ。それと奨学金をとらなくてはいけないことは目に見えてる。

それでも、元々一切お金を持っていないような状態だったのだから仕方ない。この学校だって、こんなシステムじゃなければ私は今ごろひもじい生活を送ることは確定的に



明らかだった。最初は胡散臭さ全開のあれとか言っていたが、今の私にとってはこの人生で最大の贅沢をできるチャンスなのかもしれない。

問題は、そのポイントを下手に使うと後で詰みかねないからあまり使えないということを除けばだが。

「あ? …もしかしてお前ら、Dクラスの生徒か?」

不意にそんな声が聞こえた。声のした方を見てみると、どこかで見たことのある男女を含む集団に話しかける生徒の姿があった。

……げえー! 綾小路君 主人公だ!

思わず心の中で悪態をついた。手に持っている本を落としてしまいそうなくらいの衝撃だった。

図書館にも拘わらず、諍いが起こりそうな雰囲気を感じ取った私は、いつでも彼らの間に割って入れるようにした。このまま五月蠅くされるのも迷惑だし、主人公による残酷ショーが始まったらすぐに逃げられるようにだ。

ここまで警戒する必要はないのだろうが、主人公というネームバリユーが私には何をしてくるのかわからないものだと思うので、最大限に警戒していた。

「なんだお前ら。俺たちがDクラスだから何だつてんだよ。文句あんのか?」

そう返したのは、主人公たちと一緒にいる不良っぽい感じのする男だった。

：確か、原作の須藤? 君? だったはず。

正直自信がないからあつてるかかわからない。

「いやいや、別に文句があるわけじゃねえよ。俺はCクラスの山脇つていうんだ。よろしくな。ただなんつーか、この学校が実力でクラス分けしてくれてよかつたぜ。お前らみたいな底辺と一緒に勉強させられたらたまんねーからな」

「なんだと!」

そう言つて煽る山脇君にかみつく須藤君。

そんなんでDクラスが潰れてくれるなら儲けもんだが、そいつ意外にやばいのがそつちに揃つててことを知っている私はCクラスの当て馬を冷めた目で見ていた。

：ていうか、生で主人公綾小路君見たけどあれはやばいな。他の人からすれば何とも思わないかもしれないけど、私からすれば普通に化け物認定が入りそうだ。

持つているプラスの氣質が段違いすぎる。それでいて、冷酷に邪魔者を消すという漆黒の殺意も感じる。最終的には必ず勝つプラス的な運命に恵まれているうえに、邪魔者

は絶対殺す殺戮マシンの側面を窺えた。

ただでさえ勝てないのに勝てる気がまるでしなかった。

「本当のことを言っただけで怒んなよ。もし校内で暴力行為なんて起こしたら、どれだけポイント評価に響くだろうな。いや、お前らにはもう失くすポイントが無いんだったか？ って事は本当に退学になるのかもなあ？」

「上等だ！ かかって来いよ！」

…いい加減止めるか。

他の人たちも迷惑そうにしてるし何より鬱陶しい。

「やめなさい須藤くん。ここで問題を起こしても百害あって一利なしよ。それに、先程からDだDだと馬鹿にしているけれど、あなたたちもCクラスと言ったわね？」

そこまで上位とは言えないでしょう？」

「CくAクラスなんて誤差みたいなものだ。お前らDだけは別次元だけだな」

……モブの分際でよく吠える。言うほど底辺も上も経験したことのない分際でよくそこまで吠えたものだ。

上から目線で言うように悪いが、私はCクラスの山脇君に対して静かな怒りが沸き上がっていた。

外面を取り繕ったまま、私は彼らを黙らせるべく歩みを進めた。

「さつきから騒がしいと思つて来てみたら、図書館の利用マナーもなつていない人が序列を語るなんて世も末だね」

そう言つて私は彼らの間に割り込んだ。煽りながら、山脇君を見たまま。

「なんだ、お前。いきなり入つてきやがつて」

「あれれー？　もしかして自分のことだと思つちやつた？　マナーを守ることできない人だつて自分で思つちやつたのかな？」

それとも、話している間に入つてきたから自分のことだと思つちやつたとか？」

そう言つて山脇君に顔を近づける。気持ちだけ過負荷マイナスを纏いながら、彼の顔が目と鼻の先にあるまで近づく。彼はあまりの気持ち悪さに後ろささつたが私は彼からターゲットを外す気はない。

そして、彼から顔を離して話を続ける。

「もしかして、世界の全ては自分を中心に回つてるって考えちゃう人？　気つもちわりー、自意識過剰にもほどがあるね」

「なんだと！」

そう言つてかみついてくる山脇君にグイッと顔を近づけてにっこりと笑顔を浮かべる。それに対して驚いてしまったのか、彼はまた少し後ずさつた。

「でも安心して！ 自分より弱い人にかみつくことしかできない、他の人の足を引つ張るようなどうしようもない役立たず、それが君の個性なんだからもつと自信をもちなよ！」

そう言つて彼に顔を近づけて笑う。そのあまりのマイナス具合の気持ち悪さに山脇君どころか、周りのCクラスの生徒も後ずさつた。

「弱い人を叩かないと自分を保つこともできない、そんな弱さが君の個性なんだ！」

自分より弱い人を叩いて自分が強くなるわけじゃないのに、そんなことをしないといけないくらい弱っちい奴、それが君のかけがいのない個性なんだよ！

それを誇りに思つていいんだ。君の個性は君だけのものなんだから！ 君は君のままでいいんだよ」

言葉を紡ぐたびに図書館内の空気がだんだん重くなつていくのを感じる。別にマイナス気持ち悪さをイメージした雰囲気マイナスを纏っているだけで過負荷を出しているつもりはこれっぽっちもないのにこの有様だ。坂柳さんなら表情一つ変えずに返してきそうだが、彼女と比べるのはいささか酷だつたようだ。

やっぱりマイナス式で褒めようとするところなつてしまうのかと思うと少し悲しい

気もしたが、まあこんなものだろう諦めた。一応、私は一番最初だけ煽っていったが、他に關しては自分の本心から褒めているつもりだった。

自分のことをありのままに受け入れさせてあげようと思っていたのだ。君にはこんなに素晴らしい負の側面マイナスがあると、君の個性はこんなにも醜いマイナスなものなんだと教えてあげただけのつもりだった。

しかし、目の前の彼の様子を見るとそれは失敗したことは明らかだ。

私のマイナスが悪かったのか、私のアプローチが悪かったのかは彼のみぞ知るところだ。

「…なーんてね！ 冗談冗談！ ここは図書館なんだから、みんな静かにねってことを言いに来ただけなんだ。だからそんなに落ち込まないで、さっきのは本心から褒めたんだからさ。そんなにぐったりされると傷ついちゃうぜ」

そう言うのと彼の心は完全に折れてしまったのか、他のクラスメイト達と力なく図書館を出ていった。

…やっぱり思考を過負荷側にもっていったのが間違いだったのだろう。そんなことを思っていると、一人の女子生徒がやってきた。

「…さっきの言い過ぎだと思う。いくら図書館でマナーを守らなかつたとはいえあんな言い方はないんじゃないかな？」

その女子生徒は私に近づくとそんなことを言ってきた。この雰囲気の中でそんなことを言えるなんて彼女はなかなか大物なのかもしれない。

「あー…すまなかつた。本当はあんなこと言うつもりではなかつたのだが、ちよつと八つ当たりも入っていたのは事実だ。」

他の人たちも不快に思つたらごめんさい、さっきの人にも今度会つたら謝ろうと思  
います」

そう言つて図書館内の人に向けて頭を下げた。

「…後できちんとしてね？」

「ちゃんと会つて相手が謝罪を受け入れてくれるなら、私はしつかり謝罪をするよ」

そう言つて、女子生徒の方を見て笑顔を浮かべる。それを見て彼女が後ろさつた。

…そんなに嫌われたのだろうか？

まあ、仕方ないか。どうでもいい

「そつちの人たちもすまなかつた。却つて騒ぎを大きくしてしまつた」

「いや、こつちも騒ぎ立てるようなことになつてしまつて申し訳ない」

そう言つて綾小路君が頭を下げた。他の人たちは警戒しているのか、こつちを見ては

いるが何も言つてこない。

「それに関しては絡んできた彼らが悪いみたいだから、君たちが謝るようなことじゃない。私はI—Aの小坂零だ」

「I—Dの綾小路清隆だ」

「一之瀬帆波、Bクラスだよ」

彼女がBクラスの代表か。早速Bクラスと仲良くすることはできなくなつたような気がするが、まあどつちにしろ睨みあうような間柄だし、仕方ないだろう。綾小路君にも警戒されているようだが、一之瀬さんほどじゃないのでまだリカバリーが効くと思いたい。

「クラス間でいろいろごたごたがあると思うが、騒ぎを大きくしてしまつたお詫びに何かあつたら力になるよ。これ、私のメアドと携帯の番号」

そう言つて、私はメモ帳から紙を二枚切り取つて一之瀬さんと綾小路君に渡した。前に、クラス中の人と交換した時に大量に作つておいたものだったが、連絡先の交換には便利なので重宝していた。

「それじゃあ、また今度とか」

そう言つて私は荷物を持って、図書館を後にした。

…出ていってから結局図書館に来た目的を果たしていないことに気付き、少し気が重



く  
な  
っ  
た。

「……あれがAクラス……」

隣にいた堀北がそうつぶやいた。

綾小路

オレはあいつがでていった先を見たまま動けなかった。図書館全体で時が止まった

かのような錯覚を覚えるほど、図書館内にいた人はあいつの迫力に呑まれていた。

ただひたすら心を折るような物言いを、あろうことか褒めたと言った彼に対して誰も  
が驚愕せざるを得なかった。

それこそ、未だに誰も動けないほどに。

それだけ、あいつの放っていた雰囲気は異質だった。

オレも一度も味わったことのない不思議な感覚にとらわれた。

…その後連絡先を渡してきたことにも驚いたが、さっきのあれがなければ友達になれたのかもしれないと思うと少し残念な気もするが、仕方ないか。

須藤たちが正気に戻ったころ、もうそろそろ昼休みが終わることに気付いたので、続きは次回に回すことにして解散した。

## 12話目 五月の中頃 〔舞台裏〕

結局、問題の解答がわからないまま放課後になった。

テストが近いこともあり、他のクラスメイトの多くは教室を出ていた。教室に残っている人も、普段話し込んでいるような人もなく、残っている人たち全員が勉強のために机に嘯り付いていた。

私も勉強しようと思いい図書館に行こうとしたが、昼休みのことを思い出すとあまり行く気にはなれなかった。だが、坂柳さんにも答えを教えると言った手前、どこかで図書館に行かなくてはいけない。

それならば、気は滅入るが早めにやることを済ませてしまおうと思い、私は図書館に向かうことにした。

…そして私は久しぶりに階段から落ちた。

階段を下って降りようとしたところで、私は足を滑らせて宙を蹴りそのまま階段を一気に下り落ちる。足を滑らせたまま、ずり落ちて全身を打ち付けるようにして転がり落ちていく。私は昼休みのことで内心動揺していたのか、カバンを持っていたからか、受け身もろくに取れなかった。意識が飛ぶ直前に「ああ、高校生になつてからは初めてだな」とか見当違いのことを思いながら、階段の一番下に落ちていった私は頭を強く床に打ち付けた。

…知らない天井だ。

頭が少し傷むが、そんなことを思うぐらいの余裕はあるみたいだ。

消毒液の匂いがするからおそらく保健室だろう。この学校の保健室は初めてだが、保健室特有の匂いがある。中学校生活で月一で保健室送りにされた私が言うのだから間違いない。頭に包帯が巻かれているみたいだし、恐らく保健室に誰かが運んでくれて治療されたのだろう。

スマホで時間を確認すると5時半を過ぎたころといったところだ。階段を下りたのは4時前ぐらいだったはずだから、そこまで長い時間気絶していないことを確認した。そんなことを考えていると不意にベッドの周りのカーテンが開けられた。

「さく、様子はつと…え？ もう起きてるの？」

そう言ってカーテンを開けたのは若い女性の保険医らしき人物だった。記憶違いじゃなければA―Bの担任が保険医をやっているという話を聞いたことがある。

「大丈夫？ どつか痛いところはない？」

「いえ、大丈夫です。星之宮先生…であってますか？」

「ピンポーン、だーいせーいかい！」

そう言うとき星之宮先生はケラケラ笑った。真嶋先生とは違ってフレンドリーな先生なのか、それを売りにして演技しているのかはよくわからなかった。

「いやーびつくりしたよ。いきなり連絡があつたから行つてみたら、血溜まりを作つて階段の下にいる生徒がいたんだもん」

「星之宮先生が運んでくださったんですか？」

「ううん。連絡をくれた生徒会長の堀北君が運んでくれたのよ」

堀北……ああ、堀北さんのお兄さんだったか？  
メインヒロイン

まさかこんなところで関わることになるとは……今度生徒会室に行つてお礼でも言いに行こう。

「それにしてもどうしてあんなつたのか聞いてもいい？」

「階段を下りようとして足を滑らせたなら、頭を強く打つてしまったみたいでそこからは覚えてません。中学校時代も割と頻繁にあつたので気を付けていたのですが、うっかりしてました」

「……小坂君つて結構うっかりさん？」

「実は中学校時代でもこんなことがよくありまして、単純に運が悪いと言いますか……野球部の流れ弾が当たつて保健室送りになったこともあれば、教室での授業中に外でテニスの授業をしている連中のボールが、開いた窓から入つてきて頭に当たつて保健室送り

「なったりとかしていました」

「うわあ〜…」

星之宮先生がドン引きしている。まあ、そんな不幸で何回も保健室送りにされているなんて聞いたら引かれても仕方ない。

「だけど、これからの学校生活で何回もお世話になることは確実なので、そのうち慣れると思う。前の学校の保健室の井出先生も、最初はちゃんとしてくれたのに最後の方は、「また君か」って言うようになったからな。基本優等生で心証がよかったのが幸いだったけど。」

「あれ？ そう言えば自己紹介しましたっけ？」

「してないけど、小坂君のことは知ってるよ。坂柳さんの彼氏でしょ？」

「…もしかしてその噂はもう広まっているのだろうか。だとしたら少しまずいかもしれない。」

私と彼女はよく一緒にいるが、交際関係まで発展した覚えはない。だが、勘違いさせるようなことをしている覚えはいくつかある。

「残念だけど違いますよ。私なんかじゃ彼女には釣り合いませんし、彼女とはそういう関係ではないです」

「ええ〜？ でも、お昼休みに坂柳さんの作ったお弁当食べてるんでしょ？」

：少し歪曲されているが、傍から見たら大きな違いでもないのかもしれない。

よく考えたら、昼休みに教室で席をくつつけて同じ弁当を食べているなんて高校生からすれば付き合つてると勘違いされても仕方ないのか？

高校生ぐらいだとそういう話が好きな人は多いだろうと思っていたが、坂柳さんが特に問題視していなかったから、噂にならないように手を打っているものだと思つていた。

だが、噂が立っている以上は、これから二人で昼食を食べるのは控えたほうがいいかもしれない。目立ちすぎることは私の望むところではないし、彼女も望むところではないだろう。

「その噂は間違いですよ。弁当を作っているのは私ですし、作っているのも彼女が食堂まで行くのが大変だからですのよ」

嘘は言っていない。最初に彼女が食べてみたいと言ったから作った。それからは食堂に行かなくていいのと、杖をついている彼女がわざわざ食事のたびに食堂まで行くのは大変だろうと思つたから作っていた。

一番の目的は、彼女も私も昼休みに下手なことをしないように監視することが主だ



そういう意味では、今日の昼休みは協定違反と言つてもいい行為をってしまったのかもしれない。

「え？ 小坂君が作つてるの？」

「私が作つていた弁当を彼女が食べてみたいつて言つたから作り始めて、それなら食堂に行かなくてよくなるのでそのまま続いているつていうのが真実です」

「…あー、これは坂柳さんも大変だわあ〜」

…何か勘違いさせてしまつているようだが、無理に言つても聞き入れてくれそうになり。

やつぱり、弁当は作らないほうがいいのではないかと思つてきた。少なくとも一緒に食べてたらそろそろそろそろまずい気がする。

下手に注目や噂を産んでしまうと、私も彼女も動きづらくなつてしまう。

特に、お友達しもべがいる彼女より、私の方が動きが拘束されると困るのだ。

「よつと」

そろそろ帰らないと晩御飯の準備とか明日の仕込みとか、勉強も一応しないといけない。そう思つてベッドから降りたが、まだ少しふらつく。だが、このぐらいなら問題なく行動できる範囲だ。

「まだ寝てたほうがいいわよ？ 体も痛むでしょ？」

「動けないほどじゃないですし、テストも近いので勉強もしたいですから」

そう言つて、ベッドの隣にあつたカバンを持って立ち上がった。

「そう？ あまり無理しちゃだめよ？」

「お心遣いありがとうございます。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。それではこれで失礼します」

テンプレみたいな挨拶をしたまま保健室を後にする。フレンドリーな感じを装っているが、Bクラスの担任相手にいつまでも長話をするのも得策ではないだろう。

実力至上主義の教室だ。予想が正しければ、生徒たちだけじゃなくて先生の評価もクラスごとで決まるのではないかと予想している。

そもそも、クラスとは生徒だけでは成り立たない。その担任がいて初めてクラスという枠組みが生まれるのだ。小学校なんかはわかりやすいだろう。

転生してからは小学校に行つてないが、前世の小学校ではクラスの担任ごとにそのクラス独特の係決めがあつたりもした。中学校の時も、クラスによっては他のクラスにな

い係決めなどをしたこともあるだろう。

そして、そのほとんどが担任の先生によって決められてきたはずだ。クラスの誰かが言ったところで、担任の先生が許可しないと公に認めてもらつたものにはならない。要するに、担任には受け持った生徒たちを良い方向へ導いていく役割があるはずだ。

クラスとは担任と生徒の二つの要素がないと成り立たないのだ。故に、クラスの評価が生徒に直結するならば、教師の評価にも直結するのではないかと思つた。

この学校は担任と生徒たちのかかわりが薄いように見える。真嶋先生だけなのかもしれないが、生徒たちの間に割つて入つて無理矢理何かを決めさせるようなことをされた覚えはない。

しかし、真嶋先生が職務怠慢をしたようなこともない。Aクラスには必要な情報を必ず話してくれている。入学当初は話してないことのほうが多かつたが、それには学校の方針もあるし、Aクラスのことを思つてのことだろう。

最初の月からポイントが減らしまくるようなことを、Aクラスの間人はしないと信用していたのかもしれない。

まあ、実際は学校の強制によるものだろう。もし担任が言つていいのであればDクラスとの0ポイントはあまりにも酷すぎる。見かねた担任が話してしまうことも考えられる。となると、学校側からの強制的なもので担任が話した段階で罰則があつたのかもし

れない。

しかし、この学校の方針的に生徒の自主性を尊重するような方針なのだろうが、全員がそうだとはい限らない。何が言いたいかっていうと、フレンドリーに話しかけてくるような星之宮先生はBクラスに私が話した情報を漏らすかもしれない、ということだ。

だから、保健室に長居したくなかったし、話もクラス全体のことを聞かれる前に切り上げた。

頭に巻かれている包帯をとる。既に血は止まっているようで、包帯をとっても血は出てこなかった。包帯を丸めてポケットに入れ、寮の自室に戻ろうとしたところで、ポケットの中で手に変なものが触れた。

取り出してみてもみると、それは前に買った録音機のなれの果てだった。階段から転げ落ちたときに壊れてしまったらしい。

……こんな不幸なことが続くなんて今日は厄日だ。

そろそろ本当に泣いてしまうかもしれないと思いながら、ゴミ箱に録音機だったものと包帯を投げ入れた。寮の自室に戻ると、スマホの方にメールが届いた。見てみると、

『綾小路』君からのメールだった。

思わず悪態をつきそうになる。私はもうだめかもしれない。ただでさえボロボロなのに、このままでは精神的にボロボロにされてしまうような錯覚を覚えた。

ビクビクしながら読んでみると、軽い自己紹介と今日の放課後に勉強していたらテスト範囲が他のクラスでは変わっていることを告知されていることを聞いたが本当なのか、という趣旨の文章だった。

…担任の評価はクラスの評価からなるという考えは改めたほうがいいのかもしれない。今度真嶋先生に聞いてみようと思いつながら、先週の金曜日に変更されたことと、変更前と変更後の範囲をメールで送った。不安なら、明日担任の先生にも聞いてみたらどうですか、という一文も添えて。

よっぽど切羽詰まっていたのかもしれない。大穴で好感度はそこまで低くなかったのかもしれない可能性もあるが、あの周りのドン引き具合から見てもその線は薄いだらう。

他のクラスの連絡先で持っているのが私の分しかなかったのか、持っていてあまり親しくないからお詫びに何か手伝うと言った私が一番手っ取り早かったのだろう。

そう時間が経たないうちに返信がきていた。『ありがとう、助かった。明日担任にも

聞いてみることにする』ときている。

：そう言えば、今日の昼休みにはマイナスを出さないでマイナスの雰囲気だけを気持ち出してみるってことをしていたけど、うまくできていたのか？

そもそも、私がそんな器用なことをできるはずがない。

だけど、実際に他の人との『縁』は切られずに、彼らの心をボツキボキにしてみました。いや心を折ったことはどうでもいいのだが、勝手に折れるような心しかもってない彼らが悪いから、私には関係ない。私は悪くない。

むしろ、褒めたのにもかかわらず化け物を見るような目で見られて私の心は傷ついたんだから、私の方が被害者だ。

そんなことを言って図書館でまた騒ぎを起こしたくなかったから、今度会ったら謝つとくつて答えたのだ。一之瀬さんからのメールは結局来てないところを見ると、やっぱり嫌われているのだろう。

クラスのみんなと団結して仲良くAクラスゴールなんて目指しているくせに、マイナス過負荷一人抱えられないなんて笑つちやうぐらい脆い団結だ。一人ぐらいお話しして、Bクラスの手駒を作るのもいいかもしれない。

：いや、Bクラスのリーダーがあんな有様なのに他の生徒が耐えられるわけないか。

それに、結局Bクラスの手駒を作ったところで対決するのは坂柳さんだし、他のクラスメイトに手駒を作ったなんて大きな声で言えないし、やっぱり無理か。

脱線した。

話を戻すと、私の過負荷<sup>マイナス</sup>の様子がおかしいのか、私が環境的にプラスなところにいるから制御が効くようになってるのか。

それとも、マイナスを出さなくても素の雰囲気<sup>マイナス</sup>に染<sup>マイナス</sup>ま<sup>マイナス</sup>つてきたのか。

……感覚的には染<sup>マイナス</sup>ま<sup>マイナス</sup>つてるからって言われてる気がする。

環境的にはプラスにいたつもりだが、勝負だのなんだので自分のルーツとも言えるものを探っていたのが原因か？

自分の本当にしたかったこと、自分が転生した意味、自分が生きていることの意味、そう言うことを考えていた結果、元々あった素質の過負荷<sup>マイナス</sup>が目覚めて馴染んできたところか？

…それ本当に大丈夫か？

このまま行ったらマイナス成長しすぎて過負荷<sup>マイナス</sup>が出っぱなしになったら、前のあの時代に逆戻りにならないか？

……そういうことにはならない？

なぜ？

……マイナスが馴染んでいってるだけで、マイナス成長しているわけじゃないのか。目覚めたとか言うわけじゃなくて、単純に増えてたマイナス気質が今の私に馴染んできて融合していくみたいなき感じになるわけか。

なるほど、それで威圧するためにちよつと迫力を出そうとしたら、それがマイナス風味になってみんな気持ち悪くなるよ。

……………それって、結局過負荷マイナスじゃないの？

下手なこと言わなきゃ心が折れるようなことにはならないって、本心で話しただけで心が折れたみたいだったのだが。

…取り繕え？

…そうするしかないか。

お話するたびに心をポキポキ折るなんてめんどくさいし、調子に乗ると取り返しがつかなくなつて後で自己嫌悪することになりそうだ。

クラス間の競争みたいなこの学園生活で、そんな異物がいたらそのうち同じクラスメイトからも嫌われるだろう。



そう、それこそ私が私自身マイナスを制御できなくていろいろされたあの時みたいになつてしまふ。監視カメラがあるとはいえ、学校側もグルになり始めたら私がここから消えるしなくなつてしまふ。

坂御さん彼女との勝負がついていない今、そんなことをする気はこれっぽっちもない。

私が自分で名付けた無冠刑ナツシグオールという過負荷マイナスは、その名の通り『無関係』を意味したものだ。発現しているとありとあらゆるものとの『縁』が切れる（と思つている）。

故に『無冠刑』

誰からの勝負も成立しなくなる、私の持つ最悪の過負荷マイナス。

故に『無冠』。勝利することはない。

故に『刑』。勝利を実感することができない。

故に『ナツシグオール』。全てのものごとオールが何もナツシグない。

『ナツシグオール』という単語自体は意味が通らないようなものになつてはいるが、私の考える意味としてはこんなところだ。まあ、裸エプロン先輩の『大嘘憑きオールフイクシヨン』をイメー  
ジしたところもあるが。

イツツこの話はオールフイクシフイクションです。

イツツこの話は実在の人物とは一切関係ありませオールん。

：オールナツシングの方が語感がいい気がしてきたが、今のこれで気に入ってはいるので変える必要もないだろう。

とりあえずマイナスをまき散らさないように、威圧感を出そうとするのも自重しないといけない。

あと真嶋先生に担任の評価についても聞いてみないといけないな。予想のまままで終わらせるよりは確信しておきたいところだ。

そんなことを考えながら、夕食を作って明日の弁当の仕込みを済ませ、昼休みに図書館でしていた勉強の続きをした。体を動かすのはまた今度にした。流石に心身共にポロボロの今、空手の自主練をするのは厳しい。良い時間になったあたりで勉強をやめて寝ることにした。

明日は厄日じゃないことを祈って。

# 13話目 六月のある日

……殺さなければならぬ。

……殺さなきや。

……殺したい。

……殺そう。

……殺す。

私にこんなことを味あわせた世界に

私をいなかっただことにした人に

私へ牙を向けた社会に



……そうして舞台の幕が下りた。  
鈍が振り下ろされた。

……寝てた。

変な夢を見ていた気もするが、まあどうでもいいや。私には関係ない。 どうせ思い出せないし、所詮夢は夢だ。

中間検査が終わってひと段落ついた私は、特に何をするでもなく自室で惰眠を貪っていた。まるで燃え尽き症候群にでもなったかのように、授業が終わってから寮の自室に直行してなにもやる気が起きずに眠ってしまった。

原因は中間考査だ。中間考査の問題が去年と同じ問題が出るという情報が出回ったが、Aクラスとしては最初の中間考査で躓く様なことはしたくない。しかし、最初から過去問に頼って勉強を疎かにするのも身にならないということになり、個人的に点数が怖い人が上級生から買うのは止めないが、クラス全体で回すような真似はしなかった。私も過去問を見たことは一度もなかった。そしてそのままテストを受けた。

……結果は、国語62点、数学69点、英語51点、理科53点、社会52点だ。

手を抜いたわけではない。むしろクラスで勉強を教えていた立場の人間だったから真剣に取り組んだ。

それなのに……

国語では漢字を間違えて文章題の問題を全て落とし、数学では単位を書き間違えて減点され、理科では回答欄がずれていて点数を大幅に落とし、社会ではテスト時間中に手が滑ってシャーペンが手のひらにささり、そのタイピングで椅子が壊れて、机に向かって体が倒れ込むような形になった。そのせいでシャーペンが手のひらを突き破って、回答どころじゃなくなる珍事が生まれた。

監督の先生が他の教室から急いで椅子を持ってきてくれたのでテストを受けることができたが、右手の手のひらから出血したままでテストを受けるのは正直きつかった。そのせいで時間内に必死になってやったものの、正直それどころじゃなかった。

そして、その後の英語のテストでは痛む手を我慢しながらテストを受けた。その結果、英語もボロボロだった。

テストの結果を見て、坂柳さんは引き攣った笑みを浮かべ、康平はそんなこともあるのかとなんか感心した様に頷き、橋本君は見たこともないような笑顔で私を見て、神室さんは社会のテストの時を思い出したのか思いつきり吹き出し、戸塚君は何とも言えない顔をし、茂はこつちを見て大爆笑し、沢田さんにはなぜかドン引きされた。

他のクラスメイトも、私がこんなに点数を落とすと思っていなかったようだが、社会の時間の事故を思い出して納得したような顔をした。だが、私の回答用紙をクラスで回し読みされるとかいったいどうなっているのかと問い詰めたい。

何処で間違ったのか見たかったと言われたが、回答欄がずれていたたり、単位を間違っていたり、漢字の一部を間違えていたのにもかかわらず、それを直せば社会と英語以外満点になるような回答用紙を見てクラスメイト達は何とも言えない表情になった。

とりあえず茂は一発殴ったが、そのせいで治療した手を痛めて笑われた。勢いに任せて下手なことをした罰なのかもしれない。

テスト後に保健室に行ったら星之宮先生に会ったので、原因を言ったら大笑いされた。

彼女からはもつと早く来なさいと怒られた。だが、赤点取ったらすぐ退学になる以上、途中退席したらどうなるかわかったもんじやない。途中退席で赤点を取った場合、そのまま退学になってしまうことも考えられた。

最近マイナスが馴染んできたからなのか、高校に入ってからはいくつかの事故が少なくて平和だと思って油断したからかもしれない。

いや、言い訳なのはわかっている。本当にマイナスのせいだと思いたいが、自業自得の面が圧倒的に大きいのはわかっている。前日にオールで大学受験の勉強をしてみるとかいう間抜けなことをやらかしたし、前回のテストで満点だったから、今回のテストは見直しなんかしなくてもいいと思ってた。

そもそも、中学校の時もテストの時にはこんなことになったことがなかったから完全に油断していたのもある。椅子が壊れてシャーペンが手のひらを突き破るってなんだよ。運が悪いにしてもあり得ないだろ。だが実際にいまだに私の右手には包帯がまかれてるし、テストの点数が現実であることを物語っている。

そして、その結果がこの有様である。



クラスの平均点を上げるどころか、大幅に下げた元凶になってしまった。これには思わず真嶋先生まで苦笑いしていたのだから、どれだけ期待してくれていたのが窺える。

入試もほとんど満点近くとり、前回の小テストの高難度問題全てを解き切ったような生徒が、中間考査でこんな点数を出していたら苦笑いにもなるだろう。

そんな訳で今日帰ってきたテストの結果を見て、私はふて寝している真つ最中だった。今の私に、坂柳さんに勝負を挑んだ時のようなやる気はこれっぽっちもない。何をすることも無気力で、何もしたくない気分がずっと続いている。もう坂柳さんに負けてもいいやー、とかまで思い始めているあたり重症だと自分で理解はしている。

坂柳さんといえば、最近では昼休みに一緒に昼食をとっていた坂柳さんにお弁当を渡して、自分は屋上でポツチ飯の日々が続いている。この前の星之宮先生の話を聞いて、昼食を一緒にとるのは他のクラスの人から見ても目立つし、やめにしようかと提案したのだ。

彼女は少し考えた後に了承してくれた。理由を説明したら納得したように下がってくれたので個人的には助かったのだが、周りのクラスメイト達はつまらなさそうにこつ

ちを見ていたのが印象的だった。

私が教室じやないとところで昼食をとることにした結果、屋上でボツチ飯になった。吹きすさぶ風の中、辺りにほとんど人がいない状態で、誰にも邪魔されることなく食事をとるのだ。

ボツチ飯になるのは本当に久しぶりだが、たまにはこんな日々も悪くないと思つていた。

何もしたくない、ただひたすら惰眠を貪りたい。そんな時があつてもいいと思う。

だから今は何もしたくない。

そんな思いでベッドの上をごろごろしていた。

ベッドのぬくもりを感じる。

このベッドのフカフカ感、枕の弾力、抱き枕代わりに買ったクッションのもこもこ、寒くなる前に買っておいた薄い毛布の肌触り……もう私はここから出たくない。

今日は一日中ごろごろしてやる。明日も、明後日も、毎日自堕落な生活を送つてやる

！

……さつきから鳴りやまない携帯の着信はもう無視することにした。

目が覚めたときからずっと鳴っていたが、どうせ大した用でもないのに呼び出してくるような奴だろう。多分茂とかその辺だろ。この前あいつと沢田さんとかの基本ボツチ組でカラオケに行ったし。

……だから私にはスマホの画面の『坂柳有栖』なんて文字は見えない。

あれは幻覚だ。本当は『茂』って文字が映っているはずなんだ。私は今日はもうベッドから出ないし、この駄々流しなマイナスもそのままにするのだ。

私に休息の時があってもいいじゃないか。人間だもの。

コンコンツ

……あれは悪質な新聞勧誘の人だ。出たら最後、新聞を取ることにされた挙句、幸運になるツボとか買わされる残虐非道な手口のやつだ。

だから、私が出なくても私は悪くない。私には関係ない。

コンコンツ コンコンツ コンコンツ コンコンツ コンコンツ コンコンツ

……はあ、嫌な予感しかしない。

とりあえず、マイナスは抑えておかないとどうなるかわかったもんじゃやない。出たくないけどこのままノックされ続けるのは鬱陶しい。それに、私の部屋の前でずっとノツ

クし続けるとかどっかのクラスの噂にでもなろうものならまためんどくさいことになる。

私は仕方なくベッドから出た。制服のまま倒れ込んでいたらしく、皺になっていた。今度クリーニングに出さないといけないか、と考えていた。

そしてそのままドアを開けると、そこに立っていたのは橋本君だった。

「どうしたの、橋本君？」

「坂柳さんがお呼びだ」

そんな気はしていた。私は無言でドアを閉めようとすると、彼が足をドアに挟ませて閉じさせない。

「お願いだから寝かしてくれ。今傷心中なんだ」

「坂柳さんもだが、他の人たちも待っている。急いでくれ」

他の人たちも待っている？

今日何かあったのだろうか？

とりあえず、艇でも動かなさそうな彼をどかすために、私は仕方なく彼の言う通りにした。

「…わかった。ちよつと準備するからまってくれ」

「わかった」

そう言った彼は入り口に入って立ったまま。どうやらこのまま私が逃げ出さなにか見張っているのだろう。

隙を見て逃げ出そうと思ったがそういうこともできなさそう。先月に転んだ時の怪我はもう完治しているが、この位置取りからテニス部の彼を抜いて逃げ去るのはとてもできないだろう。

私は仕方なく、スマホと学生証を持った。気が付いたらスマホが鳴りやんでいたの、マナーモードにしておく。

「外に出たりする?」

「夕食の誘いだが…もしかして覚えてないのか?」

夕食…?」

ああ、そういえば寝てたけどまだ19時前だったか。にしても珍しいな、昼食と一緒に食べる機会は多かったが、夕食は別の時がほとんどだった。記憶が正しければ、入学初日のあの日だけだ。

私は寝起きですぐに外に出て風邪をひきたくなかったので、薄めの上着を持っていくことにした。6月とはいえ、日が落ちてくるとまだ肌寒い可能性もあると思ったからだ。最悪暑かったらそのまま持って帰ればいい。

「準備できたぞ」

「ついてい」

そう言うとう橋本君は私の部屋を出て歩き始めた。彼の後ろをついて歩く、正直眠いで歩きながら欠伸を嘔み殺した。

彼について寮を出ると、杖をついた少女とサイドテールが特徴的な少女が待っていた。言うまでもなく、坂柳さんと神室さんだ。

「遅かったですね、小坂君。」

「寝てたからね。正直まだ眠い」

そう言つて欠伸をする。寝起きなのは事実だし、眠いのも事実だ。このまま帰つて寝たいというのが、正直な私の心境だった。

「あんた、もしかして忘れてる?」

神室さんがそう言つてこつちを睨んだ。そう言えばさっきの橋本君もそんなことを言つていた気がする。

だが、生憎と私には何のことだか見当もつかない。別に坂柳さんと約束したようなことにも心当たりはないし、彼女と話すようなこともそこまで多くないから約束をした覚えはない。

橋本君にはよく睨まれるし、放課後に一緒に夕食を食べる間柄でもない。

「なんかあったっけ?」

私のその発言に、そこにいた全員がため息をついた。どうやら何か約束をしていたのが妥当なところだろう。

「ただ、私には皆目見当もつかない。」

「今日、テスト終わりの打ち上げするって葛城が言ってたでしょ。もう他のやつはみんな集まってるよ」

「……そんなことを言っていたのだろうか?」

「聞き覚えもないのだが、何時言ってたんだ?」

「確か、小坂君の解答用紙をみんなで回していた時です。あと、帰りにも言っていましたけど聞いていなかったみたいですわね」

「そんな時に言ってたのか。全く覚えがない。テストの点数が衝撃的過ぎて放心状態だったから仕方ないと言えば仕方ないけど。」

「おかげで、何回も電話を掛けたのに出てくれなかったので私達が迎えに行くことになりました」

「そう言って、笑顔を浮かべてくる坂柳さん。笑顔の裏には、何で電話に出なかったんだよ?」  
「っていう想いがひしひしと伝わってくる。出るのがめんどくさかったからですとは口が裂けても言えない。」

「ふて寝して起きたら鳴ってるのに気づいたけど、その直後にノックが聞こえたからそっちに出た」

「…まあいいでしょう。」

真実に嘘を混じらせる。本当は電話の画面があなたでしたから出るのが怖くて出ませんでしたとか、大幅にクラスの数点を下げたことについてねちねち言われるのじやないかとか思っていたなんて言えるはずもなかった。

「そういうわけなので行きましょう。もうみんな始めているはずですので」

そう言っただけで彼女が歩き始める。その横に二人が立ち、私は彼女たちの後ろをついて行く形だ。

少し歩いたところのファミレスで打ち上げをしているみたいで、そのファミレスに入るとクラスメイト達で埋まっているテーブルがあった。

「遅いぞー」

そうヤジを飛ばしてきたのは茂だった。珍しくテンションが上がっているらしく、普段はあまり絡まない戸塚君とかと楽しそうにしている。クラスメイト達に遅れたことの謝罪と挨拶をして適当な席に座ろうとすると、新しいテーブルを占領した坂柳さんた



ちに誘導されて仕方なくそっちに座った。

他のクラスメイト達は自分たちの話で盛り上がっているらしく、あまりこちらを見ようとはしない。康平も茂や戸塚君と話している上に、席の中心にいたので助けを求めるのは絶望的だろう。

席に座って、適当にメニューを開き何を食べるのか見繕う。坂柳さんと神室さんも決めたのを確認すると橋本君が店員を呼んで注文した。

「小坂君、これからあなたはどうしたいですか？」

……？

「どういふことだ？」

「中間考査も終わって、恐らく各クラスの動きがこれから活発になると予想されます。それを踏まえて、これからあなたがどうするのか、ということ聞いたつもりだったのですが」

…確かに夏休み中も学校から出られないこの学校監獄の中だと夏休み中でも動きは当然あるだろうし、中間考査が終わってクラス間の格差が広がったら、動きも激しくなるだろうってことか。

そういう話か、てつきりテストのことでもなんか言われるのかと思ったからびつくりした。

「てつきりテストのことでなんか言われると思ったけど、そっちか」

「テストのことは残念ですけど言っても仕方ありませんし、それで敗北を認めるあなたではないでしょう?」

正直負けてもいいやーって思ってたことは秘密にしよう。

「それに、勝手に自爆して得た勝利を勝利なんて思いません。私がそうなるように仕組んだなら別ですが、私は今回何もしていませんので」

サラッと怖いことを言われた気がする。

必要であれば、それぐらいの工作は行うと言われたのも同然だ。

……いい加減落ち込んでても仕方ない。次のことを考えて行動しないと正気に戻った時に取り返しのつかないことになるかもしれない。

このぐらいのことは昔は頻繁にあっただじやないか。

外に出たら自転車に撥ねられたり、いきなり電柱が私に向かって倒れてきたり、学校で食中毒が起こった時の第一犠牲者は必ず私だったし、配られるプリントが私だけ白紙だったこともあった。

今回は椅子が壊れて手のひらをシャーペンで貫かれただけだ。

意図的なものじゃなくて事故ならば仕方ない。それに、前にあそこで受けていたこと

に比べれば、今回のことなんて大したことじゃないじゃないか。

たか油断して中間考査で失敗しただけだ。

よく考えたら私には大した影響がないじゃないか。どうせ最後までAクラスに居られるわけないんだから、自力で大学受験を乗り越えなくちゃいけないのは目に見えてい  
るんだ。それだったら、クラスの成績なんてどうなるうが私には関係ないじゃないか。  
それなのに、クラスメイトに悪く思われるとかいつまでくだらないことばかり考  
えているんだ。どうせ最後には嫌われることになるんだから別に気にしなくてもいいだ  
ろう。

へらへら笑えよ。それが過<sup>マイナス</sup>負荷の特権だろうに。

……よし。

「まあ、他のクラスの今後の出方次第かな？ 多分C辺りは速くつぶれるだろうけど」

「理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「独裁者が独裁政治をしているっていつたら聞こえはいいけど、それは独裁者が倒れた瞬間に全てがおじゃんになるってことと同じだからね。独裁者の力量次第だけど、速かれ遅かれ勝負を仕掛けてくるんじゃない？」

「ふむ……そう思った理由は？」

「結果を出さないと反対勢力が生まれかねないからね。どこまで掌握できてくるかにもよるけど、わかりやすい結果を出した方が独裁者に妄信的にみんなついてきやすいだろう？」

結果が出れば、自分たちのリーダーはこんなに優秀なんだ、っていう安心感が生まれる。それで完全にクラスを手足のように扱うことが出来れば上に上がれるって思ってるんじゃないかな？」

まあ、実際そんなことが出来たら上に上がれるだろう。問題としては、他の40人近いクラスメイト全員の動向を把握することなんて不可能に近いということと、それまでに他のクラスに妨害されたら準備が遅れるということ。

そして何より、自分で考えなくてもいい集団は弱い。自分が何もしなくてもリーダーが何とかしてくれると本気で思っているからだ。そのリーダーが負けたときには何もしなくても崩れ落ちるのが目に見えている。そして、その現状を見ながらも自分たちでは何もしようとしらないのが人間だ。

何もしなくても誰かが何とかしてくれる。そんなことが本当にあるわけなのに、人間はそれを信じて疑わない。

他の人がどうなっても自分だけは助かるなんて本当に思っているのが人間だ。

「だから、Cクラスの動向を見ながら動きを合わせていく感じが妥当だと思う。潰しにかかるなら多分そこらへんが早い。何もしなくても潰れそうだけど」

「何もしなくても?」

「他が勝手に潰してくれるってこと。ただでさえBとDに挟まれてるのに、ぱつと見リーダー以外は烏合の衆だからね。民衆の質が勝ってるBと、何人かの怪物が潜んでいるDを相手にするのは荷が重いよ」

怪物とは言わずもがな主人公勢のことである。相対するとCどころか他もすべて殺しかねない爆薬だ。

「Dクラスにはそんなに優秀な人がいらっしやるんですか?」

「私が足元にも及ばない異常なやつが一人いるからね。Cぐらいじゃどうやっても勝てないよ」

「……あんたでも勝てない人っているんだ」

話していると、不意に神室さんが話に入ってきた。

「私は負けることのほうが多い。自分で勝ったって自信を持つて言えることなんて一回もないんだ」

「そんな感じには見えないけど」

「見えないだけさ。私が本当に勝利を実感したことなんて一度もない。だから本当の勝

利つてやつが欲しいんだ」

そう言つて私は坂柳さんの方を見た。坂柳さんは納得したかのように頷き、神室さんは訳がわからないというような表情をし、隣の橋本君はよくわからないような顔をしている。

そのタイミングで料理が来たので、いったん話をやめて食べることにした。適当に食べ、他のテーブルに混ざる。もう坂柳さんたちにも止められなかつたし、別に話すようなこともないだろうと思つたので適当なテーブルに混ざつて楽しんだ。

その後は適当に解散して、自室に帰つた。日が完全に落ちて少しの肌寒さを感じ、上着を羽織る。

今日の失敗を引きずるのはもうやめだ。そんなことよりこれからのことを考えないといけない。クラスの立ち位置も、前よりは悪くなるだろうし他のクラスとの関わりも作る必要があるそうさ。Dクラスには一番欲しいよう欲しくなかつた主人公の連絡先という鬼札がある。Cクラスからは嫌われてるだろうし、Bも同じだろう。そう考えると、Dクラスとの関わりを強めたほうがよさそうさ。

いい加減、諦めて主人公勢との関わりを深めていこう。最悪轢き殺されたとしても、他のクラスメイトは困るかもしれないが私私には関係ないにはどうでもいい。どうせいつか落ちるん

ならさつくり主人公に轢き殺された方がマシかもしれない。

私が負けるのは確定事項だ。こればかりはどうしようもない。坂柳さんと勝負をしてはいるが、私がどんなに勝とうとしても負けてしまうのは目に見えている。それでも諦めきれないから彼女に勝負を挑んでいるのだが、綾小路君だけは無理だ。

根本的に次元が違う。だけど、私がそう思っているだけなのかもしれない。あくまで、図書館でぱつと見ただけだしメールのやり取りもあれ以降はやっていない。

だから、探りに行こう。

虎穴に入らずんば虎子を得ずというやつだ。

後ろ向きになるのを控えて、もつと自分らしき<sup>マイナス</sup>を出して、私がやりたいようにやっていこう。かといって、やりすぎて気持ち悪がられないようにしないといけないが、まあそこら辺は気を付けることにして、私自身が前進していこう。

思えば、クラスのことにはそこそこ参加していたけど、クラス以外のことには消極的だった。主人公と関わりたくないってのがあったけど、よく考えたらAクラスから落ちることは半ば確定しているのに、いつまでもAクラスのことばかり気にしていても状況が良くなるわけじゃない。

これからはクラス外の関わりを深めることにしよう。とりあえずはそれを第一方針

として、後はいくつかの仕込みを入れよう。後で役に立たないかもしれないが、役に立つことを祈っていくつかの仕込みをすることにします。

私らしく、無関係孤立無援であることを今一度思い出し、実感しないといけない。それこそが、私の本質で私自身を形作っているものなのだから。

だから、他人全てを利用して私の目的を果たすために、綾小路君君にも協力してもらおうことにするよ。



## 14話目 七月の初め

…この世に生まれなければ良かったと思つたことはあるか？

…自分が何者なのか知りたいと思つたことはあるか？

…死んでしまいたいと心から思つたことはあるか？

…自分の存在を不思議に思つたことはあるか？

…この世界に疑問を思つたことはあるか？

そしてそれを他人が教えてくれるなんて本当に思つてるのか？

まあ、自分が教えてくれるわけでもないが。

眠い…

だけど、後五分寝るともれなく遅刻する。とりあえず弁当作って、朝ご飯食べて、身支度整えて教室に向かおう。

そして私は、弁当を作り、朝ご飯を食べている途中で今日がポイントの支給日だった

ことを思い出した。そのまま朝ご飯を食べ終え、ポイントを確認したがポイントは前回最後に見たポイントから変わっていないなかった。私のテストの点数があまりよくなかったとしても、クラスポイントがいきなり0になるようなことをした覚えはない。恐らく学校側で何か不手際があったか、どっかのクラスでトラブルでもあったのだろう。

予想としては後者の方が大きいと思うが、前者のパターンもないわけではない。人間が動かしているシステムである以上、ヒューマンエラーが起こらないとは言えない。これに関してはクラスに行けば真嶋先生が説明するだろうから問題ないと思われる。

問題は後者だった場合だ。

クラス間の争いが私の知らないところですのでに動いていることが考えられる。別にもうAクラスのことを考えるようなことをする必要がないのでそこまで気にしなくてもいい気はするが、Dクラスが関わっているなら主人公勢に恩を売る機会かもしれない。何らかの形で彼らとの関わりを持ちたいと思っていた以上、これはチャンスになり得る。

結局、6月中には彼らと接触するようなことはなかった。

無理矢理関係を築きに行けるほどの仲ではなかったし、クラスメイトの目もあった。特に、坂柳さんは放課後に頻繁に呼び出して話をするようなことが多かったし、康平に

も呼び出されることがあった。なぜかは知らないが、二人からクラスのことについて相談されることが増え、今後の方針について私に話を振ってくることが多かつた。適当に口裏を合わせてはいるものの、正直興味がないので他の人と相談してほしいと思う。

クラスのことを私の目的に関係ない以上、無視しようかとも思ったが、明確にクラスと敵対することは私の望むところではなかつた。クラスのことなんてどうでもいいが、クラス全体と敵対することは別問題だ。

クラスメイト全てを敵に回して無事にいられるほど私は強くない。彼らに執拗に嫌がらせをされたら学校生活を送りづらくなるのは明白だ。だから、クラスと仲良くするような立ち回りをするつもりはないが、クラスを敵に回すようなこともするつもりはなかつた。

そのため、誘われたら茂たちと遊びに行くこともしたし、坂柳さんに誘われてカフェに行くようなことも何回かあつたし、康平に呼ばれてクラスのことと相談されたりもしたが、どれも断ることはしなかつた。

いいや、できなかつたと言つた方が正しい。

入学式の日自己紹介をしないで教室を出ようとした「私」ならともかく、何をトチ狂つたのかクラスのサブリーダーみたいでまとめ役ポジションになつてしまった「私」が今更クラスメイトを無碍にするようなことをできるわけがなかつた。

一回二回なら問題ないだろう。

だが、それが毎回となると次第にクラスの中で発言力がなくなり、そのうちいけないものとして扱われ、今回の中間考査のようなことが続けばあいつなんていなければというような風になリかねない。勝負している上に、クラスのリーダー格の一人である坂柳さんなら、間違いなくそういう風にかけていくだろう。

『めだかボックス』の過<sup>マイナス</sup>負荷の人たちみたいに、他の人全てから嫌われても学校に通い続けられるような心の持ち方を今の私は持てていない。

そう思ったから、無理にクラスメイトとの関係を蔑ろにしてまで、Dクラスに突撃する勇気が出なかった。したところで、Aクラスの私がすぐに話しかけて馴染めるようなタイプじゃないのは目に見えているし、綾小路君はともかく、前に図書館で居合わせた他のDクラスの人たちは私のことを警戒するかもしれない。

それに、Aクラスの私がわざわざDクラスに足を運んだなんて他のクラスメイトに聞かれたら理由を問いただされるのも目に見えている。

だから、Dクラスに接触するための大義名分が欲しかった。

今回のポイントの支給が遅れているのが、Dクラス絡みのことならば、これを利用して綾小路君経由でDクラスとの関係を作ることができるかもしれない。Aクラスの人、

特に保守派とも言える康平康平からなんか言われるかもしれないが、適当に流せば問題ないと信じよう。そんなやつ康平なんかよりも、怪物練小路君といかにして仲良くするかの方が今の私には重要なのだ。

……ここまで考えて、実は今日がポイントの支給日じゃなかったら笑えるが。

教室に入ると、すでにクラスメイトの大半が教室にいた。適当にあいさつを交わして、席に座るとクラスのあちこちからポイントの支給に関する話が聞こえてくる。

「ポイント振り込まれてたー?」

「いや、私振り込まれてないよー」

「先輩は振り込まれてたって言ってたから、今日が支給日であつてははずなんだけだなー」

「一年だけなんか遅れてるってことか?」

…なるほど、これは予想通り他のクラスで何かあったのかもしれない。クラス全体を見渡しても、この話題を意図的に避けているような人もいないし、一人だけ暗い顔をしているような人もいないことから、まずこのクラスが原因ではないだろう。

ポッチ組も最近ポッチ組で固まってきた以上、何かあれば他のクラスメイトに話すはずだし、一人で抱え込んでいたらこの空気で平静を保つたままにすることはかなり難しいだろう。いや、一人だけ隠すのが上手な人がいた。

そう思った私は、隣を向いて話しかけた。

「坂柳さんもポイント振り込まれてなかった?」

「ええ、私の方もポイントは振り込まれていませんでした。その口ぶりからすると、小坂君も振り込まれてなかったということですね?」

「ああ、朝起きて確認してみたけど昨日と変わってなかった」

そうやって顔を前に向ける。彼女が本当のことを言っているのかわからないが、何か仕込んでいるならここで含み笑いの一つでもしそうだ。いや、それ以前にクラスで決めた方針を無視してクラス全体を巻き込むような仕掛けをこの段階でするような人じゃないか。

そうなる、Bクラスはリーダーがみんな仲間一之瀬さんがいる以上他のクラスにこの段階で仕

掛けるのはまずないと考えていいだろう。これでBクラスが全てを捨てて勝負を仕掛けてきたというなら話は別だが、それをAクラス以外にぶつけるのは愚策だ。他の下位クラスを無理矢理潰すようなことをするとは思えない。

だから、クラス間での争いがあるとしたらCとDだろう。独裁者が独裁政権を取っているCクラスがDクラスを蹴落として、DクラスがCクラスに絶対上がれないようにするために起こしたのか。それとも、DクラスがCクラスに仕掛け始めたのか。どちらにせよまだ情報量が少なくて何とも言えないな。個人的にはCクラスが攻め入ったっていう可能性が高いと思うが、まだ憶測の範囲を出ない。

まあ、それはあくまで大義名分を手に入れるための副産物であって私に直接関係あることじゃないからいい。とりあえず今するべきことは、綾小路君にポイントが支給されたかメールで聞いてみることだ。

そう思った私はクラスメイトに画面をあまり見られないように気を付けながら、綾小路君にメールを送った。今すぐに返事が来なくても、そのうち気づいてくれるだろう。

そんなことを考えていたら、真嶋先生が教室に入ってきた。

「全員揃っているな。後で聞かれるだろうから先に言っておこう。こっちの不手際でプ



ライベートポイントの支給が遅れている。クラスポイント自体は出ているから黒板に貼っておく」

そう言つて、持ってきた紙を黒板に張り付けた。

Aクラス 1002c1

私が足を引つ張つても、クラスポイントが上昇することには変わらなかつたようだが、個人的にはそんなことよりも気にかけるべきところがあつた。

Dクラス 87c1

Dクラスの伸び幅が高すぎる。元々が0だつたことを考えると脅威にはなりえないと思うかもしれないが、逆にいうと元々が0だつたのにも拘わらず、Aクラスの伸び幅を越えているということだ。私が足を引つ張つたからかもしれない。だが、それでも90近くの伸び幅は驚異的だと言える。

これが主人公の力なのか、それともこのc1の上昇は同じことをしても元のc1が高ければ高いほど上昇率が悪いのか、どっちにしろ60近くしか伸びていないAクラスではどこかで抜かれることも考えなくてはいけないだろう。

なにせ、まだ3年もある。1年のこの時期でこんな有様じゃ、私がいるいない関係なくこのクラスはそのうち落ちていくかもしれない。この結果を見て隣にいる少女はわからないがそれ以外の生徒全てが1000c1を超えたことに対する喜びでDクラス

を見ていないのだから。

他のクラスも結構に伸ばしているが、0から一気に87まで上げたDクラスこそ一番警戒する必要があるだろう。他のクラスの伸び方も十分脅威だが、0から上げたDクラスほどじゃない。こんな浮かれ切った脳内お花畑モードのエリートたちじゃどうやってもDクラスには勝てないだろう。下手するとBとかにすら負けるのじゃないだろうか？

死に物狂いで上にと上がろうとする集団と、元々優秀と言われている程度の結果ならすぐに出せるような集団だったら、前者の方がよっぽど怖い。死に物狂いでやるってことは、後先を考えないし、他のことに惑わされないといいことでもある。何かあったらすぐに保身に走りそうなエリート集団ではどうしようもないだろう。

まあ、そんなこと私には関係ないでもいいけど。

別にDが上がるのが、Aが死のうが私にはどうでもいい。私に求められていることは、退学をしないで卒業すること。無駄に勝てない喧嘩を売りに行つて、ボコボコにされるようなことをする気はない。適当に坂柳さんとの勝負をしながら卒業まで生き残ること。彼女との勝負には全力で取り組むが、それで退学なんか食らったらたまつたもんじゃない。故に適当に勝負する。

負けたくはないが、それで人生の全部を棒に振りたくはない。勝負の上でどうしても必要なら考えるが、必要ない危ない橋を渡る気はない。それに、すでに仕掛けは打つてある。

気づかれるようなものではないが、問題があるとしたら私の運が悪いことだけだ。せっかく仕掛けた仕掛けが『運悪く』不発に終わることもあるだろうし、『運悪く』気づかれるようなことがあるかもしれない。

まあ、ばれたらばれたで知らない振りすればいい。仕掛けに気付いたところで私が仕掛けたものだど気づくかどうかはまた別問題だし、私だとばれなきや問題ない。ばれたら適当に流すしかないとも言えるが。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか真嶋先生は消え、もう授業が始まる時間になっていた。思考を切り上げ、授業の準備をする。そして、授業の先生がやってきたのを機にチャイムが鳴り、今日の1時間目が始まった。

放課後になった。坂柳さんと茂から放課後にどこかに行かないか誘われたが、今日は何事があると言つて断つた。あまりしたくなかつたが、どうしてもやつておかないといけない用事があつたので仕方ない。一回目ならまだ大丈夫だろうと思いたい。

昼休みに、綾小路君からメールがあつたが彼もポイントが振り込まれておらず、原因もわからないようだった。知らないふりをしているのかもしれないが、言わない以上詳しく聞いても教えるようなことはしないだろう。いや、そもそも彼はクラスのことこそまで関心がなかつたような気がする。

そうだとしたら、彼が知らないのも納得できる。まあ、これに関してはポイントの支給が遅れるような事態だ。そのうち学校側で何か言ってくるのかもしれない。

ここが学校で、現金ではなくポイントだから実感が薄い、私達は評価されている。その評価に対する報酬であるポイントの振り込みがこれ以上遅れるような事態になれば、学校側も説明するようなことになるかもしれない。私達の能力を評価し、それに会つた報酬を渡すと言っている以上ポイントの振り込みは給料の振り込みと大差ないとも言える。あくまでこの学校内だけの話だが。

そのポイントの振り込みが遅れているのが、学校側ではなく生徒側の問題による物な

ら学校側が説明するような事態になってもおかしくはないだろう。そもそも、学校側の都合で遅れているにしろ何らかの説明があつてしかるべきだ。給料日当日になつて給料が振り込まれず、「こっちの都合で遅れてる」なんて会社から言われたら働いてる側からすれば納得のいくものではないだろう。

ただ、これらのことはあくまで憶測でしかない。証拠とも言えるようなものがあるわけじゃないし、単に聞いてこないから担任が説明してないだけなのかもしれない。

だから、直接聞きに来た。今、私は職員室の前にいる。真嶋先生に聞きたいことがあつたからだ。前々から聞こうと思つて放置していたことと、今回の件の探りを入れに来たとも言える。

職員室の中に入り、少しあたりを見渡すと真嶋先生を見つけた。真嶋先生に近づき、話しかける。

「真嶋先生、少しよろしいでしょうか？」

「小坂か、どうかしたのか？」

「少し聞きたいことがあつてお尋ねしたのですが、お時間よろしいでしょうか？」

「ほう、いいだろう。答えられないような内容のものは黙秘するが構わないな？」

「話したくないようなこと、話せないようなことを無理矢理聞き出す気はありません」  
「いいぞ、言ってみろ」

「では早速、クラスごとで優劣が評価されていると聞きましたが、それは先生にも当てはまりますか？」

「…そうだ。卒業時にどのクラスの担任をしていたかで担任にボーナスが出る。そういう意味では、クラスの評価が担任にも直結するとも言えるな」

結構あっさり言ってくれたな。となると、別にそこまで秘密にするような情報じゃなかったのかもしれない。

「では、クラスの担任を受け持っている先生が他のクラスの成績を落とすための工作をして、成績を下げるようなことはありませんか？」

「あまりにもひどいものは許容されていないが、担任である以上受け持ったクラスに思入れを持つことはあってもおかしくないな」

予想の範囲内だ。許容されていないということとは、あまりにも露骨なものは学校側に訴え出たら処罰の対象になり得るということだろう。滅多にないだろうが覚えておこう。

「聞きたいことはこれで全部か？」

「いえ、最後に一つ聞きたいことが」

「なんだ？」

「今回のポイントの振り込みが遅れている件はCクラスとDクラスのせいですか？」

話さない…職務上に差し障ることだったか？

「だけど、その表情で全て察した。もっと底のしれないようなイメージがあつた人だと思つたけどそんなこともなかつたみたいだ。表情と雰囲気ですぐに答えを教えてしまうような人なら、そこまで脅威じゃない。」

「……何故そう思つた？」

「簡単な予測ですよ。Aクラスのリーダー格の二人には、動きがない限り他のクラスには手を出さないような方針に誘導しました。Bクラスのリーダーとは一度会いましたが、彼女がそこまで強硬手段をとるような人柄じゃないこと、この段階でリスクを負つて他のクラスに喧嘩を売るのに、クラスで団結することを意識しているBクラスではまずありえないという二点で違うと判断しました。」

「反対にCクラスは独裁政権を立てているから仕掛けるなら早いうちの方が好ましく、Dクラスはそういう目で見たら標的にしやすい。ですので、恐らくCクラスがDクラスに何か仕掛けたという予測です」

「……そこまで考えていたか」

「先生は、クラス全体の評価がポイントになるとおっしゃりました。そのポイントの支給が1年だけ遅れているとなれば、どこかのクラスが何か問題を起こしたと考えるのが一番です。」

システムの都合上、クラス内だけで終わるような内輪もめならそのクラスのポイントの支給を遅らせれば済む話ですが、1年全体のポイントが振り込まれていないのであれば、クラス同士で何かあったと考えるのが普通かと思いました」

「…職務的に今はあまり話せないことだが、『否定はしない』と言っておこう。正直、君がここまで考えが回るとは思っていなかった。テストの成績、身体能力を加味すればAクラスに居ても何もおかしいことではなかったが、それ以外にもそんな武器を持つていたとはな。今回のテストの結果が振るわなかったから少し心配したが杞憂だったようだ」

「お褒めに預かり恐縮です。テストに関しては運が悪かったとしか言えないのであまり触れないでくださると助かります」

そう言つて、まだ軽く包帯を巻いている右手を見せる。もうだいぶ治つてはいるが、元々貫通していたことを考えると念のために包帯を巻いておいたほうがいいと思ったためいまだに包帯を巻いている。

真嶋先生が苦笑いしていた。



「この件については恐らく明日あたりに説明が入るだろうが、クラスメイトに話すのか？」

「いえ、自分の中で確証を持ちたかつただけですので他のクラスメイトに言う気はありませんでした。」

それに、ポイントの振り込みが遅れているという重大な問題について、説明なしで通すとは思っていませんでしたので早いうちに話すとは思ってました」

「ほう、ではなぜ聞きに来た？」

「クラス間の抗争がすでに起こっているのであれば、何か手を打つ必要があるかもしれないと思っただけです。自分の知らないところでことが勝手に進むのが一番怖いですから。それに、もし学校側で説明が行われないようであれば、クラスメイトに話していたかもしれない」

これについては本当だ。Aクラスがどうなっても知ったことではないが、Aクラスの一員と言う肩書がある以上、他のクラスからすれば敵として見られることは間違いない。だから、クラスの抗争がすでに始まっているのなら情報が少しでもほしいと思っていた。

主に、Dクラスと仲良くなるという目的のためだが。

「そこまで考えを巡らせらせられるなら、私が言うことはないな。これからも、Aクラス

のために頑張ってくれ」

「わかりました。微力ながら頑張らせていただきます。それではこれで失礼します」

そう言つて職員室を出た。真嶋先生には悪いが、Aクラスのために頑張る気はこれっぽっちもない。別にエリートがどうなるうが知つたことじゃないし、そもそも過負荷私はエリートより弱い者の味方だ。まあ、綾小路君彼がいる以上、Dクラスが弱いものと言えないのが現実だ。

普通にAクラスまで到達しそうだ。今回のポイントの伸び幅を見ても、0からあそこまで上げた彼らならそう遠くないうちにAクラスまで届くだろう。

そもそも三年間もかけてAクラスを守り抜くという段階でやる気が起きない。報酬も、好きな大学と就職先に行けるといふようなもので正直そこまで魅力的じゃない。好きなどころに行つたところで、能力が追いついていくかは別問題だし、努力しないで好きなどころに行つて打ちのめされるようなことがあつてもめんどくさい。

私は私らしく、私の實力にあつたところに自力でいくのが合つているだろう。背伸びしたところで良くなるとは思えないし、何せ天涯孤独の身である今、そこまでしていい大学に行きたいとも思わない。普通に就職したほうがいい気もする。まあ、その辺はも

う少し経ってから考えるか。

とりあえず、CクラスとDクラスが何かやらかしていて、恐らくCクラスが吹っ掛けたと。詳しくは明日クラスで話すそうだから、その話を聞いた後にでも綾小路君にメールをしてみよう。わざわざ干渉しなくても彼が何とかしてしまえばいい。これを利用してDクラスとの関わりを持っておきたい。Cクラスには悪いと…思わないな。別にどうなってもいいし。

動くのは明日だ。今日はもう夕食の買い出しに行つた後に寝る準備をして寝よう。明日の動き次第で今後のことが変わる。これ以上Aクラスに踏み入りたくないし、この機会を逃すと次の機会まで待たないといけなくなる。

そう考えた私はスーパーで買い出しをした後に、夕食を作り、明日の弁当の仕込みをして寝た。

## 15 話目 七月の初め 次の日

「あんたなんて産まなければ良かった！」

何時頃だっただろうか？

母親にそう言われるようになったのは、少なくとも中学三年生ころには言われるようになった。原因はわかりきっている。父親が女を作って蒸発したからだ。

中学二年のころだ。あの屑は仕事もろくにしていなかった。ほとんどが母の稼いだお金で生活しているような状況だった。母は高給取りだったから、父が仕事をしなくても生活していくのに不自由しなかった。

母はあの屑のことが大好きだった。いや、依存していた。それはもう、大学に入ってラノベやアニメに少しハマった時に見て『ヤンデレ』というのを知ったときに、「ああ、母はヤンデレの部類だったのか」と納得できるぐらいには依存していた。

だから、あの屑が浮気をしているのもすぐにばれた。毎日仕事の合間にあの屑のことをずっと見張っているような人だったから仕方ないとも言える。そういう意味ではあ

の屑も不憫だったと言えるが、中学生の子供と妻を捨てるような男だから屑と称している。逆の立場ならまた違う見方があるのだろうが、私父があいつ親似だというだけの理由で、実の母親に毎日「産まなければ良かった」などと言われていたのだ。屑と呼ぶほど嫌いになってもおかしくはないと思う。少なくとも私は嫌いになった。

何時頃だっただろうか？

自分のことを『私』と言うようになったのは。少なくとも中学三年になってからなのは確かだ。

『俺』と言う一人称はあの屑と同じだという理由で矯正する羽目になった。母は暴力に訴えるような真似をしたことはなかったが、『俺』と言うたびに喚き散らされてはたまらなかった。『僕』と言うのも試したが、男っぽい一人称は却下された。『私』という一人称は公用語だ。母も自分のことを『私』と言っていたため、『私』という一人称を使う分には文句は言われなかった。

何時頃からだっただろうか？

母と会話しなくなったのは。家にいても会話が消えたのが中学三年の終わりぐらいだったのは覚えてる。あれに似た私が家にいるのは母にとつてもきついだろうと思つた私は、高校に入ったと同時に独り立ちした。いや、正確には独り立ちと呼べるものじゃなかった。実家のすぐ近くにアパートを借りていたから、家に帰ることも普通に行ける距離ではあつたし、母が私のいない時にやつてきてご飯と弁当を作ってくれることも多々あつた。それでも、母と距離を置きたかつたから、便宜上独り立ちをした。

母から仕送りをもらい、バイトをしながらの苦学生というやつだ。大変だつたが苦痛ではなかつた。むしろ、一人でいろいろできて楽しかつた。友人もでき、それなりに充実した高校生活を送つていたと思う。だが、時々家に帰つても母と会話をする事は減つていった。

何時頃だつただろか？

母と会うことがなくなったのは。高校生の時には月一ぐらいで顔を出していた。しかし、大学生になってから実家に帰ったことは一度もなかった。大学は実家と離れたところに行った。便宜上ではない、正しい意味での独り立ちをした。

実家に帰るには新幹線で3時間ぐらいの移動が必要だったため、戻ろうという気にはなれなかった。そもそも、家に電話を入れることすらしなかった。今思えば、母と交わした最後の会話は大学に入る前にアパートを見に来た時が最後だった。それも事務的な話しかしていなかったのを思い出した。私は彼女にいったい何をしてあげられたのだろうか？

何時頃だっただろうか？

マイナスになりたいと思ったのは。私は自分の人生を不幸だと思ったことはあまりなかった。恵まれた環境とは言い難いかもしれない。だが、現代社会の日本でこの程度の家庭の事情はよくある話だ。

自爆テロを強要される人や、少年兵に比べれば遥かにましと言える境遇だろう。むしろ

ろ、バイトをしてはいたが、学費も生活費も母の仕送りですべて足りていたのでプラスとまで言えるような状態だった。だからこそ、私はマイナスと言うものを知りたかったのだ。自分よりもひどい状況にある人達を見て安心したかったのかもしれない。

いったい何時頃からだったのだろうか……？

…嫌な夢を見た。

まだ『私』が『俺』だった時の記憶を夢で見た。最近、変な夢を見るような感じが増えていたが、まさか今まで忘れていた前世のころの嫌な思い出を思い出すことになるか



は思わなかった。父が家を出て、母に罵られ、自分も家を出ることにしたあの日までの日常をダイジェストで見たような感じの夢だった。

「あんたなんて産まなければ良かった！」

これが母の口癖になった。これを聞くのが嫌で、私は家を出た。中学の時には進路を変えるのが難しい時期になっていたので、進路は変えないで近くの高校に通った。しかし、一緒の家で暮らすのは苦痛だったので家の近くで一人暮らしをすることにした。

母も、父親に似た私と一緒に暮らすのは辛かったのか、すぐに了承し仕送りも送ってくれた。さらに、母は私のいないときにご飯を作ってくれてことが多々あったので、独り立ちと言うには少し物足りないような感じのものだった。そして、大学に入った時には完全に独り立ちをした。

今の『私』に比べて、とてもプラスだった時代の話した。生まれてからすぐに親に捨てられたよりはましだったし、母は高給取りだったから、仕送りのお金だけで生活することも難しいことではなかった。尤も、母の仕送りにあまり手を付けたくなかったのもあり、バイトを毎日してはいた。しかし、それを踏まえても環境的にだいぶプラスだったことは疑いようもない。

なぜ、私はこんなことを今まで忘れていたのだろうか？

必要なかったからと言われればそうかもしれない。実際、転生した今となっては私に

は関係ない話ではある。

だが、なぜこんな大事な日にこの夢を見たのか？

今日は、昨日真嶋先生が言ったことが確かならDクラスとの交流を深めることができるかもしれない待ちに待った日とも言える。そんな時に、忘れていた前世の嫌な記憶を見るなんて何か不吉なことがあるとしか思えない。

嫌な感じを拭えぬまま、私は朝食の準備と弁当の準備に取り掛かった。その際に、ポイントが振り込まれていないか確認したが、まだ振り込まれていなかったので問題が解決するまでは振り込まない方針に決めたのだろうかと予想した。

適当に朝食を摂り、弁当を作った後に身支度を整え、壊れていない録音機を制服に入れておくのを忘れない。今日を起こること次第では持つておく方が無難だと思ったからだ。

携帯を見たが、誰からの連絡もない。よっぽどのがあれば坂柳さんか、康平あたりから連絡が来ると思うからおそらく大きな変化は起こっていないのだろう。

そんなことを考えながら、私は寮の自室を出て、教室へ向かった。教室につくと、既

にクラスメイト達が談笑をしていた。私の隣の席の少女も席坂柳さんに着いていた。

「おはよう、坂柳さん」

「おはようございませう、小坂君」

挨拶をして席に着く。隣で坂柳さんがこつちを見ているような気もするけどりあえずはスルー。平静を保っているように見えるが、内心では今朝の夢が頭から離れずモヤモヤしていた。

忘れたいと思っていたから今まで思い出さなかったのだろうに、なぜ今になってあんな夢を見たのか？

あの夢が、何か良くないことの前兆な気がして私の中の胸騒ぎが収まらない。何か大事なものをなくしてしまったような気がして、何か取り返しのつかないようなものを捨ててしまったような気がして。

そう思ってしまった私の中で、モヤモヤがイライラに変わって、ストレスになるまでそう時間はかからなかった。時期が悪かったのもある。昨日、明日頑張るぞ、って思っていた時に限ってこんな嫌な記憶を思い出してしまったのだから仕方ないのかもしれない。

だけど、私の中で私には関係ないことだといっではいけないという警告がされている。

それが尚更ストレスになっている。嫌な思い出をわけのわからないまま忘れるなど言われているのだ。

この感覚の答えが『私』にはわからなかった。

そうして、机の前で難しい顔をしているうちに真嶋先生が教室に入った。先生が教室に入ったことで、クラスメイト達が会話を切り上げ、席に着く。

「全員席に着いているな。今日はHRの前に連絡事項がある。昨日話した、ポイントの振り込みが遅れている件だが、Dクラスの生徒がCクラスの生徒に暴力を振ったという報告があった。これによって、クラスポイントの変動が起こり得るため、プライベートポイントの振り込みが遅れている」

真嶋先生の説明にクラス内が少し騒ぎ始めた。だが、それも康平と坂柳さんがあたりを見渡しただけで静かになる。

「先生、一つ質問をよろしいでしょうか？」

そう、真嶋先生に行ったのは隣の少女だ。手を伸ばして、質問しようとするその姿勢が、いつぞやの私と重なった気がした。

「言ってみろ、坂柳」

「では、CクラスとDクラスの間の話なのにもかかわらず、1年全体のポイントの振り込

みが遅れている理由をお教えください」

「最初はCクラスとDクラスのポイントの振り込みだけ遅らせようという話だったんだが、他のクラスの生徒が関与している可能性もあるから1学年全体のポイントの振り込みを遅らせる方針になった」

「では、それでポイントの振り込みが遅れていることに対して私達が被っている不利益についてはどのようなようにするおつもりでしょうか？」

「AクラスとBクラスの生徒は元々のクラスポイントが高く、優秀な生徒が集まっているから多少ポイントの振り込みが遅れていても問題ないというのが、学校側の判断だ。あまり言いたくはないが、ポイントの振り込みが遅れていることについては目を瞑ってほしい」

言っていることは理解できるが、感情では納得できていない人も多くみられる。戸塚君辺りは、「なんでDとCのやつらの問題で俺たちまで巻き込まれなくちゃいけないんだ」と言いたげの様子だ。確かに、学校側の言うこともあり得ない話ではないし、そういう疑惑が起こっても仕方ないとは言える。

だが、これはそもそもSシステムとかいう人々の不信感を成長させるようなシステムを取っている学校側の責任とも言える。だが、これに言及しても良いように思われな

マイナス

だろうし、そもそもこの学校の方針はこれです、と言われたらそこまでだ。

入学するまでこのシステムについて一切説明がなかったことを言及することもできるが、それに関しても入学の時に書いたどこにでもある高校の誓約書に「学校の方針に従う」みたいな一文があつたはずだ。それを言えば、このシステムに従わざるを得ないのだ。

まあ、私には関係ない どうでもいいか。

「…わかりました。学校側でそのような方針だということであれば真嶋先生に言つても意味のないことですな」

「だが、Aクラスの生徒は優秀な生徒がそろつている。これぐらいのことで生活に困るような生徒はいないだろう。言いたいことはあるだろうが、学校側の方針と言うことで抑えてほしい」

真嶋先生の説明に、仕方ないかという雰囲気は教室内に流れる。さつきまで苛ついていた様子の戸塚君も、優秀と言う一言でだいぶ気をよくしていた。

…本当にこんな連中がAクラスでいいのかと疑問に思うが、言つても仕方ないし、そもそも私にはどうでもいいことなので無言を決め込んだ。

「Cクラスの生徒とDクラスの生徒の意見が食い違つているので、事件現場を目撃している生徒がいたら後で職員室まで来てほしい。また、意見の食い違いによりこのままいくと審議に連れ込むだろう。その審議が終わり次第、プライベートポイントが振り込ま

れることになる」

そう言った真嶋先生に対して、康平が手を上げて質問を述べる。

「審議の日程はわかりますか？」

「今のところ未定だが、そう遠くないうちに行う予定だ。1学年だけとはいえ、プライベートポイントの振り込みを遅らせているのだからできる限り早い処置をとる予定になつている」

「わかりました。審議の日程が決まり次第、HRで言つてもらえますか？」

「もとよりそのつもりだ。葛城以外に聞きたいことがあるやつはいるか？」

康平の手が下りたところで、真嶋先生が私を見ながらそう言った。恐らく、昨日の件があつたから私が何か聞きたいことがあるのではないかと思つているのだろうが、私は真嶋先生には特に聞きたいことがなかった。

「ないようなので、HRに移る」

そう言つて朝の連絡事項を言ったのちに、真嶋先生は教室から出ていった。

真嶋先生が出ていったことで、教室内でとところどころから話し声が聞こえる。

「小坂君はどう思いますか？」

隣りから不意に話しかけられた。そして、この時に真嶋先生の説明を聞いていたから

か、先ほどまでの苛立ちは大分消えていたことに気付いた。

「クラスでの方針を決めたいのなら昼休みをお勧めするよ。放課後に動きたいなら早いほうがいいだろうからね」

「ではそうしましょう。葛城君もそれでよろしいですか？」

坂柳さんがそう言うと、いつの間にか康平が私達の近くに来ていた。よく見れば、クラスメイト達も私達の方を見ているのがわかる。

…なぜ私まで注目されているのか。仕方ないことなのかもしれないが、私は現状を変える手段を持ち得ていなかったのも、甘んじて現実を受け入れるしかない。

「ああ、俺もそのほうがいいと思っていた。みんなもそれでいいか？」

そう康平が周りに聞くと、周りのクラスメイトの全員が頷きで返す。このクラスになつて早3ヶ月ぐらいだが、クラス内の団結力と言うものは着々と育っているようだ。

「昼食を食堂で済ませる人もいるだろうから、昼休みの開始20分後に教室内に集合でいいかな？ それで終わらなかつたら最悪放課後に纏れ込ませる形で」

「私は構いません」

「俺もだ。都合が悪い人はいるか？」

康平がそう言つて再び教室内を見渡すが、誰も何も言わない。

「じゃあ、極力20分後に始める予定で、遅れた人がいたら途中から参加する形にしよ



う。ちょっと食堂に行く人たちには厳しいかもしれないけど、そこは頑張ってほしい」私の言葉に、何人かが反応したがクラスのためと思つて諦めたらしい。

：何で私はクラスの方にかかわらないでいいやつと思つていたのにもかかわらず、クラスを仕切っているのだろうか。しかも、それが心地よいものだと思つてしまつてい

る。  
いい加減、クラスのこととは放置しろと言つているくせに、クラスメイト達との関わりが楽しくなつている自分に気付いた。この気持ちにどうにかして折り合いをつけないといけないなど考えているうちに、チャイムが鳴り1時間目の担当の先生が教室に入つてきた。

授業中に気持ちの整理をしておこうと思ひながら、私は1時間目の教材を机に出したところで、授業が始まった。

授業中にいろいろ考えた。とりあえず、クラスメイトとの関わりに楽しみを感じていることについてを考えた。恐らくこれは楽しいとはまた別の感覚なのではないかと

思った。具体的にいうと、マイナスである私の意見でクラスの内情が左右されるということに対して愉悦を感じているのではないかと思っただのだ。

このクラスには、わかりやすい特別スペシャルと言ってもいい生徒一人と、エリートと呼ばれる生徒の集団で、私とは相いれないプラスの人間だと言っているだろう。そんなプラス格上の相手達が、私の意見によってクラスの方針を左右されているのだ。目上の人を下したいという人間の権利欲求に近いものがあるのかもしれない。

私の予想では、これによってクラスメイト達との関わりが楽しい滑稽だという風に感じているのではないかと思っただ。だが、それが続くのはやっぱり今後の私のことを考えるとあまりいいとは言えない。

そもそも、エリートに対する嫌悪感が薄れているような気がする。自分の中の変化には気づいているのに、それが何で起こっているのかわからない。

あくまで予想を立てただけで、それが本当かもわからない。そんなもやもやとした感覚が私の中で渦巻いている。

まあ、そんなこと私には関係ないかでもいいか。

どうせ仲良くなったところで、高校を卒業したら忘れていくような人たちが大多数だろう。そんな人たちとの関係について細かく考えすぎてもめんどくさいだけだ。自分

の中のモヤモヤとした感覚も、考えれば考えるほど深みにはまっていく気がするし、考えないほうがいいことなら、私にはどうでもいいことに違いない。

そんなことを考えているうちに昼休みも、あと5分程度で朝言っていた集合する時間になろうとしていた。私は屋上で弁当を食べていたので、これから移動したらちようどいい時間になる。

そうして、私が教室に入るとすでにクラスメイト達が全員席に着いていた。教室に入ったのは1分ぐらい前だったが、5分前行動を心がけていたのだろう。私が教室に入ったのを確認して、康平が前に立った。坂柳さんはとりあえず自分の席に座っているようだ。私は教室に入って席に向かいながら康平に話しかけた。

「遅くなった。康平、揃ってるみたいだからさっくり始めよう」

「そうだな。全員揃ったことだ。早速始めよう」

康平がそう言うのと、クラスの中で緊張が走る。他のクラスが動き出したことを感じて、これからどうしていくのかを真剣に考える空気が生まれている。

「まず、俺は今回のことには関わるべきじゃないと思ってる。理由としては、CクラスとDクラスの抗争にわざわざ首を突っ込む理由もない上に、勝手に潰しあってくれるのならそれに越したことはない。」

むしろ、下手に介入してAクラスが裏で手引きしていたと言われて、Aクラスのクラスポイントが減るようなことになる事態もあり得ると思つたからだ」

康平の言葉を聞いて、まあ、康平ならこう言うだろうなという感想を持った。他のクラスメイト達は、大半の人が、「確かに……」とか、「そこまで考えるなんて流石葛城君だ」とか言つてる。

だが、火を見るよりも明らかなのは、隣の少女坂柳さんが黙っているわけがないということだ。

「少しいいですか、葛城君」

「構わない、意見があるなら是非言つてほしい」

「私は今回の件を利用して、CクラスとDクラスを潰しに行つた方が良いのではないかと思います。理由としては、勝手に潰しあつている今に便乗すれば将来的に敵対することになる可能性がある他のクラスとのリード差を広げることが出来ます」

潰す、という発言にクラスが少し沸いたが、それも康平が目線を坂柳さんから外してクラスメイトを見渡すと消えていった。

「だが、それでクラスポイントを減らされる可能性もある。『Aクラスが事件の黒幕だった』などという判断がされれば、クラスポイントが大幅に減ることになるだろう」

「そうならないように立ち回れば問題ありませんし、そもそもAクラスの生徒が事件と直接かかわっていないのであれば、リスクを最小限にして他のクラスに手を打つことが

出来ます」

「そういう立ち回りができたとしても、BクラスじゃなくてCクラスとDクラスの抗争にわざわざ手を出す必要も薄いと思うが？」

「後々CクラスかDクラスが上がってきた時に、あの時に仕掛けておけばよかつたなどと思わないためにも早いうちに仕掛けた方が良いとは思いませんか？」

そう言つて二人は睨みあつている。他のクラスメイトははらはらしながら二人を見ているし、茂とか、沢田さんとかはこつちを見て「早く何とかしろ」つていう目をして

いる。……こうなることは他の人たちも予想できていただろうに、何で誰も解決策を用意しないのか。誰かが何とかしてくれると本気で思っているからなのか？

まあ、それでエリートたちが過負荷マイナスに縋りついていて考えると考えたらなかなか笑える話ではある。そう考えたら、少し癪だけど仲裁するのがいいだろう。二人の雰囲気がどんどん険悪なものになつているし、このままだと放課後にもつれ込む可能性も高い。

そう思つた私は、席を立てて二人の間に入るような位置に移動した。二人は、怖い顔のまま私を見ているし、他のクラスメイト達も何でそんなとこに移動したんだという目でこつちを見ているが気にしない。

「二人つてもしかして頭悪いの？」

坂柳さんと康平を見ながら笑顔でそう言った。その瞬間にクラス内の空気は完全に死んだ。坂柳さんの纏っている雰囲気さらに怖いようなものになり、いつの間にか彼女のもとに移動していた橋本君はこちらを睨み、神室さんは目を見開いている。康平はこつちを見たまま動かず、彼の隣にいた戸塚君はこちらを睨みつけている。それらの視線を気にせず、私は続けた。

「5月の段階でもうわかってたよね？ 坂柳さんと康平は考え方が正反対だから話し合  
いの場なんて設けたら間違いないくこうなるって、だから何かしらの妥協案を二人とも用意しているって思ったんだが、違ったのか？」

そう言つて坂柳さんと康平の方を見ると、二人ともこつちを見て動かない。他のクラスメイト達は固まったまま動かない。

「もしかして妥協案がなかったのか？」

二人を交互に見ながら、煽るように肩をすくめてそう言った。

「…いえ、一応考えていたのはあります」

「俺もだ。だが、もう少し話し合つてから言うべきだと思つていた」

「それで二人でならめっこして何か進展したのか？」

昼休みにクラスメイト全員をわざわざ集めて話し合いに立ち会つてもらっているんだから、それを無駄な時間にするのはやめたほうがいいと思うが、君たちは違うのか？」

煽りを入れながら二人を見る。坂柳さんも康平もバツが悪そうに顔をそらした。他のクラスメイト達は納得したのかよく言ったという顔をしている人も何人かいる。相変わらず、橋本君は睨んだままだが。

「そうだな。確かに、クラスメイト全員を集めて話し合っているはずなのに、それを無視するようなことをしてしまった」

「そう思ったなら妥協案をとりあえず言ってみてほしい。他の人たちもそれを望んでい

る」  
そう言つて席に戻る。言いたいことは言ったし、後は二人がきれいにまとめられるはずだ。茂に小さい声で「お疲れ」と言われたので、とりあえず頷きで返しておく。

結果的に、クラスの方針としては「クラスで関わりを持つことはしないが、個人的に干渉するには構わない」というスタンスになった。クラスとして干渉しない方が良いと言った康平と、できるなら先手を打ちたい坂柳さんの考えを統合したらこうなるような感じはしていた。

また、干渉する際に必ずAクラスが黒幕として扱われないうにすることが条件になったが、坂柳さんがやるならその心配はないだろう。尤も、彼女も潰しに行きたいと

は言っていたが、潰せるとは言っていないし、そこまで動かないことも考えられる。い  
いところ、Cクラスの生徒の弱みを握って一人二人搾取できれば御の字と言ったところ  
か？

まあ、そんなこと私には関係ないどうでもいいけど。

今の時間で大事だったのは、これで私がDクラスの手助けをしようとしても問題ない  
ということだ。クラスで干渉することはだめだが、個人的に知り合いを助ける分には問  
題ないという状況にできた。

正直ここまでうまくいくとは思わなかったが、適度に煽りを入れたのが効果的だった  
のかもしれない。もつとも、煽りと言うよりもエリートにくせにこんなこともできない  
のかという本音の部分が大きかったが、これまで学校生活を送ってきてわかったこと  
は、このクラスの人たちは基本的にみんなプライドの固まりだということだ。

これは坂柳さんも例外じゃない。彼女は、プライドが高いからこそ私との勝負を受  
け、プライドが高いからこそ、Aクラスを掌握したいのだと言える。そんな人が煽られ  
て、妥協案すら考えないで話し合いなんてしてるのかと言われれば、仮に用意していな  
くてもその場で妥協案を提案せざるを得ない。

そうなれば、クラスメイト全員の行動を指定するようなことにはならないだろうと  
思ったが、予想通りに事が進んだ。あまりにも方向性が違ったら口を出すことになつて



いたであろうが、私には妥協案としてそれ以外の方法が思いつかなかつたし、方向性の真逆な意見の妥協案と言ったらこんなもんだらうと思つていたが、運が良かったみたいだ。

：いや、本当に運が必要なのは放課後だ。昼休みに屋上で弁当を食べている時に、綾小路君にメールを送っていた。Dクラスが大変みたいだけど何か手伝えることはないかという内容だ。返信はまだ来ていないが、よっぽど悪い返事じゃなければ、Dクラスに寄つてみる予定だ。

一つ乗り越えたと思つたが、まだ大事な正念場が残っていることにめんどくさいと思いつつも、少しづつ準備を進めていくことにした。

## 16 話目 七月の初め 次の日 II

放課後になった。昼休みに綾小路君に送ったメールの返信が来ていたので内容を確認すると、「協力してくれるなら放課後にDクラスの方に来てほしい」という連絡が入っていた。

Aクラスの人間が協力することがDクラスで受け入れられるのか少し気になったが、綾小路君からの紹介なら問題ないと思いたい。どちらかというところ、ここまでうまくいっていることの方が怖かった。綾小路君とは時々メールのやり取りをしていたぐらいだが、ここまで色よい返事がもらえるとは思っていなかった。で正直驚いた。

いいところ、綾小路君単体との話し合いだけだと思っていたのに、クラスの方にお呼ばれされるとは思っていなかった。嬉しすぎる誤算だ。

内心テンションを上げながら、放課後になったことで「どっか行こうぜー」って言うてる茂に、「悪いが今日は無理だ。また今度な」と言っただけで教室を出る。

茂には今度埋め合わせをすることにして、とりあえずDクラスの方に行くことにした。昼休みに口出ししたからか、クラスメイト達の視線を少し感じた。それを気にしないで、Dクラスに直行する。既に言質はとってあるが故にDクラスに行こうが問題はな

い。

Dクラスに向かつて歩いていたら、正面から堀北メイシヒロインさんがやつてきた。私を見て少し立ち止まると、何事もなかったかのようにそのまますれ違つて歩いて行つた。

彼女は今回の件にあまり関わりたくないのだろうか？

もしかしたら、彼女は自分が良ければ他の人はどうでもいいタイプの人間だったのかもしれない。そうだとしたら、こつち側過負荷に引きずり込むこともできそうだが、私の実力じゃあ無理だろう。裸エプロン先輩ならともかく、私みたいに過負荷マイナスを隠して生きていような人じゃあ、他の人を過負荷マイナスに引きずり込むことなんて無理なのだろう。

そもそも、過負荷マイナスであることを隠しながら、過負荷マイナスを増やしていくのはかなり無謀だろう。かといって過負荷マイナスを出したら『縁』を切ることになって、恐らく忘れられるだろうから意味がなくなるとかいう悪循環が生まれるのではと考えたのはつい最近のことだ。

出しすぎないで、ちよつとマイナスに振る舞えばできるのかもしれないが、あまりやりすぎると自分で歯止めが利かなくなってしまう。無理に仲間マイナスを増やす必要もないし、

今はそんなことよりも重要なことがある。

そんなことを考えながら、Dクラスの教室に入った。教室内では結構な人がまだ残っていて、話し合いの途中だったみたいだ。事件があつたのにいきなりやつてきた部外者を見て、Dクラスの中でざわめきが起こる。特に、この前図書館にいた綾小路君以外の三人は私を見て露骨に顔を顰めた。そんな中、いきなり部外者が入つてきたのにあまり驚いた様子のない、どこかで見たことあるような女子が私に話しかけてきた。

「君が小坂君でいいのかな？」

「綾小路君が言つていた小坂君ならそれであつてるよ」

そう言つて綾小路君の方を見た。彼は申し訳なきような顔をしながらこつちにやつてきた。

「昼休みのメールの返信をどうしようか迷つていたら、他のクラスメイトに見られてな。事情を話したらこうなつた」

「そういうことなら別に問題ないよ」

そう言つて私と綾小路君で話しているが、他の人たちの視線がいろいろ訴えかけてきているので自己紹介から入ることにした。ここで失敗はしたくない。

「とりあえず自己紹介から、私の名前は小坂零だ。I—Aクラスに所属していて、今回は

友人の綾小路君の力になれないかということまでここに来た」

私がそう言うとかラスの中がさらにざわついた。「Aクラスのやつが何で来たんだ!?’みたいな会話が所々で起こっている。そんな中で、目の前にいる少女はそんなことを気にしない感じで自己紹介を返してきた。

「私は榎田桔梗つて言います。綾小路君の携帯の画面が目に入つて事情を聞いたら協力してくれるつてこと言つてたから来てもらったんだけど迷惑だったかな?」

そう言つて彼女は上目遣いで男に媚びるような視線でこつちを見てくる。他のDクラスの生徒達も、榎田さんが言うならいいかみたいな空気が漂い始めた。

個人的には彼女のおかげでDクラス主人公たちに取り入ることがやりやすくなりそうだ。この少女をどこかで見たことあると思つたら、バスの中で老婆を庇つていた少女だと言うことに気付いた。

「こつちとしてはありがたいけど、他のクラスの人たちはいいのか?」

私は自分が考えていることを表には出さずに、そう言いながらクラス内を見渡した。私と目線が合うと、怯えを見せる人や、睨みつけてくる人、目線をそらそうとする人などその人の個性がすぐにわかるような反応をしてくれる人が多い。

「私はAクラスの人にも協力してもらえないなら心強いと思うんだけど、皆はどうかな?」  
そう言つて彼女がクラスメイトの方を見ると、クラス内で仕方ないかという雰囲気

一瞬で変わった。彼女がこのクラスで大きな影響力を持つている証拠だろう。そういうえば、Dクラスのリーダー格は『平田 榊田』だったはずだ。恐らく彼女がその『榊田』なのだろう。

「いいっていうなら協力させてもらおう。ただ、ここにいる私は『Aクラスの小坂零』じゃなくて、『綾小路君の友人の小坂零』として来てるってことにしてほしいんだ。Aクラスそのものの方針としては、首を突っ込まないようにするみたいだからな」  
「それって、小坂はここにきても問題ないのか？」

「クラス単位での協力はできないけど、個人的に協力する分には問題ないってリーダーから言質とったから大丈夫だ。だから、個人的にしか協力できないけどいいかい？」

「私としては、少しでも協力してくれる人がいてくれると助かると思うんだけど……」

彼女がそう言っただけで、クラスの中で私が協力することに反対する人が消えていくのだから不思議だ。最初に顔を擧げていた三人も一人を除いて賛成派に回っていた。

「そうしたら、とりあえず現状を説明してほしいのだが、いいだろうか？」

Aクラスの方でも軽い説明はあったのだが、詳しいことまでは教えてもらってないんだ」

「そうだね。協力してもらおうならちゃんと知ってもらおう必要があるよね」

…彼女たちの説明によると、須藤君というバスケット部の生徒がCクラスのバスケット部の生徒に呼び出されてついて行った。そして、そこで殴りかかってこられたから正当防衛で殴り返したら、次の日には須藤君が殴りかかったことになって学校側に伝わっていた。

…どう考えても詰んでる気がする。殴られたから殴り返して良いってのは幼稚園か小学校低学年までの発想だろう。しかも、相手側には殴られたことを証明できてもこつち側が相手か殴りかかってきたことを証明することはできない。

仮に、相手側から殴りかかってきたことを証明できたとしても、殴った事実が変わらないんだから下手するとそのまま停学まであり得る。須藤君はバスケット部のレギュラーに選ばれてそれから外されたくないってことは、ここで一番目指すべきなのは、相手に訴えを自分から取り下げさせることか。そう考えたら手口だけで三つ。方法としては二つはあるな。

「事情は大体把握した。言いたいことはいつぱいあるけど、とりあえずアドバイスできそうなことは解決の手口を三つで、解決の方法としては二つだな」

「そんなにあるの!?!」

私の言葉に、榎田さんは露骨に驚き、Dクラスの生徒たちは騒然となった。

「解決の手口は三つあるのに、解決の方法としては二つとはどういうことなんだ?」

「手口としての二つは方法的には一緒なんだ。アプローチの仕方が若干違うだけで内容的には全く変わらないからな。」

手口として数えたら三つだけど、方法としてみたら二つってこと。実質三つまで解決策があるってことかな。実際にやるのは君たちだから、どうするのかが君たちが決めてほしい」

綾小路君の質問にそう返すと、クラス内では入ってきた時の雰囲気とは打って変わったような明るい雰囲気となっていた。どれも彼らがやるには簡単な方法じゃあないのに、どうしてそこまで楽観的に考えられるのか不思議だが、綾小路君だけは私を見たまま動かない。

「とりあえず、その解決策を教えてほしいんだけど、いいかな？」

「いいよ。でも、どのやり方を選ぶのは君たちだからね。リスクが大きいのと、リスクが小さいのどっちから話そうか？」

リスク、という単語に反応してクラスの中で起こっていた熱が少し冷える。彼らは無条件で須藤君が無罪になるような魔法を期待していたのだと直感的に感じた。

「やっぱり、リスクはあるのか……」

「私が考えた方法だったらそうなる。というより、君たちは今回のことについてどうやったら解決すると思うんだい？」



「そりゃあ、当然あいつらが頭を下げて詫びを入れることだろうが」

それまで沈黙していて、櫛田さんの意見にも流されなくて私を睨みつけていた須藤君がそう言った。彼からすれば、正当防衛だと言っていたくらいだから自分が100%被害者なのにこんな状況になっておかしいとかそう言う感じだろう。

だが、現実はそのような甘いものじゃあない。

「詫びを入れる段階はもう過ぎている。既に1年生全体のポイントの振り込みが遅れている段階で、相手が訴えを取り下げない限り須藤君が停学になるか、相手が停学か退学になるってというのが基本だと私は思うよ」

そう言った直後、教室内がまたざわめき始めたが、綾小路君が漏らした言葉が私に聞こえた。

「相手が停学……じゃなくて、退学もあり得るのか」

「相手が虚偽の情報でDクラスを嵌めようとしていたなんてばれたら、訴えた人が退学になってもおかしくはないと思うよ。まあ、それじゃあ釣り合わないって思うかもしれないけどそこは諦めてほしい」

「釣り合わないってどういうことだ！ お前もやっぱり俺を見下してるんじゃないか  
!？」

私の言葉が悪かったのか、須藤君がいきり立って私に怒鳴ってきた。それを見て、他

の人は小さい悲鳴を上げた。

「ごめんごめん、そう言うことじゃないんだ。話によると須藤君はバスケのレギュラーに選ばれたんだろ？」

一年生のこの時期にレギュラーになることの難しさは私の想像を超えた難しさを持つものだと思う」

「……」

「そんな優秀な人間と、相手にいちやもんを付けて蹴落とそうとするような人とどっちがいいかなんてわかりきってるだろう？」

私としては、Cクラスの一人よりも君の方が優秀だと思ってるからね。そういう意味で釣り合いが取れてないって言ったんだ」

私がそう言うのと彼は落ち着いたのか、席に座り込んだ。

「脱線したけど、解決策について話していいかな？」

「ああ、こつちこそすまなかつた」

「気にしてないからいいよ。彼も人に知られたくないことを他のクラスにまでばらされて、いい気分じゃないのは予想できてた。それにもかかわらず、言葉選びを間違った私に責任がある。」

須藤君、ごめんなさい」

「そうやって、私は須藤君の方に向かって頭を下げた。他の人たちは、Aクラスの私が問題を起こした須藤君に向かって頭を下げたのに驚いたのか、沈黙が場面を支配している。」

「いや、俺も悪かった。急に怒鳴り散らしてすまねえ」

その言葉とともに顔を上げると、「須藤が謝った!？」と言う声が聞こえてくるが、それを無視してもう一度頭を下げて綾小路君の方を向く。

「それじゃあ、解決策について話をしようと思うのだが、まず前提としてDクラスの人全員が協力することが必要なのだが、大丈夫か?」

「どうしても全員じゃないとダメか? 今このクラスに居ないような奴が協力してくれない可能性がある」

「ここにいる人全員が協力してくれるなら問題ないと思うけど、嫌って人はいるかい?」  
「そう言ってみるが、誰も反応を返さない。沈黙は肯定とみなして先に進めることにした。」

「それじゃあ、先にリスクの大きい方法から話そうと思う」

私のその声で教室内が静まり返る。私の解決策に期待して今か今かと待っているような状態だ。だから私はそれに応えようと思う。

とびつきりの最低で私らしいな策を。

小坂は俺たちに協力してくれると言つてDクラスにやつてきた。本当は呼ぶつもりはあまりなかったのだが、櫛田に言われて仕方なくと言つた感じだった。

それでも、少しひと悶着あつたが概ね問題ないように進んだし、前に図書館で見たときの気持ち悪い雰囲気が消えていたので問題ないと思つていた。

…あいつが解決策を具体的に話すまでは。

「そんな難しい話じゃないよ。彼のことを訴えてきた相手をDクラスの生徒全員で監視して、階段を下りようとしたら背中を押してあげたり、廊下で足を引っかけたあげたり、靴の中に画びょうを仕込むぐらいのことを1週間も繰り返せば、彼も訴える気なんてな

くなるさ」

ゾワワワワツ

小坂は、さもそれが一番正しくて、それしかないと言いたげな笑顔でそう言い放った。この瞬間に、オレはやつぱりこいつを呼んだのは間違いだつたと確信した。この前図書館で見たときの気持ち悪い雰囲気そのまま戻り、さつきまでの小坂とはまるで別人のような印象を持っている。

この雰囲気の変化を察したのか、他のクラスメイト達も絶句し、この前居合わせた須藤たちも図書館でのことを思い出したのか硬直してしまっている。

「あれ、どうしたのそんなお通夜みたいな雰囲気になつて。もしかして他の人の人生をめぐちやくちやにするような勇氣もなしに須藤君のことを助けようなんて思つたの？」

これが成功したらCクラスの人は良くて心が折れて、悪くて階段から落ちて死亡、もしくは階段から落ちて半身不随とかかな？」

それが当たり前だと言う風に、そう言い放つ。そのあまりの気持ち悪さに、Dクラスのクラスメイト達は怯えている。

「でも大丈夫、安心して。もしそれでCクラスの生徒がひどいことになっても、君たちは悪くない。だって先に仕掛けてきたのはCクラスの方なんだろう？」

先に人の人生をめちやくちやにするようなことを仕掛けてきたのは相手なんだ

だから、君たちが彼を殺したとしても、彼が二度と運動できなくなつたとしても、彼が部屋から出てこれなくなつても君たちは悪くない、だって君たちは悪くないんだから！

そう言いきつた彼に、オレたちは何も言えなかつた。痛いような、突き刺さるような静寂が教室内を支配する。そんな中でかろうじて言葉を発したのは櫛田だった。

「でも……でもそれは良くないことだよ。いくら須藤君がはめられたとしても、相手が死ぬかもしれない解決策をするなんておかしいよ」

「それじゃあ、君たちは何か他の策があるのかい？ あくまで私の言った解決策だから、やるのも見ないことにするのも、須藤君を見捨てるのも君たちの自由だよ」

ここで、今一瞬須藤を見捨てればこんなことにはならなかつたんじやないかと思つている自分がいたことに気付き、頭を振つてその考えを追い出す。

「ちよつと待つてくれないかい？」

震えた声でそう言いながら、小坂のほうに歩いてそう言ったのは平田だった。

「君は誰だい？ 一応名乗ってもらえるとやりやすいんだけど」

「僕は平田洋介。急に入ってきて悪いけど、僕もその策には反対だ。いくら何でもやっ  
ていいことと悪いことがある。それに、リスクが大きい方ってことは小さいほうもある  
んだろ？ そっちの方を先に教えてくれないか？」

「そういうえば、確かに小坂はリスクの高いほうと言っていた。解決策も一応三つあると  
も。」

「…解決策は三つあるのに、リスクが大きいほうと小さいほうの二つしかないのはどう  
いうことだ？」

「まあ、この解決策がだめっていうんなら実質、私が解決策を提示できるのはあと一つだ  
よ。もう一つもこれと似たようなやり方だから、こつちがだめっていうんなら君たちは  
嫌がるだろうしね」

「さつきみたいなの方法なら、僕はそれに賛成できない」

「申し訳ないけど、私も同じくかな」

「小坂には来てもらって悪いが、オレもだ。流石にそんなことはできない」

「そういうと小坂の纏っていた気持ち悪い雰囲気は霧散した。」

…やってしまった。彼らが乗り気じゃなかったから、今は冷静になっているけど、結局解決策を考えていたあたりからどんどん思考がマイナス寄りになって、結果的にみんなを怯えさせることになってしまった。これじゃあ、何のためにここに来たのかわからない。

とりあえずリカバリーが効きそうな範囲内でリカバリーできないか試みよう。

「…なーんてね、流石に冗談だよ。いくら私でも、他のクラスの人に人殺しを進めるようなほど酷いことはしないさ。第一、教室に監視カメラがあるからこの方法はもう使えないしね」

「…なんだ、冗談だったんだ。冗談にしては質が悪すぎるよ」

「でも意味のない冗談ってわけでもないんだ。あくまでこんな型破りな方法もあるってことを教えたかったんだよ。凝り固まった視点だとわかる物もわからなくなるしね。」

どうしてもこの方法をやりたいっていうんなら個人的に聞きに来てほしいけど、そん



なこともないでしょ?」

「そうだね。少なくとも僕は絶対にしたくない」

「私も」

「オレもだ」

とりあえずはごまかせたか?

かなり怪しいし、結局警戒心を抱かせてしまったことには変わりないから悪い方向にはなっているが、榎田さんがノってきてくれたからだいぶ雰囲気は穏やかになった。

「じゃあ、リスクの少ないほうの解決策だけど、こっちの方は実際できるかどうか怪しいって言うのを抑えておいてほしい」

「どんな策なんだ?」

「単純に言えば、彼らの弱みを握って彼らに直接交渉するって話だね。彼らが殴りかかってきたっていう決定的な証拠を陰で彼らに突き付けて、彼らに訴えを取り下げさせるって言うのが一番穏便で平和的に解決できると思う」

「別にその証拠を直接話し合いで突き出せばいいじゃねえか」

「須藤君はそうしたいかもしれないけど、それだと君が殴ったことも追及されて確実に大会には出れなくなるよ?」

「ああ!?! なんてだよ!」

「たとえ正当防衛で殴ったとしても、殴ったっていう事実は変わらないんだから、相手が仕掛けてきたとしても喧嘩両成敗になるのが妥当だと思う。

だから、君が大会に出たいんだったら彼らに訴えを取り下げてもらうのが一番なんだ」

須藤君は、私の言葉に納得できないというような感じを表に出しながら、渋々引き下がった。

「でも、その証拠はどうやって手に入れるんだ？」

「それに関しては、君たちが頑張つてとしか言いようがないかな。だからこそ、確実性は低いし、リスクもそこまで大きくない。さっきのやつはリスクは膨大だけどやり込めさえすればほとんど確実に決まるからね」

「結局はそこになるのか……」

「まあ、どうしても見つからないんだつたら弱みを作るつても手だと思ふよ。証拠がなければ作ればいい」

「だが、それをどうするかが問題だろ？」

「そこまでは私も難しい。相手のことをもつと詳しく知つてればできるかもしれないけど、少なくとも今の私に無理だ」

「そうか。無理言つて悪かった」

「いいや、私もDクラスの人として話せて楽しかったから別にいいよ」

そういつてDクラスの生徒を見渡すが、少し警戒されているのかあまりいい反応は帰ってこない。やっぱりさつきマイナスっぽかったのが敗因だろう。榎田さんが私の良いように動いてくれたのにその機会を結局無碍にってしまった。

「じゃあ、私はそろそろ帰るよ。君たちもまだ話し合わなくちゃいけないと思うし、私がいたら話せないこともあると思うしね」

「そうか。この後Bクラスの方に行ってみようと思っていたんだが、小坂はついてこないか？」

「Bクラスはパスかな。Aクラスの私がいることでBクラスの人に警戒心を持たせると協力してもらえなくなるかもしれないし」

「それもそうか」

「じゃあ、また今度」

そういつて教室を出た。私はもうこれ以上いても無駄に警戒させるだけになってしまいいそうだから、帰ろうと思ったのだが、教室を出て少しして後ろから人が来ていることに気付いた。後ろを振り向くと、榎田さんが付いてきてた。

「どうしたの榎田さん？」

「ねえ、小坂君。何でDクラスに協力してくれるの？」

何で…ときたか。多分彼女は私が綾小路君のために来たとは思っていないだろう。実際、私は綾小路君と仲良くなりたいたいと思っではいるが、綾小路君のために協力しているわけじゃあない。

「Cクラスの生徒が気に食わないってのが一番の理由かな。当然、綾小路君の手助けをしたってのもあるけど」

「気に食わない？」

「あいつら、自分じゃ何もしないでリーダーに全部任せっきりのくせに、AとCは大差ないだの、Dクラスは不良品だの言ってるんだぜ？　自分で上上がるうともしないあいつらの方がよっぽど不良品だろうよ」

「……」

彼女の望む答えとは違ったらしい。彼女はこつちを見たまま帰ろうとしない。

「まあ、君がどう思うかは自由だけど、私はそっちの君じゃなくて本当の君の方が興味あるなあ」

「…なんのことう？」

「とぼけなくてもいいよ。君の性根がひん曲がってるのは初見でよくわかったから。そこまで濁りきってるのは昔の施設あいつらの人並みだよ。だからこそ、君の本性に興味があるんだだけ」

少しだけマイナスの雰囲気を感じて彼女に話しかける。彼女は、私の方を怯えるような目で見始めた。

「……あんななの……？」

「私？ 私はただのマイナス出来損ないさ。なんでAクラスに居るのかもわからないね」

もつと話したいけど、あまり時間をかけると彼女のクラスメイトも心配するだろうし、この状態の彼女と話してもおびえるだけでつまらなそうだ。そう思った私はこの場を離れることにした。

「まあ、また縁があつたら会おうよ。それじゃあ、また今度とか」

そう言って、後ろを向いて振り向かず彼女に手を振りながら私は寮の自室に帰った。

寮の自室に戻った私は、結局自分から彼らとの協力体制を崩すようなことをしてしまったことを自己嫌悪した。過ぎたことは仕方ないけど、何であそこまで御膳立てしたのに我慢できなかったのか。

結局、どこまで行っても最後には失敗するのだろうか？

今回に関しては100%自分が悪いが、少し仕込みを入れただけにこの結果にはショックだった。しかも、最後には調子に乗って櫛田さんを威圧するような形になってしまったし、恐らく彼女からは常に警戒されることになるだろう。

しかも、最後に次につなげるようなことをしなかったために、次に彼らとかかわりを持つ機会もない。

これでは結局前と変わらないかもしれないが、前よりはDクラスとの関わりを持ってただけ良しとしよう。彼らのAクラスに対する反応からするに、恐らくクラス全体で関わったAクラスの生徒は私だけのはずだ。

だが、一番敵に回したくない綾小路君に敵認定されてるのかもしれないと思うと少し怖い。もし彼が敵になったら、おとなしく諦めよう。彼と直接対決して勝てるような未来はない。

結果的には失敗したが、前よりも少しは好転したと思いきむことにして、私はこれらの準備をすることにした。

## 幕間　　く七月のある日く

<sup>マイナス</sup>彼の話をしよう。

その前にお前は誰だつて？

いやあ、名乗るほどのものでもないよ。それこそ閑話的な幕間的な番外的な、そういう本編とはそこまで関係のない蛇足と呼べるようなところぐらいしか出番がなくてね。そんなやつのことなんかそこまで気にしなくてもいいよ。必要なら出番があるだろうし。

そんなことより彼の話だよ。彼は自分ではあまり自覚していないが、本当は非常に強いマイナスの気質を持っている。それこそ、球磨川先輩に匹敵しかねないほどのね。

じゃあ、なぜ彼がプラスの連中、ましてや天才<sup>テリト</sup>達なんかと仲良くしているのか。

これに関してはそう難しいことじゃあない。彼は、今でこそマイナスになっているが元々は普通の人間<sup>イノマル</sup>だったということを考えて恐らくよく理解できると思う。

それでもわからない？

そうしたら、これに関しては宿題にしよう。そう遠くないうちに答え合わせができることを期待することにしてね。

彼自身は、あまり自覚がないようにだけ少しずつ過負荷マイナスに馴染んでいる。尤も、彼自身マイナスが過負荷を抑えているせいで、昔よりも適合速度は遅いけど、それでも普通の人間なら壊れてもおかしくない程度には適合している。

もし、これで彼がテンプレ通りの神様転生をして、『大嘘憑きオールドフィクション』なんてもらっていたら、今頃彼は「小坂零」ではなくなっていたと思うよ。

あくまで、彼自身のオリジナルの『過負荷マイナス』だからこそ、彼が自分自身をかるうじて保っているんだ。そうじゃなかったら、今頃他の人の過負荷マイナスに塗りつぶされている。『不慮エンカウンターの事故』然り、『荒廃ラブラフレシアした腐花』然り、『致死武器スカーデッド』然り、彼らのマイナスだとしたら、彼らの人格に似たものになっていたら、俺は思う。

だけど、今の彼はマイナスをほとんど使っていない。自分のマイナスを意識して抑え続けているからね。ある意味、ブチギレる前の『蝶ヶ崎蛾々丸』君状態とも言える。

他の誰かに嫌マイナスなことを押し付けているのではなく、自分自身に内包し続けているという明確な違いはあるけどね。だからこそ、今の不安定な彼もひよつとしたら、ひよんなことで本当に目覚めるかもしれない。



…まあ、もしかしたら『俺』と会うのが先かもしれないけどね。  
それじゃあ、また今度とか。尤も、あるかはわからないけどね。

今日はこの前放課後にすぐに帰ってしまったお詫びとして、坂柳さんとカフェに来て

いる。昨日は、茂たちとカラオケに行つて、その前は康平と久しぶりに夕食を食べに行つた。夕食を食べながらこれからのAクラスの方針とかを話していたんだが、そこまです興味ないのに話を合わせるのは少々きついものがあった。

結局、私はあれからAクラスエの人たちとの関わりを減らしていくという選択肢をとることが出来なかつた。エリートは過負荷マイナス的には忌むべき存在のはずなのに、今の私にはどうもそういう風に受け取りきれていないのだ。

昔中学生以前のころはそんなことはなかつた。むしろ、なぜかはわからないがエリート絶対殺すべしみたいな部分があつた。中学校に入つてから言うほど優秀な人がいなかったのが原因なのか、それとも彼らAクラスに絆マイナスされてしまったのか。

それとも、エリートとか過負荷マイナスとかどうでもよくなつたとか。

結局、そこまで深刻に考えなくても、なるようになるかと思ふことにして考えるのをやめたのだ。どうせこれから積極的にDクラスと関わっていく機会もないことだし、引きこもつて3年間終わらせるといふ選択肢も取るつもりはなかつた。

綾小路君のことはこの際放置しよう。どうせ睨まれたら主人公プラス的な補正によつて死ぬのが確定してる上に、手を取り合うことに失敗しているような状態になつて以上、このまま放置するのが無難だろう。

どうしようもないと言う方が正しい気もするが。

そもそもその問題として、私が過負荷マイナスを抑えているように、彼も異常性を隠しているみたいだった。そんな状態の私達だったら、本質的に敵対こそしても裸エプロン先輩とどこぞの生徒会めだかボツクスの主人公長みために手を取り合うような関係にはならない。

そんな感じで、今日の前にいる彼女坂柳さんとの勝負に勝ちたいと思っているが、結局勝ち筋なんて見えないままだった。自分自身の力で勝ちたいが、圧倒的補正綴を持つ小ている路はずの主人公と目の前坂のなんちゃってラスボス柳を潰し合わせて漁夫の利を狙う作戦は私には荷が重かったみたいだ。

自分の力だけじゃなくても、弱つているところを奇襲するのが過負荷マイナスの基本だから問題なしと思うことにしていたが、そもそもその土台を作れなかった。わかりきっていたことではある。

過負荷マイナスの私がプラスの彼らを手玉に取るなんて、裸エプロン先輩でも難しいだろう。世界の基準が違うから何とも言えないが、例えるなら裸エプロン先輩が生徒会長と安心な人外の二人を手玉に取っているようなものだ。

恐らく彼なら最後には失敗するだろうけど、途中まではうまくやれるかもしれない。生憎と私にはその途中さえできなかつたみたいだが、『負完全』とまで言われている彼とそもそも比較すること自体がおかしい話だ。

「こうして二人になるのは久しぶりですね」

「そういえばそんな気もするな」

話しかけられたのを機に思考を現実に戻す。カフェに入って私の飲み物がやってきたタイミングで彼女から話しかけてきた。彼女の言う通り、ここ一ヶ月ぐらいは彼女に呼ばれて話し合いみたいなき感じになっても近くには最低でも神室さんか橋本君がいた。その二人がいない時も彼女の派閥らしき人がいたのだが、今日は彼女と私の二人つきりでカフェに来ていた。

「他の人には聞かれたくない話でもするのかい？」

「私が…というよりは小坂君が聞かれたくない話かもしれないと思ったのでここにさせてもらいました。ここはそこまで人が来ない上に、この席だと他の人からは話を聞かれづらい絶好の場所です」

「聞かれたくない話…? 勝負関連のことか?」

「…本当に覚えがないのですか?」

そう言われても特に思い当たらない。だが、よく考えたら勝負に關しては神室さんと橋本君は知っているどころか、この前の打ち上げに参加した時に大々的に言ってしまった気もする。あまり話に上がっていないことから他の人に聞かれてはいないのだと思

うが。

「DクラスとCクラスには深く関わらないようにすると決めた日にDクラスに赴いた人がいたようなのですが何か知りませんか？　小坂君？」

「ああ、その話か」

別に問題ないだろうと思っていたが、他の人からすればそうではないらしい。確かにこの前Dクラスに行つたときに神室さんが尾行していたのは気づいていたし、どうせ坂柳さんに伝えるのだろうと思っていたが、そんなことで突つかかつてこられるとは思わなかつた。

「あの時も決めただろ？　個人的に関与する分には止めはしないって。私はあくまで友人の手助けをしに行つただけだからね。文句を言われる筋合いはないよ」

「…私は構いませんが、他の方々はそうは思いませんよ？　現に神室さんと橋本君は険しい顔をしていましたから」

「あ…確かに他のクラスメイトからすれば不快に思うかもしれないか…」

そういうことなら素直に感謝しておこう。わざわざ配慮してくれてありがとう

「いえいえ、私と小坂君の仲ですから」

そういつて紅茶を飲む彼女はとても絵になりそうな雰囲気の淑女といった感じを漂わせている。彼女に続いて私も頼んでいたカフェオレを口にした。転生してからは飲

んだことがなかったが、そこまで苦手意識なく、むしろ物が良いからなのかとてもおいしく感じた。

「私が今日聞きたいことは、そのことと関係あるのですが、改めて聞きます」

そういつて彼女が本題に入ろうとした。私は彼女を見たまま彼女の次の言葉を待つ。

「小坂君、あなたは何者ですか？」

「この前言ったことじゃ不満なのか？」

「二カ月前に言ったことで納得しきれない部分があつたから聞いているのです。あの日、小坂君を尾行してもらつた神室さんが途中で怯えながら帰ってきました。この前、図書館であなたを見たときにも少し怯えていましたが、それほどまでひどくはありませんでした」

「……」

彼女の派閥の誰かが、図書館まで尾行していたことは予想していたが側近とも言える神室さんだとは思わなかった。恐らく、その時には距離が離れていたからおそらく問題なかったのだろう。その前にたい焼きを食べたときも雰囲気だけだった。

だが、この前にDクラスに行った時には抑えが効かなくてそれなりのマイナスを吐き出していた。そして、教室の中で話していた私を見張るためには教室の近くに行かなくてはいけない都合上、恐らく神室さんは私のマイナス具合にあてられたのだろう。

どうりで、ここ数日神室さんが私を避けていたわけだ。

「小坂君を尾行させていたことに関しては謝ります」

「そう言ってもやめる気はないだろう？　ここしばらく、結構な頻度で見張られてたのは気づいてるよ」

「勝負を挑まれた相手の動向を探るのは基本ですから。無断でしたことに対する謝罪と  
言う形で言いましたが、もちろんやめる気はありません」

「そのことについては私自身どうでもいいしね。撒こうと思えば撒けるし、二度と尾行  
しようと思えなくなるようなトラウマを植え付けることもできるし」

いい加減彼女に誤魔化すのも限界が来ていたみたいだ。もうこのまま隠し通すのも  
難しいなら、この際彼女にばらしてしまうことにしよう。どうせ彼女は私の気持ち悪さ  
を知っているんだからこの際ばらしても変わらぬ。

だから、彼女には過負荷マイナスと言う人間がいることを知ってもらおう。運ラッキーが良いことにさ  
いころも8個ある。

そう思った私は、自分の持つている過負荷マイナスを少しだけ解放する。解放しすぎて『縁』を  
切ってしまうような間抜けなことはしないようにしながら。

私の雰囲気の変化に気付いたのか、彼女は顔を顰めた。

「この際、坂柳さんには話してもいいかもしれない」

「…小坂君の正体についてですか？」

「全部ってわけじゃないけどね。他のやつを受け売りだし、本当かどうかはまだわからないけど。」

「？」

「いや、こつちの話。それじゃあ話そうか」

そういつて彼女の顔を見る。彼女は私の方を見て、怯えたような、嬉しそうな、見たくないものを見るような、見たかったものを見るような、そんなよくわからない表情をしていた。

「人間は4つに分類できるらしい。1つは普通<sup>ノーマル</sup>。Aクラスの君と私以外の人は軒並みこれに当てはまるね」

「…葛城君もですか？」

「彼ぐらいじゃあ、普通<sup>ノーマル</sup>の域から出ることにはできないよ。彼は全体的に高水準なだけのただの普通<sup>ノーマル</sup>さ」

「それでは私と小坂君はどういう分類になるのですか？」

「坂柳さんは特別<sup>スペシャル</sup>に当てはまると思うよ。何か1つ、特別に秀でたものがある人間のことだね。坂柳さんの場合はその頭の回転の速さかな？」

「ありがとうございます。ですが、頭の回転の良さなら他にも優れた人がいると思いま



すが?」

「Aクラスで坂柳さんほどの人はいないよ。他のクラスじゃわからないけどね」

「……」

そう言うのと彼女は心当たりがあるのか黙り込んでしまったが、私には関係ないので、先に進めることにした。

「もう一つは異常<sup>アブノーマル</sup>」

「異常<sup>アブノーマル</sup>?」

「やることなすこと、全てが異常な結果を出す連中のことさ。ここにさいころが8個ある。試しにこれを振ってみてくれないか?」

そういつて彼女にさいころを渡した。彼女は少し戸惑いながらも、机の上にさいころを転がした。

…出目は、1、1、1、1、2、1、2、1。1に偏っているが、異常<sup>アブノーマル</sup>と呼ばれるには少し物足りない結果だった。

「坂柳さんの場合は1に偏ってるみたいだね」

「こんなので何がわかるんですか?」

「これが異常だったら出目が全部同じになるよ」

「…そんなことがあるわけ」あるさ、何をなしても結果が全ておかしくなる連中、それこ

それが異常アブノーマルなんだから」

「まあ、尤も、本当に異常アブノーマル具合が高いやつなら、さいころが全部積み重なったりするみたいだけどね」

「……そんなことが本当にあるんですか？」

「うーん……実際に私が見たわけじゃないから何とも言えないところだね。ただ、私が話したいことには必要な話だから」

「小坂君がその異常アブノーマルってことですか？」

「私が？ よりによってアブノーマル？」

まさか、異常アブノーマルと間違われるとは思わなかったので露骨に顔を顰めた。私はそんなにプラスの連中じゃあない。

「私のことストーカーしてるくせに私のこと全然わかってないんだね、坂柳さん」

「あなたの説明通りなら、あなたが異常アブノーマルと言う分類でもおかしくないと考えますが？」

話しただけで人の心を折る、盗み聞きしてただけで聞いていた人の心を折るなんていう異常な結果を出しているのですから」

「……はあ」

大きいため息を吐いた。いや、別に私には関係ないことではあるが、私のことを彼女が何にもわかっていなかったことに、呆れ半分失望半分と言った具合だ。

そこで気づいた、私は彼女に何か期待していたのではないか。彼女なら、私のことを理解してくれていると思っていたのかもしれない。そういう期待があったからこそ、勝手なことだが失望していた。

「……」

「私がそんなプラスな連中なわけないじゃないか。異常な連中はどれだけ異常だとしても、結果として返ってくるのはプラスなんだ。だから私には絶対に当てはまらない。それに、まだ分類分けに一つ余りがあるだろう？」

「…確かにそうですね。異常がプラスだとするならば、小坂君はその反対が正しいと思います。見ているだけで気持ち悪くなるなんて人がプラスなわけないですからね」

そう言った彼女の言葉に思わず目を見開いた。彼女は私のことを全く理解していないと思っていたが、そうではなかった可能性が生まれた。

私がミスリードをしてしまったせいで勘違いしていただけだったというものだ。

彼女が言った、プラスと正反対と言う言葉がまさしく私を呼ぶには相応しい名称だ。彼女がそれを当てたことに少し嬉しい気持ちになった。

思ったよりも、私は彼女に対して情が湧いてしまったのかもしれない。

「坂柳さんが言ったので合ってるよ。最後の一つは過負荷<sup>マイナス</sup>。文字通り、やることなすことが全てマイナスになるタイプの人間だ」

「過負荷……」

「そう、銀行強盗に遭遇すれば真つ先に人質にされるし、大会に出ようものなら会場に行くまでに車に轢かれ、散歩したら電柱が倒れて病院送りになり、友達を作ろうものなら人の心を折つてしまい、復讐をしようとしたら逆に殺される。」

「そんな人間の総称が過負荷さ」

「……」

「まあ、急にこんなこと言われても納得できないだろうね。とりあえずサイコロでも振ってみようか、私が振るとどうなるかやってみたかった」

「そう言った私は、机の上にあるさいころを8つとつて無造作に投げてみた。」

「……結果は、さいころが全て砕け散った。思いもよらない結果に、私も彼女も呆然としてしまった。だが、少ししてから、私はこれがどんな結果だったのかを理解した。理解したからこそ、思わず顔がにやけてしまいそうになる。それを抑えながら茫然としている彼女に向き合つた。」

「なるほどね……こうなるんだ」

「……小坂君……これはいつたい……?」

「この結果はね、出目が出なかった。出目を出すということがマイナスになって返つてきた結果だね。」

さしずめ、さいころの出目がマイナスになった、とかかな？」

「こんなことが……」

「実際にあつただろ？　これが私マイナスだよ」

そう言うのと彼女は茫然とこつちを見たまま動かなくなつてしまつた。頭が受け入れることを拒否しているのだろう。彼女のように、頭が良いとこういう理解不能なことが起きたときに受け入れられずに現実逃避するのはよくある話だ。

私は彼女をこのまま放つておくことにして、伝票を取つて会計を済ませてカフエを出ていった。心なしか、気持ちは大分すつきりしていた。もしかしたら、私は過負荷マイナスのことを他の人に知つてもらいたかつたのか、それとも、誰でもいいから話したかつたのかもしれない。

カタルシス、と言うものだ。私だけが知つている秘密を他の人に話すことで得られる、開放的な感覚。私は自分でも気づかないうちに、誰かに話したかつたのだろう。自身の本質を、過負荷マイナスという人間がここに存在しているんだと。

私は言葉にできない優越感のようなものを感じながら、寮の自室に帰つた。何気ない日常の一ページが、こんなにも私に溜まつていたストレスを発散させてくれるものだ

は思わなかつた。この日は久しぶりに変な夢を見ないでぐつつすと眠れた。

## 17話目 七月の下旬

人を壊したことはあるか？

殺したじゃあない。壊しただ。壊れた人間がどうなるかも、まあ予想が付くだろう。ただ、一つだけ言えることは、まともな人間に戻ることはほとんどできないってことだな。

人を見捨てたことはあるか？

ない人間なんていないだろう。本当にないつていうんなら、今すぐにも国を出て人々を助けるために奔走すると良い。ああ、別に強要するわけじゃあないから勘違いしないでほしい。今ここで言いたいことは、本当に誰一人として見捨てたことのない人間がいるのかということだからな。

人を憎んだことはあるか？

鬱陶しく思ったと、憎んだではだいぶ意味合いが違うのだが、それに気が付かない人間も少なくはない。本当の憎しみを胸に抱いていたと思っていた人間が、その憎しみが実は嫉妬だったなんてこともあるだろう。

人との縁を切りたいと思ったことはあるか？

ある人間は数あれど、ない人間を探すのは至難の業だろう。こいつが気に食わない、こいつなんて二度と顔も見たくない、こいつがいなければ、そう思ったことはないか？

まあ、そうは言っても、それに折り合いを付けて生きていくのが人間だ。



DクラスとCクラスとの間で起こった件に決着がついた。

とは言つても、審議で決着がついたわけではない。審議は一度行われ続きは明日と言ふところでCクラスの生徒が訴えを取り下げたのだ。

それに伴つて無事に私達にもポイントが支給された。正直、そこまで貧窮していなかつたが労働者の立場としては遅いと言わざるを得なかつた。審議が終わるか結果が出るまで待たされていたが、七月も半分が過ぎる頃に支給されるのはいくらなんでも遅すぎるだろう。

そんなことを言つても、文句を言うことしかできないのが現状だが。

このことを盾にCクラスを弾劾することはできるかもしれない。だが、それをやるには手札が弱すぎる。それに何より、私達はポイントの支給が遅れると困る無能ですなんて言ひふらしていることにもなりかねない。別に私自身は構わないが、他のクラスメイトは嫌がるだろうし、坂柳さんも康平も間違ひなくそんな方法はとらない。

メールでどうなったのか綾小路君に聞いてみたところ、Cクラスの生徒が突然訴えを

取り下げてきたからよくわからないと返ってきた。嘘だと思うが、確認するのも面倒だし特に意味もないので適当に返しておいた。

この前、Dクラスに行つてから綾小路君たちとは会つていない。私自身Aクラスの友人たちに誘われる機会が多いということ、Dクラスで過負荷<sup>マイナス</sup>を撒き散らかしたのでDクラスの生徒たちがそもそも私に近づこうとしないことの二つの点が合わかり、彼らと会う機会はなかった。

審議の時も、Cクラスのやつらを見て我慢したままでいられるかわからなかったので行かなかつた。この前にDクラスに行つた帰りに櫛田さんに言つたように、私はCクラス<sup>の</sup>の生徒に対して嫌悪感が募つていた。

理由としては自分では何もしくないせに、他人を見下すことだけは一人前な連中が気に食わないから。その中に、エリートと言つてもいいのが何人かいることも拍車をかけていた。Aクラスの友人たちは友人と呼んでいることからわかるように、そこそこの付き合いをしている。その上、彼らはリーダーに基本方針を任せているが自分で何も考えないほど無能じゃない。

いや、訂正しよう。自分で何も考えていない無能もないわけじゃあないが、きちんと考えているやつもいるということだ。私がよくカラオケに行つたりしている、ポツチ組の茂や沢田さんあたりがいい例だろう。彼らは決して無能じゃない。

むしろ、私なんかよりもはるかに優秀なエリートであることに間違いはない。自分たちが派閥争いにかかわりたくないから、私を隠れ蓑にした立ち回りを上手にしているのだ。派閥争いにはかかわりたくない。でも、このクラスで発言権を完全に捨てないために、中立で発言権をなぜかそれなりに持つている私との関わりを強くすることで自分の立ち位置を周りに示しているのだ。

これに気付いたときは素直に驚いた。気づいたのは彼らが両方の派閥の人と話していたのを見ていたときだが、私との付き合いにそこまでの打算を組み込んでいたとは気づかなかつた。しかし、現に彼らはクラスで誰とも対立することなく平和に日常を謳歌している。

他のクラスメイト達が派閥争いで常に緊張感を出しているのにも拘らず。これが私の勘違いだったらそれはそれで面白いが、Aクラスに配属された以上偶然とは言いにいと私は結論付けた。

まあ、別に私に関係ないことだが。

今の私は、放課後に康平の相談を受けてから自室に帰ってジャージに着替えていた。康平からの相談はいつも通りクラスのことに関する事だ。派閥争いにはかか

わらないと、康平にはあらかじめ言っているのだから私が私にそういうことで相談することはない。今回の件は、他のクラスのクラスポイントの伸びが思ったよりも大きかったことについてだった。

彼自身としてはあまり下手に動きたくないと思っっているようだが、他のクラスメイトから、この伸び方だともしかしたらまずいんじゃないか、と言われたので対策を練る必要があるかというものだった。

康平自身も、そのことにはすでに気づいていたようだがまだ問題にはならないと割り切っていたらしい。だが、クラスメイトにそう言われたことで対策を練るべきか相談しに来たということだった。

私としては今更感が強いが、現状維持に回る保守的な考え方の彼が動き始めるべきなのかと言ってきたことに少し驚いた。彼の変化に驚きつつも、それを決めるのは君であつてクラスメイト達だ。必要だと思ふならするべきだろうし、必要ないと思ふならそのままでもいいんじゃないか、と返しておいた。

そう言うとき康平はこつちを見て、そうだな。確かにその通りだ。と言つて満足そうにしていたから、彼自身の中で踏ん切りがついたのだろう。

まあ、そんなことは私には関係ないでもいいけど。

それと、最近坂柳さんとの付き合いが減った。お弁当を作つてくこともなくなつ

た。おかげで、最初の一日は昼と夜がお弁当だった始末だ。そのせいか、周りのクラスメイトからは喧嘩でもしたのかと思われているみたいだが、喧嘩はしていないとだけ言っておいた。

恐らく、この前の過負荷のことを話したからだろう。話すだけではなく、物理的にどう考えても不可能なプラスチック製のさいころを8つとも粉々にしたのが一番の原因だと思う。これによって、過負荷マイナスというものの存在を証明するようなことになったからだ。

私自身、これが本当に過負荷マイナスと呼んでいいものか怪しいと思っていたし、他の人から教えてもらえない以上確かめる手段もないと思っていた。だが、思いがけないところで私が過負荷であるということの証明ができたのだ。

原めだかボツクス作では、過負荷マイナスの人がさいころを実際に振るシーンはなかったはずだ。だが、さいころの出目がなくなる結果なんて、それこそが過負荷マイナスを過負荷マイナスたらしめる証明だと私は思っただ。

私がそう思ったのと同じように、彼女も私が過負荷マイナスであることを実感したのだろう。私が時々出した、気持ち悪い雰囲気マイナスの正体が過負荷であるということマイナスで理解しているはずだ。そして、過負荷マイナスは人の心を折ることに特化しているものだというマイナスことマイナスも。

自分の欠点を認めて受け入れる。ここまでは普通の人間でも理解できる範囲だ。だ

が、欠点を認めて受け入れた上で他人に見せびらかすなんていうことは普通の連中には理解したくもないほど気持ち悪いことだ。

私自身、前世の記憶があつて、そこでは普通の一般人だった。恐らく、前世の私が今の全開の私を見たら気持ち悪さで卒倒するかもしれない。

しかし、私が他の過負荷の人たちと違つているところは過負荷をひた隠しにしているところだ。ところどころで出すことはあれど、常に垂れ流しにしているわけでもなく、普段は普通の皮を被つて生活している。

そしてなにより、私自身が私自身の欠点を認めてはいるもののさらけ出していないということだ。ただ、これに関しては仕方ないとも言える。なにせ、さらけ出したら相手が私のことを忘れるのだ。『縁』が切れるとはそういうことだ。そして前世の記憶があり、今生の幼少期で過負荷を制御できなかったことによつて受けた苦しみがあるせいで、過負荷を全面的に出したくはないと思つてゐる。

私の過負荷のルーツは前世からの気質によるものと予想しているが、後天的に過負荷になつた身だ。当然、普通の一般人だった時の記憶もある。そして、恐らく私以外の過負荷はこの世界にいないということも理解している。過負荷なんて言う概念はそもそもこの世界には存在しないものだ。

もし、私以外の転生者と呼ばれる人がこの世界にやつてきたら話は別だが、この学校

にいなければそんな人物はいないだろう。学園ドラマもの、それも限りなくクローズドサークルであるもので、<sup>作品</sup>学校外に転生者がいて何になるのか。どのみち、学校外にいるなら私と関わることはないから関係ないことだ。

ようするに、何が言いたいかつていうと、私が過負荷を垂れ流しにすると、他のスキル持ちがない以上私はひとりつきりで生きていけなくなるといふことだ。

私のことを忘れないような特殊な能力がある人がいない以上、私が過負荷を垂れ流すと誰もかれもが私を忘れていく。流石に、知り合いに毎度毎度忘れられるような思いはもうごめんだ。それに、俗物的なことを言うとお金を稼ぐこともできない。

それなら、もつと過負荷<sup>マイナス</sup>を調整できるようにしようとも思った。だが、下手にやって制御不可能になるのが怖くていまだにその試みを結局してこなかった。

そうして今に至る。半端者の過負荷<sup>マイナス</sup>の誕生つてことだ。

そんなことを考えながら、寮の自室を出て走り込みをしていた。油断するとすぐに階段から落ちたり、車に轢かれそうになったりする過負荷<sup>マイナス</sup>体質なので、暇があれば基礎身体能力を高める鍛錬をしている。

中学校時代の空手を思い出して型の練習もしたりもするが、型の練習よりも体作りの

方に重点を置いていた。理由としては、咄嗟のことに反応できる体を作ることが目的であり、現在空手部に入らなかつた以上空手に固執することもないからだ。

最近、最初は肩を外してしまった『マツハ突き』がいい感じに仕上がってきてテンションが下がっている。『マツハ突き』とは、簡単にいうと体全体の関節に回転をかけてその回転力を貫手に集約し、貫くといったものだ。前世の漫画で見た技でやってみたいと思っていた技である。

前世の漫画にあつた技がいい感じに仕上がつたのに、なぜテンションが下がっているのかというと様々な問題に直面したからだ。

一つ目に、腕にかかる負荷が尋常じゃないこと。最初に肩を外してしまったことからわかる通り、上手くいっても日に2回が限界といったものになってしまった。それ以上やると腕が壊れる。比喻抜きに。

そして、突きを当てたところがとても痛くなる。例えるなら、授業中に窓ガラスを突き破つてテニスボールが後頭部に直撃した痛みの倍ほどの痛みが手を襲う。とても使えるようなものじゃない。

二つ目に、人体に使えるものじゃないことだ。威力としては、普通の木を貫く程度。……何を言っているかわからないかもしれないが事実なのだ。試しに、坂柳さんの見張りを撒いてから、監視カメラのない位置の普通の木に打ち込んだら木を貫いて貫手が貫



通した。

私の手はかなり痛いですんだのが奇跡と思えるものだった。こんなものとても人体に使えない。間違いなく重症、普通に死亡まであり得る。

そして、最大の難点がここが学園ドラマ物の世界だということ。グラップラーがいるようなバトル漫画の世界でも、世紀末な世界でも、奇妙な冒険の世界でも、海賊王な世界でも、目安箱な世界でもない。ようするに、できたはいいが使う機会はないのだ。

ほとんど自己満足でやったことだから、仕方ないと言えば仕方ない。むしろ、なぜこんなにまで痛い思いをしてまでやってしまったのかと今更ながら冷静になつて考えている。

恐らく、バトル漫画の世界ならそこまで腕にかかる負荷も多くなかつたのではないかと予想している。この程度の完成度と威力でインフレが激しいバトル漫画の世界で、こんなデメリットをもつていたら使い物にならないモブキャラにしかならないだろう。

前世で読んだ漫画のキャラも、そういうデメリットがあるのは完全に完成した『マツハ突き』の時だけだった。いや、イメージで関節を増やすような世界と一緒だったらそれはそれで問題ではあるけども、ここまで取り回しが悪いと使い物にはならない。

因みに『マツハ突き』完全版は体の関節をイメージで増やし、その関節を含めた回転力を用いて繰り出すものだ。手の先から、真空波が生まれるほどの速度で打ち抜かれた貫

手は空振りだけで部屋のガラス全てを破壊する衝撃を生み出す。

そして、多用すると腕が物理的に内側から弾ける。とても現実的にできるとは思えないし、できたとしても使う機会はないだろうし、できたところで腕にかかる負担が大きすぎる。

そんなわけで、漫画の技の習得はこれ以上しないことを心に決めた。現実にはできるものが少ない上にできたとしても、ほとんどがデメリットになるようなものを進んでもつと作ろうとするほどマゾ体質じゃない。おとなしく、初心に帰って体作りをすることにしたのだ。

走り込みを終え、柔軟運動をしてから、スクワット、腕立て伏せ、背筋、腹筋、30mダッシュ、反復横飛びを時間の許す限り繰り返し返す。手を抜くと次にいつできるかわからないから今日はいつもより長めにやると決めていた。汗水たらすこと2時間、4セット目の反復横飛びをしているうちに私を見張っていた人が消え、私のすぐ近くのベンチに坂柳さんが腰かけていた。

「いつの間になんだ？」

「今さっき来たばかりですよ。トレーニングしながらでも構わないので、今一度話をしたくて橋本君に居場所を教えてくださいました」

「ふーん」

そう言つてトレーニングに戻つた。坂柳さんの近くでスクワットを始める。50回ほどしてから、腕立て伏せ、背筋と続けるつもりだ。

「まず、最初に謝罪をしようと思ひます」

「何についてだい？ 別に謝るようなことをされた覚えはないけど」

「ここ一週間、小坂君に過負荷の<sup>マイナス</sup>ことを聞いてから小坂君を避けたことについてです。私から聞きたくて聞いたのに、避けるような真似をしてしまい申し訳ありませんでした」

そう言つて彼女はこつちに向かつて頭を下げた。

だが、頭を下げたのはわかるのだが、なぜ彼女が私に謝っているのか、それが私にはわからなかつた。

「別に謝るようなことなんてないと思うよ。あんなこと言われて気持ち悪いと思わない方がおかしいし、そもそも私は過負荷<sup>マイナス</sup>だぜ？ 人に避けられるのは当たり前さ」

「…そうだとしてもです。私は、私の持てる全てであなたを叩き潰すと決めてました。なのにもかかわらず、あなたから目を背けるようなことをしてしまつた。それが私にとつて一番の屈辱でした」

そう言つて頭を上げた彼女は、ここしばらくの私を避けて怯えていたような彼女とは

まるで違った。教室に入って隣の席なのに挨拶しか会話がなくなっていた彼女とはまるで違い、いつぞやの私が勝負を挑んだ時と同じ意志の強さを秘めた瞳をした彼女の姿があつた。

「だからこの謝罪ははじめです。勝負から目を背けようとした、あなたを怪物か何かだと思つて怯えていた私に対するはじめです。小坂君が過負荷マイナスだろうが、異常アブノーマルだろうが、怪物だろうが、化け物だろうが、私はもう逃げません」

「私の全てをもつてあなたを叩き潰すことを今一度宣言します」

そういう彼女は特別スペシャルの皮をもう少しで破つてしまいそうなほどプラスで、ちよつと前までマイナス気味な空気に変わるかもしれないと期待していた彼女とは大違いだった。

「…そこまで過大評価してくれるのは嬉しいけど、そんなに頑張らなくていいんだぜ？」

どうせ過負荷マイナスとプラスの勝負なんてプラスが勝つに決まっているんだから」

「小坂君の中ではそうだとしても、私はそうは思いません。この前の時から自分が負けるイメージが頭から離れませんでしたから」

「まあ、好きにすると良いよ。私も過負荷故に勝てないとしても、勝つことを望んでいる身だ。あの人みたいに、過負荷マイナスだつて主役を張ることができると証明したいのかもね」

恐らく、彼女はこの前話した時に私の過負荷マイナスに当てられたことと現実離れした現象に

よつて一時的に私過負荷というものに対してフアンタジーの世界からやつてきた怪物か何かと錯覚していたのかもしれない。

普通はそこまでいったら心が折れたり、過負荷マイナスとは絶対にかかわらないようにしようとしたり、過負荷マイナス気味になったりしてもおかしくない。それなのに、彼女はあろうことが自力で元に戻った。

これだけで、彼女の精神力がどれだけ高いのか思い知らされる。

また勝てなかった。と心の中で呟くと同時に、彼女の精神の強さを内心で称賛した。

「それで、用事はそれだけかい？」

「いえ、もう一つ。明後日からの旅行についてはご存知ですよね？」

「ああ、無駄に金をかけたやつだろう？ そんなことに金をかけているからエリートどもが調子に乗るんだよ。差別社会をなくしたいなら、そういうところから変えていかないといけないと思うよ」

そう、この学校の一年は明後日から豪華船での旅行とかいうとても必要とは思えない行事がある。普通なら浮かれて楽しみにするのであろうこの行事だが、生憎とこの学校は普通ではない。十中八九、何かやらされるのだろう。

そのために、馬鹿みたいに金をかけて豪華船を用意するなんてとてもエリートが好き

それでイライラする。別に普通の旅行船で十分だろうが。わざわざ高校生が豪華船とか、どんだけ金を持っていることを見せびらかしたいのかが窺える。

「差別社会の話は置いて、私は本来それに参加することはできなかったのですが、お父様に無理を言いつて参加させていただくことになりました」

「お父様……？」

「そういえば言つてませんでしたね。私の父はこの学校の理事長を務めております」

「へー」

「……それだけですか？」

「だからどうしてつてこともないだろう？ 君が私が過<sup>マイナス</sup>負荷だろうと関係ないつて言つたのと同じだよ」

自慢気に言つた彼女にそつけなく返したからか、彼女は少し不機嫌そうだった。

……だが、こんな会話すら彼女とここ一週間してなかつたと思うと少し感慨深いものがある。

「それで？ それを言いに来ただけ？」

「……私はこの通り身体が弱いので付き添いの生徒を常に1人、最低3人用意してローテーションさせるようにと言われました」

「ああ、それで神室さんと橋本君と私に白羽の矢が立つたつてことか……。何で私？」

「一つは、ここしばらく喧嘩みたいな感じになってしまつていたので他の方々に仲直りしたと思わせるため。二つ目に、小坂君の監視をする手間を省きつつ、小坂君のことをもつと知るため。三つ目に、神室さんにも過負荷のことについて知ってもらうため」

「神室さんに？」

なぜそこで神室さんが出てくるのだろうか？

「小坂君のことを神室さんが怖がつているのは知っていますね？」

「それはこの前聞いたね」

「このまま3年間怯えられたままで過ごしたいのなら別に構いませんが、早いうちに仲直りしてもらつた方が私としても楽です。小坂君の監視に使える人が同じようにどんどん減っていくのは面倒ですから」

「それで、神室さんに過負荷について説明しろと」

「彼女も過負荷について知つたらいろいろ考えが変わると思いますし、小坂君のことを怯えなくなるかもしれません」

…確かに彼女の言っていることも理解できなくはない。知らない気持ち悪い何か、よりも、過負荷という正体のある気持ち悪い人の方が受け入れやすいかもしれない。そこさえ受け入れることが出来れば、私と神室さんの仲が今よりは改善されることにつながる可能性はある。

だがそれはあくまで坂柳さんの都合だ。

「悪いけど坂柳さんの付き添いをするのは構わないけど他の人に過負荷のことを言うつもりは今のところないよ」

「どうしてですか？」

「こんな荒唐無稽なことを信じてもらおうとは思わないし、そもそも私が話したのは坂柳さんだったからだからね」

「!!?」  
「そ、それはどういうことですか!?!」

私の言葉を聞いた瞬間に、顔を少し赤くして焦ったように坂柳さんが詰め寄ってきた。何をそんなに焦っているのかは知らないが大した理由じゃない。

「他の人がいきなり過負荷マイナスだのなんなのって言われても受け入れられるとは思わないし、この前見せたさいころが砕けたなんてのを見せたら発狂してもおかしくない。その点、坂柳さんは発狂するほどやわじやないし、他の人に言いふらすような人でもないからね」

こんなに早く復活するとは思わなかったけど、と内心で付け足す。

「ああ…そういうことですか…」

説明した途端に彼女は見るからに気落ちしていた。ここまで露骨に気落ちしている彼女を見るのは初めてだったので、少し新鮮な気分だ。



「ま、そんなわけだから今のところ信頼してる坂柳さん以外には話すつもりはないよ」  
「…私のことを信頼しているんですか？ 勝負をしているというのに？」

「勝負をしているからこそさ。そもそも、過負荷相手に正面切つて啖呵切れるような人はいないよ。そんな坂柳さんだからこそ、私は勝負を挑んだ。そんな君が、こんな非科学的なことを他の人に言うわけないじゃないか。メリツトが欠片もない」

「…そうですね。その通りです」

そう言うとき坂柳さんは少し不機嫌そうだが納得したみたいだった。

実際、こんなことを言ったら狂人認定される。仮に受け入れられたとしても、今度はそんなやつ相手に勝てるのかという疑惑が生まれれば自身の信用を落としかねないだろう。

「私はもう少しトレーニングしてから帰るけど、坂柳さんは？」

「もう少し見ています。それと、せっかく仲直りしたのですから…有栖と呼んでください」

「……」

一瞬、何を言っているのかわからなくて腹筋をしている途中で固まってしまった。

「？ どうかしましたか？」

「…いや、女子を下の名前で呼ぶようなことなんてなかったからね。前世でも、施設にい

たときもそんなことなかったから少し驚いただけだよ」

「昔：？）意外ですね、小坂君なら沢田さんあたりとは下の名前で呼び合っているもおかしくなさそうでしたけど」

「私は男子でも打算込みじゃなかったら基本的に苗字呼びをしている。女子に対して下の名前で呼ぶことなんてなかったし、呼んでほしいとも言われたことはなかったからね」

前世の時はそもそも女子とそこまで関わることはなかった。施設にいたときも、名前呼びするほど親しくなった人はいない。中学校もまた然りだ。そもそも、中学校では保険医の先生以外の人はもうほとんど覚えていないけど。

「まあ、坂柳さんがそう言うなら別にいいけど本当にいいのかい？」

「他の人から何を言われようとする程度操作することはできますから」

そう言って黒い笑みを浮かべた坂柳さん：もとい、有栖。ようやく、元の調子に戻ったみたいだ。

「じゃあ、私のことも零でいいよ。その方がわかりやすく仲直りしたって感じに見えるだろうしね」

「わかりました。：零君」

そう言って彼女は私に手を伸ばす。私はそれに応えるように、腹筋の体勢から立ち上

がつて手の汗をタオルで拭ってから彼女に手を伸ばす。

「これからもよろしく、有栖」

そう言つて私と有栖は握手をした。お互いに倒すべき敵を睨むように、お互いに相手のことを理解しようとするように、お互いに信頼しているからこそ相手を叩き潰すべく不敵な笑みを浮かべていた。

## 18 話目 豪華船旅行 初め

青い空、白い雲、すがすがしい空気、まるで心が洗われるみたいじゃないか、とはどこぞのアライグマ君が台風の去った日にアニメで言っていたセリフだったか。尤も、その次にはアライグマ君のお父さんに怒鳴り散らされることになっていたが。そのアライグマ君のお父さんは、青い空も嫌いだし、白い雲も嫌いだし、すがすがしい空気何ぞもつと嫌いなんだよ、と吐き捨てていたのは未だに覚えている。

それはともかく、この部屋から見える外の風景がまさにそんな感じだろう。デツキにいる人達もそう思っているに違いない。だが、生憎と今の私は有栖の部屋で二人つきりの状態だ。神室さんと橋本君は坂柳さんの命令で甲板の方に行つて情報収集集中。私は有栖と二人で机に向かいあつていた。

「それで……結局神室さんとはどうするんですか？ このままの調子で二週間過ごすのはまずいと思うのですが」

「別に気にしないよ。私と彼女が仲が悪かろうが良かろうが私には至極どうでもいいことだしね」

「零君が良くても、私と橋本君が重い空気の中で生活することを強いられるので何とか

してください」

「嫌だ。有栖がどう思おうが、橋本君がどう思おうが私は悪くない。勝手に一緒に居させるようにして、空気が悪くなったから何とかしろって君はいったい何様なんだい？」  
「確かに私の付き添いをお願いはしましたけど、神室さんとの仲が改善するどころかますます悪化していくままではクラスの方でも支障が出ることになりませうよ？」

私と有栖と橋本君と神室さんが集まってまず最初に起こったことは、神室さんの逃走だった。私が有栖の割り当てられた部屋に入ったのを確認した瞬間に、回れ右をして自分に割り当てられた部屋に戻ろうとしたが、橋本君に捕まえられて泣きそうになりながら必死に抵抗していた。

珍しく茫然と神室さんを見る有栖。

今にも泣きだしそうな顔で必死に逃げようとする神室さん。

その神室さんを必死に繋ぎとめてる橋本君。

それを見て引き攣った笑みを隠せない私。

どこをどう見ても地獄絵図だった。それほどまでに私に対する恐怖感があつたのか、有栖に服従しているはずの彼女がそれを無視してまでここまで錯乱しているのを見たのは初めてだった。

ここが有栖に割り当てられた部屋の中じゃなかったら、教員が飛んできてもおかしく

ない絵面になっていた。私と橋本君は有栖の補助をする人を聞いていたが、こうなることを見越したのか有栖は神室さんには伝えていなかったみたいだ。

結局、私と十分に距離を取って話し合いをすることになった。位置としては、私の対面に有栖、隣に橋本君で有栖のベッドに腰掛けているのが神室さんだった。絵面が結構シユールだったが彼女にできる最大限の譲歩だったらしい。

話し合い中に私が話しかけるたびに小さい悲鳴を上げる彼女の姿が面白くて遊んでいたら、有栖に怒られたのは記憶に新しい。

話し合いの末、朝は神室さんが、昼は橋本君が、夜は私が主に付き添うことになった。就寝中はナースコールのようなものをベッドに置いておき、状態が悪化した場合はそれを本人が押すことで教員が駆けつけることになっていくらしい。

だが、今はデツキに向かっている生徒が多いため諜報向きの橋本君には甲板に行ってもらい、そつちに神室さんもついて行ってもらう形になったため、残った私が有栖の相手をしていくというわけだ。

「クラスの方は私と有栖が仲直りしたことで元の明るい雰囲気になってるし、元々私と神室さんは仲が良くなかったからそこまで支障が出るようなことじゃないと思うけど

？」

「片方があからさまに怯えていたら気づく人は気づきますよ? 葛城君とかは気づいて  
いるみたいでしたし」

「それでも放置してることとは問題ないってことだろう? そもそも、本人があ  
の状  
況で無理やり会話してもネガティブマイナスにしか受け取らないよ」

「…確かにそういう見方もありますね。少し、急ぎすぎたみたいですよ」  
急ぎすぎた?

何か急がないといけない理由でもあるのか?

「急ぎすぎたって、何かあるのかい?」

「…零君はこの旅行がただの旅行だと思ってるのですか?」

…ああ、そういうことか。いや、考えてみれば当然だな。この頭のおかしい学校が  
た  
だの旅行をするわけがない。やっぱりこの旅行にはそういう意図があったってことか。

「少し考えればわかることだったね。大方、試験か何かをやらせるつもりなのかな?  
わ  
ざわざ船で行くってことはそれ相応のところでは何かやらされるんだらう」

「そういうことです。私は体の都合で参加できませんが、恐らくクラスごとで対決する  
よ  
うなものになるはずですよ。その時に、クラスメイトで明らかに仲の悪い人がいた  
ら  
他の人たちの不信感が募ってもおかしくありません」

「それを理由に不満をまき散らすこともありそうだね。こいつらが空気を悪くしてか

「こんなことになるんだ。まあ、ここまで極端なことはないかもしれないけど、そうなる可能性はあるってことだね」

「私も私が参加できないような試験ということしか教えてもらってないので、どうい内容かはわかりません。わかってても守秘義務を付けられていそうですが」

「まあ、そういうことなら安心していいよ。私は今回、他の人と行動する気はないから」

私がそういうと、彼女は目を見開いてこつちを見たまま固まった。そんなに単独行動することが驚きだったのだろうか？

「…何を企んでいるんですか？」

「いいや、企んでなんかいないよ。ただ、私はもう他のクラスに目を付けられているのと同じだから今回は単独で動こうと思っただけさ」

半分本当で半分は嘘だ。Cクラスには山脇君の件で、DとBには過<sup>マイナス</sup>負荷のことで目を付けられていてもおかしくない。だからこれは本当。

嘘は、企んでいないという部分だ。当然、めんどくさい以外にも単独行動したい理由はある。この機会に、いい加減目を背けてきた問題を解決したいのだ。有栖に勝つ。そのためには主人公<sup>綾小路君</sup>をぶつけてやるのが一番手っ取り早かったが、それができない以上仕方ない。

彼女に勝つために、まずは私が自分自身に決着をつけないといけない。



『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありません。ぜひデツキにお集まりください。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

突然、そんなアナウンスがされた。言い方から、デツキに向かえば試験に有利な情報 that 得られるのだろう。だが、私にはAクラスがどうなるかが知ったことではない。悪くなっても、良くなっても、それが有栖との勝負にかかわらず以上、私には関係ない。『…零君は行かないんですか?』

「有栖を置いていくことはできないだろうか? 行くなら一緒に行くけど、どうする?」  
「そうですね…」

そう言う少し考え込む有栖。試験に参加できない彼女からすれば、そこまで有意義にはならないと知っているからだろう。

「私としては別に行かなくてもいいとは思いますが、せつかくのいい景色だ。窓越しじゃなくて、実際に見てみたいなら一緒に行くよ」

「…それならお願いします」

そう言って、彼女は杖を持ち杖を持つていないほうの手を私に委ねた。手を取りながら、橋本君に『デツキに向かうから神室さんをよろしく』と書いたメールを送信した。これで、わざわざ鉢合わせするようなことはないだろう。仮に鉢合わせしたとしても、私

は連絡を入れて橋本君が携帯を見ればわかるようにしたんだから私は悪くない。

デツキに着くとさんさんときらめく太陽の下、生徒たちがこぞつてデツキから見える島を凝視していた。一番前のいいポジションをＡクラスのクラスメイト達が占領していたが、そこまで行くのは私はともかく有栖にはきついだろうと思った。そのため、遠目からその島を眺めるだけに留めといた。

「いい景色だね。太平洋の中で、島と船と人間だけがここにある」

「そうですね。こうやって直接見ることのほとんどできない景色を見ると、感慨深いものがあります」

私はこつちに来てから施設暮らしてこういう景色を見たことはなく、彼女は彼女で先天性疾患を持っているためこういう景色を直接見ることはできなかったのだろう。本来なら、ここにいることすらできないなかった彼女だ。そんな彼女が見ている同じ景色は、私と同じでももつと輝いて見えているのかもしれない。

島が目前という距離まで近づくと、そこから島全体をぐるっと回って生徒たちに見せるらしい。どこをどう考えても、意図がある物だろう。

「ああ、そういうことね」

「ええ、そういうことでしよう」

二人で意味深につぶやくと、お互いに意義ある景色を見れたと確認した。

それは、少し浮かれていた旅行気分には十分だった。

『これより、当学校が所有する孤島に上陸いたします。生徒たちは30分後、全員ジャージに着替えて、所定の鞆と荷物をしっかりと確認した後、携帯を忘れず持ちデツキに集合してください。それ以外の私物は全て部屋に置いてくるようお願いします。また、暫くお手洗いにいけない可能性がございますので、きちんと済ませておいてください』  
そのアナウンスが、これから試験が始まることを確定づけるには十分だった。短い旅行だったな、と思いつつも有栖を部屋に送っていく。

「それじゃあ、送るよ」

「ええ、お願いします。しばらく会えなくなりますが、あまり変なことをしないでくださいね」

「変なことって?」

「先ほどのように、神室さんを弄んだりしないでくださいということです」

「前向きに検討して、善処しよう」

「直す気はないってことですね」

そう言つたため息をつく有栖の手を取りながら、彼女の部屋まで見送る。私達が島で試験を行う間は恐らく他の教員が彼女を見ていることになるのだろう。島で試験を行いたいがただだけに、豪華旅行船という餌で生徒を釣りだす。

端から拒否権はないが、こうすることで逃げ出そうとする生徒はいなくなる。合理的というか、過負荷的というか、こんなもので釣られている側である以上文句は言えないか。

そんなことを考えているうちに有栖の割り当てられた部屋に到着した。

「それじゃあ、またね。たしか、島では一週間過ごすはずだから長いと一週間後かな？」

「恐らくそうなりますね。あまり神室さんをいじめないように」

「まあ、善処しよう。私もそこまで下手なことをする気はないからね」

「ええ、そうしてください。それでは一週間後にお会いしましょう」

「ああ、有栖も体に気を付けてね」

そう言つて、私は有栖と別れて自分の割り当てられた部屋に戻った。私と入れ替わりで、真嶋先生がやってきたので軽い挨拶をして自分の部屋に向かった。有栖の様子を見に行ったのだろう。試験中のことについて指示が下されるのだと思われる。

自分の部屋に着いた私は、アナウンスの指示通りにジャージに着替えて荷物をまとめて携帯を持ってデッキに向かった。録音機の類や、青本と参考書は当然部屋に置いてきた。

下船するために一人一人荷物検査を行っていたことから、ここで試験を行うのは確定

的だ。携帯電話まで没収されたことから、外部との通信を完全に遮断されたことになる。それよりもこの無駄に暑期中、生徒たちを長時間拘束することに内心で悪態をついた。もつと効率良くやれよ、前世の高校の生徒会でももつと効率よく生徒を動かしていたぞ。

Dクラスの生徒の荷物点検が終わり、全員が揃ったところで真嶋先生が前に立った。校長先生の話のような綺麗ごとを並べているうちは、生徒たちで話す人も少なく特に問題はなかった。

だが、次の瞬間に彼らの旅行気分は一気に吹き飛ぶことになる。

「ではこれより——本年度最初の特別試験を行いたいと思う」

周りの生徒たちがざわついたのと同時に、私の中で言葉にできない何かが蠢いているのを感じた。もしかしたら違うかもしれないという希望が少しでもあったのだろうか？

言いようのないムカつきにも似た何かが私の中で渦巻いている。これが何なのか、今の私にはわからなかった。

いろいろ説明しているの、とりあえず切り替えて頭に入れておく。テントに関しては正直高望みしていないからどうでもいい。施設暮らしの時に嫌がらせて寝床がなかったことも少なくはなかった。アスファルトじゃないだけマシだ。というより、いろ

いろ配給してくれているのだからそこまで文句も出ないだろう。生徒を殺したくてこの試験をやるわけじゃあないし、理不尽なだけの試験はそもそも試験じゃない。

生徒の耐久試験じゃあるまいし、何かしらの措置があるはずだ。

どこかで見たことがあるようなDクラスの生徒が真嶋先生に文句を言ったところ、想像していた通りの措置があつた。ポイントを使わなければならないが、豪遊することもできるのだからそのポイントも何か細工があるのだろう。

案の定、残つたポイントはクラスポイントになるということだった。これによって、クラスの中で遊びたいという人がいても、簡単にそうなるわけではないということになる。

いや、むしろクラスポイントを残そうとするあまり他の人に我慢させることを強要させる人も出そうだ。

「真嶋先生、質問をよろしいでしょうか？」

そのタイミングで、意見を言うために手を伸ばす。私の方を見てくる人達もいるが、今無性に真嶋先生に聞きたいことがあつた。Dクラスの人たちも私の方を凝視しているが、どうでもいい。

「…なんだ小坂」

「不慮の事故によって死亡者が出た場合はどうするのでしょうか？ リタイア扱いで30ポイントになるのでしょうか？」

「後程各クラスで話すことになるが、この特別試験では試験開始前に腕時計を配布する。その腕時計に体温や脈拍、人の動きを感知するセンサー、GPSも備えてる。また万が一に備え、学校側に非常事態を伝えるための手段も搭載してある。緊急時には迷わずそのボタンを押し「そういうことじゃありません」

真嶋先生の言葉に割り込んで「そういうと、他の教員も私の方を注目し始めた。だが、今はそんなことどうでもいい。」

「私が言いたいのは、海岸を歩いていたら海岸が崩れて頭を打ち付けて死んでしまった場合とか、木の根に足を引っかけて転んでしまい転んだ先にあった木の枝が眼球部に入り脳幹を突き抜け死んでしまったとか、歩いていた山がいきなり崩れて断層に挟まれて帰らぬ人になったとか、そういう学校側でも対処しきれない状況で死亡した場合のことについて聞いています」

私がそういうと周りの人たちはこっちを見たまま固まった。そんなこと実際に起こるはずがないと思いつつも、あつてもおかしくない。そういう恐怖が生まれたのだから。自分が死んだ場合、担任のクラスの生徒が死んだ場合のことを考えたときのことを考えているはずだ。

「…そういう場合はリタイヤとは別の扱いになる」

「そうですか。ところで話は変わるのでですけど不慮の事故で1クラスまるまる全員が死んだ場合ってクラス分けはどうなるんでしょうね？ そのクラスだけなかったことになるんですかね？ それとも、Dクラス以外の生徒が全員退学したり死亡したりしたらDクラスはAクラスと同じ扱いになるとか？」

私が話すたびに、他の人達がまるで化け物か何かを見るような目でこつちを見てくるのがわかる。何をそんなに警戒しているんだらう？

私は何もおかしいことは言っていないのに。

「……小坂。それ以上余計な質問をするようなら、君をリタイヤにしなくてはいけなくなるかもしれないがそれでも続けるか？」

「あ、それじゃあいいです。そこまで興味があることでもないですし」

そう言うのと他の人たちが一齐に息を吐き出した。

そこで潔く私は、自分が過負荷を少し出していたことに気付いた。今話すまで、自分が何時から過負荷を出していたわからなかったが、今出していないことは理解できる。自分の中で、自分が自分じゃないような不思議な感覚に襲われる。

それを無視しつつ、私のことを化け物を見るような目で見てくる茂や康平たちに、勝手にこんなこととしてごめんね。と言うと彼らの中から私に対する警戒心は完全に消え



た。

他のクラスの人や教員たちは、未だに私の方を化け物か何かを見るような目で見てくる。だが、それが気にならないくらい、私は内心とても困惑していた。

過負荷マイナスを出していたことに自分で気が付かなかった…？

こんなことは、HIGH、LOWの制御ができてから初めてだった。今まで、意識が緩んで漏れるようなことはあつたがその時にも過負荷を出しているということは実感していた。だが、今は自分自身が今までとは違う何かになつていくような何とも言えない感覚が襲っている。

その感覚が抜けないまま、各クラスごとにまとまつて担任の先生から補足説明を受けることになった。集まっているAクラスのみんなは私のことを見て、怯えていたり、首を傾げたりしている。神室さんは私から一番距離を取っていた。

そんな中で、真嶋先生から説明が行われる。スポットがどうのなの、トイレがどうのなの言っているが正直そこまで興味はなかった。

私は今回の試験には何もするつもりはない。

私が今回の試験でしたいことは、端的にいうと自分の過負荷と向き合うことだ。

今まではこのまま放置していても問題ないと思っていたが、第一案である「主人公を綾小路君坂柳さんにつつけて漁夫の利作戦」が失敗した以上、自分の手札を少しでも増やした

かったという思いがあった。

だが、過負荷の制御ができなくなつたとなれば今やるしかない。

この試験中に必ずやる必要はなくなつた内容が内容であれば普通に試験に取り組むつもりだったが、事情が変わつた。本当なら、単独でできるだけ他のクラスの動向を探つておきたかつたのだが、こうなつてしまつては仕方ない。

私は早急に自分の過負荷マイナスを完全に制御しなくてはならない。

真嶋先生の説明が終わり、他のクラスメイト達が集まっている中で、私は自分自身が今までで一番の修羅場に立っていることを自覚したのだった。

## 19話目 豪華船旅行もとい、特別試験 一日目

私が自分自身の修羅場をどうするか考えていたところで、クラス内で話し合いが始まった。

まず、この試験で有栖が参加できないことから主に康平の言うことにみんな従うことで賛成している。だが私はそれに同意していない。

「零もそれでいいか?」

「嫌だよ。私は今回、単独行動をとらせてもらう」

私がそう言うのとクラスの雰囲気が一変した。私が康平に従うと思っていたのだろう。茂や沢田さんも私の方を見て驚愕を隠せていない。橋本君も話が違うとも言いたそうな目でこつちを見ている。

「勘違いしないでほしいんだけど、私は君の奴隷でも、有栖の奴隷でもないんだ。それ今は無性にむしゃくしゃしているんだよ。とは言ってもリタイアする気はないし点呼をさぼるわけでもない。一週間ぐらいなら自分で何とかできるから、簡易トイレだけもらっていくよ」

「…そうか。そう言うことなら止めはしない」

康平の言葉にクラスメイト達は少なくない驚きを隠せていないが、私は無言で折りたたまれている簡易トイレを一つ鞆の中に押し込んだ。とても全体は入りきらず、上半分が露出した状態だが仕方ないだろう。

「点呼はどうするんだ？」

「午後7時半にここに戻るから一人寄越してほしい」

「それなら、俺が直接迎えに来よう」

「そう」

そのまま彼らに背を向けて海岸沿いに歩いていこうとしたら、再び康平に声をかけられた。

「俺はお前のことを信頼している。お前のことだから考えがあつてのことだろうと思つている」

「…ああそうかい。私は初対面のクラスメイトの中で、人見知りの自己紹介を目立たせるような奴は嫌いだよ」

今のは入学初日の日のことだろう。自分でもするりと出てきた言葉に驚きつつも、彼らを見ないよう背を向けたまま歩き出した。背中に突き刺さる視線と他のクラスから投げられる視線に辟易するが、今はただ一人になりたかった。

海岸沿いを歩いて適当なところで鬱蒼と茂る森に入った私は、行き場のない『怒り』にも似た感情をどうするかで必死だった。海に入ることも考えたが、その後のことを考えると気が引けた。木々に『マツハ突き』を打ち込みたくなる衝動に駆られるが、したら自分もただでは済まないうえに環境破壊とみなされて減点対象になるだろう。

「…『無冠刑』」

呟いただけで何も起こらない。当然ではある。私は今過負荷マイナスを抑えているのだから。だが、ここら一帯で人の気配はない。こんな状況こそが、私の過負荷を解き放つ最高の環境なんじゃないだろうか？

幾つか、私の過負荷ナッシングオールについての推論がある。

その中で最も有力だと思っているものは、全力で過負荷を解き放つても周囲に人がいなければ縁が切れないのではないかというものだ。理屈としては切るべき縁の対象が近くにいないから。施設暮らしの時には、常に垂れ流しにしていた上に同じ施設内の人にしか会う機会はなかった。

だが、この学校に来てから寮の自室で過負荷を解放しているにもかかわらずクラスメ

イトから忘れられていることはない。もつと言えば、中学校の時にOBの心を折った時も他の人との『縁』は切れていなかった。さらに、少量であれば他の人がいても完全に『縁』が切れることはなくなっていた。

以上のことから、私の過負荷ナツシツグオーを本格的に解明するには今この試験中しかないということだ。それも点呼がある都合上連続でできる時間は限られている。

そう思ったところで、私は過負荷を完全に開放した。私を中心に周囲の空間が落ちてくるんじゃないかと錯覚しかねないほどのぶつ鈍切られた空気が広がっていく。辺りにいた野生の鳥や、虫が一斉に私の周りから逃げ出していく様すら認識できた。

「…『無冠刑』」

そう呟いたが、何も変化はなかった。これによって少なくとも今は鈍を出すことはできないことを確認する。意識して鈍を出すイメージを作っても見たが結果は同じだった。

次に座禅をして瞑想した。少し前のように、自分自身の過負荷に話しかけるように心の中で言葉を投げる。

…だがいつもなら来る感覚が全く来なかったことに、私は愕然とした。

何で今日に限って……いやまてよ、そもそも何時からこの状態だったっけ？

冷静に考えてみたら過負荷マイナスを抑えると決めてから放置しすぎて、自分の過負荷マイナスとの対話とも言えるものを、ほとんどしていなかったことに気付いた。

そもそもこの学校に入ってから気づいた過負荷との対話だが、初めの方こそ何回かやったがここ2ヶ月ぐらいは対話どころか無冠刑ナッシングそのものを使おうとしたことがない。

元々、意識して使おうとはしていないし過負荷のオーラとも言えるものを纏う時と寝るときにしか出していなかった。

それだけ自分自身の過負荷マイナスを蔑ろにしていたら愛想を尽かされても仕方ないのではないか？

言いようのない喪失感が私を襲った。私は過負荷マイナスなら何でもよかったのかもかもしれない。別に『無冠刑ナッシング』じゃなくても。

そして、それに気づいてしまったことで辺りの空気は変化する。私が出していたと錯覚ナッシングしていた『無冠刑ナッシング』の空気ではなく、ただの『過負荷マイナス』としてのそれに。ぶつ鈍ぎられるような空気から、ただただ歪んで気持ち悪いだけのものに。

私だけの欠点マイナスだったはずのそれが、私の知らない欠点マイナスに書き換わっているような気持ち悪さ。

そのことに気付き、本来なら喜ぶべきはずの欠点マイナスが消えたはずなのに、自分の両の眼

から涙が止まらない。

いったい何時からだったのだろうか、私にただ一つだけ寄り添っていてくれた欠点がいなくなってしまうたのは？

他の人たちとの『縁』を紡ぎすぎたせいなのだろうか？

どうすれば、私自身の欠点を取り戻せるのだろうか？

私だけのものだった過負荷はもう戻ってこないのか？

自分の過負荷マイナスとの決着をつけるつもりが、既に決着はついていたなんてなんという皮肉だろうか。私は取り返しがつかないであろう、自分自身のルーツを知らないうちに手放していた事実を点呼の時間が近づくまで、ただひたすら嗚咽を漏らしなら自己嫌悪と懺悔をするしかできなかつた。

気が付いたら既に日が落ち始めていた。少しずつ辺りが暗くなっている。既に腕時計は6時半を示そうとしていた。



未だに気持ちの整理がついていないが点呼の時間に遅れるのも問題だし、食料はなくても問題ないが水の確保をしなくてはいけない。一週間ぐらいなら水だけでも死にはしない。とても辛いだけだ。死ななければ安い。

今の私に生きている意味があるのだろうか？

わざわざ転生してまで掴んだ過負荷マイナスを切り捨ててしまった私に、そこまでして生きる意味なんてあるのだろうか？

このまま死んでしまった方がマシなのではないか？

そんな考えが頭の中をぐるぐる回ってる。試験のことも、有栖のことも、康平のことも、綾小路君のことも、Aクラスのこと、今生きることにすら、全てがどうでもよくなっ  
てしまっている。

だがここで死んでは文字通り何も残らない。私が転生した意味も、私が知りたかったものも、私が見つけたかったものも見つけられず、全てが無意味になってしまふ。

それだけを心の支えに私は水を探した。自分の過負荷マイナスを抑えながら歩き始める。何者かわからない過負荷それに気持ち悪さを感じながらも、そう遠くない場所で川を見つけた。

そこまで汚くない上に、下の方に続いていることから結構立派なものなのだろう。下に下つていけば他のクラスが拠点にしてもおかしくないぐらいだ。ただ問題とし

てここから降りるには少し急だということか。

そう思っていたら、看板が立てかけてあるのを見つけた。「この川はスポットに指定されているものであり、許可のない利用を禁ずる」と書いてある。それを見て川沿いを歩いてスポットを確認することもできたが、リーダーでない以上占拠することもできないので諦めた。

森の中から感覚を頼りに、待ち合わせの場所に向かうと今度は池を見つけた。先ほどの川よりはきれいではなく、大きさもそこまで大きくなかった。池と言うよりも大きな水たまりと言った方が適切だろう。

とりあえず、そこまできれいではないが死ぬよりはマシだと思ったので少しでも水分を取るべく池の水を飲んだ。案の定、おいしくないしジャリつとした感触が少しある。

だが、施設で過負荷<sup>マイナス</sup>を垂れ流して生きたときにいじめの一環で飲まれた劇物の類に比べればまだましだ。醤油を直接飲まされるような喉の痛みではないし、泥水ほど汚くもない。洗剤入りの水なんかは酷かった。冗談抜きで死ぬところだった。

ここ数年はまともな生活をしていたので抵抗感がなかったわけではなかったが、それでも普通に池の水でのどを潤すことはできた。間違いなく他の生徒はやらないだろうが、私は生きていられるのであればよかった。尤も、生きていく意味もなくなってしまう。いそうな私ではあるが。

再び自己嫌悪に陥った私はそのまま待ち合わせの場所に戻った。

森の中を歩いていたので、それなりに時間がかかったが7時半にはついた。最初に降りたところに戻るとすでに康平が来ていた。

「やあ、わざわざ来てもらって悪いね」

「…俺とお前の仲だ。これぐらいなら構わない」

少し戸惑った顔をしているようにも見えたが、すぐにいつもの仏頂面に戻ったので気のせいだったのだろう。そう言つて歩き出す康平の後ろをついて行く。結構歩いてきた気もするが、体力づくりを日々していた私にとってはこれぐらいで疲れるようなことはなかった。

だけど、精神的にだいぶ参っていることを自覚している。自分のアイデンティティが自分の知らない間に消え去っていた事実は、思いのほか私の心は抉りつくしていた。

康平について歩くと洞窟に着いた。既に他のクラスメイト達も中に集まっていた点呼をするまで待っているような状態だった。時刻は7時55分。真嶋先生もいることから、間違いなく私を待っていたのだろう。

「小坂で最後だな」

「そうですか。点呼が終わったのならこれで失礼します」

そう言つて後ろを向いて歩き始めた。

「ちよつと待てよ!」

そう言われたのを耳にして歩みを止めた。振り返つてみると珍しく感情的になっているのは茂だった。彼がここまで感情を露わにしているのを見るのは珍しい。

「お前が何に苦しんでいるのかはわからないけど、同じクラスメイトだろ? 一人で行くとうしないでもつと俺らのことも頼れよ!」

「そうだよ。いつも坂柳さんとか葛城君とか、竹本君とかと仲がいいけど小坂君もAクラスの一員なんだよ!? そんなに辛そうな顔をしてないで一緒に来なよ!」

茂のほかにも、あまり話したことの無い女子までそう言ってくる。私には何でそんなことを言ってくるのかがわからなかった。

「別に苦しんでることなんか無いし、辛いこともない。今はそういう気分じゃないだけだ」

「嘘をつくなよ。ここ何ヶ月一緒にいたと思つてるんだ? 葛城君や坂柳さんほどじゃないがその二人を除けば一番一緒にいたのは俺だぞ? お前が苦しんでいる時の顔ぐらゐ見たらわかる」

そう自信満々にいう茂だが、私は彼の前でそんな顔をした覚えはない。それに、これ以上ここにおいても時間の無駄だ。私は無言で振り返り、そのまま歩き始めた。

後ろで何か言っているような声が聞こえるが、そんなこと私にはどうでもよかつた。

あいつ※が行ってしまったからAクラス内は痛いほどの沈黙が支配していた。真嶋先生も無言で立ち尽くすほどの衝撃だつた。

あいつは苦しんでなんかいないと言っていたが、それが嘘だということははっきりとわかつた。

あいつの両頬に涙の跡がはつきりと残っていた上に、目元が真っ赤だつたからだ。

普段のあいつ※なら、それに自分で気づいて跡を消してから来ただろう。だが、それをしなかつたということはそれだけ余裕がないということだ。そんなあいつが苦しんでいないわけがないと思っていた。それに、あいつは時々ぞつとするようなことを平然と言うような奴だ。がなんだかんだ面倒見が良いところがあつた。クラスを纏めたり、孤立

気味なやつに声をかけていったのがいい例だ。

さつき俺と言葉をかけた矢野さんも、同じ気持ちだったのだろう。普段ほとんど関わりを持つていない彼女まで言うぐらいだ。恐らく、他のクラスメイト達も全員把握している。今のあいつが何かに苦しんでいて他にわき目を振る余裕などないということ。

普段から付き合いの深い葛城君も沈痛な顔でただ黙っている。何故かあいつに怯えている神室さんも怯えていた雰囲気が消え困惑している。橋本は苦虫を噛み潰したような顔で見ている。あいつも何か思うところがあつたのだろう。戸塚も零のことは好きじゃないのを知っている。葛城君が小坂を呼びに行くと言つて行つた時には葛城君にこんなことさせるなんてとか言つていたぐらいだった。そんな戸塚でさえ、先ほどのあいつ零の顔を見てから黙り込んでしまつている。

Aクラス内は葛城派と坂柳派で分かれていて普段はお互いに敵視しあつている。その間に入っている零がこんな状態では、どっちの派閥にしようがいい気分じゃないのは確かだろう。あいつは派閥に関係なくAクラス全体から好かれていたからだ。全員が全員というわけではないかもしれないが、あいつ零がいなかったらもつと緊張感の溢れる殺伐とした雰囲気になつているということは全員理解している。

既に二回もクラスの代表格がぶつかつていいるが、お互いに発言権を失うどころか同等の発言権のままなのが小坂の頑張りを表しているだろう。俺としては人望としては葛

城君、策略としては坂柳さんの方が上だろうと思っているが、そのすり合わせを調整していたのはあいつだ零った。

俺があいつを隠れ蓑代わりに行っていることも、あいつ自身察しているだろう。それでもなお、俺と一緒にいてくれるのだから友達の助けぐらいはなりたかった。

真嶋先生がどこかに行くのと同時に、ポイントで得た食料と飲料水を摂ってこの日は寝ることになった。

…そして次の日だった。  
あいつ<sup>零</sup>の死亡報告が発表されたのは……

---



Aクラスから分かれた後、私は適当にぶらついていた。海岸沿いを歩き、崖になって  
いるような場所に居る。もう少しで落ちてしまいそうな錯覚に陥るぐらいだ。

とは言っても、自殺する気はさらさらなかった。

私はもう一度自分自身を見つめ直そうとしていた。

私は何者なのか？

私は何をしたいのか？

私が生きていく意味は何か？

私は過負荷マイナスをどうしたいのか？

私はこの学校で何をなしたいのか？

そう言うことを今一度見つめ直していた。

何者なのか、という問いには『小坂零』である。としか答えようがない。前世の自分  
も同じ名前だったし、私にはこれ以外に名乗る名はない。

何をしたいのか、という問いには過負荷マイナスだろうと普通ノーマルだろうとプラスだろうが、意味  
のある人生があるということを証明したい。過負荷マイナスだろうが、意味のない人生なんか  
じゃないってことを証明したい。

…今更だが、私は『前世の小坂零』の人生が決して無駄なものじゃなかったというこ

とを証明したいのじゃないだろうか？

そうじゃないと、プラスと普通ノーマルまで対象に入っていることがおかしい。今の私は過負荷オーバーロードなのだから、過負荷でも意味のある人生が送ればそれでいいはずなのに。

……いや、過負荷オーバーロードでも意味のある人生が送れるということを利用して前世のマイナスじやなかつた小坂零が逆説的に意味のある人生を送れたということにしたいのか。

そんな半端な考え方じゃあ、こんな有様になつても仕方ない。私は潔く自分自身の過負荷をただの道具としか思っていないことに気付かされた。自分の過負荷オーバーロードを踏み台に、前世の自分が生きていたことに意味があつたと証明する。こんなことを考えていたのであれば、自分の過負荷オーバーロードにそっぽを向かれても仕方ない。

自分自身を切り捨ててまで、私はそんな意味のないことがしたかつたのか。改めて自分自身に絶望した。前世の自分にどれだけ意味があつたとしても、それは今の私とは関係ないのに。

そんなことを思つて、ふと過負荷オーバーロードを出した。いつものぶつ鈍切られるような感覚はなく、ただただ歪んで気持ち悪いそれを確認してまた自己嫌悪する。

……そんな時だった。私が座っていた崖が崩壊したのは。

急に崖が崩れ落ち、左腕を下から突き出ていた岩に打ち付けた拳句、頭を強打し意識が朦朧とする中で私の上に崩れた崖とそれによつて生じた土砂が乗るのを感じる。

そうして私の意識は深い闇の中に落ちた。

# 幕間　　く夢の中、泡沫にてく

：

……

……生きてるのか？

確か私は点呼の後に海岸沿いで考え事をしていたら、崖が崩れて海に投げ出されて……

もしかしてここは死後の世界だともいうのか？

ついに私は死んだのか？

わざわざ転生したのにな？

あんなところで？

坂柳さんとの決着もつけずに？

自分の欠点マイナスを見失ったまま？

『そのとおり、君は今死にかけてるよ』

言葉と同時に後ろに、人の気配を感じた。

思わず振り返ってみると、そこにいたのは身長170cmぐらいで、髪は黒く前髪が目にかからない程度の長さ。顔は他の人がどう思うかは知らないが個人的には中の下の中程度の顔で細身の体で学ランを着ている。

私そつくりの男がいた。

違いのような違いと言えば、目の黒目が完全に真つ黒になっていることと学ランを着ていることぐらいだろう。声も括弧<sup>カッコ</sup>つけたような感じではあるが、私の声そのままだ。

『君は海岸沿いで考え事をしながら過<sup>マイナス</sup>負荷を出したら座っていたところの崖が崩壊。落ちたときに左腕の腕時計は岩に叩きつけられたせいで壊れ、ダメ押しのように後から崩れた崖に全身を潰されてお釈迦寸前の有様さ』

「……」

それを聞いてやつぱりと思っていたが今の私にはそんなことはどうでもよかった。それよりもこいつだ、私と瓜二つのこいつはいつたいたい何者なんだ？

『おいおい、そんな風にじろじろ見るなよ。照れちゃうじゃないか？』

「…お前はいつたいたい何者だ？」

『そんなに冷たいことを言うなよ。俺は君さ。君だつてそう思ってるんだろう？』

「まあそんな気はしてたよ」

実際に目の前で見てみるとよくわかる。

目の位置、鼻の高さと造形、耳の曲がり方、腕の長さ、指紋、足の長さ、筋肉のつき方、手の大きさ、肩幅の広さ、ひじの関節の位置、それらをぱつと見ただけで既視感がある。それらは恐らく、鏡を見ることで見ることができるものだろう。

『気持ち悪いかい？』

「そりゃあな」

『俺もさ。自分みたいに気持ち悪いやつが二人もいるなんて考えたくもないだろ？』

「わかってるんなら言わなくてもいいな。ていうか思考回路までまるつきり一緒なのか？」

『さあ？ まあそうだとしても俺には関係ないけどね。俺は俺でしかないし』

「同意見だ。私は私だ。俺じゃあない」

俺なんて一人称は20年ほど前にやめたものだ。私は私であって、俺じゃあない。

『そんなこと言うなよ。俺って言わなくなっても俺だったことには変わりないんだから』

「言うなよ。そうだとしても私は私だ。俺じゃあない。」

『頑固だねえ。まあ俺には関係ないどうでもいいけど』

私という一人称に変えたのは生前の中学三年生ぐらいの時だ。

母親が『俺』と言う一人称を嫌がったから無理やり『私』に矯正したものだ。それが結果的に今の『私』を形作るための根幹になっている。

『そんな風に無理やり矯正した結果、しゃべり方に統一感がなくなつたんだろう？ 私  
は私ではないと言うわりにはその「私」がブレブレすぎて笑つちやうぜ』

「ツ!!」

『凶星かい？ そもそも君はどつちつかずの宙ぶらりんだつていうのをいい加減自覚しろよ。プラスにもマイナスにもなりきれない中途半端な存在。それが君さ』

「…ムカつくよ君」

『また口調が変わつてるぜ？ それも俺に近づいてる。それでいいのか？』

本当にムカつくやつだ。

自分が一番言われたくないことを的確に抉つてきやがる。

…自覚はしていた。

マイナス気質だと言つても、元々がプラスにいた人間だったからかなりきれいでない  
感覚はずつとあつた。

プラスプラスの連中と仲良くしようとしたり、エリート坂柳さんと仲良くしていたのなんかいい例  
だろう。



その結果、私は私自身の過負荷に蓋をしておしまっていた。

本当にマイナスだったら問題なかったのだろう。

どっちつかずの私だったから、自分の過負荷を蔑ろにするなんていう残酷なことができたのだ。

『君の本質は「縁を切ること」。だと言うのに、誰彼構わず「縁」をつないでいるのが今の君だ。そんな状態でマイナスだと誰が言える?』

「だが、誰彼構わず切っていったら生きていくことすら厳しいだろうが」

『そんな風に「周り」のことを考えるから君はどっちつかずなのさ。自分以外はもういいとか言いながら、周りに常に気を配って壊さないように丁寧に生きているのが今の君さ』

…言われてみればそうだ。

転生してから最初の方…と言うより高校入学前は『縁』を積極的に結ぶなんてことはしなかった。高校に入学してからだ。クラス内の立ち位置とか、周りの人からの評価を細かく気にするようになったのは。

自分以外はもうなってもいいとか言いながら、自分以外のことを常に考えている。

…そんな状態じゃ、どっちつかずと言われても仕方ないのかもしれない。どっかであわかってはいた。マイナス気味になってもマイナスになりきれないって。

…だけど、こいつは何なんだ？

いったいどこまで私のことを知っているんだ？

そもそもこいつはいったい何者なんだ？

『俺は君さ。さつきからそう言ってるだろ？』

「さらつと思考を読まないでくれ。正直良い気分じゃない」

『俺が君である以上は仕方ないと思わないかい？ 第一、君は俺のことを本当は気づいているはずだ。過去に2回俺とこうやって話したこともあるしな』

過去2回…？

そんなことがあつたのか？

いったい何時…

…殺さなきや。

こんな奴生きてちやいけない。

今ここで殺さないと、ありとあらゆるものへの害悪にしなければならない。  
だから殺さないと……

…私を殺さなきや。

人のために、世界のために、社会のために

この手に持つ鉈で、私の存在とこの世界そのものとの『縁』を切る。  
そうすれば、こんな気持マち悪いナやつが死んでここにココにいる人達も元に戻るだろう。

ここの人たちは私のせいで子供を虐待するような外道に成り下がってしまった。他の子供たちに被害が行かないように元凶の私が死なないと。

……ああ、それでも……

「もう少し、生きていたかったなあ」

こうして舞台の幕は鈍が振り下ろされた下りた。

---

ツ  
なん!????  
なんだ今のは!!?

突然頭が痛くなったと思ったら、いきなり目の前に浮かんで消えた…

今のは…私？

でもこんなこと記憶に……

もしかして自分で封じ込めていた記憶なのか？

『思い出したかい？ それが二回目だ』

「…今のは何だ？」

『現実から目を背けるなよ。今のは君さ。もちろん過去のね』

「だとしたら何で今私は生きているんだ!? あそこで自殺したんならここにいる私は一体何なんだ!？」

『簡単なことさ、君は最後に生きていたいって思った。だから俺が生かした。君の中にあつた「死」という概念と君との「縁」を切り離すことでね。その影響が残っているから、君は今死にかけにも拘らず死んでいないのさ』

確かにさつき見た私の最後の顔は生きたい、けど死ななくてはいけないという悲壮に満ち溢れたものだった。だが、生きたいと思つたからで『死』との『縁』を切つた？

そんなオカルトがあり得るのか？

『あるさ。現に君は転生を経験しているだろう？ そんな一番のオカルトがあるんだ。君が信じたがっている「無冠刑」<sup>ナッシングオール</sup>があつても不思議じゃない。それに、死にかけている

今君がここで対話しているのが良い証拠じゃないか』

確かにそうかもしれないが、それがあつたとしてこいつは何のために私を生かしたんだ？

それに『俺が生かした』ってことは、こいつが『無冠刑』<sup>ナツシングオール</sup>を持つているってことなんじゃないか？

…待てよ、もしかしてこいつの正体って

『やつと気づいたのか。そうさ、俺の正体は君が言うところの過負荷スキル、<sup>マイナス</sup>「無冠刑」<sup>ナツシングオール</sup>そのものさ』

『!!』

過負荷<sup>マイナス</sup>そのものに人格が宿ってるだど!?

そんなことめだかボツクスの原作でもなかった。

第一そんなことあるはずが……いや、だがそれならいろいろと説明が付く。

私を死なせないようにするのは彼の言った通りの『無冠刑』<sup>ナツシングオール</sup>の使い方をすればできるし、今対話しているのも私の精神世界に私の過負荷が入ってきたということなら説明が付くだろう。私が思いつかなかつたような使い方だし、精神世界に入ってくるなんて突



拍子もないことだが理屈は通つてゐる。

何せ過負荷マイナスは私自身なんだから。

『お、どうやら理解してみたいだね。そうさ、俺こそが君から見向きもされなくなつた過負荷そのものだよ』

……

「本当にごめんなさい」

理解した時にできた行動は土下座で謝ることだけだった。ついさつきまで使用することを躊躇い続けた結果、存在そのものを否定してしまつた自分自身の半身に対してできるとはそれしかなかつた。

当然、彼にはわかつてゐるんだろう。こんなことしても、私は彼を見捨てたという事実は変わらぬことを。さつきまでの彼に対するイラつきが、全部後悔に変わる。

ところが返答がないので顔を上げてみたら、そこにあつたのはさつきまでの楽しそうな顔をしてゐた彼ではなく、非常に困惑してゐた彼の姿だつた。

『あれ……？ おつかしいな、こんな感じになるはずじゃなかつたんだけど……』

「？ 私かほとんど『無冠刑ナッシングアール』を使わない挙句に、過負荷マイナスとして威嚇ぐらいにしを使つ

てなかった。その上、道具のように使い捨てるような真似をしていたから愛想を尽かしたんじゃないのか？」

『それだけは絶対にありえない！』

私の質問に帰ってきた答えは私の予想外の言葉だった。ここで会って初めて彼が声を荒げたのに思わず体が跳ねる。私はどうやら精神的に相当参っているらしく、完全に委縮してしまっていた。

『君がいなかったら俺は生まれるどころか誰からも認識されないまま存在そのものがなくなっていた。そんな中、過負荷のない世界で過負荷に目覚めて俺という存在を確立させた君に愛想を尽かすなんて、絶対にありえない！』

括弧つけたままで、その言葉は心に響く様な絶叫だと私は感じた。あつけにとられしている私を見て、ハッと我に返った彼は咳払いをしてからこつちを見た。

『だから俺が君を見限るなんてありえない』

「でも、さつきまで『無冠刑』とは全く別の過負荷のオーラになっていた。その上に、前なら返ってきた過負荷との対話と言えるようなものもできなくなっていたから、てつきり愛想を尽かされたもんだと」

『それに関して何だが…それは俺のせいじゃない。君自身の変化のせいだ』

「私自身の変化？」

『さつきも言っただろう？ どっちつかずだつて。君がプラスとマイナスを行き来しているような状態だから、唐突に「無冠刑」が変質したり、かと思えば突然自分でもわからないうちにマイナスを出してたり、自分が自分じゃなくなった感覚とかあつただろ？ あれがそれだよ』

…頭の中が完璧に混乱している。でも、さつきは君から見向きもされなくなった過負荷そのものだつて言つてた。これからすると、私のことを見捨ててもおかしくないのでは？

『確かに、君が俺を必要としていないことはわかつていたさ。さつきの言葉だつて嫌味っぽく言つたのは事実だしね。でも、君が本当に俺のことが必要ないつて言うんならそれでもいいと思つた。君が望むのなら、今ここで俺は自分を消滅することすら受け入れよう。今の君なら俺がいなくてもうまくやっていけるだろうよ』

『俺は俺でしかないと言つたが、「私」のためなら俺は自分を殺す覚悟がある』

そう言う彼の眼は全てを飲み込むような漆黒の瞳のはずなのに、覚悟を決めて己の身すら顧みない誠実さを感じた。自分がいなくても、私なら何とかなると完全に信じているように感じる。

彼の本体とも言える存在であるはずの私が探し求めているものを、私よりも先に手にしているであろう『俺』がそこにいた。

その姿がとてもプラス向きで、彼が私の過負荷そのものなんてとても信じられなかった。その眼はいつか見た彼女の目の輝きにも似ていて、とても綺麗だった。

でもだめなんだ。今の私には君がいてくれないといけない。過負荷の人生に意味を見つけないという理由だけじゃなく、私自身の欠点を忘れたくない。私自身の本質を変えてまで得たものに意味を見出したくない。

『そう思ってくれただけで嬉しいけど、本当にいいのかい？　ここで手放さなかったら、君は一生過負荷のままだぜ？』

「そんなことは百も承知だよ。それでも、君と一緒に歩んでいきたい。それでこそ『小坂零』の人生だと思うから」

自分自身の本質を変えてまで手にしたものは、果たして『小坂零』が手に入れたものと言えるのだろうか？

私にはとてもそうとは思えなかった。例を挙げるなら、弱いカードだけでカードゲームの戦術を楽しんでいる人間がいたとしよう。その彼は周りの人から単純に強いカードばかり薦められて新しくデッキを組み直した。それによって彼の勝率は格段に上がった。弱いカードの組み合わせを上手く使える人なら強いカードを使えば勝率が上がるのは当然だろう。だが、デッキを組み直す前の彼の勝利と自分を捻じ曲げて作った

新しいデッキによつて手に入れた彼の勝利は同じものなのか？

私はそうとは思えない。その人の本質を無理矢理に変えてまで得た勝利に価値を見出すことはできなかった。だからこそ、私は自分自身の過負荷を取り戻したい。私自身の欠点を持ったまま、私の理想を果たしたい。

『…全く、本当に良いご主人様だぜ。こんな過負荷にそこまで期待するなんてな』

「二度手放すような目に合つて漸く私は気づいたんだ。私には『無冠刑』しかないつて。変質して違う過負荷みたいになつた時に思い知らされた。私の過負荷はこれじゃないつて、どこの誰かのじゃない。プラスでも、普通でも、特別でも、異常でも、他の過負荷でもない。私自身を表すには『無冠刑』しかないんだ」

そう言つて彼の瞳を見る。私が今どんな目をしていのかはわからない。だが、彼は私を見るととても嬉しそうにしていた。

『それだけ成長してるんならそのままプラスに戻つてもらおうほうがいい気がするが、そこまで言われちゃあ仕方ない。ちよつと立つてくれ、そのまま動かないでくれよ』

彼の言葉通り、私は彼の前に立ち上がつて直立不動の状態になつた。いつのまにか彼が鋸を持っていた。鈍じやないことに少し驚いたが、予想通り彼はそれを私の胸に突き刺した。当てることで獲物を削る目的のそれは、本来突き刺さるような形状ではない。それにもかかわらず鋸は私の胸を何の抵抗もなく穿つた。痛みはほとんどなかつ

たが、それでも心臓を穿たれているような気持ち悪さはある。

『ピースメーカー平和癌望』、君の中のプラスの要素から作り出した禁忌終わりの過負荷マイナス。君が知らず知らずAクラスの全員に好意的に思われていたところから、俺が俺自身を弄繰り回して作り出した過負荷だ』

『ピースメーカー平和癌望』……』

『そうだ。能力はそいつの持つているプラスの要素を強制的に過負荷にさせる。球磨川先輩の「却本ブックメーカーづくり」をイメージして作った、存在してはいけない禁忌終わりの過負荷マイナスだ』

その説明が正しいのであれば、文字通り禁忌終わりの過負荷マイナスだろう。過負荷マイナスとしての最終形、他人を過負荷に矯正する。文字通り禁忌、存在することすら許されない最低最悪の過負荷だ。

球磨川先輩の『却本ブックメーカーづくり』は、球磨川先輩自身がプラスに近づけば効果は弱まる。だが、強制的に誰であろうと過負荷にする過負荷なんて存在していいはずがない。

とは言ってもどれだけの過負荷になるかはわからないため、必ずしも『却本ブックメーカーづくり』を上回ることはないだろうし、むしろ『負完全』たる球磨川先輩と同じになるほど強力とは思えない。

『ピースメーカー平和癌望』について考察しながら鋸から私に伝わってくる過負荷マイナスを感じると、直感的

にこれは彼が私のために作った過負荷であると思った。私に対して過負荷が急速に馴染んでいく。いくら過負荷マイナスを直接撃ち込まれているとはいえ、尋常ではない速度に驚きを隠せない。

恐らくこれは…

『その分だと気づいたみたいだな。そう、これは「私」のためだけに作った過負荷だ。こういう精神世界じゃないとまず使い物にならないほど脆い上に、「私」専用に調整しているから他のやつには使えねえような不良品だ。禁忌っていうのは完全に完成した場合って言う方が正しいな』

そう言う彼の言葉から、私に対しての感謝と敬意が伝わってきてとてもむず痒かった。私のためにそこまでしてくれていた彼が私を見捨てたなんてとんでもない勘違いだったのだ。

私の欠点彼はこんなにも私のために尽くしてくれていたというのに。

『これぐらいのことではいちいち気にしなくていい。実際、話しかけてこなかった二か月でできたようなもんだからな。軽く背中を押してやるだけのつもりで作り始めたのに、こんな形になるとは思わなかったけどさ』

「…ありがとう」

『礼はいらない。これからもう少し時間がかかるから、少し意識を落とさせてもらおうぞ』

「やっぱり時間がかかるのか？」

『調整したとはいえ無理やり作ったようなものだからな。ほかの過負荷も併用している以上時間がかかるのは仕方ない。その間に今まで君が忘れていたことでも思い出させるが構わない？』

そう言えば、彼は私と会うのは三度目というようになことを言っていた。過去に二回あったと言ったからそう言うことだろう。だが私は彼に会った時の記憶がまるでない。

そう思っていたら、いつの間にか彼の手には私が想像していた『鉈』が握られていた。刃の部分は長方形形状になっている。刃がついている下向きの方の3分の1程度は銀色、残りの部分は漆黒の金属でできていた。刃渡りは60cm程度で刀身は厚く、簡単に折れるような貧弱さを感じさせない。柄は木製で、刀身から少し内側に折れ曲がるような形になっている。刃の重量と厚みで、獲物をカチ割ることを容易にするためのものだ。

『それじゃあ、おやすみ。夢の中で今まで君が忘れていた記憶を見れるようにするよ』  
『そうか。よろしくお願いするよ』

『任せとけ「私」。こういう時じゃないと直接役に立たないんだからこれぐらいはしっかりとやるよ』

「そんなことを言うなよ『俺』。君が目覚めてくれたから、今の『私』があるんだ」



そう言うと同時に、『俺』は私の頭に鉈を振り下ろした。鉈が私そのものになるような感覚、私自身が元に戻るような、歯車がきちんとはまったような感覚を感じながら、私は意識を落としていった。

## 20 話目 特別試験 それから

「今日の早朝、小坂零の死亡が報告された」

朝の点呼が終わった後で真嶋先生が発した第一声はそれだった。俺を含めたAクラス<sup>茂</sup>の生徒は真嶋先生が何を言っているのかわからず、ただただ茫然としていた。

流石と言うべきか、真っ先に正気に戻ったのは葛城君だった。

「…真嶋先生、詳細な説明を希望します。突然そんなことを言われても、俺を含めたみんな理解できていません」

「昨日の午後8時36分をもって小坂の腕時計が破損、GPSが機能しなくなった。最後にGPSが示していた場所は海岸沿いの崖に面した海になっていたため、昨日の夜に手の空いている教員全員で捜索を行った。見たところ崖が崩れて海に投げ出された模様で、さらに海の中では上から落ちた土砂が積み重なっており探索は難航。小坂のものと思われる鞆の発掘により、小坂の生存は絶望的であるものと判断された」

「……………」

言っていることは理解できる。恐らく全員そうだろう。だけど理解したくない、納得できない。そんな感じだった。

「え？　え？　どういふこと？　??？」

状況を飲み込めていない女子の一人が周りに説明を求めるように顔を向ける。だが、それと顔を合わせる事ができる人はこの場にはいなかった。

そんな彼女の要求に応えるかのように、真嶋先生が補足の説明を加えた。

「小坂が昨日の説明の時に言っていた、海岸から落ちて死んだ場合というケースが実際に起きたということだ。これに関しては学校側のミスだ。指摘された以上、何らかの対策を取っておくべきだった」

他人事のように話しているが、俺を含めた全員が真嶋先生に問い詰めるような真似はできなかった。昨日の点呼の後零に一人にさせてしまったのは結局のところ俺たちだ。

それに真嶋先生の目の下に見たこともない隈ができている上に、服も着替えていなかったのか昨日のままで所々汚れが目立っている。

恐らく昨日あいつが行方不明になってからずっと搜索していたのだろう。よく考えると昨日の夜に点呼をして暫くしてから真嶋先生を見ていなかった。

潔く俺も正気に戻り、いくつかの質問を真嶋先生に投げることにした。

「遺体はどうなんですか？」

「見つかっていない。土砂を除ける重機がない中で、人力で掘り返すのは不可能だった。

鞆には簡易トイレが入っていたため、簡易トイレの段ボールが近くに浮上していたのでアタリをつけて回収できたが小坂を発見することはかなわなかった」

「それなら確実に死んだわけじゃあないんですね？」

「そう言う捉え方もできるが、確率は相当低いだろう。服を着たまま海に投げ出され、その上に土砂が乗っていれば圧死する可能性もある上に、窒息死することがほとんど確定的だ。太平洋に流されていったのならば、海流によつてどこかに流れ着いている可能性も考えられるが現実的なものではない」

「そうだとすると、あいつの死体を見ていない以上俺は信じません」

俺がそう言ったことが意外だったのか真嶋先生が少し目を見開いたような気もするが、すぐに普段の表情に戻った。周りのクラスメイト達は俺が積極的に発言していることに驚いているみたいだが、あいつの友達を名乗るならあいつを信じるだけだ。

あいつはそう簡単に死ぬような奴じゃない。それにあいつがいない今、Aクラスが分裂しかねない状況を何とかしてあいつが戻ってこれるようにしておくのが友達としてしてやれることだと思つた。

本心を言うならば、先生に交じつてあいつの搜索をしたい。

あいつの死体が本当にあるのならきちんと埋葬してやりたい。

だが俺が一人でやったところで大きい意味はないだろうし、学校側が試験を中止にし

ない以上教師に交じって搜索することの許可は下りないだろう。

だからあいつが帰ってきてても問題ないようにしておかなくてはいけない。それがあいつに返してやれる数少ないことだと思っから。

「そう思うなら好きにするといい。だが、学校側では死亡したものと判断したということだ」

「こうやって点呼を取っているということは、試験の中止はないんですよね？」

「中止にすべきだという意見も上がったが、学校側は強行することに決めた。手の空いている教員で搜索を続けながら、試験を続行する方針だ」

「あいつの分の点呼はどうするんですか？ それとリタイアにしないってことで点数の減少はないんですね？」

「リタイアもそうだが、点呼も同じく小坂の分はしないことになる。学校側で死亡したと判断した以上、それで減点することはない」

「わかりました」

そう言うのと真嶋先生は去っていった。これからまた搜索の方に戻るか、搜索状況の確認でもするのだろうか。周りを見るとクラスメイト達は皆落ち込んでしまっている。

無理もないだろう。クラスメイト…それも、ある意味クラスの中心にいたといつても過言ではない人物が事故で急死したなんて信じたくない。

だが、こんな状態ではこの特別試験を乗り越えるのは不可能だ。

「死んだ…なんて嘘だよね…?」

昨日あいつを引き留めようとした矢野さんがそう言った。恐らく彼女も今の俺と同じように頭の中でいろいろなことが渦巻いているのだと思う。

あの時、もっと止めていれば。

あの時、体を張ってでも止めておけばよかった。

あの時、きちんと零の苦しみをわかっていればこんなことにはならなかったんじゃないかな？

…俺のせいであいつは死んだんじゃないか？

そんな思いが頭に残っている。あいつの様子がおかしいのはわかりきっていた。それを放置するような結果にしてしまったのは俺たちだ。

でも、それでAクラスが崩壊したら誰があいつの居場所を守るんだ？

あいつが帰ってきた時に試験の結果が悪くてBクラス以下のクラスにするわけにはいかない。他でもないダチのためだ。俺がここで足踏みをすることなんて許されない。

「真嶋先生が言った通りなら生きている可能性は低いと思う」

「そんな…」

「だからこそ今ここで俺たちがすることは何だ？ 教師に隠れてあいつを探すことか？

教師と一緒にあいつを探すことか？ 遺体のない葬式をすることか？ 別れの言葉を済ませておけばよかつたと嘆くことか？」

「竹本君！ そんな言い方「俺はそうは思わない」…」

「…それなら俺たちがするべきことを聞かせてくれないか？」

「…それなら俺たちがするべきことを聞かせてくれないか？」

割り込んできたのは葛城君だった。普段の彼とは違い、その顔に頼もしさを感じるよ

うなものはない。だが、今すべきことを必死に探しているようにも見えた。

「この試験を中止にしない以上、俺たちが教師に交じって搜索することは不可能だ。学

校側が許容しないだろう。教師に隠れて搜索するのも非効率的だ。勝手にやる分には

問題ないだろうが、素潜りで土砂を取り除けるとは思えない。葬式なんて論外だ。俺自

身あいつが死んだなんて認めてないしな」

「……」

「馬鹿だと笑つてもいいぜ。でも俺にはあいつがそう簡単に死ぬような奴とは思えねえ

んだよ」

力強くそう言うのと周りのクラスメイトも同じように思ったのか、さつきまでのパニッ

クに陥る一步手前の状態から瞳に理性の光が見え始める。

「だから俺たちにするべきことは、あいつが帰ってくることを信じてこの特別試験でトップをとることだろ？ Aクラスの居場所をあいつに残しておくことじゃないのか？ あいつが帰ってきた時にAクラスのままじゃなかったらあいつに笑われちゃうぜ？」

そう言つて、あいつ零の笑い顔を想像しながら笑いかける。あいつが坂柳さんと葛城君の二人を馬鹿にした時のように笑つてくることを考えたら少しムカついてきた。

「幸いなことに、既に葛城君がCクラスとの協定を結んでいる。このままいけば順当に勝ち残るはずだ。だから俺たちは、体調を崩してリタイアしなければそれでいい。Cクラスをあてにしすぎるのも問題だが、今の俺たちが無理に動いたところでいい結果にはならないと思う」

「…そうだな、試験の方は俺に任せてほしい。できる限りの最善を尽くすことを約束しよう」

「最初からそのつもりだ。事実上この試験中のトップは葛城君なんだ。俺ができるのはこれぐらいで限界だから後は任せるよ」

「茂、感謝する。突然の事態で混乱していてみつともないとところを見せた」

「そんなの誰でもそうだろう、あんなこといきなり言われて動揺しないやつはいない」



俺自身も今は取り繕っているが、聞いた当初は叫びたくなるような感情が迸っていた。少しでも考え方が違っていたら、他のクラスメイト同様に黙り込んでしまっていた側だった。

「竹本君、ちよつと聞いていい?」

葛城君に進行を譲って他のクラスメイトたちの輪に戻ろうとしたら、比較的一緒にいることの多い沢田さんに声をかけられた。

「どうかしたか?」

「…なんで竹本君はそんなに落ち着いていられるの? 小坂君とは仲良くしてたよね? ショックじゃなかったの?」

自分では内心いろいろな感情が渦巻いているが、他の人から見たら落ち着いているように見えたみたいだ。気が付くと他のクラスメイトも同じようにこちらを見ていた。

「…俺はあいつのダチで坂柳さんとか葛城君を除いたら、確かに一番付き合が多いと思う」

「じゃあなんでそんなに落ち着いていられるの?」

「だからこそだ。あいつのせいでクラスが崩壊しましたなんてなったらあいつが報われないだろ?」

「!!」

「みんな参ってる今だからこそ友達の俺が頑張らないといけねえんだよ。こんな時ぐらいいじゃないとあいつに何もしてやれないんだ。普段借りてる借りを返すにはこんな時ぐらいいじゃねえとねえんだよ」

自分自身に言い聞かせるようにそう言い切った。そして、俺の気持ち伝わったのか彼女も納得した様に頷く。

「…そうだね。小坂君のおかげで今のAクラスがあるんだから、帰る場所ぐらい残して恩返ししないとね」

彼女がそう言うのとクラスメイト達も次々とそれに同調していった。

…お前の居場所は俺たちが守るから、きちんと帰って来いよ零。

最初に違和感を感じたのは、昨日Aクラスの拠点に入った時だった。堀北と一緒に他のクラスの偵察をしていた時だが、初日に食い掛かってきた弥彦と呼ばれていた取り巻きがおとなしく拠点内部にオレたちを案内した。

初日の対応を見たら間違いないと追いつき返されると思っていたのだが、そんなことはなくリーダー格である葛城のいる洞窟の内部に案内された。その後、Bクラスの対応とほとんど変わらないほど好待遇だったことに違和感を感じた。

Aクラスの人間はDクラスを軽視していると思っていたし、初日に会った弥彦はその傾向が顕著に出ていた。それが、一日も経たないうちに対応を180度変えていたのだから違和感を覚えるのも当然だろう。

だが、一番感じた違和感はこの2日間小坂を見ていないことだ。

初日にAクラスを去って一人で何処かに行くのを見て以来、小坂を見ていない。単独行動をしているからだとも思ったが、島の中で生活できそうな拠点を探してみても何処にもいなかった。

葛城達に聞いてみたが、少し顔を顰めて言うことはないと言われ追いつき返されてしまった。何処かで生存しているのであれば飲み水の確保や食料の確保をしていると思うし、何より初日にあんなことを言っておいて何も仕掛けていないと思う方がおかしい。

そう言えば、Aクラスの近くにある海岸沿いの崖が崩れて立ち入り禁止になっていると聞いた。

もしかしたら小坂が関係しているんじゃないか？

確か、近くに行ってみたら教員が何かを搜索しているみたいだった。もしかして小坂

は本当に事故に見せかけて邪魔なやつを始末したのではないか？

だが、それだと誰を始末したのかが疑問だ。事故があつたのは茶柱先生が言うには初日の夜中だと言っていた。

その後、他のクラスの拠点に足を運んだが、どのクラスも事故に巻き込まれて人が減っているような感じは見受けられなかつた。

クラスメイトが事故に遭つたのなら、それをクラス全員が隠しきるのは不可能に近い。一番可能性があるのはAクラスだが、小坂が自分のクラスメイトを手にかけても大きなメリツトはない。

…さてよ、もしかして事故に巻き込まれたのは小坂なんじゃないのか？

自分であんなことを言っていたから、つきり他のやつを嵌めて始末したものだと思っていたが、本当に事故で行方不明になつたのではないか？

そうだとしたら葛城達が顔を顰めていたのも納得できるし、あいつに会っていないのも当然だ。そうだとしたらこれまでの違和感の全てに説明が付く。

弥彦が急に態度を変えたのも、級友が死んだとなれば納得できる。クラスメイトの死によつて落ち込んだ後に立ち直つた結果、冷静に自分を見つめ直した結果冷静に行動するようになったのかもしれない。

そう考えると、もしかして事故に遭つたのも計算なのではないか？

Aクラスの慢心を剥がすために自分の死を偽装した可能性がある。学校側が死んだと判断すれば、得点の減少を受けることもない。

他ならぬ小坂自身がそれを初日に質問したのだから。

やっぱり事故にしては出来過ぎている。そうなるかどうかやって事故に偽装したかが問題だ。それと、どうやって今生存しているかも問題だな。GPSがあることと海岸沿いを検索していたことを加味すると、GPSが最後に示した反応は恐らく海岸沿いの海。

島にはいないが、海の中で生活できるような人外というわけではないだろう。

そうなる島ではない何処かに生存している可能性があるのか？

だがこの辺りに島があることなんて知らないし、あいつも知っているはずがない。仮に知っていたとしても、水平線が広がるこの島から他の島まで泳いでいくのは現実的じゃない。

…いや、調べていない場所がもしかしたらあるのかもしれない。生活の痕跡を消して移動し続けている可能性もあるが、水と食料を確保しない以上はそう多く活動できないのが人間だ。

そして、その水場も他のクラスが確保しているから残りはポイントを使うしかない。初日にあいつが出していた気配は、以前の図書館とDクラスでのそれと同じ…いや、

もつと禍々しく気持ち悪いものだった。だから、オレは未だにあいつを警戒し続けている。

初日にあんな質問をしたのだから何かを仕掛けてくると思うのだが、直感的にはそうじゃないと警告されている感じもある。

オレは大きなため息を一つ吐き出すと、生活拠点にできそうなところと水を確保できるところをもう一度探すことにした。

# 幕間　　く泡沫の夢、夜が明けるく

「あんたなんて産まなければ良かった！」

何時頃だっただろうか？

母親にそう言われるようになったのは。少なくとも中学三年生のころには言われるようになった。

何時頃だっただろうか？

自分のことを『私』と言うようになったのは。少なくとも中学三年になってからなのは確かだ

何時頃からだっただろうか？

母と会話しなくなったのは。家にいても会話が消えたのが中学三年の終わりぐらいだったのは覚えてる。

何時頃だっただろうか？

母と会うことがなくなったのは。高校生の時には月一ぐらいで顔を出していた。しかし、大学生になってから実家に帰ったことは一度もなかった。

何時頃だっただろうか？

マイナスになりたいと思ったのは。自分よりもひどい状況にある人達を見て安心しなかったのかもしれない。

何時頃だっただろうか？



自分自身が不安定になってしまったのは。ここ最近、話しているうちに口調がどんどん変わっていくことが増えていた。

は？  
いったい何時頃からだったのだろうか…こんなに大事な記憶すら忘れてしまったの

……夢を見ている。

---

…この世に生まれなければ良かったと思っただことはあるか？

…自分が何者なのか知りたいと思っただことはあるか？

…死んでしまいたいと心から思っただことはあるか？

…自分の存在を不思議に思ったことはあるか？

…この世界に疑問を思ったことはあるか？

そしてそれを他人が教えてくれるなんて本当に思ってるのか？

まあ、  
私には何も見つけられなかったことだが。

小坂著

……夢を見ている。

人を壊したことはあるか？

人を見捨てたことはあるか？

人を憎んだことはあるか？

人との縁を切りたいと思ったことはあるか？

それを本気でしたいと思った結果が小坂零お前だ。

……  
夢を見ている。

……  
夢を見ている。

---





ないでいいことだが、「小坂零」という人物を知る上では必要なことを話しておこう」  
 『いや、その前に答え合わせからだね。確か、「なぜ彼がプラスの連中、ましてや天才達エリートなんかと仲良くしていられるのか」だったっけ?』

『まあ、答えと言つても前に「私」に言ったことがそのまま答えだよ。彼自身が普通からマイナス過負荷になつたということがそのまま答えだ。要するに不安定なんだよ彼は』

『彼の人格形成には3つの柱がある。「自己嫌悪」、「自己改造」、「マイナスへの憧れ」の3柱が彼の人格を作っている元だ。「自己嫌悪」は単純に「自分がいなかったら母親は離婚した後<sup>に</sup>に苦しまなくて済んだ」という考えのもとから来ている。その「自己嫌悪」がそのまま自身に対する過小評価にも繋がっているんだ』

『あ、それと今の彼の場合はマイナスになつたから自分は誰よりも下にいるって思っているせいもある。それに間違いはないけど、彼の場合卑下しすぎてマイナスらしい振る舞いとは言えなくなっている場面もいくつかあるね』

『2つ目の「自己改造」は文字通り、自分自身の人格を改造した結果だ。考えてみてほしい、中学3年生ぐらいの思春期真っ盛りの子供が無理やり一人称を強制されるとどうな

るのかを。社会人になって目上の人と話すときには「私」と言うのが一般的だ。だから、そこまで弊害が起こるようなものではないと思う人もいるだろう』

『だけど、彼の場合私生活もすべて「私」に統合することを強制された』

『その結果起こったことは、彼は「私」という仮面をかぶることじゃなくて「俺」を「私」に改造した。15にもなっていない年齢でそんなことをしたんだから自分の口調がころころ変わるのも当り前さ。なにせ彼の周りで自分のことを私って言うのは女性しかいなかったんだから』

『彼自身は当然「男」だからそれを意識して「私」になるように調整したはずなんだろうけど、15にもなっていない彼がそんなことできるはずもなく時々周りに引つ張られて女の子と間違われるような口調の会話が混ざることになったんだ。幸い彼は学校でそれなりに友達もいて嫌われものじゃなかったから、当時いじめにあうことはなかったけど普通に気持ち悪かったと思うぜ?』

『だって昨日まで普通に話していた友達が、時々オネエみたいな口調を入れてきたら気

持ち悪く感じても仕方ないと思うよ。俺は』

『まあそんな訳で不安定な「自己改造」をした結果、もつと不安定な人格を自分で形成しちゃまったっていう話だ』

『そして最後の「マイナスへの憧れ」だが、これはそもそも彼自身に「マイナスの素質」が全くなかったことが根底の原因だ』

『前に「彼が球磨川先輩に匹敵しかねない過負荷」って言ってたって？ それに嘘はないさ。けど、彼には素質はない。今のが持っているのはあくまで気質だ。今は個人的な性質として持っているけど、彼自身に生まれ持つて過負荷を持つ者という素質はない。強いて言うなら、彼自身の本質が少しだけ過負荷マイナス寄りだったぐらいだね』

『わかりやすく言うと、生まれつきの過負荷としての素質はなかったけど後天的に過負荷に目覚めたということだ。そして、生まれ持つて過負荷を持っていなかったから彼は過負荷としての振る舞い方を理解していない。気質としてはマイナス的に優れたものを持つているから、無意識的にマイナスの振る舞いをすることはあっても、彼自身が深

く考えている時には元々の普通の考え方が基本になっているということだ』

『彼が自分自身の意思に反して過負荷を垂れ流していた時なんかがいい例だろう。特別試験の説明で質問をしていた時の「私」と言っているのか怪しい「私」は間違いなく過負荷だった。それも、完成された過負荷と言つてもいいくらいのお手本のような過負荷だった。それこそ、「無冠刑」があればすべてを台無しにしていたであろうぐらいの』

『だけど、結局「私」の自由意志の下でとつた行動ではない。彼自身の根っこは普通の人間だからね。だから生まれつき素質がなかったことを本能的に知っていたからか、自分が持っていない「マイナス」というものへの「憧れ」が非常に強く定着してしまったというわけだ。それこそ、その世界にない過負荷という概念を生み出すほどに』

『ま、あくまで「俺」の推論でしかないけどな。これが本当に真実かどうかを判断するのは何時だつて見た人それぞれのことだ。世の中なんてそんなものだろう?』

『強い人には強い人の、弱い人には弱い人の、孤児には孤児の、貴族には貴族の、平民に

は平民の、正直者には正直者の、嘘つきには嘘つきの、いじめっ子にはいじめっ子の、いじめられっ子にはいじめられっ子の、勝者には勝者の、敗者には敗者の、神童には神童の、落ちこぼれには落ちこぼれの、主人公には主人公の、モブキャラにはモブキャラの、異常には異常の、特別には特別の、普通には普通の、過負荷には過負荷の』

『物の見方とか受け取り方つてもんがあるだろう?』

『何時だって決めるのは自分自身だ。それが正しかろうが正しくなからうが、自分が納得できれば人間ってのは概ね満足するものさ』

『こんなことを話しているうちにそろそろ時間のようだ。泡沫の夢ももう終わる。現実の時間では特別試験最終日で、もう少しで夜が明ける時間といったところか?』

『それじゃあ「私」を迎えに行こうか。いい感じに過負荷も馴染んだ頃だろうしね』

夢から覚めた。どれぐらいの時間がたったのかはわからないが、多くの昔の自分を何回も追体験したような感覚だった。

例えば「5歳で施設の職員の人たちをろくでなしにしてしまった自己嫌悪によって自殺した自分」、または「前世の中学生と高校生ぐらいの記憶を思い出した自分」、あるいは「前世で死んだときに何も残せなかったことを悔やむ自分」、後は「本気で過負荷になることを望んだことを自虐する自分」とかだった。

自分でもあまり覚えていない自分を見せられるという何とも不思議なものだった。恐らく、私の精神が過負荷によって自分で完全に壊されてしまう前に『俺』が記憶を封じていたのだろう。私が壊れてしまわないように、精神が壊れるという縁を切ったのだと思われる。

縁を切ったはずなのに、それでも自分の持つ過負荷によって再び精神が壊れていく。3回も精神が壊れるという縁を切ったはずなのに過負荷故の貧弱さから再び精神が衰

弱する。

強制的に精神を壊さないようにしていたのだから当たり前と言えば当たり前だろうが、『俺』に会うのがもつと遅かったら私は『私』を殺して完全に過負荷になっていたかもしれない。

それと私が精神的に壊れていったのとは別の記憶も見た。それは「私が最初に死んだときに『俺』に会った」記憶と、「5歳で自殺した後『俺』に会った」だった。

最初に会った時には、『俺』も発現したばかりで要領がよくわかっていなかったみたいで、お互いにあたふたして見ていて見て面白かった。

二人で話し合った結果、なぜかは知らないが転生することだけはお互いに理解していたみたいだった。そのため、転生した時にすぐに過負荷が目覚めないという取り決めだけ決めていた。転生していきなり過負荷<sup>マイナス</sup>が目覚めたら、親から気味悪がられたりするんじゃないかという配慮のもとだった。

まあ意味はなかったことだが。生まれがまず捨て子だった上に、元の過負荷量<sup>マイナス</sup>が多すぎたのか普通にしても気味悪がられていた。

問題は転生した時にすぐに過負荷が目覚めないという取り決めのせいで、私が『俺』のことをすっかり忘れていたということだ。そのせいで今の今まで私は『俺』の存在を

すっかり忘れてしまっていた。

次に会った5歳で自殺した後は、そもそも私の精神状態を考えたのか『俺』が事件直後の記憶という『縁』を切つて元の状態に無理やり戻すという力技をしていた。『俺』が5歳の私に鉦無慈悲を突き刺すところは見ているだけでとても心を抉られた。

『俺』はとても苦悩しながら私に鉦無慈悲を突き刺したのだろう。知らなかったとはいえ損な役回りを押し付けていたことを思い知らされた。

それらを思い出して、漸く私は『小坂零』になった。生前の普通ノーマルを味わい、過負荷マイナスの戸口をなぞり、そうして漸く過負荷として生きていくことを決めた。過負荷マイナスとしての『自分』の形成。

そう、言うなれば『負完成』だ。

球磨川先輩の『負完全』とは違う、もう一つの過負荷としての在り方。『完全な負』に對して、『完成した負』というアプローチ。普通ノーマルとプラスと過負荷マイナスを併せ持っていた状態から、過負荷マイナスだけの状態へと変化した様。

…なんて御大層に行つてみたが、なんてことはない。私が完全に過負荷になっただけだ。それも、普通の視点も併せ持っているだけの過負荷へと。



あくまで記憶を思い出したのであって、記憶を忘れたのではない。過負荷として目覚めはしたが、それと同じように普通だった時の記憶を見せられた。

故に、何もなしに学校崩壊させるほど過負荷ではない。

故に、理由なしにエリートを皆殺しにするような気もない。

ではなぜ『負完成』を名乗るのか。

それは、過負荷の完全な制御を可能としたからだ。以前までのHIGH、LOWだけでなく、ON、OFFも自由自在。わかりやすく言うなら、江迎怒江さんが『荒廃した腐花』の完全制御に成功したようなものだ。彼女ほど制御の利かないじゃや馬の過負荷ではないが、イメージというならこれがわかりやすいだろう。どっちの制御が簡単かといえば確実に『無冠刑』になるが。

さらに、普通であった記憶を刻み込んでいるためどんなにプラスになろうが私の過負荷の絶対量が減ることはない。これは過負荷を完全に制御できるようになったことと、普通だった時の記憶があったことが大きな原因だ。

球磨川先輩たち生まれつきの過負荷だった人とは違って、私には普通だった時の記憶がある。私が既にプラスを体験していることでこれからどれだけプラスになろうが、既にプラスだった時のことを知っているため私の本質である過負荷に影響は出ないという理屈になっている。どれだけプラスを感じようと、私は『無冠刑』で過負荷なのだ

から。私そのものを変えてしまうぐらいの出来事があれば揺らぐこともあるかもしれないが、よっぽどのがない限り私は永久に過負荷のままだ。

これこそが、『負完成』。「完成された負」になったことで、完璧な過負荷の制御と完成したマイナスの絶対値を手に入れた。

それと『鉈』を出せるようになった。精神世界だからかもしれないが、今の段階で出せて当たり前という感覚がある。この感覚を忘れなければあつちに戻っても問題なく使えるだろう。形状は今の『私』の頭に突き刺さっているであろうものとまるつきり同じだ。

尤も、人目にあまり見せられるようなものではない。あまりやりすぎると入学初日に想定していた研究所送りも考えられる。

『無冠刑』<sup>ナッシングオー</sup>の完全な制御に成功した今、『私の鉈を見たという縁』を切つてしまえば問題ないのかもしれないが、一人一人それをするのも手間だ。何せ、他の人の縁を切るには鉈を突き刺さなければならぬのだ。そのため他の人に見られたら確実に殺人現場になるだろう。一応球磨川先輩の『却本つくり』<sup>ブツクメーカー</sup>と似たようなもので、外見はシヨッキンダが肉体へのダメージはほとんどない。

私がそういう風にすればという一文が付くが、『負完成』を名乗っている以上、過負荷を練り込んだ鉦を突き刺すことで身体的にダメージを与えることなど造作もない。肉体的にも精神的にも完全に殺すことができる。

ところで、今はどれぐらい時間がたったのだろうか？

試験に戻ったらAクラスのクラスメイトに、とりあえず謝らなくてはいけないと思つた。今思えば、彼らにも酷いことをしてしまつた。普段他の人の間を取り持つ私が、こんな状態だつたら他の人が困つていただろう。茂の言葉も無視してしまつていた。普段そこまで話さない女子：確か矢野さんまで私に言葉を投げてきたぐらいだったから、よっぽどひどい顔をしていたのかもしれない。

それに、こういう団体で動く様な行事で単独行動するような人がいればそれだけで問題だろう。点呼までに間に合うのだろうかこれ？

そうしているうちに目が覚めた。気が付くと、頭に刺さっていた鉦も自分の心臓を穿っていた鉦も消えていた。直立したまま意識を落とされていたらしく、立つたままの状態だったが足や体が辛いという感触はなかつた。

あくまで精神世界だからだろう。肉体的にはほとんどダメーじはない。

『やあ、お帰り。これまた随分な過負荷マイナスになったね』

「ただいま。おかげでこれぐらいはできるようになった」

そう言つて右手に鉈を握る。握りしめた感覚は手にとてもよく馴染むものだった。

それを見て、『俺』は嬉しそうな顔をしている。私も思わず笑顔になった。

『それだけ馴染んだらもう大丈夫だろう。急に過負荷マイナスが湧き出たり、過負荷マイナスが変質したり、自分が自分じゃなくなる感覚もなくなるはずだ。「私」として確固たる自我と「負完成」足りうる過負荷マイナスを獲得した今の君ならね』

「そう言つてもらえると嬉しいよ。ところで夢を見てから聞きたいことがあったんだが  
いいか?」

『俺に答えられるものなら答えるよ。さしずめ、今の現実の時間とかかい?』

「それもあるんだけど、一番聞きたいのは何で私が転生したのかつていうことだ」

『…そつちか』

「答えられないなら別にいい」

『あ…まあいいか。話せる範囲だけどいいか?』

「もちろんだ」

そう言つて彼は話を始めた。

曰く、過負荷マイナスもスキルもない世界で過負荷マイナスなんて言うものに目覚めてしまったせいでは生きていた世界からはじき出されたんじゃないかということ。

曰く、この世界に転生したのは人間としてのオーバースペックが多少許容されていたからじゃないかということ。

曰く、過負荷マイナスになった理由は死ぬ直前にマイナスになりたいと強く願ったことで過負荷に目覚めたのじゃないかということ。

曰く、『俺』が誕生したのは私が過負荷マイナスに目覚めたからだと思われること。

一つ目は、私が最初の人生を歩んでいた時の世界の話だ。その世界は正真正銘普通の人間しかいない世界。坂柳さん並みの特別な思考能力を持つ人はほとんどいない世界。綾小路君並みの異常な心理掌握術を持つ人間なんて一人もない世界。

そんな世界で、癌細胞とも呼ぶべき異物が過負荷わたしだった。『死』という概念の『縁』を切り離すことで、『死』を覆すことすら可能とする過負荷癌細胞。

恐らくはそんな存在になってしまったから、私が死んでいるうちに世界が私を切り離したのではないかという話らしい。自分の世界に許容できなくなってしまうから他の世界に押し付けたのではないかという推論だった。

二つ目の人間としてのオーバースペックが多少許容されていたからというものは、わ

からなくもなかった。綾小路君<sup>主人公</sup>の活躍ぶりは原作を最初の方しか読んで、見てないのでそこまで知らないが、前世で見たところは記憶を追体験したおかげですべて思い出した。それで思い出したものと当てはめると、頭が良いと言っただけでテストの点数を50点で揃えられる人間なんて前の世界ではまずいない。頭が良いから100点で揃えましたが言っただけがまだ説得力がある。50点に調整することを試みて実際にできるようなスペック<sup>異常さ</sup>を持つ人間は前の世界にはいない。

だが、この世界ではそれができる人間が割と頻繁にいる。恐らく、有栖でもやろうと思えばできるだろう。それに原作の水泳の授業では、確か高円寺君がオリンピックでも目指すのかと言わんばかりのスペックを發揮していた。こういうところでも人間としてのオーバースペックが多少許容されていたと言えるだろうと結論付けたらしい。

過負荷<sup>マイナス</sup>とは人間の可能性だ。プラス<sup>生</sup>を生きる人間に在り得るかもしれない人としての真逆の可能性。それこそが過負荷<sup>マイナス</sup>という存在なのではないか？

だからオーバーな低スペックである過負荷がいても、この世界は許容しているのではないかと言う推論だった。

三つ目の過負荷<sup>マイナス</sup>に目覚めた理由は説明されても私にはいまいちよくわからなかった。

『俺』が言うには、『死』という極限のマイナスな状態でさらにマイナスになりたいなんていう、ありえない願望と信念がなした結果だろう』とのこと。

言っていることはわかるが、それくらいでなれるものなのか、と聞いたら『逆に聞くけど、死ぬときにさらに死にたいなんて誰が思うんだい?』と返された。一応納得はしたが、別に死んでなお死にたいと思つたわけではないのでいまいちよくわからなかった。

四つ目の『俺』が生まれた理由は、外付けの過負荷制御装置なのではないかというものだった。私がいなければ存在することすらなかった、というのはその予想によるものらしい。

私がむやみやたらに過負荷を出しすぎないための制御装置として発現したという予想だった。私の精神が壊れるたびに完全に壊れないように記憶を封じ込めていたことが一番わかりやすいだろう。

彼は私に対して忠誠を誓つた従者のように忠実だった。私を殺さないように、私の精神を壊さないように私が知らなくても手を尽くしていてくれた。

『平和<sup>ピースメーカー</sup>癌望』を作れたのも過負荷制御装置の役割を持つているのなら、それを応用すればそう難しくないんじゃないかと思つて作つたものらしい。『私』の過負荷<sup>マイナス</sup>を抑えることはできたから、それを応用すればそこまで難しくはなかったそうだ。

『まあこんなところだろう。あくまで予想だけどね』

「大体分かった。ありがとう」

『お礼を言われるようなことじゃない』

そう言うが少し照れくさそうにしている『俺』を見てみると少し微笑ましかった。鏡を見ながら自分で同じことをやったら確実に気持ち悪いと思うが。

「それでどうやれば現実に戻れるんだ？」 『無冠刑』<sup>ナウシツグアル</sup>で『精神世界と縁』を切れればいいのか？」

『それでもいいけど、それをするともれなく海の底で意識を取り戻してお陀仏エンドだぜ？』

そう言えばそうだった。私の肉体って確か、崖から落ちた上に体の上に崖の土砂が積もって『無冠刑』がなかったら即死していたんだった。

今でこそ『俺』が『肉体の死』という概念との『縁』を切っているから死んでないが、この状態で復活しても死ぬだけだろう。

「それじゃあどうすればいい？」

『俺が君を無理矢理ここから追い出す。その後、自分で「崖から落ちたという縁」を切れば恐らく問題ないと思う』

「それだと私の肉体の損傷もなくなったりするの？」

『微妙なところだね。死にはしなないと思うけど、既にあの事故から5日は経ってるから完全に無傷にはならないかもしれない』



「5日!？」

思っていたより時間が経っていたことに驚いた。長い時間夢記憶を見たいし、同じ夢も何度も見ていたが、ここまで時間が経っているとは思わなかった。精神世界は現実世界とは時間の流れが違うかもしれないと思っていたこともあるし、夢を見る形で記憶を見せられていたから体感時間もぐちゃぐちゃだった。

『これでも頑張ったほうなんだぜ? 「肉体の死」の方を抑えながら作業するのは大変だったんだ。それに加えて「平和癌望」も併用していたからこれが限界だった』

「あ、なるほど。言われてみればそれもそうか」

とても納得した。ただでさえ『無冠刑』ナカシンクォールを2つ以上同時に扱うような暴挙を行っている上に、『平和癌望』ピースメーカーまで使っていたのだ。

いくら私の過負荷マイナスそのものだと言っても、負担がまるつきり消えるわけではないのだろう。今の私でも使えない『平和癌望』ピースメーカーまで使っていたのだ。どれだけ負担がかかっているのかを考えるべきだった。

「すまない、不用意な発言だった」

『だけど事実だ。本当はもつと早く終わらせられれば良かったんだけど…』

「いや、ここまでしてくれたんだから文句を言うのはお門違いだ」

『…そうか。今度直接会うことは当分先になるだろう』

「…よく考えたらそうか。死にかけるたびに会うとしたら次に会う時は当分後でいいしな」

私がそう言うと『俺』も苦笑いをしていた。

そしてお互いにするべきことがわかっているからか、お互いに言葉を交わさずとも次の行動に移った。

『俺』と私は同時に既に持っている鉈を握りしめる。私はそれを自分に向けて、彼は私に向けてそれを振り下ろした。

『無冠刑!!』  
ナッシングオール

まったく同じ声が二重に重なり私の体を鉈が貫き、私は意識を再び深い闇の中に落とした。だが、崖から落ちたときの絶望しきっていた気持ちはもう消えていた。

## 21話目 特別試験 最終日

……ここはどこだ？

見たところ洞窟みたいなどころか？

体の下半分は水に浸かっているが、立えないほど深さはない。

……よし、鉈は出せる。『俺』と会ったことは夢と言うわけじゃなかったみたいだ。

『無冠刑』<sup>ナツシグオール</sup>がきちんと使える感じがする。

……だけど過負荷<sup>梅</sup>との対話はできないみたいだ。私を無理矢理追い出したと言っているからもしかしたら前みたいに感覚で対話できるようになるには、少し時間がかかるのかもかもしれない。

そう思った瞬間、左手に痛みが走った。思わず鉈を落としてしまう。落ちた鉈は元から何もなかったかのように跡形もなく砕け散った。

『崖から落ちた』という『縁』を切ったつもりだったのだが、やはり時効だったのかもれない。海の底にいるわけではないが、崖から投げ出された状態であることは変わらない。それに思ったより肉体へのダメージがあった。

右手……損傷なし。

左手……強く打ちつけたみたいでかなり痛むがそれだけ。

右足……土砂に潰されたのか全体が痛む。立ち上がることはできたが、走ることは難しいだろう。

左足……土砂と言うよりは岩みたいなものにぶつかったのか、一部だけ負傷。動けないほどではない。

左手の腕時計は打ち付けられた時に壊れたのか、左腕にあつたはずの腕時計が消えている。

そしてここは……島の側面にある隙間に上手いこと流れ込んだということか？

恐らく島の側面が縦に割れた隙間と言ったところだろう。潮の匂いがすることから下半身が浸かっている水は海水だ。

体温を非常に奪われているが、夏場だからか凍えるほどの寒さではない。靴も見当たらないし、この身一つでこの場を乗り切らないといけない。

それに『俺』が言っていたことが正しければ、もう5日は経過していて最低でも今6日目でもしかしたら最終日だ。

早くここから脱出しないと置いて行かれることになる。まさかもう試験が終わって

島にいないという事態にはなっていないはずだが、そうだったらどうしようもない。

そうなる本格的に置いてけぼりをくらってしまふ。『死』との『縁』を切り離すことで生存することは可能だが、来年の試験を待つのは流石に厳しい。

それにこんな場所普通は気づかないから、そのまま考えるのをやめた究極生命体みたいになつてしまふ。

『ここにいる』という『縁』でも切ってみるか？

いや、これをする『この世界』から弾き飛ばされる気がする。『ここ』というのを『地球』と解釈されるだけで宇宙に投げ出されることさえあり得そうだ。そうなるもまた考えるのをやめることになる。

ある意味欠点らしいといえそうですが、マイナス過負荷だからと言って諦める理由にはならない。

おとなしく泳ぐことにしよう。この前の授業では見学に回ったので泳いでいないが、前世では泳げたから多分泳げるはずだ。

そう思った私は服を脱ぎ始めた。水を吸った服は重い。そのまま泳ぐのは水泳選手でも結構きついと聞いたことがある。体にある傷跡を他の人に見られないことを祈って、パンツ以外の服を全て脱ぎ捨てた。

幸いなことに海水が染みるような傷はなかった。打撲のような傷が主だったので海

水に全身が浸かっても痛いということはない。古傷に染みるかとも思ったがそんなことはなかったので安心した。

そのまま海に潜って泳ぎ始めた。ゴーグルがないので手探りになるが、早急に試験の拠点に戻らないといけない。一応事故のはずだから、これで戻って状況を聞いたら説明ぐらいはしてくれるだろう。

そしてなによりも、早く戻らないと置いてかれる可能性もある。体力の限界も考えないと早急に戻らないといけない。

潜って泳ぎ、戻って息が持つぐらいのところの上上がった。運良く海面に出れたので酸素を確保できる。もしさつきまでいた場所がもつと奥の方だったら最悪窒息死していた可能性もあった。

海面に出たすぐそばに、恐らく試験会場の無人島があった。よく考えたら流されて見知らぬ島の洞窟に流されていた可能性もあったのか。もしそうだったら完全に詰みだ。

とりあえず島の壁伝いに泳ぐ。パンツだけでも結構水を吸って重たくなっているように感じるから服を脱いだのは正解だった。

泳いでいくと、土砂と思われるものや岩が大量にある場所を見つけた。上を見ると崖が崩れたような跡になっていることからここが私が落ちた場所だったのだろう。とり

あえず何処か別の島に流されたという線は消えたようで安心した。

他の島に流されてなかったのはいいが、この上をよじ登っていくのは無理だ。右手以外の四肢が動けないほどではないとはいえ負傷している今、ロツククライミングができるような余力はない。

暫く島の外周を泳いでビーチになっているところや、最悪船のある場所まで泳いでいかないといけない。

事故現場と思わしき場所には立ち入り禁止の看板のようなもので上の崖が封鎖されているが、搜索している人はいない。学校側では私が完全に死んだものとして扱われたのだろう。

とりあえず岩につかまって息を整える。時間に余裕がないとはいえ、無理に泳いで途中で力尽きたらそれで終わりだ。『力尽きるという縁』を切ることもできるだろうが、それが待つ未来は寝ることすらできない地獄だ。

力尽きることがないということは休息が必要ないということに等しい。

そのため『力尽きることがないという縁』を切った場合、力尽きることはないが休息をとることもできなくなる。

必要ないものを無理に取ろうとしないように、勝手に体を作り替えることと同義だからだ。

そもそも過負荷マイナスと言うぐらいだから、そんなプラス向きの使い方はできるわけがない。前まではこの辺の区別がわからなかったが、今となっては大体感覚でわかる。

だから『無冠刑こ』は多用できるようなものじゃない。使えば使うほど全てを台無しマイナスにするものだから、使い時は考えなければいけないのだ。

『負完成』となった今だからわかる。これは思つたよりもどうしようもなく欠点マイナスでしかなく、どうあがいても利点プラスとしてのみ扱うことはできないということが感覚と心の両方で理解できる。

理解したからこそ、今の状況では自力で何とかしないとイケないわけだ。過負荷マイナスは完全にOFFにしたままにしている。ちよつと出したらそのまま岩が崩れましたとかシヤレにならない。

息を整え終わった私は島の外周に沿って泳ぎ始めた。正直パンツが邪魔で脱ぎ捨てたい衝動に駆られるが、流石に全裸を他のクラスメイトに見られるのは嫌だった。

水を吸って重く感じるのもあるのだろうが、やつぱり5日以上気を失って海水に浸かっていたのも大きいのだろう。疲労感と倦怠感が身体から抜けていない。

ただひたすら泳ぎ続ける。時折外壁につかまったりして息を整える。呼吸を乱すとペースダウンを起こすのは運動をやっている人ならよくわかるだろう。とは言っても、





森を横目に、海を横目に、半裸の男が走り続ける。

文字にしたらとても変態としか思えない有様だが、残念なことに何か身に着けるものを探すような余裕はない。

時折小石を踏み抜いたりもしたが、そんなことにも目をくれずただひたすら走り続けた。

そうしてどれほどの時間が経ったのかはわからないが、遂に私は人がいっぱいいる場所に出ることが出来た。

---

…やられた。

まさかDクラスに出し抜かれるなんて…。

特別試験の日程が終わり結果発表が行われた。

結果はAクラス120点、Bクラス140点、Cクラス0点、Dクラス225点だった。Cクラスと協力関係を取っていた俺たちは一方的にやられたと言ってもいい結果だ。

どうしてこんな結果になったんだとか葛城君は何をしてたんだか思ったが、他のクラスメイト達が葛城君に突つかかっているのを見て思い直した。

むしろ、なぜ俺たちは全て葛城君に任せていたんだ？

もつと手伝えることがあつたのではないか？

俺たちは本当に胸を張ってAクラスの一員だと言えるのか？

こんな寄生虫のような有様が本当のAクラスの姿なのか？

負けた責任を押し付けているようではAクラスのままでいることは難しいだろう。Bクラスとの差が大きくないことが唯一の救いだ。BクラスとDクラスの点数が逆だったらかなり切迫していたかもしれない。

そして他のクラスメイト達が葛城君を囲んでいた時に、真嶋先生がまだ前に立つたままであるということに気付いた。

「結果に一喜一憂することは構わないが、ここで大事な連絡を一つ追加させてもらう。

既に各クラスで説明されたかもしれないが、初日の夜8時30分ごろに崖が崩れる事件があった」

もしかして…

「その時には説明されていなかったと思うが、実はこの時に一人の生徒が崖崩れに巻き込まれて行方不明となっていた」

…やめろ。

「学校側は試験の続行と並行して行方不明となった生徒を捜索していたが、遂に今日まで見つかることはなかった」

…やめてくれ。

「そのため、今この時をもって行方不明となった生徒を死亡したものと確定づけることになった。不慮の事故とはいえ学校側で用意した特別試験でこのような結果になってしまつてとても心苦しいが、休憩に入る前に生徒諸君に黙祷していただきたい」

……

周りの事故に巻き込まれたと言われたときに起きていたざわめきも、この時にはすでになくなっていた。自分たちが試験をしていた中で同じ学校の誰かが死んでいたことにショックを隠しきれない人が多く、Aクラスの中には今にも泣き崩れてしまっ

うな人もいた。

「それでは生徒諸君、黙祷」

…認めたくない。認めたくないが、現実を受け入れる時間になってしまったらしい。目を瞑ればあいつとの他愛ない日常を思い出す。

最後にあんな別れ方をしてしまったことに後悔を隠しきれない。

そんな思いで黙祷をしていたら、不意に袖を引つ張られた。

そして、顔を向ける前に口を湿った何かでふさがれた。

「!?!」

「静かに」

俺にしか聞こえないような声でそう言われた。恐らく手で口をふさがれたのだろうが、この声には聞き覚えがある。

もしかして…いや、そんな幻想を夢見ても現実は変わらない。

??そう思っていたらいきなりジャージの上を脱がされた。

「!?!?!」

「思わず体をよじらせるが、既にジャージはとられてしまっている。だが、周りも俺が

おかしいことに気付いたのかこつちを向いていた。

そしてそこにいたのは、俺のジャージを上に着て下はパンツしか履いてないあいつ  
だった。

.....  
!!???!?!?!??

なんかよくわからないけどクラスメイトや他のクラスの生徒たちも教員も全員目を  
瞑っていたので手近にいた茂のジャージの上をはぎ取って上に着ることに成功した。

それに気づいた他の生徒たちが私を見たが、私を見るなり悲鳴を上げる。

「キヤーーーーーッ!!!」

「変態! 変態がいる!!!」

「…小坂君!?!」

なんか面白いことになってるけどどうにかして収集を付けないといけない。パニツ

クになつてゐる女子と、なんだこいつと言う目で見てゐる男子、クラスメイトの茫然とした状態を何とかしないとイケない。

よく見たら前の方に真嶋先生がいた。真嶋先生もこつちを見ていたのでとりあえず手を振つてみる。

そう思つてたら他の教員たちに囲まれた。

迅速な対応で感心するが、私を拘束しただけではこの事態が収まるとは思えない。

だけど囲まれたおかげで体の傷が他の生徒に見られる可能性はだいぶ減つただろう。ふくらはぎに包丁を突き刺された時の傷は未だに跡が残つてゐる。あまり見られていい気分ではないものだ。

事態の收拾に來たのか、いつの間にか私の正面に來ていた真嶋先生が私に話かけてきた。

「…本当に小坂なのか？」

「残念ながら本物の小坂零ですよ。この格好は許してください。海に投げ出されたみたいで服を脱がないと泳げないまま死ぬところでしたので」

そう言つてジャージを引っ張つて下を隠す。他の生徒に見られないように教員が壁になつてゐるが、こちらを見てゐる教員には女性もいたので恥ずかしくなつた。

恥ずかしがっている場合じゃないのかもしれないが、割と余裕がないので現実逃避も兼ねている。無理をして走ったからか全身が軋むように痛い。

「だが、既に事故があつてから5日が経過している。今までどこにいたんだ？」

「私も意識を取り戻したのはついさっきなのであやふやですが、島の側面にある洞窟みたいところに流されてました。潜らないと入れないような場所だったので、崖崩れに巻き込まれたときに上手く入ることが出来たみたいです」

正直にそう言った。嘘をついても仕方ないし、私自身本当はどうだったのかを知る手段もないのでそう言うぐらいしかない。

それを聞いた真嶋先生は珍しく安心したような笑みを一度浮かべたが、一瞬の間に元の仏頂面に戻った。

「…それが本当なら本当に不幸中の幸いだったということか」

「死ななければ安いとはよく言ったものですよね」

そう言つて笑いかけるが、教員の方々は笑うどころか顔が引き攣っている。

過負荷的観点からすれば別にいつものこと不幸なのに何でそんな顔してるんだと思うが、普通の観点から見ると死にそんな目に合つて生還してきた生徒が死な安とか言つてればそう思われても仕方ないと思つた。

「そんなわけで——A小坂零戻りました。見たところ試験の結果発表みたいです、今



私が生きていたところで結果は変わりませんよね？」

恐らく全てのクラスの生徒が集まっていることと、5日間行方不明だったという真嶋先生の発言から今が結果発表なのだと予想した。

そうだとした時に一番気になったのは、私が生還したことによる結果の変更があるのかどうかと言うことだった。

点呼に参加していなかったことを逆算して計算し直されるとクラスメイトに申し訳ない気持ちになる。

「学校側で一度決めた結果は何があらうと覆らない。既に発表してしまったのならなおさらだ」

どうやら杞憂で済んだみたいだった。

Aクラスのみんななら有栖と私がいなくらいでも大したへまはやらかしていないだろう。康平もいるし、橋本君と神室さんも力を貸していればそれなりに優秀な結果になっているはずだ。

そう考えた瞬間、ふと右足に違和感を感じると同時に膝から崩れ落ちた。

「大丈夫か!？」

真嶋先生の隣にいた男性教員の一人が私に駆け寄ってきた。

今までアドレナリンが出ていたからか、それとも私の生存によってAクラスの点数が

変化しないことに安堵したからか、緊張の糸が切れてしまった私は右足が本来走れないほどに負傷していたことを思い出した。

その状態の足を無理に動かしてここまで走ってきたので限界が来たのだろう。先ほどこから全身が軋むように痛んでいたのも、体が警告を発していたからだと今気づいた。口は動くので駆け寄ってきた教員の腕を引っ張って医務室に連れていってもらうことにした。

「とりあえず医務室とかに連れてってもらえませんか？ 崖から落ちたときの衝撃で足と左腕を負傷してしまった上に、時間がわからなかったのでここまで走ったので割と限界です。右足が特に重症だと思うので、できれば治療をお願いします」

「わかった。今、船に運ぶからにおとなしくしていてくれ」

その言葉を聞いて安心してしまったのか、私は5日も意識を失っていたにもかかわらず再び意識を闇の中に落としていった。

## 2 2 話目 特別試験 最終日 その後

次に意識を取り戻したのは医務室のような場所だった。意識を取り戻すとベッドの脇には有栖や茂、康平をはじめとしたＡクラスの面々が揃っていた。

私が目を覚ましたことを確認すると同時にベッドに押し寄せてくるが、保健医の星之宮先生に止められている。

その様子を眺めながら体の調子を確認してみた。

まず海に落ちた時にべちよべちよだった体はきちんと拭かれたのか、潮の香もしなければ塩分が身体にまとわりつく様なねっとりとした感じもなくなっていた。流石に目の前の星之宮先生が拭いたわけではないと思うが、教員の何人かは私の古傷を見てしまったかもしれない。

怪我をした左手には包帯が巻いていて固定されていた。そこまで重症じゃないと思っていたが、思ったよりも酷い怪我だったのかもしれない。

左足は包帯が巻いてあるみたいだがそこまで重症じゃないのかそれだけ。

問題は右足だった。天井から布をぶら下げて右足だけ吊るされている。包帯もギブスもつけている上に、左足の負傷も考えると当分自力で歩くことはできないだろう。

もしかすると暫くは車椅子生活になるかもしれない。

「体調はどうかしら？ 小坂君？」

「見ての通りですよ。体の各所が負傷してろくに動くこともできない：他は特に問題ないみたいです。今月もお世話になりました」

「ほとんど毎月保健室送りになってるのはあなたぐらいよ」

そう言つてため息をつく星之宮先生。普段の軽い雰囲気はなく厳格さすら感じる雰囲気から、私の怪我が普段に比べていかに重症かを物語っていた。

普段の星之宮先生をクラスメイト達も知っているのか、彼女の出す雰囲気にあてられて少し怯んでいるようにも見られる。

そんなことを考えていると、星之宮先生が真剣な顔で私の目を見ながらカルテと思わしきものを取り出した。

「…左手は左手首の骨に罅が入つてはいるものの折れてはいないわ。右足は上から潰されたように過度に圧迫されたみたいね。しかもあなたあそこに行くまでに走つたでしょ？ そんな状態で走つたせいであと一歩治療が遅れていれば二度と歩けないことになっていたわよ。左足は右足に比べて軽傷だけど無理に走つたせいで状態が悪化しているわ」

「…どれぐらい気絶してるかわからなかったので、最悪置いて行かれることを考えてし

まったのが仇になつたみたいですね」

予想通りの酷い怪我だった。左足は比較的軽いかと思つていたが、他の怪我に比べれば軽いだけで思つたよりも酷かった。

だが、あの時に時間がわかるようなものが何一つなかった以上は仕方ない。最悪足を潰していたかもしれないが、あの無人島で放置されたままでは何時回収されるかわかつたもんじやない。

今考えたらスポットの機械とかの整備もあるから一年以内には回収されるのかもしれないが、それでも負傷した状態で治療もできずにいつ来るかわからない助けを待つのは嫌だった。

「ああ……納得したわ。他の先生から『自分から事故に遭いに行つたんじゃないか?』つて声が上がつただのだけれど、自分から事故に遭いに行つて生還するために足を潰すようなことをするとは思えないつて言っておくわね」

Bクラスの担任である彼女がわざわざそんなことを言う必要はないようにも見えるが、他の医者が見たときに虚偽の報告をしたと思われれることを嫌つたのだろう。

逆に今ここでそう言っておけば、Aクラスの中での星之宮先生への好感度が上がつて交流しやすくなるかもしれない。そう考えると今はそう言つておいた方が後で有益になり得る。

「流石に死にかけるような事故に自分から飛び込むほど自棄になってないですよ」

あの事故は真正正銘の事故だった。

私が過負荷<sup>マイナス</sup>状態とでもいうべき状態だったから起きた事故とも取れるが、故意に自分が事故に遭うために起こしたものではない。

第一そのメリットがほとんどない。クラスごとに見ればあるのかもしれないが、それをするために自分の足を潰すような献身をする気はこれっぽっちもない。

クラスメイトの死を無駄にはしないためだのなんだの言って奮起するのかもしれないが、そんなことで奮起するなら最初からもつとやる気を出せと言いたい。

結果的にそれでAクラスのみんながやる気になると見越しても、それを狙って自分から事故に遭いに行くスタイルとか聖人を通り越して狂人だろう。

過負荷<sup>マイナス</sup>なんて狂人みたいなもんだらうと言われるかもしれないが。

「あの後どうになりました？ それと、今はあれからどれぐらいですか？」

「あの後は各クラスに事故にあつた生徒が生還したことの説明と学校側が改めて謝罪をしたわ。今は5時間ぐらい経つた当たりかしら？」

学校側は思ったより普通の対応をしたみたいだった。

あの状況をどうやって収めたのか聞いてみたい気もするが、星之宮先生の周りにいる

クラスメイト達がそろそろ痺れを切らしてきてるので話を切ることにしよう。

「星之宮先生色々ご迷惑をおかけしました」

そう言つて頭を下げる。

純粹に感謝の気持ちもあるが、クラスメイトを待たせすぎているので話を切るタイミングを作つた。

「私は仕事をしただけよ」

私の意図を察したのか、星之宮先生は椅子から立ち上がつて私を含めたAクラスの生徒を見渡した。

「…それじゃあ私は失礼するわ。あ、ここで見たことはできるだけ内緒よ？ 小坂君の怪我の状態も含めてね」

いつの間にかいつもの軽い感じに戻っていた星之宮先生は、そう言つて茶目つ氣たつぷりにウインクをして部屋から去つていった。

残されたクラスメイトと私との間で気まずい沈黙が流れる。

このまま固まつていても仕方ないので私が先手を切ることにした。

「…試験で単独行動してごめん。クラスの中での雰囲気や試験の内容を考えると迷惑をかけたと思う」

そう言つて頭を下げる。ベッドの上で怪我の状態も酷いのでしっかり頭を下げてい

るわけではないが、私の謝罪の意を示すには十分だろう。

それに一番早く対応したのは康平だった。

「零が一人で行動すると言った段階で零に何かあったのだろうかとは思っていた。だからクラス内のことや試験については謝らなくていい」

そう言われたので頭を上げる。頭を上げると康平が心なしか何処か怒っているようにも感じた。

だがそれでは何故クラスメイトが集まっているのだろうか？

自意識過剰じゃなければ私の心配をしてきているのだろうか？

もしかしたら私が事故に巻き込まれたことを試験中にAクラスに説明されていたのかもしれない。

そう言えばあの試験には点呼があった。

点呼の時間になって私がいなくても点数が引かれていないのであれば、点呼の時に説明しているもおかしくない。

そう考えるのが自然か。彼らからすれば5日間も行方不明で事故死として扱われているクラスメイトがいたら心配になってもおかしくない。

それが過負荷<sup>マイナス</sup>という人でなしだとしても。

「零が事故に遭った次の日の朝に死亡報告があった。正真正銘の事故である以上巻き込



まれた零に何も非がないのはわかっている。わかっているが、俺を含めたみんなが心配していたことを知ってほしい」

「…確かにそうみたいだ。心配かけてごめん」

そう言つてまた頭を下げる。

私がクラスメイトを無視して星之宮先生と話していたことに怒っているように感じた。

他のクラスメイト達も康平に同意しているように頷いている。

心配されるなんてこつち一度死んでからに来てからなかつた気がするし、あつち前世でも私のことを心配するような人はあまりいなかつたからとても新鮮な感じはある。

それが過負荷マイナスになってからというところが何とも言えない感じがするけれど。

「顔を上げてくれ、俺の方が謝らないといけないことがある」

康平の言葉で顔を上げた。

康平の顔を見るとさつきまでの何処か怒っているような感じはなくなっていた。

そこにあつた康平の顔にはとても悔しそうな表情に変わっていた。普段はほとんど見ない表情だった。

「…今回の特別試験。Aクラスは3位だった。真嶋先生から聞いたが、零が戻った時に試験結果が変更されることがあるかと聞いていたみたいだな。それとは全く関係なし

に俺の力が及ばず、3位にという結果になってしまった」

「本当にすまない」

康平はそう言つて背中を九十度曲げて私に謝罪した。

クラスメイトも私も思わず息を呑む。

クラスの代表格である康平が私個人に向かって誠心誠意謝罪をしている様を見て誰もが驚いていた。普段の頼もしい雰囲気があるので尚更違和感がある。

「康平、顔を上げてほしい。試験の結果は残念だけど、一人で勝手に行動して事故に遭つた私に何か言う権利はない」

康平が顔を上げる。その表情は普段のような頼もしいものとはかけ離れているようにも感じた。

そんな中、有栖が康平のそばにやってきた。康平の隣に立つて康平の方を向いている。

「私も参加できないでクラスの得点を減らした状態からスタートさせてしまった身です。葛城君がそこまで思い詰めることはありませんよ。私と零君がいなくても葛城君が頑張っていたことはクラスの皆さんが知っているはずですよ」

「そうだとしても結果が振るわなかったのは事実だ」

康平は心底悔しそうにそう零した。

私はAクラスが3位という結果に今更ながら少しの驚きを感じているが、どこか心の片隅で納得している自分もいた。

「とりあえず試験の結果とどういう戦略だったのかを聞いていいかい？ 謝罪はもう受け取ったから今やるなら反省会も兼ねてどんな感じだったかを聞きたい」

「零君は大丈夫なんですか？ あまり無理をしないほうがいいと思いますよ？」

「そうは言ってもこのままだと暇だつていうのもあるし、試験の結果も気になる。それに、振り返ることができるなら早いうちがいいと思わないかい？」

「…そういうことでしたら私も今一度詳しく聞きたいです。葛城君お願いできますか？」

「…構わない。他のクラスメイトには話してあるが、二人の意見も聞きたいと思つていい」

そう言つて康平が主導で、時々戸塚君などの他のクラスメイトたちも混ざる感じで話した。

Cクラスと協力してポイントを保守する方針にしたこと。

康平とCクラスのリーダーが、私と有栖以外の2万プライベートルースのリーダーに流れる代わりにCクラスのポイントで物資を補給するという契約をしたこと。

それに対して私と有栖以外が同意のサインをしたこと。

私が事故に遭ったというのを聞いてパニックになった皆を茂が纏めてくれたこと。

それから康平が指揮を執りなおしたこと。

途中でDクラスの生徒が洞窟を見に来たこと。

それ以降は特に音沙汰もなく最終日を迎えたこと。

Cクラスの情報を参考に他クラスのリーダーを指定したこと。

Aクラスのリーダーは康平ではなく戸塚君にしていたが、ほとんど康平と一緒にいた上に行動も康平と共に行っていたこと。

結果はAクラス120ポイント、Bクラス140ポイント、Cクラス0ポイント、Dクラス225ポイントだったこと。

「…大体こんなところだ。俺はどうすればよかったのだろうか？」

…私の考えだと方針自体はそこまで悪くないようには感じる。

不用意にポイントを消化しないでCクラスからもらうことでこの試験を高得点で突

破する。200以上のポイントを残せばCクラスのリーダーに一人2万prを渡しても問題ない。

惜しむらくは詰めが甘かったところだと思う。まずDクラスに拠点を見せたのは失策だろうし、本当のリーダーである戸塚君と常に一緒にいたら自分がフェイクで彼がリーダーだとばれてもおかしくない。

「私が指揮を執る前提で話してもいいかい？」

「構わない。寧ろ零だったらどうしていたか気になる」

「まず私だったら洞窟の入り口を完全に塞ぐように4人前後をローテーションで常にしたせる。中を見せて欲しいと言われても、リーダーから許可が下りない以上は無理だと言わせて中は絶対に見せない。無理やり通ろうとしたらセクハラだのなんだので騒げばたいていの相手はどいてくれると思うよ」

「…だが、そうだとしても拠点を占拠しても中を見る権利はあると押し切られた場合はどうする？」

「そうしたらこの試験のテーマは自由だから、この入り口に立っているのも私達の自由だとも言って入れさせない。強引に入ってくるなら接触してきたことを盾に学校側に報告すれば相手にペナルティが入るかもしれないしね」

「なるほど…かなり強引な気もするが、できなくはないか…」

「後は最初に拠点を確保するときに見られていた可能性もあったと思う。だから、最初に拠点を確保するときにはリーダーだった戸塚君とフェイクの康平だけじゃなく他のみんなもつれていった方が良かったと思うよ」

「確かに言われてみればそこはそうするべきだったかもしれないな」

「最後に、私ならすることだけど怒らないでね」

「…構わない。言ってくれ」

「私が指揮を執るなら最終日の朝に戸塚君には事故に遭つてもらうことになるよ」

私の言葉でみんなが目を見開いた。

本当に事故に遭つている本人がそんなことを言ったのだから驚くのも当然だろう。

有栖も私の方を見ているが、彼女は私の方を見て納得したように頷いた。

「この試験の肝は他のクラスのリーダーを当てることだ。本気でポイントを死守したいのなら、最後にリーダーを変えてしまえばいい」

「だがリーダーを変更することはできないはずだ」

「正当な理由なしにはつていう但し書きがあるけどね。逆に考えれば正当な理由があればリーダーを変更することは可能つてことだ」

「それは……」

「手段としては、何者かに段差から突き落とされて動けなくなつてしまつたリーダーを

クラスメイトが運んで先生に渡せばいい。一人がリタイアした時のポイントよりもリーダーを当てられた時の方が損失は大きい。後遺症とかが残る可能性も0じゃないが、ポイントだけを見るならこれが最適だろう」

相変わらず過負荷的マイナスな策ではあると思う。でも私にはこれぐらいしか思いつかなかった。

そもそも康平と戸塚君が常に一緒に行動していたら、わかりやすいリーダー的人物である康平はフェイクで戸塚君がリーダーであるということなんてばれてしまってもおかしくない。

だけど、こうすれば試験の途中でリーダーが誰であるか確信していても最後の最後で全く関係なくじ引きかなんかで選ばれた人がリーダーになる。

それだけで他のクラスがリーダー当てに参加していたらポイントを勝手に減らしてくれる。

「そんでもってCクラスなんか信用できないからリーダー当てには参加しない。Cクラスが嘘の情報を流したとは思えないけど、私の予想が正しければDクラスは今言ったことと似たような手段を取ったと思う」

「Dクラスが!?!」

「事故に見せかけてリタイアさせたのか、本当に何かあったのかはわからないけどCク

ラスを信用するならそういうことになる。そして新しくリーダーになった人が他のクラスのリーダーを全て当てた。それでもないとこの点数の差は起こらない」

「…でもDクラスにリーダーを変えなんて考えができてリーダーを全員当てられるような人がいるとは思えない！」

康平の隣にいつの間にかいた戸塚君がその声を荒げた。

Aクラスの自分たちがDクラスに出し抜かれたことが未だに気に食わないのだろう。いや、彼の場合は康平が負けたことにかもしれない。

「いるんだよ、一人だけ。あのクラスには怪物が潜んでる」

声のトーンを落としてそう言った。私の言葉にその場にいる全員が動かなくなる。

私が言っている怪物とは主人公綾小路君のことだ。ある意味、彼のための世界とも言えるこの学園で彼と勝負をすることは無謀極まる。

どんな手を使おうが最後に勝つから主人公なのだ。

どんな手を使おうが最後に負ける過負荷があるAクラスじゃ相手にならない。

私が離れているように、その運命とも言える彼の勝利は覆らなかつた。

ここで生きている以上ラノベのキャラだからとかは言いたくないが、主人公という概念を無視して彼を語ることができるとは私には思えなかつた。

「あまり表舞台に立つような人じゃないと思つてたけど、この結果を見るからに彼が動



いたことはほとんど確定。それだったら負けても仕方ない」

「…そんなやつがDクラスに…?」

「彼には絶対に邪魔者を消して自分だけは勝つっていう覚悟がある。そしてそれを後押ししてくれる運命も彼の味方だ。少なくとも私じゃどうやっても勝てない人種だよ」

「…零、それが誰なのか聞いてもいいか?」

…どうする?

ここで安易に綾小路君だとばらすか、それとも言わないほうがいいか。

ばらした時のメリットは単純にAクラスで作戦を考えるとときにそれを考慮に入れられるということ。

デメリットは考慮したところで勝てない可能性が圧倒的に高いということと、下手に目を付けられると潰されるかもしれないということだ。

そんな時だった。ふと視線を感じたのでそつちを横目で見てみたら、有栖が言うなど目で言っている気がした。

「私が勝手に思っていることで本当かどうかの確信が持てないから言えない。知りたかったら自分たちで調べてみるといいよ」

「…そうか。言いたくないなら無理に問い詰めるつもりはない」

他のクラスメイト達はあまり納得していないみたいだが、康平がそう言ったからか私

が怪我人だからか問い詰めるようなことしなかった。

有栖は少しほっとしたようにも見えたことから、彼女は見当がついているのだろう。知っているうえで他の人には知られたくない事情があるのだと察した。

しかし、私と有栖以外のクラスメイトとの間で見えない壁のようなものが生まれた気がした。その壁は私と彼らの間に完全に信用しあっていないような不信感を感じさせる。

そんな時だった。

ぐうう~~~~~

シリアスな場面だったのに私のお腹の虫が盛大に鳴いた。思わず顔を赤らめて顔を逸らす。

よく考えたら特別試験中何も食べていなかったのだから、7日以上食べ物をお腹にしない。最後に口にしたものとても清いとは言えない汚水だ。

私の腹の虫の音を聞いてみんなが笑いだした。

「仕方ないじゃないか！ 冷静に考えたら1週間近く何も食べてないんだよ！」

「ぶつぶぶ…零君がそんな醜態を晒すなんて思わなかったので…ぶぶ」

有栖までこんな調子だ。

あれだけカッコつけた後にこれは恥ずかしい。思わずベッドに潜りたくなつたが足も手も満足に動かないのでそれすらできなかつた。

「プツクク…零、なんか食べ物持つてきてやるよ」

「後で覚えてろよ茂。ついでに飲み物も持つてきて。それと、できれば車いすとかあれば持つてきてほしい」

「いや、それは無理だろ。少なくとも今日はそのまま安静にしておいたほうが良いと思う」

真顔に一瞬で戻つた茂にそう嗜められてしまった。

自力で動けないのは不便だと思ふから車いすが欲しかつたのだが、流石に今の状態では車いすがあつても動くのは無理だろうと思われたらしい。

「…まあ、それもそうか」

「じゃあ持つてくるからちよつと待つててくれ。何人かついてきてくれ、一人じゃあまり持つてないからな」

茂がクラスメイトから持ち運び班を募る。

ちよつどいいのでついでに他の人たちにはちよつと抜けてもらうことにした。

「ちよつと有栖と二人で話したいから、他の人は申し訳ないけど出てもらつていいかい

？」

「話ですか？」

「大したことじゃないし、10分もかからないだろうから他の人も飲み物とか持つてくると良いよ。有栖もいいかい？」

ふとドアの方の壁を見ると時計が付いていたことに気付いた。

今の時間は17時45分ぐらい。18時前ぐらいに切り上げればいいだろう。

「…わかりました。皆さん、申し訳ないのですが少しだけ時間をください」

「わかったよー」

「坂柳さんに変なことするなよ！」

「あの怪我でできるわけないでしょ！」

そんなことを口走りながら有栖以外のクラスメイトが退出していった。

怪我人相手にそんな冗談を言えるほど調子が戻ったといえは聞こえはいいが、調子に乗りすぎではないだろうか？

…高校生ってこんなもんだったな。よく考えたら前世でもバカ騒ぎしている連中しかいなかった気がする。

そんなことを考えながら私は有栖の方を見て、この試験で彼女がしたことについてどうやって問い詰めようか考えて心の中のため息を一つ吐いた。

## 23話目 特別試験 最終日 その後Ⅱ

クラスメイト達が出ていってからどうい風か話を持っていかどうか考えていたせいか、残された有栖と私の間で少しの沈黙が生まれる。

なるようになるかと思ひ、先に切りだそうとしたところで有栖の方から先に話し出した。

「…試験の結果を聞いたときよりも、零君が事故に遭ったと聞いたときの方が驚きました。死ぬことはない」と星之宮先生がおっしゃっても、見るからに重体のあなたを見てとても心配したんですよ？」

「それに関しては本当に申し訳なく思ってるよ。心配されることなんてほとんどなかったから、さつき康平に言われるまでそんなこと全く考えてなかった」

「表向きのトップは私と葛城君でも、Aクラスで一番方針を決める立場に近いのですからもつと自覚してください。神室さんでさえ心配そうにずっとここで起きるのを待っていたんですから」

そう言う彼女はどこか怒っているようにも見えた。

別になりたくてなったわけではないクラスのまとめ役という立場を彼女は引き合い

に出しているが、私との勝負のこともあるのかもしれない。

この船旅の前に私に宣戦布告したのにもかかわらず、いきなり相手が事故に遭った。その上そのまま死んだりしたら勝敗が付かないままになってしまう。

勝つたと言うこと自体は難しくないが、本人が勝つたと思うかは別の問題だ。少なくとも有栖がこの船旅で事故死なんてしたら私は勝つたとは思えない。

まあそれはおいといて  
閑話休題

「虐げられるのが当たり前だったから心配されることに慣れていないんだ。前にも言ったけど見るもの全てを不快にするような気持ちマイイナス悪さだし、それを制御出来てなかった時期は本当に酷かったからね」

「…参考までに聞いてもいいですか？」

「汚いから洗ってやると言われて口の中にトイレ用洗剤を吹き込まれたこともあれば、施設の職員にふくらはぎを包丁で刺される躰け、熱湯を背中にかけるつてのもあったな。同年代のやつからは視界に入れば殴られたり蹴られたりは普通だったし、外に出れば全く知らない大人がいきなり石をもつて殴ってくる。それで病院に運ばれたかと思えば、治療された後に看護師が殴ってくるつてのがデフォルトだった時だったかな？」

尤も、その次の日には誰も私のことを覚えていないというのでワンセットだ。

おかげで治療代の請求をされたことはないが、1日で怪我が治らなかつたら施設に戻ることさえ難しくくてそこら辺の公園で夜を明かしたことも少くない。

今思えば死んでもおかしくないような日常だったが、「死」という概念との「縁」を無意識的に切っていたのか「俺」が切っていたのだろう。

有栖の方を見ると完全に固まっていた。

それを見て直感的に話すことじゃなかったと悟った。冷静に考えてみれば何かの本でそういうことがあったということを見たとしても、それが近くの知り合いに起こっていたというのは全く別の問題になる。

有栖はすぐに元に戻ったが、その表情は曇っていた。

「申し訳ありません。気軽に聞いていいことではありませんでした」

「別に私はいいいけどね。私よりも酷い目にあっている人なんて星の数ほどいるし、私は軽いほうだよ。まだ生きてるから」

「……」

「それに今は周りにそんなことするような人はいないし、私自身自分を制御できるようになったからね。今が良いからそれでいいと思ってるよ」

「……その状態じゃなかつたら説得力があるんですけどね」

「事故は仕方ない。まあそんな訳で許してほしい」

「……わかりました。次からは事故に遭わないように気を付けてくださいね」

「こればかりは運によるから断言できないけど気を付けるよ」

有栖は私の言葉に少し不満そうだけど渋々引き下がった。

不幸が基盤マイナスになった今の私がこの3年間で事故に遭わないほうが珍しいと思うがそ

こは話さないことにした。

「それで話とは何ですか？」

「……今回の試験で康平のこと蹴落とそうとしたよね？」

「何のことですか？」

「とぼけなくていいよ。違和感を感じたところは三つ。一つ目は有栖坂柳のお友達派も全員が康平の案に賛成してサインしたこと。二つ目は康平が話している時に他のクラスメイトのほとんどが康平を睨んでいたこと。三つ目にその睨みつけているクラスメイトの中に康平の派閥の人も交じってたこと」

「……今回の試験は葛城君が指揮を執っていました。その葛城君が失敗したのですから、皆さんから悪く思われるのは仕方ないことだと思いませんか？」

「度が過ぎてるって言ってるんだ。そもそも自分たちが何もしていない癖に全ての責任を康平に押し付けて康平だけの責任になってる。戸塚君の方に批判する人も、それに



乗ったクラスに問題があったんじゃないかと問題提起する人もいない。ましてやこの短期間で康平の派閥にいたやつが、そのトップを睨みつけるようになるなんて誰かが扇動しないとまずない」

「康平に全くカリスマがなかったら別問題だが、彼は同年代にしてはなかなかのプラスの要素を持つているのはわかってるだろう？」

「……」

そこで有栖は口を閉ざしたが、私の方を見てにつこりと笑顔を浮かべていることから正解なのだろう。

今回の試験では多かれ少なかれ得をした者と損をした者が生まれた。

得をしたわかりやすいところはDクラスとBクラスだ。単純に上との差を詰める結果になったのだからこれは確定。

そうしたら損をしたのはCクラスとAクラスになるが実はそうじゃない。実際に損をしたのはAクラスは康平の派閥、Cクラスはリーダー以外の全員だ。

康平の方は言わずもがな、Cクラスはポイントを吐き出して終わったのだからこれは疑いようもない。

だけどCクラスのリーダーはAクラスの契約によってアドバンテージを得、有栖は康平が指揮で失敗して失脚寸前になったため事実上Aクラスのリーダーになることが出

来た。

恐らく有栖はお友達に自分が参加できないことを良いことに、全ての責任が康平の方に行くように仕向けた。今回の船旅には参加しているものの、自分が参加できない試験があつたらそういう風にしろとでも指示しておいたのだろう。

自分の特別試験への不参加を強みに変える、とてもプラス的な考え方だ。

故に得をした者はDクラスとBクラスだけではなく、Cクラスのリーダーと有栖たちということだ。

因みにAクラスの中立派は損をしたとも言えるし得をしたとも言える微妙なラインだと思う。

損をしたのは言わずもがなポイント、得をしたのはAクラスのリーダーの片方が失脚寸前だということでAクラス内両派閥に挟まれて肩身の狭い思いをすることが減るということ。

損の方が大きいようにも見えるが、クラスのリーダーが2人いるよりも片方だけになつたほうが今後のことを考えると良いようにも見える。

「まあこのことを他の人に言う気はないけどね。気づけなかった方が間抜けってことで」

「話が早くて助かります。おっしやる通り都合が良かったので葛城君にはここで落ちてもらおうと思つてました。さっきの謝罪はとてもキツチリしていて良いように見えましたが、事実上の敗北宣言です。これで私がAクラスを纏めやすくなりました」

「答え合わせにどんな感じで仕込んだのか聞いてもいいかい？」

「学校側は私の体のことを考えて、この船旅に参加させない方針だったので予測していました。ですが、頼んだ結果船旅には参加できませんでした。それを踏まえて船を用いてまで行かう特別試験を考えたら、私が参加できないものになつてもおかしくない。そういう意味で教員の指示に従うことが条件にされたと思ひました。ですのでそれを見越して、責任が葛城君だけに集中するように指示しました」

「まあそうだろうね。実際にこれで有栖がAクラスの実権を握つたようなものだ」

「ええ。後は何もしなくても勝手に葛城君が落ちて、Aクラスが一つになるだけです」

「好きにしていよいよ。私の知つたことじゃないし」

「…葛城君のことはいいんですか？」

「どうでもいい。別に彼に何があろうが私には関係ないし」

「葛城君は零君の友人でしょう？」

「それがどうかしたのかい？」

私の言葉に彼女は閉口した。

確かに普通であれば友達というものは助け合う関係にあるのかもしれない。

だが、過負荷私にそれを要求すること自体がナンセンスだ。

私の中で渦巻く過負荷マイナスが私から滲み出る。有栖の顔を見ると、彼女は顔を顰めていた。

「知っているかい？ 他人って「他の人」って書くんだぜ？ 自分自身以外は全て他人だろ？」

「そこに友人とか友達とか親友とか恋人とか配偶者とか家族とか親族とか仲間とか、どれだけ関係が深いと主張しても所詮は他人だよ」

「…友達や家族と全く知らない人は違うと思います」

「違うないさ。同一人物になれないというだけで、どれだけ共感しても自分自身が受け取ったことも相手が全く同じことを受け取ることはないだろう？」

「それは言葉一つとつてもそうだし、私が昔受けた仕打ちを有栖が本当に理解することはない。同じように私が有栖の先天性疾患を完全に理解できることはない」

「だから無関係さ。私と康平の関係なんて、君が思うような関係じゃない。私にとって

は他人の中の一人だ」

「それは…確かにそういう見方もできるかもしれませんが、他の人から見たら違うように受け取れます。それに、そんな生き方は難しいと思います」

『あの子はこれができるんだからあんただってできる』『みんな違って皆いい』。よく小学校とかで言われてるけど君はどっち派かな？」

「……」

「要はそういうことさ。君も茂も康平も、私にとつては友人とも言える間柄ではあるがそれ以上にただの他人だ。だから私に康平がどうなろうが知ったことじゃないし、君との勝負を楽しみにしていることは認めるけどそれだけだ。君を見捨てるか私が生きるかという選択肢があつたら私は間違いなく君を見捨てるよ。所詮他人だからね」

私がそう言うと彼女は完全に口を閉ざしてしまった。

その表情はどことなく悲しげな雰囲気と思わせる。

私の過負荷マイナスが無関係ナッシングオールを指す『無冠刑』として発現したのは、私のこういう考え方を汲み取ったからだ。

父からは家を出て、母から距離縁を切りを置き、友人とは常に一定の距離縁を結びを置いていた前世。そういう環境から来たものなのだろう。

どれだけ仲が良くても、友人と言っても所詮は他人であるという考えが頭の中である。

目の前で人が倒れていたときに、一体どれだけの人がその人を助けるだろうか？

AEDで心臓マツサージをしたところで、蘇生に失敗すれば対応が悪かったなどと非難されるのが現代社会である。

現に過負荷<sup>マイナス</sup>である私を心の底から助けよう、一緒にいよう、何とかしてあげようと思うような人も言うような人も会ったことがないし見たこともない。

上っ面の言葉だけならいくらでも耳にするが、私<sup>過負荷</sup>という本性を見ただけでしつぽを巻いて逃げ出すか私のことを忘れるだけだった。

コンコンツ

「零、入るぞー」

そう言つて茂たちが入ってきた。

大体10分と言つたが、茂たちが来たのはそれよりも遅く、時刻は既に18時を指していた。

彼らの手にはハンバーガーやポテトなどの手に持って食べることができて、持ち運びが簡単な食べ物でいっぱいだった。

私と有栖の間でピリピリとした空気が流れていたが、茂たちが来たことでお互いに外面を取り繕った。有栖はいつもの少女に、私は普通の人間に。

「右手だけでも食べれそうなもの持ってきた。それとお茶だ」

「ありがとう。早速もらうよ」

そう言つて茂からハンバーガーを貰つたが、左手が使えないので包装紙を取ることが出来なかった。

「…誰か左手の包帯外してくれない？」

「罇が入ってるんだから当分そのままだ。紙剥くからちよつと待つてろ」

茂は私からハンバーガーを取ると、包装紙を剥いて再び私に渡した。

右手で持つてかぶりつけば食べれるような形になっている。

それを受け取つた私は体感時間的にはそれほど経っていないはずなのに、やたらと五月蠅いお腹の虫を黙らせるべくハンバーガーにかぶりついたのだった。

あれから他のクラスメイト達も集まり、7時ぐらいに彼らが夕食に行くまで話し込んでしまった。

クラスメイト達が夕食を食べに行ったので部屋で一人ボツチになる。

お腹いっぱいになるまでハンバーガーを食べたのはいいが、食べ過ぎて少しお腹が重い感じがした。珍しくハンバーガーを5つも食べてしまったので少し苦しい。普段は多くても3つが限界なことを考えると胃がパンパンになっているのがわかる。

そのせいで寝ようと思っていたのに全然寝る気になれなかった。

有栖とは食事中にほとんど話さなかった。

彼女も思うところがあつたのか、私の方を見て時折悲しそうな顔をするだけだった。

なぜ彼女がそんな顔をしていたのか見当もつかないし、考えてもわからなかった。

ため息を一つ吐き、私は眠くなるまでこれからのことについて考えることにした。

まず試験の方だが、1週間で特別試験を行った。だがこの船旅は2週間行うことが告知されている。十中八九もう一週間で2回目の特別試験を行うのだろう。すぐに行うかはわからないが、1週間もただで遊ばせてくれるとは思えない。



この船にいる間、生徒たちはこの船の施設の利用及び食事にポイントを使う必要もなければ現金を払う必要ない。限度はあれど文字通り好き勝手にこの船で遊ぶことができるというわけだ。

だがよく考えてみると、高々一週間無人島に放り投げられただけで一週間丸々遊び呆けられるわけがない。しかも私のような事故があったとはいえ、時計と点呼で人が死ぬような事態は避けていた上に教員も相当数が動員されている試験だった。

その教員たちもこの船に乗っているのだ。

教員たちもこの船の使用料金がからまないのだとすれば、尚更バカみたいな金がかかっている。高々一週間の試験のためだけに金を使って、残りの一週間は遊んでくださいなんて話があるわけがない。教員もついでにリフレッシュしてくださいとかあるわけがない。

予想だと生徒を油断させるためか準備のために2日3日空けてからと見た。

これを踏まえて、動くのであればそれ相応の手を考えなければいけない。

私みたいな過負荷マイナスがこの学校の生徒ブラッスの相手進中に取るには、いかに早く相手のペースを切り崩して私が握るかという1点にあると見ている。

過負荷状態とも言える過負荷マイナス全開で全てを台無しにするのも一手かもしれないが、それで試験をなかつたことにするようになちゃぶ台返しに近いものは絶対にやりたくない。

心を折るためならともかく、「特別試験の結果との縁を切った」なんていう逃げはしたくない。過<sup>マイナス</sup>負<sup>マイナス</sup>荷<sup>マイナス</sup>にも過<sup>マイナス</sup>負<sup>マイナス</sup>荷<sup>マイナス</sup>なりの意地がある。

負けるのは許容できるが、逃げるのは許容できない。

負けたとしても、負けるとしてもそれを受け入れてへらへら笑うのが私<sup>マイナス</sup>達だ。

前は主人公<sup>綾小路君</sup>相手に逃げるような立ち回りをしてきたが、今はそんなことをするつもりはない。向かってくるなら迎え撃つ覚悟でいる。負けるとわかっていても、その敗北<sup>マイナス</sup>を私の心<sup>マイナス</sup>に組み込むためにも負けることから逃げるわけにはいかないのだ。

だから私は私の持てる全力を尽くし、綾小路君に負ける。

負けるということは覆らないだろうが、負けることにも意味があるはずだ。

そのために最初の特別試験が終わったばかりでまだ誰も対策を練っていないうちに次の試験の予想と対策を練ることにした。

無人島での特別試験は主にクラス同士の対決、もつと言えばクラスの団結力と組織力、そして思考力を見ることが出来たと思う。

団結力とは言わずもがな、組織力と同じくクラスという団体でどれだけの協調性があるかが試された。それは点呼だったり、自分勝手にリタイアした場合の減点だったり、ポイントで物資を補給するという面で見てもわかる。

思考力を指すのはリーダー当てのことだ。これまでの他のクラスを見て誰がリーダーであるかを考える、という意味での思考力。ただ、これは個人でできる範囲なのでこの試験に合っているかと言われると私は微妙に思っている。それにリーダー当てはクラスで相談する方が稀だろう。B固精力重視クラスならクラス全体で話し合ったかもしれないが、普通だったらリーダーに丸投げしてもおかしくない。

そう考えるとリーダーになった者の思考力しか図れないので、あれば思考力を図るというのはあまり正しくない気がする。

これを踏まえて次の試験の内容を考える…。

学校である以上学力を競う可能性があるか？

いや、仮にも夏休み中の上に学力を競うなら船でやる意味がない。あの学校もクロード・サークルではあるが、この船ほどではない。一応船から海に飛び降りて泳いで脱出できる可能性もあるが、ほとんどの確率で沖に上がる前に死ぬだろう。

船でどこかに飛ばされる可能性もあるが、無人島以外だとどこかの施設になると思う。しかし、豪華旅行船と銘打ってるだけあるこの船で大体は事足りるだろう。

そうなるとこの船の中で行える範囲に絞り込める。

運動系はまずない。屋内プールはあるが、全クラスが入るような余裕はない。

もつと言うとこの船でやる必要がない。

そうなると思考力を鍛えるグループワークか？

前世<sup>昔</sup>大学でやったところだと「社会的ジレンマ」を用いたものをやったのが印象的だ。簡単にいうと全体の利益を高めようとする個人が儲かる可能性は少なく、逆に個人の利益を追求すれば個人的には得をする可能性が高くなるが全体の利益は減っていくというものだった。

その時のグループワークでは、最初に何も説明されていない状態で全体の利益を高める「協力」と言う選択肢と、自分の利益だけを高める「非協力」と言う選択肢のどちらを多く取ったかを見た。

その後に説明した後では、どちらの選択肢を取る人が多かったかと言うものを確認して、各グループで話し合っ発表した。

…もしかしたら本当にグループワークかもしれない。

学校とは違って他のクラス同士で交流しやすく、さつき考えた無人島での思考力を図るためにはごく少数の人間のみしか図れないという点も解消できる。

グループワークというものはグループの中の2人しか会話していなくても成立するものだ。その時に同じグループで何も発言しない人は「ただ乗<sup>フリーライダー</sup>り」として蔑まれる傾向にあるが、恐らくこの試験でそれをするような人はいないだろう。

この特別試験の一番の特徴は他のクラスとの差を縮めることも突き放すことも可能

だということだ。

そのためAクラスだったらポイントを守りさえすればいいという方針も取れば、さらに差をつける方針も取ることができる。

だが、それ以外のクラスはAクラスに上がりたのであれば「ただ乗り」フリーライダーなんてしている余裕はない。Aクラスとは違ってポイントを守らなければいいということができない以上、どうにかして高得点を得るかAクラスの得点を削ぎ落とす必要があるからだ。

「ただ乗り」フリーライダーをやるということとはそのためのチャンスを無為に潰すということになる。学校側としてはするならするで構わないが、何もできなかったという評価が付けられるだけだろう。そしてその報いは、クラスかプライベートルームかはわからないがポイントの方ではつきりと出るようになる。

前世での体験があるからグループワークなら多少は有利かもしれないが、私としての問題はただのグループワークには絶対にならないということか。

普通のグループワークというものはグループで出した結論を発表して終わるようなものが大多数だが、この学校のことだからそれだけで終わるはずがない。

何かあるはずだ。

それも他人を出し抜くことで利益につながる物が。

無人島での特別試験やCクラスとDクラス間の問題を黙認した構え方、もつと言え

中間試験で過去問という必勝法を許容したこと。

これらのことを踏まえると、この学校は他のクラスを蹴落とすことを良しとする傾向がある。自分たちが上に行くために、愚者マユナスからリソースを奪い取って自分たちのものにすることを黙認しているのだ。

いや、正確にいうと黙認しているどころか推奨している。無人島での特別試験ではそれが顕著に出た。

当然リーダー当てのことだ。当てられた側のポイントを削って当てた側のポイントにすることが、これからを生きていくうえで他者を蹴落として自分たちが上になることが必要だと教えているようにすら見える。

CクラスとDクラスの問題があつた時もそうだった。

他のクラスのポイントまで支給を停止して、2つのクラスでの問題を解決しようとしているフリをしていた。

早急に解決する気があるのならもっと早く審議を行うべきだった。それこそ仕込みをさせる余裕を作る前に。にもかかわらず、審議までの期間が開いていた。急な事件だったからというものもあるが両方のクラスの動向をうかがっていた可能性がある。

中間試験の過去問に関しては、そういう方法があることを知らせないことで思いついて過去問を貰ったとしても共有する自由としない自由がある。

他のクラスにわざわざ教えに行くようなことはまずないため、クラスで思いつく人があるかどうかということを見ると相手を見捨てて自分たちが上に行くとも取れる。

そこに過去問を何時貰ったかによって覚える時間が長いか短いかで考えて尚更だ。

他人を出し抜き、自分が勝つ。

そういう人間が今の社会で求められている……というよりは、どの業界でも上に行きたいなら他人を蹴落とさないといけなからそういう人材を高く評価しているのかもしれない。

ここまで考えたが情報がもう少し欲しいところだ。

次の試験の予想まではざっくりとできたが、これからどうしていくかまでは全く決まっていない。

私がAクラスを牛耳るわけではないので私のことだけ考えればいいのだが、正直どうでもいい気がしてきた。Aクラスが勝とうが負けようが遅いか早いかの違いだし、そもそも次の特別試験にこの様では参加できるかも怪しい。

……でも有栖が負けるのはなんか嫌だ。

彼女を這いつくばらせるのは私の役目だ。

他の人に譲りたくない。

あの時のあの目を乗り越えて彼女に勝ちたいのだ。

私が絶対的に勝てないと思つてしまつた、あの人間がもつ美しい何かを乗り越えたい。

美しいものに汚いマイナスのまままで勝ちたい。

過負荷マイナスだつて勝つことができることを証明したい。

こんな私過負荷を知つた上で勝負を挑んできた彼女に勝ちたい。

これだけは綾小路君にも譲れない。

：今まではつきりと自覚してなかつた。寧ろ綾小路君と有栖をかち合わせて弱つているところを叩きのめせばいいと思つていたくらいだった。

でも、今はそれに意味を見出せない。

過負荷マイナスのことを教えたあたりから、理解者を求めている節があつたのは自覚してい

た。その時は、理解されたら私にわざわざ敵対するなんてことはしないだろうと思つていたのが正直な感想だ。

でも彼女は過負荷を知つてなお私に宣戦布告した。

それが嬉しくて、面白くて、楽しくて、彼女に勝ちたいと思つた。

過負荷マイナス故に勝てない可能性の方が圧倒的に高い。それでも、勝ちたいと心から渴望した。



恐らくそこが分岐点だったのだろう。

現にさつき有栖と二人で話していた時に、有栖に事故死はしてほしくないと思った。彼女も私が死なないか心配していたように、私も彼女に何かあつて勝負がつかないままになるのは御免だった。

そこまで考えて、大きくため息を吐く。

彼女が言った通り、真正正銘の赤の他人と友人兼赤の他人である人とはまるつきり同じというわけにはいかないみたいだ。

いや、正確には有栖だけだ。これが康平や茂だったら他の人と同じ対応だったと思う。

スペシャル 特別に足を踏み入れている有栖だからこそ、その強さを飲み下して勝ちたいのだ。

…そのためにはAクラスに落ちてもらうわけにはいかないか。

Aクラスのリーダーが早くも有栖に移行寸前ということは、Aクラスの代表として有栖が表舞台に立つということになる。

もつと言えば、Aクラスの敗北が有栖の敗北と取ることもできる。

そう考えるとAクラスをさらに上げる必要はないが、落とすすぎるといふことはしない方針にするべきだ。できるところまで上げて私には構わないが、私が意図的にそれをしようとする裏目に出て落ちていく可能性はある。

どうするべきなのだろうか…？

私はこれからどういう方針で、どういう手を使って、どういうことをしたいのか。大  
体の方向性は見えたが、あまり有栖に協力しすぎて勝てなくなるほどになってしまった  
ら元も子もない。

ぐるぐると頭の中で回る考えを吟味しながら、頭を一度冷やすべく茂が持つてきてく  
れたお茶に手を伸ばした。

## 幕間 竹本茂は決意する

俺は一体何をしたいのか。

無人島での特別試験を終えてから、そう考えることが多くなった。

今までの人生では言われるままにしていれば大抵のことは上手くいった。

先生の言う通りになっていけばいい成績が取れ、親の言う通りになっていけば生活の保障はされるし自尊心も満たされた。

クラスメイトの行動に目を向け、彼らに都合の良いように振る舞っていれば自然と友達ができて楽しい日々を過ごせた。

それに対して疑問を思ったこともなかったし、それさえしていれば今までの人生に不都合なんてなかった。

それを疑問に思うようになったのは、言われていた通りにしていたはずなのに結果が伴わなかったからであることは間違いない。

そこからだった、これまで考えていかなかったことに目を向け始めたのは。

胸の内にある種の違和感を覚えた。

言われるがままに、成績が優秀で国立故に家計への負担が私立に比べて少ないこの学

校を受験した。卒業後に好きな進路に進むことができるという謳い文句にも惹かれた。

入学することができた後で知ったことではあるが、好きな進路に進むためにはAクラスで居る必要がある。

だが、俺はAクラスで入学することができた。

何もなければそれだけで好きな進路に進むことができる。

…それに本当に価値があるのか？

未だ答えの出ない問いに頭を悩ませる。

これまでの人生では言われたとおりのことをしていればよかった。

だけどこの学校ではそれだけでAクラスのままに居れないだろう。

自分よりも優秀だと思っていた葛城君がDクラスに出し抜かれたのだ。そう思わない方がおかしい。

しかし、俺はこの問いの答えを知っていそうなやつを一人知っていた。

俺にとっては友達だと思っているが、あいつのことはよくわかっていない。

時折出す気持ち悪さもそうだし、自分以外のことに関してはとことん無関心なこともそれに拍車をかけていた。

第一印象は気持ち悪い何か。

だけど蓋を開けてみれば特殊な事情があったみたいだったので、自分とあまりにも違う価値観を持っているから気持ち悪いと感じたのだと思った。

それは半分正しく、半分は間違いだとは今は言える。確かに価値観が違うようにも見えるが、それとは全く関係なしにひたすら気持ち悪い時があった。

クラスの代表格の二人を馬鹿と称した時やクラスがなくなったらクラス分けはどうなるのかを聞いていた時は、俺だけでなく他の人たちも同じように思っていたに違いない。

そんなあいつは俺にはない答えを知っていると、確信に近いものを抱いていた。

だからあいつと二人で話すために俺はあいつの病室とも言える一室を訪ねることにした。

俺の持っていない何かを知るために。

コンコンツ

お茶を飲んでいい感じにすつきりして、そろそろ寝ようかと思つていたところ不意にドアのノックが部屋に響いた。考えている間に時刻は20時近くになっていたことから、夕食を食べ終わったクラスメイトの誰かが来たのかもしれないと思つた。

「入つていいですよ」

その予想が外れて教員の誰かが様子を見に来た可能性を考え、丁寧口調で返答した。その返事は私がよく知っている声だつた。

「…零、ちよつといいか?」

そう言つて入つてきたのは茂だつた。普段の飄々とした雰囲気とは違つた真面目さを感じたことから、何か相談に来たのだろうと直感的に察した。

私には康平が相談を持ち掛ける時と今の茂が重なつて見えた。

「別にいいよ。見ての通り暇を持て余しているからね」

「…まず特別試験のことだ。零の調子が悪かつたのはわかりきつていたし、止めることもできなかった。だからせめて零がいない分の穴埋めしようと思つたんだが見ての通りだつた」

「パニックになつてた皆をまとめたんだらう？ 普段の茂ならまずやらないようなことを率先してやつた上に、私の事故を知つたうえでクラスメイトをまとめたことを非難するつもりはないよ」

「だけどそれで止まつたんだ。そこから全て葛城君に丸投げした」

「…でも他のクラスメイトもそうだったんだらう？ それに比べれば茂はよくやつてくれたと思うよ？」

「他のやつは関係ない。比べたところで俺が結局何もできなかった…いや、何もしなかつた。事實は変わらないんだ」

茂は忌々しいとばかりに吐き捨てた。

私に何かあつたことを悔やんでその分の穴埋めをしなければというところから、彼もまた私を心配してくれていたということが推測できる。先ほどのクラスメイト達も同じように思っているのかもしれない。

だけど茂はこのクラスで誰も疑問に思つてこなかつたことについて疑問を抱くようになっていた。

何もできなかったというところを何もしなかつたと言い直したことから、クラスの代表者にまかせつきりではよくないのではないかと疑問に思い始めている。

さらに言うとう、他のやつと比べても意味はないと言うあたりが彼の思いの強さを表し

ているようにも感じた。

「確かにそう言うこともできると思う。このクラスは良くも悪くもリーダー任せにして自分で考える人が少なすぎる」

「…あまり言いたくないが零の責任でもあると思うぞ」

私の責任？

そう言われてもいまいちピンと来ないのだが、私が何かしたのだろうか？

「…わかってないみたいだから言うが、零が坂柳さんと葛城君の間に入って纏めているからAクラス内では、基本的に葛城君と坂柳さんが何とかしてくれるし二人がぶつかっても零が何とかしてくれるから自分たちは言われたことだけしていればいいって思っているやつが滅茶苦茶多いぞ」

「…マジで？」

「マジだ」

完全に想定外だった。

Aクラスと言われるだけあって、優秀な人が集まってもっと考える人が多いだろうと思っていた。だが、蓋を開けてみれば自分よりも優秀な人が何とかしてくれるならそれでいいやと思っ停止している人が多いという事実だった。

生徒の優劣でクラス分けをすると知っていたが、まさかここまで自主性がなく長い物



に巻かれるタイプの人が多いということに驚きを隠せない。

…もしかしてクラス分けには生徒の優劣以外にも何かの法則性があるのだろうか？

前に考えていた綾小路君がDクラスに居る不自然さや、成績だけではAクラスに居てもおかしくない堀北さん。学力も身体能力もトップクラスの高円寺君がDクラスに配属されている段階で違和感を持つべきだった。

後者二人は協調性が皆無というわかりやすい欠点を持っているからDクラスに配属されたということになっていたはずだが、スペック的にはAクラスの生徒を凌駕している生徒がそれだけの理由でDクラスになるだろうか？

協調性がないことを考慮しても、自分で考えないAクラスの生徒より遥かに優秀だろう。

…もしかして学校側は協調性を重視しているのか？

…考えても仕方ないか。今のところは学力等も込みで協調性を重視していると考えられるが、それだとBクラスがAクラスよりも一丸となって団結していることの説明が付かない。

これから他のクラスを見ていけばわかるかもしれないが、少なくとも今は無理だ。

「…他の人が全てやってくれる。人生がそうやって全て上手くいくと思っっているんな

ら、とんだ<sup>幸せ者</sup>プラスだね。本当に他人任せで生きていけるならそれでもいいんじゃないかな？」

「…だが、それは本当に生きてるって言えるのか？ 奴隷のように誰かに使われないと何もしないような奴らが、本当にAクラスのままで行けると思うか？」

「『運命とは眠れる奴隷だ、オレたちはそれを解き放つ事が出来た。それが勝利なんだ』っていう私の好きな漫画の言葉があるんだけど、君はどう思う？」

「…Aクラスは運命に縛られた、眠れる奴隷だって言いたいのか？」

「流されるままでもいいなんて思ってるやつは運命…いや、上級階級の者に縛られているだけだ。そう言う意味ではそのことに疑問を持って相談に来ただけで、茂は勝者だ」

「…それで勝ったからなんだっていうんだ!! 結局何かが変わるわけじゃない!!」

「自由を得ることが出来る。誰に誘導された思考でもない、茂が自分の意思で自分自身の行動を決めることができるんだ。それこそが君の言う人あるべき姿なんじゃないのか？」

「……」

「自分より優秀なものに従うことを間違っていると一言もない。でも、自分で何も考え

なくなつてしまつたらそれはただの機械だ。私が特別試験で単独行動をした時、他の人たちはやたらと驚いていたけど私は機械じゃないんだ。自分の意思で起こした行動だつて自信を持つて言える。それで事故を起こしてこんな状態になつてもね」

「茂、君はあの特別試験で本当に自分の意思で行動したつて自信を持つて言えるかい？」

「…俺が自信を持つて言えるのは、点呼の時に零を止めようとしたのと零が事故に遭つたつて聞いてパニックになつたあいつらを正氣に戻した時だけだ」

「だけど今の君なら自分の意思で行動することができるんじゃないか？　こうやつて相談に来たように」

「…そうだな。確かに今なら、命令とも言える指示を聞いていただけの時よりはマシだと思ふ」

「それならそれでいいんじゃないか？」

私がそう言うのと茂は黙つて考え込んでしまつた。

私は茂のことを最初からある程度は評価していた。

最初に康平ではなく有栖の方に来たことも、その後には有栖の支配下に下ることなく中立を維持していたことも、私と仲良くなる前から有栖の黒い笑顔を他の誰も見ていなか

つたのに茂だけ見ていたことも、私と仲良くなつた後も飄々とした態度で他の派閥の人たちとも付き合っていたことも、今こうやって有栖と康平という支配する側の人ではない私に相談を持ち掛けてきたことも評価できると思う。

私に相談しに来たというと上から目線に見えるが、有栖や康平とその派閥の人に相談することはその派閥と完全に敵対することになるかその派閥に入らざるを得なくなる。

支配する側から見れば、無駄に考えを巡らせるような頭の良い人は邪魔なだけだ。康平はあまり積極的になんか言わないだろうが、戸塚君辺りは出しやばつてくるなど言つて対立するか排除に動いてもおかしくない。

他の中立派の人も何処につながっているか現実にはわからない。

そう考えると、確実に派閥には入っていない私に相談に来ることが適切だと私は思う。

私が康平の派閥に入っていることは無人島での特別試験を見るとあり得ないし、有栖の派閥に入っていないと言えるのは康平と有栖の意見がぶつかった時に康平の方に肩入れしたことからはならないと判断することができる。

それに、この船旅の直前には仲直りしたもののそれまでは有栖が私を避けていたのだ。

それを私とよく一緒にいる茂は一番早く気付いていた。そう言う細かいところの気

づきが茂は早い。

そして、今回のことでそれに疑問を持つ着眼点まであることが分かった。茂のような人が多ければ有栖がAクラスを掌握することはもつと難航していたかもしれない。

「…俺だけが気づいても意味ないんじゃないか？ Aクラスのまま卒業するには後2年と7か月ぐらいある。このまま維持できるとは思えない」

「そもそも茂は何でAクラスのまままで居たいんだい？」

「だってAクラスで卒業しないと好きな進路に行けないし、Aクラス以外で卒業したら俺はAクラスに行けなかった無能人間だと評価されてもおかしくないだろう？」

「それに何の意味がある？」

「何の意味って…」

「本当に行きたい進路があるんなら、周りの評価なんて気にさせないほどの實力を見せればいいだろう？ 茂は進むべき進路が決まってるか？」

「…まだ決まってない」

「自尊心とかプライドで生きていけると思ったら大間違いだ。Aクラスに居たい理由も、進路もともに決めないままAクラスのまままで居たいなんて傲慢だと思わないかい？」

「…それじゃあ零はどうなんだよ」

「私は至極どうでもいい」

「…だと思つた」

私の言葉で一瞬凍りついたかのように固まった茂だったが、2秒も経たないうちにそう言つて大きく息を吐いた。

未だに誰にもAクラスでなくても良いなんて言つていないはずだが、一体茂は何時から気づいていたのだろうか？

「不思議そうな顔してるけどそんな大したことじゃないぞ？」

「…何時からそう思つてた？」

「疑問に思つたのは初日から。カメラのこととポイントについてほとんど回答そのものだった答えを知っていたのに、坂柳さんとリーダー争いをしていなかったから他の人なんてどうでもいいと思つてるんだと思つてた」

「でもAクラスの特権を知つたのはもつと後だ」

「その特権を真嶋先生が話した時から確信に変わったんだ」

「??」

「坂柳さん以外の他のやつらは大なり小なり驚きを見せていたけど、零だけ心底どうでもよさそうにしていたからな。坂柳さんはどちらかと言うと答え合わせをしている感じだった」

…本当によく見ている。

確かにあの時は特権に関してはどうでもよかった。あの時に大事だったのは有栖と勝負をする上で、クラス内での立場を作ることと重点を置いていた。

それに過負荷<sup>マイナス</sup>たる私がAクラスのままでいられるわけがないし、そこまでして進学したいわけでもなかった。働ければ最悪何処でもいいとまで思っている。

今でもその考えは変わっていない。むしろ『負完成』となったことで尚更Aクラスのままで卒業できるとは思ってなかった。だからこそ図書館や自室では既に大学受験の勉強を進めているのだ。

進学するためには最低限特待生にならなければいけない。Aクラスのまま卒業できるなら特待生で入れるのかもしれないが、自分の学力が伴っていない状態で特待生になっても途中で外されてしまうかもしれない。

それでも無理なら就職する。最悪アルバイトを転々とするようになっても死にはしない。

そういう考えがあるからこそ、あの時他のクラスメイトのほとんどが動揺したのに私

だけ無関心だった。

茂は目敏く、それを見ていたのだ。

有栖の方にも目を向けて、彼女が何か違うことを考えていることにも気づきながら私との違和感に気付いていた。

「…正解。私自身、初日に言った通り施設出身の身でね。お金がないんだ。だから大学に行くんなら、最低限特待生にならないといけない。それでもアルバイトとか奨学金を借りることは確実だろうけどね」

「Aクラスの特権を使えばそれでなれるんじゃないか？」

「なることはできると思う。でも、成績不振で特待生を外されたらお終いだ。だから今のうちに学力を付けて、自分の力で大学受験を乗り越えないといけない」

「…確かにその方が後でAクラスから外されてもリスクは少ないな。それにその後のことも考えるとその方がよっぽど良い。だけどAクラスを外されたことで大学側からの評価は下がるんじゃないか？」

「それならさつきも言った通り、周りを黙らせるほどの学力を見せれば良い。コネで特待生になったと言われるよりはマシだと思わないかい？」

「…ああ、そうだな。その方がかつこいい」

茂はそう呟いて、また大きく息を吐いた。



彼の美学に沿ったつもりはないが、私としてはそれがベストの選択肢だった。Aクラスを維持するための策略を廻らすよりも、学力を身に着けたほうが今の私には役に立つ。

プライドと自尊心がまるつきりないとは言わないが、それだけで食べていけるほど世の中が甘くないことは今世の幼少期に思い知った。私は公園で死んでいたカラスの味も、石を当てて何とか捕った鳩の味も忘れることはないだろう。

むしろ人としての尊厳を守りたいからこそ、3年間しかいない高校で自尊心を振りまく様なことをしないのだ。自分の価値なんて出来損ないでも構わない。

有栖との勝負も私が「勝ちたい」と思ったからしているわけだが、その勝負を理由に勉強をさぼることはあまりしなかった。

あまりと言うところが意思の弱さを露呈している気もするが、機械じゃないのだからその日の気分とかコンディションがある。無理にやってペースを無理矢理守っても意味はないはずだ。

「…零はこれからどうするんだ？ もう坂柳さんがAクラスのリーダーみたいなものだろ？」

「本当のことを言うとAクラスのことなんてどうでもいいんだけど、ちよつとした事情でAクラスを落とすわけにはいなくてね。とりあえずはAクラスをAクラスのまま

にすることに努めるよ」

「Aクラスの特権を必要としているやつがいるかもしれないのにか？」

「口だけだったり意思だけ立派でも、実力が伴ってないやつにあげるようなお人よしじゃないからね。茂はコネだけで医者になった医者に診察してもらいたいと思うか？」

「…それもそうか」

「まあ、そういうわけだからAクラスの不利になるようなことは控えるつもりだ」

「坂柳さんとの勝負があるからか？」

茂の言葉に今度は私が固まった。

これについて知っているような人は有栖と橋本君、神室さんぐらいだ。康平にも言った覚えはない。

「この前の中間考査の打ち上げの時だ。他のやつらは楽しそうに宴会気分だったけど、零たちが来た時のそっちのテーブルだけ雰囲気違ったからな。そっちに注意を向けてた」

「…あの時茂、戸塚君たちと楽しそうにしてなかった？」

「無理やりテンション上げてたんだよ。正直くっそきつかった。ああいう場所だと一人白けたやつがいたらみんな白けるからな」

「それでも一応他の人に聞こえないように気を遣っていたんだけど」

「だからこそだ。その雰囲気だけおかしかつたから、ちよつとトイレに行くフリして隣を通つた時に聞き耳を立てた。他のやつらは場の雰囲気もあつて大して気にしていなかつたが、俺以外にも葛城君はそっちに気を向けてたぞ。まあ、葛城君は他のクラスメイトに引つ張りだこだったから多分聞いてないけどな」

「…あの時に勝負がどうのつて詳しく言つた覚えはないけど」

「坂柳さんの、それで敗北を認めるあなたではないでしょう？つていうところを聞いたからな。後は今の回答で確定になつた」

「…鎌かけだったのか」

「ほとんど確信に近かつたけどな」

私の予想よりも茂は優秀な人間だ。

私みたいな過負荷マイナスよりも、周りを見て社会に適応しつつ答えを探しに行けるプラスの人間。恐らくそれが彼の本質なのだろう。

「まあ、そういうこと。下手にAクラスが落ちて有栖が勝手に負けたなんてことになつて欲しくないんだ」

「スベシヤル有栖は私が潰す」

そう言った私は私の中の過負荷<sup>マイナス</sup>が、まるで歓喜に打ち震えているかのように私の中で渦巻き、増幅していることに気付いた。

私という容量からオーバーしたものが私から滲み出る。

それを見て茂は露骨に顔を歪めた。

「なんだそれ…？」

「私だよ。今ここで君が見ている者こそが、正しい意味での私さ。私は君の思っているような人じゃない」

自嘲気味にそう笑うが、茂の顔は歪んだままだった。

まあ、ただの普通<sup>ノーマル</sup>である彼には負荷が多いのだろうと思つて過負荷<sup>マイナス</sup>を抑えようとした。

しかし、抑えようとした時には茂の心は折れておらず、顔も笑顔になつていた。

「それが本当の零なんだな。…ようやく納得した」

「…気持ち悪くないのかい？ 正直自分でも驚くほど最低<sup>マイナス</sup>になつた自覚はあるぜ？」

「それがどうした。今更ダチに気後れするようなことはしねえよ。さっきのはちよつと驚いただけだ。むしろ、本当の零を知れて嬉しいとまで思つてる」

茂の表情から、それが今まで見てきた上つ面の言葉ではなく本心であることを察し

た。

そしてまた、有栖と同じく茂の目に宿る輝きが私には眩しかった。それは過負荷マインナスになつてしまった私が捨て去つてしまった、人としての大事な何かなのだろう。

わざとらしく息を吐き出してから、私は彼に向き合つた。

「本当に君はどこまでもプラス愚か者だよ。こんな過負荷私を知つてなお、友達なんて言われるとは思わなかつた」

「俺の意思は自由なんだろう？ だったら俺が零を友達だつて思うのも自由だ。零が何を抱えていようともな」

「もしかしたら大量殺人鬼かもしれないよ？」

「零が俺を殺しに来たら考えるさ」

爽やかな笑顔を浮かべてそういう茂が、私にはとてもプラスに見えて仕方なかつた。色々と吹つ切れただけにも見えるが、自棄になつていているわけではない理性がしっかりある。彼は何か自分なりの軸を見つけたのだろう。

自分の根本を形作る物、自分の本質、考え方となる軸を。

「…まあそこまで言うなら止めはしないよ。言つた通り君は自由だ。茂はこれからどうするつもりだい？ 今なら有栖の方につけば、私との立場を利用できるしそれなりに上

の立場につくこともできると思うよ?」

「俺は零の方につく」

「本気で言ってる?」

「自分の意思でダチを助けるんだ。そっちの方がかつこいいだろ?」

そう言つて不敵な笑みを浮かべた茂は、この部屋に來た時の道がわからなくて迷子になつてしまった子供のような雰囲気は全くなかつた。

自分の探し求めていたものを見つけ、自分の意思を取り戻した様は紛れもなく『人』  
だつた。

この世界がライトノベルを基にした物だと思つていても、ここで生きている人たちは  
本当に生きているのだと肌で感じた。

「そう言うならよろしく頼むよ」

「ああ、でも何でも言うことを聞くわけじゃないつてことは先に言つておくぜ?」  
「それでいい。それがいいのさ」

そう言つた私達はお互いに右手を伸ばして、握手をした。  
プラスとマイナスが合わされば0に近づく。

でも、プラスとマイナスをかけ合わせれば結果は必ずマイナスになる。

この協力者との出会いが私に何をもたらすのか、今の私にはまったく見当が付かなかった。

「ところで、さっきのは何の漫画のセリフだったんだ？」

「ジョジョも知らないとか死ねよ」

もしかしてこの世界にはジョジョまでないのか？

突然のことに困惑する茂を無視して、私はこの世界に私が知っている漫画がほとんどないかもしれないという事実を改めて戦慄したのだった。

## 24 話目 豪華船旅行 八日目

目が覚めると足が全く動かさないことに気付いた。

周りに人はいなく、時刻は朝の7時を回ったところ。そろそろ朝食の時間になるかもしれないが、このままでは食べに行くことすらできない。

いい加減にこの怪我を何とかしなければならぬ。

流石に不便極まりないこの状態のまま特別試験に臨む気はないし、そもそもこんな状態では特別試験に参加できるかもわからない。

目覚めて早々大きなため息を一つ零すと同時に、懸念していたことを割り切る覚悟を決めた。

「無冠刑」  
「ナツシゲオール」

そう呟いて空いている右手に鉈を持つ。この部屋に監視カメラがないことは確認済みだ。

取り回しがとても悪い私の過負荷<sup>マイナス</sup>だが、もうそれを気にしている暇はない。

私はその鉈を勢よく自分に突き刺した。

無冠刑鉈はベッドや衣服を傷つけることなく、私自身を貫いても外傷を残さない。



本来ならこんなことしなくてもスキルを発動しようと思えば発動するが、『怪我』が『私』の大部分を占めている今完全に『縁』を切るならここまでしないとイケないと感じた。

『怪我』との『縁』を切る。

これをすれば金輪際一切怪我を負うことがなくなる。

長い時間が経てば再び『縁』が結ばれるかもしれないが、少なくともこの高校生活で怪我を負うことはなくなった。

最初からこうしておけばよかったと思うかもしれないが、それをしなかったのは懸念していたことがあったからだ。

1つ目に、あの重体が一瞬で完治したとなれば原因究明をしようとするのが普通だ。

当然シラを切ることになるが、それまでの間精密検査などを頻繁にやることになるかもしれない。それ以上に何らかのモルモットにされる可能性もある。

だが教育機関であるということからその可能性は低かったことと、精密検査をするなら今やらなければ特別試験と被る可能性があったから仕方ないと判断した。

昨日茂が協力すると言った以上、彼がどのような行動をするのか次の特別試験で見たい。そのために、多少のリスクを背負ってでも次の特別試験に参加しなければならぬと判断した。

2つ目に、「無冠刑」<sup>ナツシグオーレル</sup>が治療能力みたいなプラスの力ではないこと。

ある意味で「大嘘憑き」<sup>オールフィクション</sup>とも似ているこの過負荷<sup>マイナス</sup>は、同じような欠点がある。なくしたものは取り返しのつかないという点だ。

これのせいで私は、交通事故に遭つても怪我を負うことはないし、頭を撃ち抜かれても怪我を負うことはないし、崖崩れに会つても怪我を負うことはないし、殴られても怪我を負うことはない。

正確には、怪我を負うことが出来なくなつたとも言える。

そのため、自傷行為の類はできなくなつた。力尽きることと『縁』を切つた場合には、睡眠がとれなくなることと同じだ。外部からの干渉によつてではなく、自らの手で『怪我』を自分に負わせるようなことはできない。これによつてどのような縛りが起こるのかがわからなかつたから、この選択は本当に取りたくなかつた。

現状でそう困るようなことにはならないと感じているが、もしかしたら後々何かで引つかかる可能性もある。

そういう意味で、球磨川先輩が作つた「虚数大嘘憑き」<sup>ノンフィクション</sup>がどれだけやばいものかわかる。

一度なくしたものを取り戻すことを可能にするだけのスキルだが、私には逆立ちしてもそんなスキルは作れない。

一度なくしたものが取り返しのつかないように、一度切った縁は基本的に時間経過か、それに関わることでしか復縁しない（縁が戻るという意味で復縁と言葉をあてている）。

人との縁ならそこまで戻すことは難しくないが、概念だと時間経過でしか復縁できない。

縁を結ぶスキルがあれば別だが、私以外のスキルホルダーがいるとは思えない。いたとしても、そんなピンポイントなものを持っている人に出会う確率は限りなく0に近い。

怪我をしていた部分を見た。

固定されていた左手は包帯を外しても痛みが走ることはなかった。

左足も動かしても大丈夫そうだ。

一番重傷だった吊るされていた右足も、自力で下すことが出来た上に痛みも違和感もなくなっていた。

ベッドから降りて、辺りを少し歩いてみる。歩いてみた感じの違和感はなく、文字通り怪我なんて元からしていなかったかのようだった。

持っていた鉈を消して、ふと時計を見た。

時刻は7時15分。昨日はあの後すぐ寝てしまったが、既にお腹が減っているように感じた。

とは言っても、突然重体だった私がいきなり食事をしに行つては問題がある。

少なくとも星之宮先生辺りに会つて話さなければならぬ。

「何してるのっ!？」

突然の声に驚いてそつちの方を向くと、血相を変えて声を荒げる星之宮先生の姿があつた。

恐らく私の様子を見に来たのだらうと思われるが、タイミングが良いのか悪いのか微妙な気持ちになる。

少なくとも暫く朝食にはありつけないさそうであることを察した私は、少し憂鬱な気持ちなりつつも事情説明を行うのだった。

あの後、星之宮先生とこの船に付き添っていたらしい医師の下で精密検査を行った。血液を採取されたり、レントゲンを撮られたり、触診をされたり(当然男性の医師が)と色々なことを行つて解放されたのが18時を回ったころだった。

予想通りかなり長い時間を検査に当てられたが、食事を持つてきてくれたこともありそこまで苦ではなかった。

星之宮先生と医師の、狐に化かされたような顔が今でも忘れられない。

過<sup>無冠刑</sup>負荷を使ったのだから原因がわかるわけではないのだが、あの大怪我が影も形もなくなつてしまった事実は変わらない。

「私」を対象に「無冠刑」で「縁」を切つたが、過去に起こつたことに遡つて「縁」を切れるほどのものではない。

記憶も記録も残るのだ。だからあまり使いたくなかつた。

乱発していたら確実に化け物扱いされることは間違いない。一回目でこれだ。こんなことが頻繁にあつては、ただでさえ過<sup>マイナス</sup>負荷なのに尚更人外扱いされてしまう。

私は一<sup>過負荷</sup>応人間だ。定義が曖昧であろうが、心を持つている人間である。

それが普通<sup>ノーマル</sup>寄りであろうが、過<sup>マイナス</sup>負荷寄りであろうが人間なのだ。

男でも女でも子供でも大人でも老人でも同じ人間であるように、過<sup>マイナス</sup>負荷であろうが人間であることに変わりはない。

そんな訳で解放された私はクラスメイト達に事情説明をし、一緒に食事をとつた後で割り当てられた自室に戻つていた。シャワーも浴び、寝るための準備はすでに終えてい

る。

予定通りであれば私が有栖に付き添う時間帯だが、怪我人だったということもあり今は橋本君と神室さんの二人が有栖に付き添っている。

有栖とは表面上は変わらないが、私を見るときの彼女の表情が時折曇っているのを見逃さなかった。

だからといってどうかするわけでもない。

今、割り当てられた部屋には茂と私だけがいる。

もう一人、吉田君というクラスメイトが相部屋だが彼は今出払っていた。

「で、あの怪我をどうやって治したんだ？」

「日頃の行いが良かったからだよ」

「いや、それだけはない」

私の返事に茂が即答する。

彼の言う通り過負荷マイナスでもある私が、日ごろの行いが良かったから治ったなんてことがあるわけがないので、言っていることに間違いはない。

「まあ、何で治ったのかはご想像にお任せするよ。知っていたら話すわけないし、知らなかったら話せないだろ？」

「…それもそうか。強いて言うなら自力で治せるんなら最初からそうしてるだろうって

と何か？」

「そういうこと。それじゃあ、吉田君が帰ってくるまでにこれからの方針について話そうか」

偶然、私と茂だけで部屋にいる機会を逃すわけにはいかない。

これからも二人だけ話せる機会があるかわからない以上、話せるうちに話しておきたいことがある。

「チャットとかは使わないのか？」

「記録に残る物はどこからばれるかわからないからあまり使いたくないってのが本音。必要だったら使うけど、あんまり多用したくない」

チャットやメールでも話し合いはできるが、記録に残ると携帯を奪われた時に内容が他人に割れてしまう。覗き込まれて内容を見られる可能性もあるため、私はあまり好きではなかった。

「とりあえずはAクラスをそのまま持ち上げる感じだったか？」

「基本的にはそんな感じで進めようと思うけど、細かいことは指示するつもりはないから。どういう風に行動するか茂の好きにしていよいよ」

「…言いたいことは大体分かった。その言葉には、Aクラスを無理に持ち上げることはしなくてもいいってことも入るか？」

「当然。もしも君がAクラスに居たいっていうんならそのまま頑張ればいい。もしくは、自分だけAクラスに移れるポイントを確保するように動いてもいい」

「そういうことか」

私の物言いに納得したと言わんばかりに頷く茂。

何も間違つたことは言つてない。お互いに薄々察していることだろう。

Aクラスはいずれ落ちる。

それこそ、天使が堕天使に変わるように、プラスがマイナスに変わるように、眞実が虚言に変わるように、正義が悪に変わるように、勝者が敗者に変わるように、支配者が奴隷に変わるように、薬が毒に変わるように、貴族が平民に変わるように、流れ星が消し炭に変わるように、有力者が犯罪者に変わるように、光が闇に変わるように、いずれ必ず落ちていく。

過負荷私があるから、というよりは綾小路君主人公私がいないからと言つた方が正しいかもしれない。彼が一人だけでAクラスに入ってくる可能性もあり得る。だけど上に上がろうと試行錯誤しているDクラスの面々と、上にいるからもつと優秀な人に丸投げしていれば何とかなると思つて放棄しているAクラスの面々ではそう遠くないうちに差が付く。

正確には、差が縮まると言つた方が正しいか。

無人島での特別試験を踏まえて、毎回Aクラスが敗北するとは限らないがAクラスが



他のクラスから目の敵にされるのは目に見えている。

茂からすれば、私がDクラスに敵対したくないやつがいると零したこともAクラスが敗北すると予想できる判断材料になるだろう。

「まあ、なるようになるさ。俺だけが深く考えすぎても仕方ない」

「それもそうだろうね。どれだけ変えようと思っても、力がなければ変えられないこともある」

「そういうことだな」

そう言つて二人そろつて溜息を吐いた。

どれだけ意気込んででもできることとできないことというものが世の中にはある。

私はもちろん、茂だつてAクラスを表で引つ張つていくだけのリーダーシップはない。仮にあつたとしても、他のクラスを抑えて自分たちがAクラスのままでいられるようにする策を練るような力もない。反逆してきた生徒たちを抑えるだけの力もない。結局できないことはできないのだ。どれだけ覚悟があろうが、無い袖は振れない。……そろそろ本題に入らないとまずいか。

既に寝る準備は済ませているが、吉田君が帰つてきたら話し合いができなくなる。

最低限、私側につくというなら伝えておきたいことがあつた。

「…私は自分の派閥なんて作るつもりはない。作つても負けるのが目に見えてるし、そ

んなものにつき合わせる気も付きまとわれるのもご免だからね。プラス茂の人間が私につくつて言ったときも、正直どうしようか困ったくらいだ」

「だろうな。普段見せないような間抜け顔は見てて面白かったぜ」

「それは忘れてくれ」

過負荷マイナスをあつさり認知してなおかつ、私に協力すると言うような人がいるとは思わなかったのが本音だ。

有栖でさえ暫く私とは距離を置いていたのに、即断即決で私側につくとまで言った茂には驚くしかない。私の過負荷マイナスをもともしないプラスを持つているのなら、そう遠くないうちに何かに目覚めてもおかしくない。

彼が言うには私だから別にいいと言っていたが、他に過負荷マイナスの人がいたらどのような反応をするか見てみたいと思った。

もしかするとこの世界に私以外のスキルという概念があったのなら、昨日の段階で覚醒していたかもしれない。

未だに普通ノーマルの域を出ていない茂だが、観察しただけで筋力量まで測定できるようになったら特別スペシャル、もしくは異常アブノーマルになるのだろう。

常人には出来もしない領域まで手を出し始めたら、間違いなく普通ノーマルとは言えなくなる。

「私が君にしてほしいことは一つだけ。自分がしたいことをしてほしい。せつかく考えられるだけの頭があるんだから、それを統率して押さえつけるのは愚策だと思うしね」

「本音は？」

「他人にあれこれ指示出すのがめんどくさい。指示がないと何もできないような奴は友人だと思わないし、そんな奴隷私には必要ないから」

「…ほんと零らしいと言えばその通りだぜ。それじゃあ、俺は自分のしたいようにやるさ」

「それがいい。口を挟むかもしれないけど、最終決定は任せるから」

「おう、俺なりに考えて好きにやらせてもらおうぜ」

茂は決心を新たにするかのよう、強く頷いた。

これからの学校生活は、茂が今まで生活してきたそれとは変わったものになるだろう。

他の人に任せていたクラス運営に、自分で疑問を持ち、自分の意思で考え、自分で行動する。

言葉にすればこれだけであるが、実際にクラスの輪から外れて行動するには問題が発生することもあるだろう。それを踏まえて、彼に自由にやってほしかった。

彼がどの程度の思考力と行動力があるのかを見たかったというのもあるが、彼の本質

がどこにあるのかを知りたい。

以前からその片鱗を見せていた観察眼がそうなのか、私の過負荷マイナスを跳ね返すような精神力なのか、はたまたそれ以外の何かなのか。

彼が過負荷私を理解したように、私も彼を協力者として理解しなければならぬと考えている。

「それじゃあ、早速次の特別試験の話なんだけど」

「ちよつとまで。次の特別試験ってなんだ？」

…そう言えば茂には言っていなかった気がする。

いや、そもそもこれも私の予想であつて本当にあるかわからないものだ。

「あくまで私の予想だけど、あと二日以内にもう一度特別試験が始まると思う」

「…そういうことか。無人島での特別試験とは別の試験が残りの一週間以内に起こるって予想したわけだな？」

「そういうこと。この船の設備を無料で学生に使えるようにするために、一体幾らのお金をつぎ込んだらうね？」

「確かにそう考えると、もう一度特別試験があつてもおかしくないな」

「まあ予想の範疇を出ないつてのはあるけど、心構えがあるかないかではかなり変わるから覚えておいてほしい」

「そこまで言うならきちんと言っておく。残りの一週間がただ遊んで過ごすってわけじゃないような気はしてたしな」

茂の言葉で、茂も無意識的に疑問を抱いていたのかもしれないと感じた。

無料で遊べる船の施設、一週間も残っている目的地のない船旅、学校で貸し切っている豪華客船。これらの要素を踏まえると、どこかで無意識的に警戒してもおかしくないかもしれない。

無人島での特別試験があつたということもあるが、昨日は何もなく終わったはずだ。警戒を解いている生徒のほうが多いだろう。

有栖や康平は恐らく警戒を外していかないだろうが。

「その特別試験でもしかしたら何かしらのアクションを取るかもしれないから、その時に協力してもらおうかもしれない」

「その時の連絡は？」

「今みたいに直接会って話すのが一番だけど、出来ない場合も多いだろうし人気がないところでチャットで話す方針で。もう一度言っておくけど、協力って言ってもするしないも自由だし細かい指示なんかも出さず気はないから」

「了解。気を張りすぎて空回りしたら元も子もないし、適当にやらせてもらうぜ」

彼は目の前で覚悟を決めるかのように拳を握りしめた。

何が彼を突き動かすのかはわからないが、プラスであつても一応は友人である彼をどのように扱うのか。過負荷<sup>マイナス</sup>である私には理解もできないことではあるが、普通<sup>ノーマル</sup>である部分<sup>私</sup>からはそれが良いものだからだと訴えかけてくる気がした。

そうこうしているうちに吉田君も部屋に戻ってきたので、私はベッドに潜り襲い来る睡魔に身を任せた。

## 25話目 豪華船旅行 十日目

無人島での特別試験から3日。

昨日は何事もなく平和で、くつだらな日常を謳歌するだけの日だった。

どうでもいいクラスメイト達と話をし、どうでもいい人生の時間を浪費していき、どうでもいいクラスの間にある確執に囚われてとらわれて過ごす。

それだけの、いつもま通りらない日常だ。場所が船内だということしか変化していない。

昨日から初日に決めた予定通りに有栖の付き添いをしているが、今はまだお昼なので橋本君が付き添っているだろう。

あの後、有栖は私を時折悲しそうな目で見てくるようなこともなくなった。彼女に夜付き添っている時は、大体夕食を食べてから有栖の割り当てられた部屋で時間を潰していた。

彼女の部屋は体のこともあつてか、それとも急に参加することにしたためか一人部屋である。そのため、他の人に聞かれることのない他愛ない話をしてることが多かった。

豪華船と言うだけあつて映画館や舞台などもあるらしいが、私はその手のものに詳しく

くない上に興味が無い。プールなどには有栖が参加できない。そのため有栖の部屋でただただ深い意味のない話をする、無意味でだけど何となく楽しいと感じるような時間を過ごした。

昨日は日付が変わる前、具体的には22時30分に彼女の部屋を出て自室の部屋で勉強をしていた。

吉田君が少し引いていたような気もするが、私にはどうでもよかった。生きていくために余裕がある時には少しでも積み上げないといけない。プラスに勝ちたいと思うなら、尚更見えない努力をする必要がある。

裸エプロン先輩だって安心院さんからスキルを返してもらうために立ち向かったのだ。私は彼のようになれるなんて思っていない。どんなに模倣したところで所詮は模倣であって、本人ではない。他人であることに変わりはないのだ。

でも、過負荷マイナスとしての在り方に感銘を受けたのは間違いない。彼の在り方だった。

嫌われものでも！ 憎まれっ子でも！ やられ役でも！ 主役を張れるって証明したい！！

今でもはつきりと覚えているこのセリフが、私の目的と酷似しているようにも感じた。

プラスでも、マイナスでも、ノーマルでも、生きる意味と言うものは存在するのだと、



小坂零が存在していることに間違いはないと思いたかつたのかもしれない。

人の輝きというものはマイナスであろうとプラスであろうと持つているものだということを証明したいという気持ちだが、未だに名残惜しく残っているようにも感じた。私は過負荷にしかねないのだと理解していても、私の生き様というものを貫くためには避けては通れない問題だとも直感的に思っている。

だから、積み上げたところで水泡と化すような努力だとしても私はやめる気はなかつた。

そうして決意を新たにしていたが、無理に続けても効率が悪くなるので1時ぐらいい切り上げた。

そしてそのままベッドに入つて、気が付いたら昼になつていたというわけだ。予定よりも長く寝ていたが、未だに少し眠いような気がする。

時刻はすでに13時を回つて、もう少しで長い針が6を指そうとしていた。

昨日の夜に在つたやる気は日を跨いだからか萎えており、今日は有栖の付き添い以外で部屋から出る気にすらならなかつた。一日一食でも十分だが、こんなこともあるかと昨日珍しいものを見つけたので買っておいたそれに手を伸ばした。

カロリー〇イト チョコ味

自販機産である。前世ではそれなりに見たが、こつちに来てからは初めて見た。昨日

無料だからと、自販機の飲み物を片っ端から漁った時に見つけたので一緒に回収した。

悪気はなかった。ラウンジでスタップからコップを貰って、部屋の中で種類問わず買った飲み物を混ぜて飲んだだけだ。誰でも一度はあるだろう。ドリンクバーでジュースを混ぜるのと同じだ。

コーンポタージュとコーヒーと緑茶とお汁粉はなかなかの強敵だった。

昨日買って、ぬるくなっている余ったミネラルウォーターを口に含む。

寝起き特有の口の中の気持ち悪さが、洗い流された。そして、カロリー〇イトを食べる。食べかすがベッドの上に散らかるが、どうせ私のものではないし私には関係ないからどうでもいい。

そうして口の中がパサついたところで再びミネラルウォーターを口にした。もちよもちよといった感触が口の中で繰り返される。ゴクンと飲み込むと、少しばかりお腹が満たされた気がした。

そしてミネラルウォーター二本目を取り出し、飲み口を口に合わせる。

そんな時だった。

キーンツという高い音が室内で反響した。

「ブッフオ!?!」

驚いて思わず噴き出してしまった。

ベッドの中の枕の上で食事をしている状態だったので、枕がびしょ濡れになった。

不幸中の幸いと言うべきか、シーツの方まで被害はなく枕だけが全ての犠牲になったようだ。

いったい何の音だったのかと思っていると放送が入った。

『生徒の皆さんにご連絡いたします。先ほどすべての生徒宛てに学校から連絡事項を記載したメールを送信いたしました。各自携帯を——』

そこまで聞けば十分だ。

待つてましたと言わんばかりに、音を発していたであろう携帯電話を確認した。

そこには間もなく特別試験を開始すること、『20時40分』に集合すること、10分以上の遅刻にはペナルティがあることなどが記載されていた。

一度流して読み、見直しの二回目を見ていたところで『各自指定された部屋、指定された時間』という部分が引かかった。

確信を得るべく、時折覗いてはいたものの書き込むことは最低限しかしなかった私が作つたほうのグループチャットを開いた。

『今回の特別試験、書き方的にグループ分けされるみたいだから時間と場所をみんな書いてほしいんだけどいいかな？ 私は20時40分組の2階202号室だった。気づいていない人がいたら他の人も書き込んでもらうようにしてほしい』

突然私がこんなことをしていることに驚く人もいるかもしれない。

乗ってくる人もそう多くはなさそうだと思っていたが、早くも書き込んだ人がいるみたいだった。

『俺は18時の2階203号室だ。誰が同じグループか知っておいた方が気が楽だし、皆も書き込んでくれよな』

書き込んだのは茂だった。

思わずガツポーズをしてしまいそうになる。それほどファインプレーだった。

私が突然こんなことを言ったところで、乗って来る人はたかが知れている。だが、他のクラスメイトが参加していれば話は別だ。一人が乗れば、それに気づいた周りの人が乗り始める。そして一人、また一人と段々増えていけばそのうち、他の人も書き込んでいるのだから自分も書き込まなくてはいけないという強迫観念に駆られる。

現に、茂が乗ったのを皮切りにクラスメイト達が書き込み始めた。

康平と有栖が早い段階に反応し、私の意図を汲んだのかわからないが彼女たちも書き込んでいた。

『私は零君と同じ20時40分の2階202号室です。他の方も協力お願いします』

『俺も零と同じ20時40分、2階202号室だ。気づいていないクラスメイトがいたら声をかけてほしい』

…それだけ分かれば十分だ。

他のクラスメイトのことはそこまで重要視していない。

私は内心ほくそ笑んだ。

これから忙しくなるぞと思っていると、枕がびしょ濡れなことを思い出した。濡れている枕を見ると、下にまでシミを作っており、シーツも交換しなくてはいけなくなっていた。時間が経ったせいで、下の方に染みていったのだろう。

私は大きなため息を吐き出し、濡れている枕とシーツを交換してもらうために制服に着替えてから、ラウンジに向かうのだった。

ラウンジで枕とシーツの替えを貰った後、私はまた部屋に戻って引き籠っていた。

直接船内を歩いてもいいが、今からしたいことは部屋でもできることだったのでわざわざ歩き回って他の人に見られるような真似をしたくなかった。

シーツを交換してから、枕を取り換える。濡れた枕をシーツで包んでそのまま放置した。後で外に出るときにツイデに渡すことにする。

私はベッドに転がり、携帯を取り出して康平への個人チャットを開いた。

『康平、ちよつと話があるんだけど』

先ほどのグループチャットでは、既にクラスメイト達の全ての時間と部屋割が書き込まれていた。

だが、康平はかなり最初の方に書き込んでいたため個人チャットの方には気づかないかもしれない。

10分経つても書き込みがなかったら電話をしようかと思っていた。

『どうかしたか?』

そう思っていたが、2分も経たないうちに返事があつた。

他に学校側からの連絡がある可能性を考えたのかもしれない。

『今回の特別試験についての話をしたいんだけどいいかい?』

『今すぐか?』

『ここだけで済むことだけど、今忙しい?』

『チャットをする分には問題ない。話に行くとなると少し時間がかかる』

『それならチャットで。今回の特別試験、私も一枚かませてくれないかい?』

『どういうことだ?』

『そう難しいことじゃないんだけど、一つだけお願いがあるからそれを聞いてほしい。』

『どうか?』

『なんでもというわけにはいかないが、零の頼みならある程度は聞こう。前回の特別試験のこともある』

『それは気にしてないけど、お言葉に甘えるよ。康平はいつもと変わらない振る舞いをしてほしい』

『詳しく頼む』

『Aクラスのリーダーで、Aクラスだというプライドを胸に掲げて、慎重で、保守的で、クラスメイトのことを良く思っているその姿勢を崩さないでほしい』

『元からそのつもりだ。だが、前回の特別試験のことがある以上、俺のことを見限ったクラスメイトがいてもおかしくないだろう。それを踏まえると、前回のようにはいかないかもしれない』

『その辺は少し根回しをするから、康平はありのままの自分で居てほしいんだ』

『了解した。その方が都合がいいのなら、そのように心がける』

『頼んだ』

とりあえず康平には話が付いた。これで、Aクラスのリーダーは康平であると他のクラスに誤認させるための一步を作る。

思いのほか康平がこっちの言い分をおとなしく受け入れたのが気になったが、説明が終わった後にも有栖と三人で話すはずだ。その時にでも聞いてみるか。

次に手をまわすのは、当然有栖だ。

『有栖、今ちよつといい？』

こちらも多少時間がかかるかと思いきや、返事はすぐに来た。

『どうかしましたか？』

『少し話があるんだけど、今いいかい？』

『でしたら、私の部屋に来てください。私も話したいことがあります。橋本君と入れ替わりでよろしいですか？』

『了解。もしたら今からそっちに行く』

チャットだけで済ませたかったが、チャットの履歴を残されるデメリットを考えると二人だけで直接会うなら問題ないだろうと判断した。

濡れた枕を包んだシーツを部屋を出て近くにいたスタッフに渡してから、私は携帯を持って有栖のいる部屋に向かった。

有栖の部屋に入ると、橋本君と有栖がそこにいた。

私が来たことを確認して、橋本君が部屋を出ていく。橋本君が部屋を出ていったのを



確認してから、私は有栖に向き合った。

「今回の特別試験、ちょっと真面目にやろうかと思ってるんだ。それで、少し協力してほつろ」

「どういう風の吹き回しでしょうか？ クラス間の抗争にはあまり参加したくないと思っていましたか？」

「有栖に負けられたら困るんだ。君は私が叩き潰す」

「…私が他のクラスに後れを取ると言いたいのですか？」

「<sup>足</sup>クラスメイトが<sup>手</sup>いるんだから、そうなってもおかしくないだろう？ 別にAクラスで居る必要性なんて感じないけど、私は私のためにAクラスを持ち上げる」

「確かにそういう可能性もなくはないでしょう。ですが、私がわざわざその申し出を受けると思いますか？」

「確かに有栖に対してメリツトはそこまでないかもしれない。やろうと思えば一人でクラスを移れるぐらいのポイントを貯めることだってできるだろう」

「私が負ける前提のところになりますが、3年間もあればそれぐらいは難しくありません。話はそれだけですか？」

「それだけだよ。協力してくれないなら、私が勝手にやるだけさ」

私が意味深にそう返すと、彼女は少し考えるように黙ってしまった。

私の言いたいことを理解したからこそ、どっちがいいのか考えてしまっているのだろう。

有栖が協力してくれないなら、文字通り「勝手」にやる。

私の過負荷マイナスという気持ち悪さを知っているのなら、何をしてくるのかわからないことよりも、手元に置いておいた方がいいかもしれないと考えているだろう。

そう思わせられれば、今の段階では十分だ。

「気が変わったら、呼び出された後にも言っただけいい。まだ試験の内容すらわかってないからね」

「…そうさせてもらいます」

「それで有栖の話は何だい？ そっちも話したいことがあるって書いてたよね？」

「今回の特別試験、零君はどう思いますか？」

「予想的にはクラス内でグループ分けをしたことから、クラスに関係なくグループで何かをするってところだと思ってる。前回の特別試験はクラスごとに分かれたこともあるし、今回はクラスの垣根をなくすような形にするんじゃないか？」

「私も概ねそう思っています。クラスごとではなく、グループ単位で何かをするということでは間違いでしょう」

「問題はどこにポイントを絡ませてくるかってところかな？ 何もポイントが絡まない

ようなものだったら、積極的に行動しようとする人は少なくなるだろうしね」

「いくつか予想は立てていますが、はつきりとした証拠がないので図りかねています」  
「最初に説明された組から聞けば大体の概要はわかると思うから、そこまで気にすることは無いと思ってた」

「グループ分けの方はどう思いますか？」

「予想だけど、何らかの評価基準はあるとみた。私はともかく、有栖と康平が一緒にまとめられている以上は何らかの評価基準があるんだろう」

「私の予想では担任の教師が決めたと思います。零君が真嶋先生に質問をしに行ったことは知ってますから、そこら辺を考慮したのではないでしょうか？」

何でそんなことを知っているのだらうかと思つたが、概ね手下神室さんに見張らせていたのだらう。職員室では人目がありすぎてそこまで注意していなかった。

尤も、そんなことはどうでもいい。

「過大評価もいいところだ。こんな過負荷私が優秀な人のいっぱいいるグループになんて入れられたら、委縮して何もできなくなるよ」

「私はそうは思いませんよ？」

「いいや本当だよ。エリートの巣窟になんて入れられたら、私が何をすべきなのか、私にすらわからない——」

いじめられっ子をクラスの一員だと認識して、クラスの輪に無理やり入れる。

それがどれだけ残酷なことか、どれだけムカつくことか、想像しただけで吐き気がする。Aクラスに入れられた時にはなかった嫌悪感が、今の私を支配していた。

Aクラスの生徒は優秀ではあるが、愚か者でもある。何があってもリーダーが何とかしてくれると思っている人の方が多い。そんな人達が固まっているのだから、過負荷私がいることにもまだ納得ができた。

だが、学年中から優秀な人を選びすぐってグループを作った挙句、その中に過負荷私が入れられたのだ。学校側は何一つ私を理解していない。

私の欠点を、性質を、本質を、氣質を、在り方を、能力を、思考を、技能を、特徴を、判断を、力量を、後悔を、苦悩を、無能さを、不幸を、汚さを、人生を、あいつらは何一つ理解していない。

プラスを名乗るのであれば、それぐらい見抜いてほしかった。過負荷マイナスの上に立っているかのように錯覚することさえ気持ち悪い。錯覚であるとわかっているから、尚更たちが悪い。

私の中の負の感情は、文字通り過負荷マイナスとなって私から滲み出ていた。

「…何に気が障ったのかはわかりませんが、それを抑えてもらえますか？」

「…そうだね。悪かった。ただの八つ当たりだ」

そうやって、意識的に自分の中で昂っている過負荷<sup>マイナス</sup>を抑える。

不成功してから、少しエリートに対して過敏になつて自覚はあつた。

感情の制御が上手くいかない。過負荷<sup>マイナス</sup>が本質をさらけ出すことを良しとするのであれば、そもそも感情の制御なんて必要ないからかもしれない。

過負荷<sup>マイナス</sup>の切り替えを意識しておいたほうがいいだろう。社会が過負荷<sup>マイナス</sup>を受け入れない以上、生きていくうえでON、OFFの切り替えができなくなったら面倒だ。

顔を歪めている有栖に謝罪をして、へらへらとした笑みを顔に張り付けた。

「時間までどうしよつか? このまま考察を続けて時間まで待つのも乙だけど、疲れた頭で説明を受けるのも効率的に良くないんじゃないか?」

「最初のグループの報告が上がるまでお話でもしてお話を潰しましょう」

「そうしよつか。ストレスばかり溜めても仕方ないしね」

そうやって私達は最初のグループ説明を受けるであろう時間まで、お互いに溜めていた何かを吐き出すかのように談笑した。

最初のグループの集合時間まで残り、3時間程度。それから20分程度の説明がある。チャットの方に書き込まれるまでにはもう数分かかるだろう。

私と有栖の会話は、その時がくるまで止まることはなかった。

## 26 話目 豪華船旅行 十日目 その後

その後、時間はどんどん過ぎていき最初のグループからの報告がチャットに書き込まれた。

そこには私と有栖が予想していたことと、疑問点に対する解決法が書き込まれていたようにも思えた。

- ・各クラスの同じ時間帯に説明を受けるメンバーが同じグループになること
- ・指定された時間に各グループで一定時間話し合いを行うこと
- ・グループは十二支を模したものであることと、チャットの方の集合時間の数から12グループであるということ
- ・優待者が各クラスに何人か割り当てられており、試験はその優待者が重要になるということ

・試験の解答は試験終了後の決められた時間内であること

・試験の結果は4通りであること

1. 優待者の所属するクラス以外の全員の回答が正解していた場合、優待者を含む全員にプライベートポイントが支給される

2. 優待者を当ててゐることに誰か一人でも失敗した場合、優待者のみにプライベートルールが支給される

3. 試験終了を待たずに優待者以外のものが学校に答えを送信して正解していた場合、当てられた優待者のクラスからクラスポイントが引かれ、当てた生徒のクラスにクラスポイントが支給され試験が終了になる。なお、優待者のクラスメイトからの解答は無効となる

4. 試験終了を待たずに優待者以外のものが学校に答えを送信して不正解となつた場合、答えを送信した生徒のクラスからクラスポイントが引かれ、優待者のいるクラスにクラスポイントが支給される。結果3と同じように不正解となつた段階で試験は終了し、優待者のいるクラスからの解答は無効となる

大体こんなところだろう。

初日に予想したグループワークと似ているようで、その実態は全く異なるものだ。グループワークをしたいのなら、裏切り者が解答を送るという前提を無視しないといけない。このルールだとクラスポイントを得るためには裏切り者になるか、裏切り者にさせないといけない。

今回の特別試験では、康平、有栖の派閥関係なく優待者は名乗り出ることにした。

優待者に何らかの法則性があつた場合、片方の所属している派閥のみが優待者を知つ

ていることでAクラス全体の不利益が生じることを考慮したためだ。

各クラス優待者が3人だと仮定して、Aクラスの優待者全員が名乗り出れば有栖のよ  
うに頭の回転が凄まじい人ならば法則性を見出すことも可能だろう。

逆に他のクラスが同じようなことを行った場合、Aクラスだけ優待者をお互いに把握  
していないどころか互いに疑心暗鬼な状態では勝てるものも勝てなくなる。

これは、有栖も康平も同じ気持ちだったようだ。

「明日の午前8時に優待者選ばれた人はメールが届くようですね」

「みたいだね。…優待者の予想は？」

「これだけでは何とも。十二支で分けたというところが露骨すぎるぐらいでしょうか  
？」

「同じく。ナンバリングするのにわざわざ十二支を用いたことから、法則性があるなら  
確実に関わつてると思う。ミスリードの可能性もあるが、無人島行きの時のアナウンス  
もヒントを隠すような形だったから無視することはできなさそうだ」

12グループに分けるからと言って、わざわざ十二支を用いる必要性はない。

1〜12でナンバリングすることも可能だし、アルファベット順に並べる方が妥当だ  
ろう。いや、それだとクラスと混ざるから配慮した可能性もあるか。しかし、そもそも  
12グループに分ける必要もない。



グループに分けて本気で話し合わせたいのなら、一クラス2人ずつの8人グループが限界だろう。正直それでもかなり厳しい。グループワークの適正人数は基本的に5〜6人だ。

1グループに14人もいたのでは話し合いが円滑に進むことは極めて困難になる。

全員が一斉に話し出したら話し合いにはならないし、1人ずつ話していたら時間が圧倒的に足りなくなる。その上、まとめ役がいないと成果が出ることはまずない。少なくともまとめ役になれそうなAクラスのリーダー二人を同じグループにしている段階で、グループディスカッションを真面目にさせる気があるようには到底思えない。

「ところで有栖、他のクラスの名簿と違って持つてる？」

「持つてはいます。そう遠くないうちに必要になると思いましたので」

「お願いがあるんだけど」

「貸し1つでどうですか？」

「じゃあそれで。怪我を負うようなこと以外なら大抵のことは聞いてあげるよ」

既に私との個人チャットに各クラスの名簿を流してくれている有栖に向かつて、へらへらとした笑みを顔に貼り付けながらそう言った。今の私は怪我を負うことができない。そのことがあったので、へらへらとした笑みで怪我を負えない事実を隠してしまいたかった。

しかし、その言葉を聞いた瞬間の有栖の表情は楽しそうなものとは一転して、憤怒しているような無表情へと変わっていた。

「…そのようなことは絶対に言わないので安心してください。それと、冗談でもそのようなことは言わないでください。前科持ちの零君が言つては冗談で済みません」

「…悪かった。ちよつと口が滑った」

「軽口を叩くのは勝手ですが、他の人を心配させるようなことは控えてください。私も、他のクラスメイトも心配します」

「悪かった。肝に銘じておくよ」

どうしても慣れない心配されるという状況に違和感を覚えながらも、自分の中に生じる気持ち悪さに蓋をした。過負荷マイナスとはまた違った、本心から自分のことを気持ち悪く思っている感じだ。

客観的に見ても主観的に見ても、女の子に心配されていることが嬉しいと思つている男なんて気持ち悪いのだろう。私がそう思っているように。

青春なんて前世当の昔に終えたつもりなのに、現実では高校生になったばかりだ。本当に今更だが、違和感を拭いきれていない。もしかすると、時折電池が切れたようにベッドに倒れ込んで昼まで寝ているのは大学生活で何も無い日にそうしていたことが原因かもしれない。

それに加えて過負荷マイナス全開だった幼少期時代の嫌われようも、自分の自己評価が低いことに拍車をかけていることは自覚している。前世の時から高くなかった自己評価は、過負荷マイナスを言い訳に地の底まで潜り込んでいる自覚はあった。

「ただ、今はそんなこと気にしている暇はない。」

「だって、今はそんなことどうでもいいから。」

「後2時間もすれば私達の番になるけど、夕食はどうする？」

「先に軽く済ませてしましましょう。それと、説明会を終えた後で葛城君を含めた3人でカフェに寄るといふことでどうでしょうか？」

「じゃあ、それで康平にも伝えとく」

「そう言つて携帯を取り出し、康平に『説明会が終わつたら有栖と三人でカフェに寄るぞ』と送つておいた。返答が返ってくることも確認せず、有栖の杖をついていない方の手を引く。」

「今まではあまり意識していなかったが、有栖の手を取つた時に有栖の顔が少しだけ赤くなつていた。」

「だが、今の私にはそれがどういふことなのかすら、わからなくなつてしまつていた。」

食事を終え、時間まで店の中で談笑をした。

その後、20時20分頃に店を出て指定された部屋に向かう。

有栖の手を取って歩くことにも慣れつつあったが、手を通して伝わる柔らかい手の感触が自分のそれとはまるで違って、それだけがなかなか慣れなかった。

有栖に合わせて歩いていたからか、早めに出たはずなのに先客が廊下を陣取っていた。

そんな中で、見覚えのある丸い頭と見たことのない長髪の不良が廊下のだ真ん中でガンを飛ばしあっている。

ヤクザとホストがシマの取り合いで揉めていると言われても納得できるような絵面だった。

「俺はお前の非道さを許すつもりはない」

「あ？ 非道さ？ いったい何のことだよ」

「まあまあ、二人とも落ち着こうよ。他にも人がいるんだぜ？」

そう言つて康平と不良君の間に割り込んだ。

有栖にはアイコンタクトを取つてあまり目立たないように伝える。

「誰だテメエ?」

「Aクラスの生徒で、同じ20時40分に集まる、康平の友達さ」

恐らく同じグループであろう不良君に軽い自己紹介をすると、彼は私を嘲笑うかのよう  
に蔑むような声を発した。

「誰かと思えば、葛城の金魚の糞かよ。Aクラスは辛いよな? 媚びを売ってないと生き残れないもんな?」

「そんな日常にも面白さを探すのが人間さ。康平行こうぜ、有栖も待つてる」

「…そういうことだ。失礼する」

そう言つて私は康平と一緒に指定された部屋に向かう。ふと見ると有栖の姿が見えなかつたことから、彼女は他の生徒に見つかる前に移動したのだろう。

歩いている途中で何か康平が言いたそうな顔をしていたが、目を合わせるとバツが悪そうに顔を逸らした。

後ろから感じる威圧感も、有栖のそれに比べれば大したことはない。何よりも言動が不良のそれだ。印象的には嘯ませ犬とか、小物みたくに見える。

それにしてもポテンシャルがあるように感じたが、恐らく普通の域を出ていないただのエリート。何処のクラスかはわからないが、グループで話し合う時にそれはわかる。まさか違うグループの生徒が突つかかかってきたわけではないだろう。

他に集まっていた人たちも私の方を見ると、驚いたような顔をしている人が何人かいたような気がした。恐らく、無人島での特別試験の結果発表の時にでも私を見たのかも  
しれない。

露出狂だと思われるいなーなどと思いながら、彼らを後目に私と康平はその場を後にした。

結局私と康平の間で部屋に入るまで言葉を交わされることはなかった。

「落としどころを決めよう」

説明を聞き終えた後、有栖と康平の三人でカフェで作戦会議をしていた。

私の言葉に、二人とも呆けたようにこつちを見ている。

「どうしたんだい？ そんなに呆けちゃってさ」

「言いたいことがよくわからない。詳しく言ってくれ。以前から思っていたが、零は言葉が足りないと思う」

「…言いたいことの予想はつきませんが、同じです」

「じゃあ補足で——明日優待者の名前が割れるだろ？ 恐らく、有栖や康平ならそう時

間がかからないうちに検討を立てられるはずだ」

「そう評価してくれるのはありがたいが、実際にどうなるかまでは保証できないぞ?」  
「そうだとしても、単純に今回の特別試験の方針を決めるだけでもしておくべきだ。わかりやすく言うなら、クラスポイントを取りに行くか、クラスポイントが関わらないように結果を持つていくかね」

「私と葛城君に聞いたところで、結果はわかりきっているのでは?」

「だから落としどころを決めたいって言ったんだ」

そこまで話すと納得したように二人は頷いた。

端的に言うところのままではいつも通りとも言える、康平と有栖の方針の違いによってAクラスが分裂する。

現状、康平の派閥が規模を縮小しつつあるが、有栖の派閥にAクラスの全員が所属しているような状態ではない。あの時、康平が頭を下げたときに康平の方を睨んでいた人も、既に有栖の方に心変わりしたわけではないだろう。

鞍替えするにしても、まだ前回の特別試験から一週間と経っていない。

それに有栖のヘイトコントロールがあったとはいえ、不幸な事故も要因の一部と言える。その上、自らの非を認めて謝罪する姿勢は男なら心が揺さぶられてもおかしくないくらい綺麗なものだった。

そう遠くないうちに有栖が仕切るとはいえ、今回の特別試験では康平の影響力はまだ残っている。

だから有栖も康平と私の三人で話し合いをすることになっているのだ。夏休みが終わるころには康平が落ち切ったとしても、今は必要だから参加させている。

とは言っても、私には関係ないことだが。

「一応、名実共に未だAクラスのリーダーは康平だ。片方が落ちただけでもう片方が何の力も見せていない。機会がなかったからね。」

それに、前回の特別試験からまだそう時間も経っていない。裏で手を回しても、正面切つてぶつかるとしても、意見が合わない二人が代表格なんだ。どこかしらで落とすところを決めるのがセオリーだろ？」

「…ええ、その通りです。早めに決めておかなければ、Aクラス内で行動がばらばらになつてしまうことも考えられます」

「そういうことか。だが、落とすところはどのようにして決める？ この特別試験ではクラスポイントにかかわる結果を出すには、クラスポイントを減らすリスクを抱え込むことにもなる」

「案はある。それに乗るかどうかは君たち次第だ。乗らなかつたら乗らなかつたで他の



手を探すことになる」

「話してみてください。それを考慮に入れて考えます」

「同じくだ」

二人の言葉に、私は無人島での特別試験が終わったあの日から考えていた案を彼らに提案することにした。

これが通れば、私の今回の目的の大半はスムーズに進むだろう。

「まず、クラス全体には康平が主導で進めてもらう。だから、基本的には康平がメインでクラスメイトに指示をしてもらうことになる。この時に康平には、こういう風にしてほしいが最終的には自分たちで決めてほしい。前回の失敗がある俺を無理に立てる必要はない、という趣旨の文を付け加えてもらう。」

次に、それを言質に取った有栖たちが優待者を指定してもいい。と言っても、だれに投票してもらおうのかを有栖から私達に教えてもらうし、するのは3グループが限度だ。確定できて説明できるほどになれば別だけど、それ以上はリスクが大きすぎる」

「だが、それで優待者を外したら結局クラスポイントが減ることになる」

「どっちにしろ、前回の失敗をどこかで取り戻さないとAクラスに未来はないよ?」

「私もそう思います。ですが、葛城君が主導でやる必要性はありますか?」

「優待者を外しても康平の責任になる。当てても有栖たちが当てたと言えれば有栖たちの

利益になる。康平からしても、それを考慮したとでも言えばそう悪いことじゃない。仮に外したとしても、Aクラスのことを考えて行動してくれたことを嬉しく思う。とでも言っておけば大きく落ちるようなことにはならない」

「だが、クラスポイントを減らすリスクを冒してまで行動する必要はあるのか？」

「Aクラスを維持したいなら、落としたポイントをどこかで拾い上げないといけない。今回の特別試験での最悪は、Aクラスがポイントを全部落としてBクラスがポイントを取って全部拾うことだ。」

DクラスかCクラスならまだしも、目下一番の敵とも言えるBクラスに後れを取ることでだけはあつてはいけない。ただでさえ、前回の特別試験で差を縮められたんだ。

それに逆に聞くけれど、この三年間で穴熊を決め込んだままAクラスを維持できると思ふかい？

特別試験と称したクラスポイントの変動を推奨しているこの学校で」

「…だが、今そこまでして動く必要性はないだろう？」

「今日を生きないものに、明日は来ないんだよ。明日やろうっていう時の明日は来ない。」

明日って今さ！　なんていう名台詞もあるしね。

失ったポイントをどうやって補充する？

テストを地道に乗り越えるのも手だ。他のクラスも同じようにしてポイントを伸ば

すけどね。部活で優秀な成績を出す？ 他のクラスも同じことができるね。Dクラスの須藤君なんて、もうバスケのレギュラー入りしているみたいだぜ？

前回失ったポイントを他のクラスが追いつけない形で取り戻すには、同じ特別試験しかないことぐらいわかるだろう？ それが学校側の意図したことだとしてもね」

しやべりすぎて喉が渇く。

テーブルの上のカフェオレが入ったコップを口に運んだ。苦みと甘さがちょうどいい感じのカフェオレは、喉を潤すと同時に心も少し満たしているような気がした。

「それはそうだが、取り戻すためにポイントが減ったらさらに落ちることになる」

「問題はそこなんだよね。私は有栖なら優待者の法則を見つけられると確信している。学校側が何の法則性もなしに優待者を決めていくわけがない、ということも確信している。でも、他の人がそう思わないのも当然だ。あくまで私の考えだしね。だけど、穴熊に閉じこもったままでは好転しないのも事実だ。将棋じやあるまいし。

だから落しどころなんだよ。最低でも150c1しか稼げない。逆にいうと運が良ければ150c1は稼げる。前回の失敗を帳消しにするぐらいにはなるだろう。

他の優待者全員を把握できるなら完全に決め打つて言う手もあるけどね。それには、最低限私と康平にロジックを説明してもらいたいんだけど、それぐらいはいいよね？」

「…ええ、私も直感に頼って優待者を決めるようなことはしません。私はクラスポイントを増やしたいと思っけていても、減らしたいとは思っていませんので」

「だが、坂柳が優待者の法則を見つけられる保証はどこにもない」「じゃあ誰が見つけられる？」

Aクラスの中でもトップの頭脳を持つ、有栖が見つけられないような優待者の隠し方を学校側がすると思うかい？

完全にランダムで優待者を選ぶと思う？

グループで話し合いの場を設けるのは優待者の尻尾を探すためだけだと本当に思う？

十二支でグループを分けた意味は？

わざわざ10数人にグループを分けた意味は？」

「…坂柳、優待者を本当に見つけられるか？」

「既に予想は立っています。後は、明日優待者の方が名乗り出ればほとんど確定できると」

「…落としどころか。わかった。俺は構わない。零の案に乗ろう」

「ありがとう康平。有栖はどうだい？」

「私は…」

そう言うと彼女は黙り込んでしまった。私はそんな彼女から目を離さない。

康平は私と彼女を見守っている。

私は有栖がこの提案に乗ると確信している。だが、この提案は有栖からすれば別に乗らなくても大して問題はない話だ。

乗ろうが乗らまいが、勝手に優待者を当てればいいだけの話。だが、康平が主導で進めてしまうと優待者を勝手に指定した時に反感を買いやすい。康平側から有栖側に移ろうか考えていた人は考え直してしまいかねない。

この案に乗らなかつた場合、康平は普段通りの方法を取るだろう。つまり無人島での特別試験同様、優待者当てなんかに参加しない。最悪Aクラスの生徒には話し合いをさせずに、無言無反応を貫き通させることもできる。

だが、落ち目の康平に既に勝者となつている有栖が無理に合わせる必要もない。

この特別試験を逃そうが、そう遠くないうちに有栖がAクラスを掌握することは確定事項であるからだ。それでも、有栖なら売られた喧嘩から逃げるようなことをしないと確信していた。

尤も、有栖が提案に乗ろうが、他のクラスが優待者の法則を見つけないという前提がある。

もしかすると、Dクラスの彼なら見つけれられるかもしれない。クラスで見た最悪はB

クラスの一人勝ちだが、個人的な最悪はDクラスの一人勝ちだ。破滅へのカウントダウンとも言える。

そのためには手をこまねいている暇があれば、さつさと優待者の法則を看破して貰って他の誰かが気付く前に試験を終了させる方がいい。

だけど、Dクラスの彼に対する布石は、私の意図していないところで既に打たれている。

「…わかりました。零君の提案を受けましょう」

「ありがとう、有栖ならそう言うと思つてたよ」

「ただし、きちんと優待者の法則を見つけることが出来れば、全部の優待者を当てるということに二言はないですね？」

「勿論。有栖ならそれができるつて信じてるよ」

「……」

「零はなぜそこまで確信を持つて言える？ 確かに坂柳の頭の回転は速いが、確実とは言えないだろう？」

「単純に有栖よりも頭の回る1年生を私が知らないつていうのが一つ。有栖が私達よりも遥かに優秀な情報網を持つているつていうのが二つ。有栖が既に多くの答えを予想

して、それを考え続けて考え抜くだけの強さを持つていて三つ。ダメ押しに、精神力が常人のそれよりも強いってのが四つ目だ」

「他に答えを導き出せる生徒がいない。優待者に法則があるのであれば、一年で一番優秀とも言える坂柳なら当てられるということか？」

「要約するとそうなるね。他のクラスに私の知らない優秀な人がいる可能性もあるけど、それに有栖が遅れを取るんだつたらどつちにしろAクラスはお終いだよ。何せ、その人がいるクラスにこれから三年間の特別試験で負け続けることになる。」

Aクラスだって胸を張って言いたいんだつたら、有栖が答えを出してそれを康平が利用してやるぐらいの気構えがないと、とてもじゃないけど生き残れないと私は思うよ」

私はそう締めくくった。私の言葉に康平と有栖は納得したように頷いた。

だけど、有栖が少しだけ不満そうにしていることはわかりきっているし、康平の方も自分が既に落ち目であるという自覚はある。

私が言ったことが全て正しいなんてわけがない。過<sup>マイナス</sup>負荷の言うことが全て正しいなんて妄想は持っていない。

ただ、そうかもしれないと思わせられれば、人はわかりやすい結論に飛びつくものもある。

二人がどこまで私の話を鵜呑みにしているのか、裏で何を考えているのかまではわか

らない。だけど、ある程度は私の思うように進んでいる。後はグループでの話し合いの時が、過負荷として一番振る舞いやすい時だろう。

真剣にクラスで争っている彼らの姿は美しいものであると頭では認識しているはずなのに、私の目にはそれがとても無様に、滑稽に見えた。

だって、別にAクラスが勝とうが負けようがどうでもいい。

ニコニコへらへら笑っていても、友人たちの力になろうと奮闘しているように振る舞っても、他の人に媚びを売っているように見えても、私と君たちは所詮は他人だ。

有栖に私が勝てればそれでいい。クラスのことなんかどうだっていい。康平が死のうが興味がない。有栖が辱められようがどうでもいい。茂が不登校になろうが私には関係ない。クラスメイトが退学になろうが半年もすれば忘れるのが人間だ。私も同じようにいざれ忘れるだろう。

「ところで零、なんで龍園に金魚の糞呼ばわりされた時に否定しなかったんだ？」

「龍園ってあのホストっぽいやつ？」

「その言い方はどうかと思うが、それで合ってる」



「別に私を甘く見ているならそれでいいと思ってたからね。大したことじゃないし」

「…そんなことがあったんですか？」

「大したことじゃないって」

「零の悪い癖だ。謙虚は美德だが、卑屈は醜いものになる」

「その通りです。初めて葛城君と意見が合った気がします」

「いや、大したことじゃないって」

「友人を馬鹿にされたんだ。思うところがあってもおかしくないだろう」

「…そういうものなの？」

「そういうものです」

「そうなんだ…。まあ、私はそこまで気にしてないから明日会ってもそんなに喧嘩腰にならないでね」

「相手の態度次第だ。Aクラスのリーダーとして、不適切な発言は咎めるべきだろう」

「葛城君と同じというわけではありませんが、相手の態度次第です。相手がAクラスを侮るのであれば、それ相応の処置をします」

「…（同じじゃないのか？）」

## 27 話目 特別試験Ⅱ 一日目

朝食を終えた頃、グループチャットの方に優待者の名前が書き込まれた。

加えて、各グループの他のクラスの生徒を含めた名簿がチャットに書き込まれている。それによって昨日有栖からもらった名簿の意味がほとんどなくなっていた。

だが、事は昨日康平が指示をした通りに進んでいる。

『先ほど、零と坂柳と相談して今回の特別試験でのAクラスの方針を決めた。まず、基本の方針として今回の特別試験では優待者を当てさせないことを念頭に置くことにした。』

基本的な動きとしては、最初にこの書き込みを確認次第各グループのメンバーを各自書き込んでほしい。その次に、優待者になったものは判明次第名乗り出てほしい。出来ればこのグループチャットの中で名乗り出てほしいと思っっているが、名乗りづらかったら個人で俺が坂柳か零に送ってくれても構わない。

そして重要な明日の話し合いだが、Aクラスの生徒は積極的に話し合いに参加しないでほしい。

話し合いで優待者がわかってしまわないように、優待者になったものは特に注意してくれ。できることなら全員が話し合いに不参加の姿勢を取ってほしいと思う。

だが、前回の失敗がある以上最終判断は独自の判断に任せることにした。優待者だと自信をもって指定できるのならそれを止めることはしない。

止めるようなことはしないが、それでクラスにどのような影響を与えるか、熟考してから決断してほしいと思っっている』

ほしい、思う、と強制するような言葉ではなく、方針としてはそういう風にしたということを前面に押し出すような文章だった。強制はしていないが、同調圧力をかけるには十分な内容だ。

最後の文は有栖に宛てたものだろう。他のクラスメイトが興味本位で下手なことをしないように釘を刺したということもあるが、優待者を指名したければ確実性をより高めろ、と言っているようにも思える。

康平が個別で優待者だと名乗り出てもいいと書いていたが、優待者に指名された人たちは全員グループチャットの方で名乗り出た。

そして、賽は投げられる。

『優待者の法則を見つけました。

各グループのメンバーを五十音順に並べたときに、上から十二支の順番に当てはまる人が優待者です。

私達が所属する辰グループを例とすると、メンバーは

Aクラス 葛城康平

小坂零

坂柳有栖

Bクラス 安藤紗世

神崎隆二

津辺仁美

Cクラス 小田拓海

鈴木英俊

園田正志

龍園翔

Dクラス 榎田桔梗

平田洋介

堀北鈴音

ですので、これをまず五十音順に並べ替えます。

安藤紗世

小田拓海

葛城康平

神崎隆二

櫛田桔梗

小坂零

坂柳有栖

鈴木英俊

園田正志

津辺仁美

平田洋介

堀北鈴音

龍園翔

辰、なので子丑寅卯辰で上から五番目の櫛田さんが優待者です。

Aクラスの優待者が割り当てられている子、酉、亥のグループも同じようにすると、優待者を名乗り出た方と一致します。

全てのグループで各クラスのメンバーが男女問わず五十音順に並べられていること、十二支を用いた法則となっていることも、この法則を裏付ける理由になります。

優待者に法則があるとすれば、これで確定だと判断しました』

自室に戻って時間を潰そうと思っていた矢先に来たチャットの内容がこれだ。

あれから私と康平と有栖の三人だけをつなぐチャットを作成した。言うまでもなく今回の特別試験で連絡を取りやすくするためにだが、ここまで早く優待者を割り出すとは思っていなかったので正直驚いた。流石は特別スペシャルと言ったところか。

念のために、他のグループも含めて全てのグループを有栖が見つけた法則に当てはめてみた。

当然の如く、Aクラスの優待者が割り当てられた3グループの優待者とチャットで名乗り出た優待者が完全に一致した。それどころか、他のグループの優待者の数が各クラスちようど3人になっていることから、この法則の裏付けにもつながるだろう。

優待者が重要なこの試験で、優待者の数を偏らせるようなことを学校側がするはずがない。

優待者の数が多ければ多いほど、クラスポイントに関わる機会が増えるのだ。

極論、優待者が一人もいないクラスがあれば自分たちから当てようとしないう限りクラスポイントに一切かわかることはできない。

そういう意味で見たら、Aクラスはそうなつても許容できる。だが、学校側はそれを良しとしないだろう。

特別試験の一番大事な要素は、クラスポイントの変動が起こるといふことだ。それも、ただ増えるだけではなくて他のクラスから奪う形で上下することが多い。

奪う、ということとはポイントの差し引きがあるわけだ。今回の場合はそれを優待者の指名によって決める。だから、優待者の数は偏つてはいけない。

それでは学校側の試験に優遇されているクラス、冷遇されているクラスが生まれまして、まうことと同義だ。

この学校は『バカとテストと召喚獣』みたいに、クラス分けて優劣を決めている。だが、学校生活を送る上ではそれだけだ。Dクラスは教室がぼろいわけでも、窓ガラスが仕事をしていないわけでも、椅子が綿の出ている座布団でもない。

DクラスでもAクラスとそこまで待遇が変わっているわけではないのだ。初期メンバーの優劣があつても環境的要因をそこまで変化させていないということは、DでもAでも等しく同じ条件で能力を確かめたいということだ。

だから、この特別試験の各クラスの優待者の数は12を4で割った数の3であると言える。

恐らく有栖もそう思っているはずだ。

そして、昨日の段階で優待者を当てられると確信していたからこそ、この試験で全優待者を決め打つ宣言をしたのだ。

私こそがAクラスを纏めるのに相応しい。

葛城君には分不相応だ。

直接は言っていないが、こう言っているように受け取れる。

だから死ぬ、まで飛躍してないことが康平にとつての救いだろう。いや、単純に死体蹴りをする趣味がないだけか。

前回の特別試験の結果だけで、康平は自分がリーダーとして力不足であることを認識させてしまった。それも、一番最初の特別試験でそうなつてしまった。これが5回目の特別試験で一回だけ失敗したとかなら、そこまで落ち目になることはなかった。

だけど、よりによって初回の特別試験で失敗してしまった。これによるイメージダウンはリーダーとしてまとめていくことに大きな悪影響を与えることは間違いない。

そういう意味で、康平はAクラスのリーダー争いから落ちていいる。今回の特別試験が前回の特別試験から1週間も間を開けずに実施されているから発言力がまだあるだけで、これが夏休みが終わってからだだったなら多くの人は康平の指示には従わなかったと予想できる。

だから、今康平を攻撃することは死体蹴りとそこまで大差ないのだ。

してもしなくても、有栖がAクラスのリーダーになることは揺るがないのだから。

個人的には康平を傀儡人形にして有栖が影の支配者になつた方がAクラスとしてはやりやすいと思うのだが、有栖のやり方的にそれはしないだろうと感じていた。

自分が優秀な人間であることを誰かに示したがっている。



他の誰でもない、自分自身が他者を支配することに楽しみを覚えている。

自分よりも強いもの、理解の及ばないものすらも打ち勝ちたいと思っている。

承認欲求、自己顕示欲、勝利願望。

これらの言葉が彼女を示すのにちょうどいいのかもしれない。

これが悪いことだと言うつもりはない。人間なら、誰しも一度は思うことだ。

私にも覚えがある。

小坂零がいたことを知ってほしい。

過負荷の欠点を知ってほしい。

敗者でも勝者に勝ちたい。

マイナスでもプラスでも人とと言う枠組みに乗っ取っている以上、欲を持っていて当たり前だということだろう。

欲が悪いものだと思えば、過負荷だからこそ持っていると言えるかもしれない。

それがたとえ、どんなに他の人を傷つけても、他のモノを壊しても、自分自身を壊しても、欲が満たされなくても、満たされないことを悟っていても、欲が悪いことだと思っ  
ていても、欲が満たされてはいけないうことだと知っていても、欲で身を亡ぼすと知っ  
いても、人とと言う枠組みの中で生きていく以上欲に振り回されるのだろう。

その欲に、私もまた身を任せるとしよう。

朝食を終えて、チャットの書き込みで適当に返事も書いた。今すべきことは特になく、話し合いの時間まで暇をつぶすことになる。

要するに眠くなってきたのだ。いい感じにお腹も膨れて、ベッドはまだぬくぬくと温かい。その中でずっと携帯を弄っていた。

今の時間は9時過ぎ。話し合いまで後3時間以上ある。

私は携帯のアラームを設定し、ベッドの上で仰向けになると体の奥から這い上がるような睡眠欲に身を任せた。

---

アラームの音で目を覚ます。

話し合いの時間まで10分程度しかないが、身支度を整えて移動するだけなのでたいしたことはない。

そう思っていた寝る前の私をぶん殴ってやりたい。

携帯のアラームを止めた時に、有栖から連絡がきていたことが確認できた。

『部屋までの付き添いをお願いしてもいいですか？ 他に頼れる方が葛城君しかいないので、出来れば零君にお願いしたいのです』

『もしかしてまだ寝てるのでしょうか？ 気が付いたら連絡をください』

『本当に寝てしまったのですか？ 葛城君とはそこまで仲が良くないので零君にお願いしたいのですが』

『10分前までなら待ちますので、お願いですから来てくださいね』

『不在着信 5件』

それを見て、有栖は付き添いがいないと船の中を移動することすら許されていないことを完全に忘れていたことに気付いた。他のクラスメイト達も同じように話し合いをしに行くのだから、必然的に有栖の付き添いができるのは同じクラスの生徒に限られている。

全員が全員同じ時間ではなかったはずだが、神室さんと橋本君と私達の時間は被っていることを思い出した。

この時間帯は私じゃないから大丈夫だと思つて油断していた。有栖なら橋本君辺りで行くだろうと思つていたが、橋本君だつて自分のグループに行かなくてはいけないのだ。それでも橋本君なら有栖を送つてから自分の割り当てられた部屋に行くこともするだろうが、その様子を他のクラスに見られると有栖が自分のグループに付き添つてくれる人がいない悲しい子になってしまう。同じ派閥の話し合いの時間外の人に頼むことも考えられるが、私と同じ場所に行くのなら一緒に行ったほうがいいと思つたのだろ

う。

もしくは康平とだが、Aクラス内では康平と有栖が対立しているのだ。康平がそんな器の小さい男ではないことは有栖も把握しているが、対立している相手に付き添いを頼むほど気まずいものはない。

話し合いの時間まで残り13分。急いで制服を着ながら、有栖に電話をした。

私が連絡するのを待っていたのか、ワンコールもしないうちに有栖に繋がった。

私は寝起きであったこともあり、Aクラスがこの段階で落ちることは好ましくないことは理解していたので、とても冷静ではなく端的に言うと言とパニック一歩手前の状態だった。

「有栖！ ごめん寝てた！」

『…後1分遅ければ他の方に連絡を入れるところでした。今、私は自室にいます。間に合いますか？』

「全速力で向かう、有栖の部屋まで飛ばせば2分。グループ分けされた部屋までは有栖のペースだと間に合わないから背負ってくけどいいね!？」

『…こうなつては仕方ありませんね。早めにお願います』

「了解ッ！」

転がっているミネラルウォーターの余りを飲み干して、着替えが終わった私は携帯と

学生証カードだけを持って有栖の部屋に向かって走り出した。

運が良いことに、廊下を出ても人が一人もいなかった。

周りの人の目がないので、思いつき全力で走りだした。

階段を駆け上がり、有栖の部屋まで走る。

幸いなことに周りに人が一人もいない。昼時なので昼食を食べに行っているか、話し合いの部屋に向かっているのだろう。

私は全速力で走り続けた。つい最近まで歩けもしなかった状態なのに、元空手部で鍛錬をしばしば行っていた私の体力は未だに衰えていない。

突然ドアが開いて人が飛び出してくることを考慮して、ドアの反対側の廊下を走り続けた。

そうこうしているうちに有栖の部屋についた。

ノックもせずにドアを開ける。

有栖は待ちくたびれたようにこちらをジト目で見てきたが、それに対する反応をする間も惜しくて有栖の反対側を向いて膝を曲げた。

「早く乗って！ 恥ずかしいかもしれないけど、許して！」

私の鬼気迫る言葉に気圧されたのか、時間がないことをしつかり受け止めているの

か、有栖は何も言わずに私の背に体を預けた。

有栖が手を首に回してしがみついているのを確認してから、有栖の杖を左手に持って有栖の部屋を出た。

有栖の体重が軽いことや、体格が小さいことが救いだろう。私にとって、有栖がそこまで重荷にはならなかった。

当然ながら、有栖を背負ってからは走ることなんてできない。一人だけなら落ちてもいいぐらいの勢いで階段を転がり落ちるが、先天性疾患持ちの有栖をジェットコースターに乗せるような殺人行為をする気は毛頭ない。私は先天性疾患について詳しく知らない。だが、有栖が普段運動の類が全くできないことを考えれば、今走るとどうなるかなんて火を見るよりも明らかだった。

私が有栖の部屋に向かったときの半分も出ていない速度で、確実に気持ち早めに歩いていた。歩きながら廊下にある時計を見ると、残りは10分。有栖の部屋に着くまでに飛ばしたおかげで、2階に下ることを考慮しても話し合いまでには間に合うだろう。

歩いているうちにだんだん落ち着きを取り戻し、走っていたときに荒くなっていた呼吸も少しずつ落ち着いた。

冷静さを取り戻した私は有栖に謝ることにした。

「本当にごめん。有栖の体のことすっかり忘れてたし、他の人がいないことも忘れてた」

「…次からは気を付けてくださいね。送ってもらつてる身なので、私から強くは言いません」

「次はこんなことがないように気を付けるよ。流石に他の生徒に見られたらまずいし」

こんな状況を見られたら、他の人になんて思われるか。有栖の事情を知っているAクラスの生徒ならそこまで冷やかしては来ない…いや、あいつらは色恋沙汰になると他の人が困るのを見て楽しむようなタイプだ。

間違いない有栖には被害が出ないだろうが、私に全ての被害が来るように冷やかしてくる。

私と有栖にそんな甘酸っぱい関係はないのに、それをでっち上げてくるのだから堪つたもんじゃない。

他のクラスメイト達に写真でも撮られた日はそれ以上に最悪だ。最悪Aクラスが私の意図していない段階で崩壊しかねない。他の人が近くにいたら、早急に有栖を下ろす必要がある。

「零君」

「どうかした?」

話しかけてこられたから聞き返したのだが、有栖の答えは沈黙だった。

話し辛いことなのだろうかと思ひ、周りを警戒しながら階段を下りる。2階に下った

時、有栖が消えてしまうような声で囁いた。

「…ありがとうございます」

彼女が何に対してそう言ったのかはわからない。

だけで、その小さな一言が私の心を揺さぶって私から言葉を奪って行ったのだ。

今までほとんど言われてこなかったその言葉だけで、私は気分を良くしてしまっていた。

それで過負荷私が変わるわけではないのに。



## 28話目 特別試験Ⅱ 一日目Ⅱ

結局私と有栖は部屋に着くまで、あれ以降お互いに話すことはなかった。

私は彼女になんて言えばいいのかわからなかったし、彼女も私に言葉を投げるようなことをしなかった。

廊下で有栖を下ろしてから、時間まで二人で部屋まで歩く。

2階には開始時間が近いこともあり、生徒がかなりの数廊下をうろうろしていた。私は有栖の手を引いて歩き、他の人にぶつからないように彼女を誘導しながら歩く。

時間の2分前に割り当てられた部屋に着いた。

部屋のドアには『辰』と書かれたプレートがかけられており、ドアを開けると私達以外の11人が既に円状に設置されている椅子に座って待っていた。

「ごめん、遅れた」

「時間ぎりぎりだが、遅刻ではない。零たちも早く座ってくれ」

康平に促されて康平の隣に腰を下ろした。有栖が私の隣に腰を下ろして、康平と私と有栖の三人が横並びになる。

他のクラスの生徒もクラスごとで固まっているらしく、正面にはDクラス、右側には

BかCクラス、反対側も同じくだろう。BクラスとCクラスの生徒がほとんどわからない。Dクラスの生徒は前にクラスに行つたこともあるし、堀北メイシヒロインさんもいるから流石にわかつた。

このグループ分けの基準だつたらいいほうがおかしい、綾小路君と一之瀬さんがいないことに気付く。

綾小路君は実力を隠している節があるからまだしも、一之瀬さんがいないことは異常と言つてもいいかもしれない。

そういえば、綾小路君と一之瀬さんは茂と同じグループだつたはずだ。

予想では担任がグループを分けている。もしかすると、星之宮先生は綾小路君に一之瀬さんをぶつけたかつたのかもしれない。

担任経由で綾小路君の優秀さを見破つていたとすれば、そうしていてもおかしくはないだろう。

となると、兎グループの優待者を早めに指定して潰しておく必要があるかもしれない。

いや、それは最終手段だ。

茂がどういふ風に行動するのを知りたいのに、真つ先にその機会を奪つていては話にならない。

有栖には悪いが、兎グループだけ優待者の指名を後にしてもらおう。最悪、兎グループは放棄してもらおう可能性まで考えないといけなくなっていた。

思考を廻らせながら部屋を観察し、隠しカメラの位置を確認しているとスピーカーから放送が流れた。

『ではこれより一回目のグループディスカッションを開始します』

わかりやすいアナウンスだったが、他の人たちはわかりやすすぎる故に一瞬だけ固まってしまっていた。

その隙を見逃さずに私が切り込む。

「それじゃあさっくり自己紹介からしよう。したくないって人はいるかな？」

「やりたいなら勝手にやってみろ。俺は馴れ合って話し合いをする気はないぜ」

そう言つて嘸みついてきたのは昨日見た不良少年の龍園君だった。

一応、このグループディスカッションでは自己紹介をしなくてはいけない指示が出ている。

それにすら歯向かおうとするなんて、そんなことがあればこんなに捻くれてしまうのだろうか。私には到底及びもつかないが、そんなことは至極どうでもいい。

「じゃあ好きにすれば？」 監視カメラがあるから最低限のことはしたほうがいいと思う

けどね」

「ちよつとまってくれ。この部屋に監視カメラがあるのか？」

そう割り込んできたのは龍園君と反対側にいる顔の良い青年だ。

どつちかがCクラスでもう片方がBクラスなのだろう。

「あそこのスピーカーの上、恐らくマイクもついているから音声も拾えるやつだね。確認したいなら歩いてみてみれば？ よく見ないとわからないけど、不自然に壁の色と一部違うカメラのレンズが見えると思うよ」

「…どれだ？」

「まあ見たかったら話し合いが終わった後にでも確認すればいいよ。時間もそんなないし、さっさと自己紹介を済ませようよ。後は何を話しても自由なんだからさ」

「…零、その辺にしておけ」

なおも私が仕切ろうとしているのを見かねて、康平が口を挟む。

そう、Aクラスはおとなしくしている予定だった。有栖も私の方をずっと見ている。だけど、私がそれに従う義理はない。

「何で康平が私に指示をするのさ？ 前も言った通り私は康平の友人ではあるけど、奴隷じゃないんだぜ？」

「Aクラスの方針は皆に伝えたはずだ。零も納得しただろう」

「自己紹介までみんなを引率してあげただけじゃないか。そもそもリーダーシップがあつてみんなを引つ張つてくれる人がいれば、私がこんなことをしなくてもよかつたんだ。

『だから、私は悪くない』

過負荷マイナスも何もなしに、ただ球磨川先輩の真似をしてみる。括弧カッコつけたように、彼のお決まりのセリフを言っただけだ。

他の人は大きな反応はなかったが、康平だけが嫌なものを見てしまったかのように顔を顰めていた。

「なんだなんだあ？ Aクラスって言つても纏まりきれてないんじゃないか？」

「面白いことを言うね君。纏まりきつたから偉いのか？ 纏まりきつたから勝つのか？ 纏まりきつたから強いのか？ そういうわけじゃないだろう」

「ハッ、違いねえ。葛城だけじゃなく坂柳とも一緒にいるから、どんな奴かと思えばとんだじゃじゃ馬じゃねえか。金魚の糞って言ったのは撤回するぜ。Aクラスは生徒一人統率できないクラスだったんだなあ？」

「零君は例外です。他の方はしっかり協力し合ってますよ」

有栖はそう言つて溜息を一つ吐いた。

それを聞いて、龍園君は面白いものを見るかのように挑戦的な目でこつちを見てく

る。

「こいつは面白れえ。坂柳にも手に負えないやつがいるってことか」

「…認めたくありませんが、そういうことです。話は以上でよろしいですか？」

先に自己紹介を済ませてしまいましょう。零君の言う通りなら、自己紹介をしないことと何かしらのペナルティがある可能性も考えられます」

「そう言うなら有栖からやつたら？」

その流れでA B C Dの順でいいでしょ？ わかりやすいし」

「反対意見がないようであれば、そうしましょう。他の方もよろしいでしょうか？」

有栖の言葉に反対する者はいなかった。

龍園君も私を好奇心に溢れた目で見ていただけで、異論はないみたいだ。

「では私から。ご存知の方もいるかもしれませんが、Aクラスの坂柳有栖です。見ての通り体が弱いので、何かとご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いいたします」

そういつて有栖が頭を下げたのを見て、私が拍手をした。

それを皮切りに他の人たちも彼女に拍手を送る。それが落ち着いたところに、康平に目配せをして先に自己紹介をしてもらうことにした。

「Aクラスの葛城康平だ。よろしく頼む」

同じように拍手をし、少しずつ拍手が小さくなる。

その時を見計らってAクラスの三人目となった私が同じように自己紹介をした。

5分程度かけて、グループのメンバー全員の自己紹介を終えた。

自分の自己紹介が終わってから、聞く必要性も感じなかったのですと監視カメラと睨めっこをしていた。

ちようど私の前の壁、Dクラスの後ろの壁に監視カメラがある。見られていると感じると気になって仕方ない。他の人の自己紹介が終わって、少しの沈黙が生まれたのを見て、私はこのくだらない話し合いに終止符を打ち込みに行った。

「じゃあ、自己紹介終わり！ 解散！」

「零君の気持ちはわかりますが、時間までは部屋に居なくてはいけない決まりです。まだ帰らないでください」

「だってもうやることやったし必要ないだろ？」

まさかこの中で優待者が馬鹿正直に出てくるわけもないし、今更他のクラスと和気藹々楽しく話せて？」

「小坂君の言うこともわかるけど、坂柳さんの言う通り部屋から出るのはやめたほうがいいんじゃないかな？」

「誰だっけキミっ？」

私の言葉に彼女は完全に固まった。

同じように他の人たちも固まっている。私は彼女をどこかで見たような気はするが、名前までは覚えていなかった。

対面にいる、割り込んできた彼女の顔をよく見ると、それがDクラスに行った時に話した女子だったことに気付いた。

「ああ、思い出した。Dクラスの櫛田さんだったっけ？」

「……うん、それで合ってるよ。前に話したのは1か月前だったのに、覚えていてくれて嬉しいよ」

彼女は引き攣った笑みでそう答えた。

康平が呆れたような顔をしてこつちを見る。

「零、今自己紹介したばかりだろ？ 聞いてなかったのか？」

「自己紹介をしろとは言われたけど、自己紹介を聞けとは言われてない。」

だから、私が他の人の自己紹介を聞いていなくても、自分のクラス以外の人の名前がわからなくても、私には関係ない。

だって私には関係ないんだから」

どろりとした、地の底から這い出てくるような気持ち悪さが私から滲み出る。

それを確認したのか、他の人たちが少し震えているようにも見えた。



「まあ、このまま時間がくるまで待つのも不毛だしね。

せつかくだから私が楽しい話をしてあげるよ」

「…零」

「康平が文句を言っても話す自由は私にあるんだぜ？」

「何もしないよりは、誰かが話している方が楽しいじゃないか。エリート君たちが大好きなやつだろ？」

「無駄な時間は極力なくすつて。『隙間時間で勉強しましょう』だったっけ？」

「無駄なことをするよりは、効率的に物事を進める方が正しいのは当然でしょう。同じ1時間作業するにしてもロスタイムが少ないほうが作業の進み方は早くなる」

私の話が気になったのか、割り込んできたのは堀北さんだった。

既に過負荷マイナスは抑えているが、私の気持ち悪さを振り切るために無理やり会話に加わったように見えた。

「そんなことばかり言ってるから人が潰れるんだぜ？」

人件費を削減するために、残業代を出しませんって言って納得できる人はそう多くないだろ？」

納得したところで、ストレスで潰れていく人間も出てくる」

「確かにそういう見方もあるかもしれないですね。ですが、会社としてみたときに仕事が

できる人を優遇します。社会で求められているものに、無駄な時間というものはそう多くはないと思いますよ？」

有栖も話に加わってきた。他の人たちは私の方を見て、さつきの気持ち悪さがまるで気のせいだったことを確認するかのように私を見ていた。

「そもそも無駄なことが悪いことなのか？」

社会が求めているものは人間に不要なのか？

私はそうは思わない。よく『復讐は何も生まない』っていうけどさ、それで納得できれば感情なんかいららないと思わないかい？」

「零の言うこともわかるが、だからといって復讐と称した他害行為を認めることはできない」

康平の反論が普通ノーマルなら正しいのだろう。

私もそう思っている部分はある。だが、それには納得できないと叫んでいる部分もあるのだ。

さつきから、ここにいる時からずっとそうだ。

エリートを見ているとイライラする。

自分が強いと思っているやつを見るとムカつく。

プラスで出来ているような正当性ばかりを主張する奴にどうしようもなく嫌悪感を

覚える。

だから、彼らにぶつけると言うのは見当外れなのもわかっている。的外れなのだとも思う。

だからこれはただの八つ当たりだ。

「それも大事な意見だ。貴重なものだし、大切にするといいよ。

先にされたから何をしてもいい。それが通るんなら、私はここにいる君たちを皆殺しにしたいぐらいだ」

私の発言に彼らの顔は疑問が生まれたようなものと同時に、受け入れられない何かを見てしまったかのようなものになっていた。

「君たちさ、育ての親から熱湯をかけられた時の熱さって知ってる？ 躰と称して包丁でふくらはぎを刺されたことは？ 消毒と称して口の中に洗剤を吹き込まれたことぐらいはあるよね？」

まあ、痛みとか熱さなんてその時が過ぎたら忘れちゃうか。

じゃあ、口の中に残った洗剤の味は？ 路肩に死んでたカラスの死骸とか、飢えを凌ぐために殺した鼠の味ぐらいは知ってるよね？」

彼らの歪んだ顔が、驚愕に溢れたそれに変わる。

「まあ、その顔を見ればそんなことはなかったことぐらいはわかるよ。

君たち<sup>幸せ</sup>プラス<sup>せ</sup>そうだもんね。

安心してほしい、今の例は冗談だ。だけど私が本当にそれを味わってきたとして、私は酷い目に遭ってきた、だから酷いことをしてもいいんだ!! って言っても、君たち同情はしたとしても納得しないだろ?」

他の人たちは苦虫を噛み潰したような、決して相いれないものを見つけてしまったよ。うな、そんな表情になっていた。有栖以外の人が冗談だと聞いた瞬間に多少安堵を見せていたそれは、言葉を終える頃には完全になくなる。有栖は終始顔を顰めていた。

そんな彼らの様子を気にも介さずに、私は康平の方を向く。

「そういえば話は変わるけど、康平って妹がいるんだったよね?」

康平は他の人と同じような表情をしているが、その中に普段の私とのギャップによって困惑しているようにも見えた。

私の問いに対して、少し間があつたがすっかりとした声で返答する。

「…それがどうかしたか?」

「卒業したら君の妹を真っ先に殺しに行こうと思うんだけど、康平は笑って許してくれるよね?」

だつて復讐は何も生まないんだから!」

「ッ!」

ドス黒い過負荷マイナスが零れ出る。空気がぶつ鈍たぎられていたかのよう錯覚するほどの過負荷れは、私を中心に私の周囲を包み込むように溢たれていた。

私はそれを感じつつも、抑えようという思いはこれっぽっちも起きなかった。

正論に正論を重ねる。正しいから正しい。認められないから認められない。悪いから悪い。強いから強い。

常識だから、正常だから、当然だから、普通だから、当たり前だから。

それじゃあ、過負荷私が納得しない。

だって、そこに過負荷マイナスなんて要素はないものとしてみているのだから。

横にいる康平に向かってニッコリ笑顔を浮かべる。近い距離なのに康平が思わず体を引くのがよくわかった。

「あは！ っていう冗談でした。そんなに睨むなよ康平、お茶目な冗談だぜ？」

笑って許してくれよ！ 私と君の仲じゃないか！

「……零、その手の冗談はやめてくれ。いい気分じゃない」

「そんなに怒るなよ。君だってこの学校にこうやって通っているわけだけど、その時に蹴落とした人のことを考えたことはあるかい？」

もしかしたら、国立のこの学校に入らないと高校生になれなかった人がいるかもしれない。親からの期待を背負ってこの学校に受験して、落ちちやったから親に見捨てられ

て人だっているかもしれない。

でも友人である康平が他人を蹴落として掴んだ高校生活で、君がそんなことも考えないで、自分だけは順風満帆に学校生活を楽しんでいるみたいでよかつたよ」

「——ッ!!」

話せば話すほどより過負荷マイナスに近づいている。

自覚はあるが、それもいい気がしていた。

席を立ち、部屋にいる彼らの輪に沿うように歩きながら言葉を続ける。

『かもしれない運転を心がけよう!』って知らないかい？

みんなも一緒に想像してみようよ!

中卒で働くしかなくなつて、最低賃金で働き続けている人がいるかもしれない。社宅で暮らして、働くか寝ることぐらいしかできなくて、娯楽を楽しむ余裕もない日々。それが一生続くことを想像して、生きる希望が見いだせないかもしれない。

家に帰ったら自分のご飯だけない生活。親からは無視されて、兄弟からは無言で馬鹿にされる生活。そのせいで非行に走るかもしれない。麻薬に手を出しているかもしれない。

誰のせいで、とは言わないけどね」

そう言いながら部屋の中にいる彼ら一人一人の顔を見る。

私が言葉を紡ぐたびに、彼らの表情は苦々しいものに変わっていった。

最初に嘯みついてきた龍園君や、話に加わってきた堀北さんに、苦笑いをしていた櫛田さんも全員が私の方を見て絶句していた。

康平も私を見て顔を歪めているし、有栖も顔を顰めたまま私から視線を外さない。「でも気にしないで！」

君たちが無意識に蹴落とした人がいっぱいいても、そんなやつらのこと気にも留めなかつたとしても、そいつらが失意のあまり自殺をしたとしても、その人たちが将来に希望を持ってなくても、君たちは悪くない。

『社会に必要とされている力が足りなかつた彼らが悪い』  
エリートである君たちが、さつきそう言つてただらう？

だから、自分のことを棚に上げて特に理由もなく高校生活を楽しんでいても、細かい進路なんて何も決めないでAクラスに上がりたいから頑張つていても、自分の視界に入らない人なんて見ていなくても、自分が勝ちたいから他人を蹴落としても、君たちは悪くない。

だつて君たちには関係ないんだから！」

私が言い切つた時には、有栖以外の全員が身体を震わせていた。有栖はかろうじて耐えているように見えるが、私の方を見て固まっている。

私の<sup>マイナス</sup>負に、全員が恐怖の感情で支配されていた。

「皆Aクラスに上がりたいんだよね？」

Aクラスで卒業すれば、好きな進路に進めるからかな？」

確か原作でAクラスに上がりたいと言っていた堀北さんの方を見た。

彼女は震える身体を落ち着かせてから、私に向き合う。

「……ええそうよ。私はAクラスに何としても上がるわ。あなたたちを超えてね」

「へえ、他の人を蹴落として人生を台無しにさせてまでAクラスに上がりたいんだ？」

Aクラス以外だと進路の保証がされないって知って、自分だけAクラスに上がりたい

んだ？」

私の物言いにも彼女は臆さず、こっちを見据えてはつきりとした声で宣言した。

「そうよ。私は何があってもAクラスに上がらなくてはならないの。たとえば他の人を蹴

落としてもね」

「ふくん。まあ、どうでもいいけどね。」

君のせいで誰かの人生が壊れても、君のせいで誰かが自殺しても、君のせいで生きる希望を失った人がいても、君のせいで君の知っている人がいなくなっても、君に直接関係ないもんね」

私はその宣言を嘲笑うかのように話し続けると、彼女の何かに障ったらしく彼女は顔



を歪めて体から怒気を発した。

「——人に聞いておいて、その言い方はないでしょう！」

「勝手に話したのは君じゃないか。別に話す義理もないのに君が勝手に話したんだ。

『だから私は関係ない』」

私がそう言うのと彼女は私の方を睨みつけてきた。

だけど、先ほどまで出ていた怒気はすっかり鳴りを潜め、体が震えている姿は滑稽にしか見えなかった。

彼女の方を見て、くるつと反転して肩を竦めた。

「思い入れとかー、心がげとか誓いとかー、願いと夢とかー、希望とかー覚悟とかー、ごめんねー。

私そういうのよくわからないし、興味もないんだー」

過<sup>マイナス</sup>負荷の完全版である球磨川先輩を意識しながらだったが、かなり効果的だったようで同じグループの生徒たちの心は完全に折れてしまったかのように茫然としている。

未だに過負荷になりたての私は、どうしても会話のベースに負完全である球磨川先輩をベースにしていた。彼の言動が過<sup>マイナス</sup>負荷的に完全に完璧すぎて、過<sup>マイナス</sup>負荷と言ったら彼が頭に浮かんでしまう以上は仕方ない。

球磨川先輩があまりにも負完全なのが悪いんだ。

『だから私は悪くない』

その内自分自身の過負荷的な会話ベースができることを期待しながら、私は過負荷マイナスに身を委ねていた。

「そんな今にも吐きそうな顔をしないでよ。流石の私でも傷ついちゃうぜ？」

別にあの先輩みたいにエリートを全員抹殺しようなんて思ってもないんだからさ。一緒にの学年なんだから仲良くしようよ！

ねえ榊田さん？」

私が話を振ると、呼ばれた彼女の肩が跳ねる。

正面にいる彼女の方を見ると、彼女は顔面蒼白で今にも倒れそうだった。

彼女の方に向かって真つすぐ歩くが、他の人は誰一人としてそれを止めることはしなかった。

彼女の前で手をだし、握手を求める。

「榊田さんは確か、クラスの間でなくみんなと友達になりたいんだよね？」

退学するかもしれないなかった須藤君に見返りもなく協力していたんだから、きつとそうに違いない！

だからさ、私とも友達になろうよ」

「」

彼女は肩をガタガタ震わせたままだった。

握手を返そうともせず話すこともできない彼女を見ながら、私は話すのをやめな  
い。

手を下げて肩を竦め、また過負荷マイナスをばら撒く。

「なんだ、やつぱり上つ面だけだったんだね」

心の底から残念だと言わんばかりに、ため息を混じらせながら吐き捨てる。

だが、次の瞬間にはけろりとして彼女の顔を覗き込むように近づいた。

「でも安心して！」

誰とでも友達になりたいように見せかけて、本当は自分の役に立つ人とだけ仲良くしたい。利用したい。自分が良ければそれでいい。それが君の本性だとしても、それでいいんだよ。

だってそれが君の大切な個性なんだから！

無理に変えようなんて思わないで、自分らしさに自信を持つようよ！

君は君のままでもいいんだよ」

私の言葉に、彼女は震えたまま答えることはできなかった。目と目が重なりそうなほど近づいているが、私の濁りきった瞳に映る彼女はDクラスで音頭を取っていた人と同一人物には思えないぐらい弱弱しかった。

図書館に居合わせた堀北さんも、私の方を見て震えが止まらない。たまたま同じグループにされたBとCクラスの生徒たちは今にも泣きだしそうなくらいに怯えていた。彼女に背を向け、自分の座っていた席に向かつて歩き出し、歩きながら話し出した。「そういえばさ、16世紀に貴族の間で行われていたあるゲームがあつたらしいんだ。奴隷の骨を身体の端から一本ずつ順番にハンマーで砕いていく！」

奴隷は最初、『助けてくれ』って懇願するんだけど最後には『殺してくれ』って言いだすんだ。果たして何本目の骨でそう言うかを、貴族の皆様方は仲良く賭けたのさ」

安心院さんの話を過負荷マイナスのまま言っただけなのに、グループのみんなはただでさえ青い顔がさらに青白くなつて既に死体になつているんじゃないかと思わざるを得なかつた。

自分の席に座り、雰囲気作りも兼ねて足を組む。

「君たちがAクラスに上がりたいっていうのも、同じ状況だと思わないかい？」

今君たちは私の言葉一つで震えあがっているけど、私と君たちはこれから3年間も同じ学年にいるんだぜ？

今でさえ、ここから逃げ出しそうなくらいに震えているのに3年間も耐えられるかい？」

言われてからその事実気付いて想像してしまつたのか、彼らは今にも崩れ落ちそう

だった。

今の20分にも満たない間一緒にいるだけでこの様だ。3年間も一緒にの学年で居ることを想像しているのだろう。

「だから、『Aクラスに上がりたい』じゃなくて、『この学校を辞めたい』って言う気にはならないかな？」

私の言葉に有栖でさえも顔を青くした。

彼女に以前話した、康平を倒した後はどうするのか退学させるでもない限り復讐しようと思う生徒が出たときにどうするかと言ったことを思い出したのだろう。

この話し合いでの一番の目的がこれだった。

有栖が負けることを認めたくないのなら、それより先に他のクラスを潰してしまえばいい。

エリート私の輪に過負荷私を入れやがった八つ当たりということもあるが、いかに私が過負荷マイナスで気持ち悪マイナスくて、人間マイナスとして欠陥で、理解マイナスできないかを教えてあげれば、彼らも私に絶対に関わりたくないと思うだろう。

それでも、勝手に気持ち悪いと感じるのは彼らだ。

だから私は悪関係ないくない。

「ああ、勘違いしないでほしいんだけど、別に強制するわけじゃあないよ。

君たちにだつてこの学校でできた友人とか、友達とか、仲間とかがいるんだろ？  
ただ、矛先が他の人に向かうだけさ。

でも別に構わないよね？

だつて君たちとは関係ない他人なんだから。あまり覚えてもいないようなクラスメイトが減つていったところで、君たちは悪くない。仮に、直前に私と話していたとしても彼らの自己決定で退学を選んだ。

だから、私も悪くない」

にっこりとした笑顔を浮かべて、他の人たちにそう言った。

既に彼らの心はほとんど折れていて、このグループの空気はお通夜と同じぐらい重い空気になっている。

「そんな目で見るなよ。同じ学校の同じ学年の仲間じゃないか！ 同じ制服に袖を通している仲間じゃないか！

化け物を見るかのような目で見られたら、私の心が痛むじゃないか。

だから、君たちが今ここで吐いたとしても、私の言葉を聞いて学校を辞めたとしても、君たちが自責の念に駆られて自殺したとしても、私は悪くない。

むしろ、私は被害者だ」

誰一人として反論しようとすらしらない。

まるで死体の中で演説をしている様な錯覚に襲われるが、私は死体ではなくそれが同  
学年の生徒だということを当然理解していた。

「ありやりや、空気が完全にお通夜か葬式だぜ。

じゃ、誰も話したからないようだしこのまま私が話し続けるね。

後45分、ただの過負荷私の戯言ざれごとにお付き合いください」

一種の死刑宣告にも等しいそれは、彼らに絶望を味わわせるには十分だった。

## 29 話目 特別試験Ⅱ 一日目Ⅲ

過<sup>マイナス</sup>負荷を垂れ流しにした話し合いが終わり、他の生徒たちが茫然自失している中で、私は終了のアナウンスと共に部屋を後にした。

「あ、残念だけど時間みたいだね。結局終始私に話させっぱなしで、話し合いなんて言えるものでもなかったね。」

君たちは君たちが蹴落とした人が欲しくても得られなかった機会を、無駄に、無為に、無意味にしたんだ。

でも君たちの自由意思で行っているんだから、私は関係ない。

偉そうなことを口にするぐらいなら、もつと今自分たちがここにいるっていう意味を考えなよ。『責任を持った行動を』ってエリート<sup>君たち</sup>が好きな言葉だろう？

『それじゃあ、また今度とか』

有栖ですら私が出ていった時に正気に戻らなかったのだから、他の生徒たちが立ち直るには暫く時間がかかるだろう。

初回の話し合いは私の予定していた最低<sup>最高</sup>の形で幕を下ろした。

強いて言うなら、過<sup>マイナス</sup>負荷をばら撒きすぎたような気はする。それでも自分の打算を考



慮して、完全に壊しきれない程度に抑制していたのだからコントロールはできている。

それに、私はあれだけ色々やっても今回の康平の指示通りには動いているのだ。

話し合いに積極的に参加しないでほしい、というものは守っていない。これは紛れもない事実だ。

だが、Aクラスのクラスポイントを守るという意味では康平の指示通りに動いている。

私だけがこの試験に対して関係もない話を延々としているのだ。他の人たちが優待者を探ろうなんてことをする余裕もない。

もつと言えば、早く話し合いが終わって欲しいと何も考え無くなれば最高だ。話し合いの時間が近づくとたびにストレスが溜まり、話し合いがただの拷問と同じになって聞いているのをひたすら我慢するだけ。

自分で何か言おうとすることはせず、ただじつと耐えるだけになる。

そう、せつかくの特別試験のチャンスが無為にすることを彼ら自身が望むのだ。

私を見たくないから、私の言葉を聞きたくないから、私の声を聴きたくないから、私を知りたくないから、彼らは自分自身を守るためにこの試験を無駄にする。

そこに私がこうしてほしいとお願いするようなことはない。彼らが自分の手で衰退を選ぶことで、彼らをエリートの座から引きずり降ろしてあげられる。

『ショートカット平和癌望』なんて使わなくても、他人を不幸にするぐらいはできるはずだ。ましてや、それがただの普通なら。

……初めてといっても良いぐらい私の策が機能していたことを、彼らを通して実感していたからだろう。

本当にただの普通なだけなら、そもそもヒロインどころかサブキャラにすらなれない。そして主人公側の人間は、叩いても這い上がってくる芯の強さというべきものを持っている。

そんな単純な事実を、この時の私はすっかり忘れていた。

彼を甘く見ていたと言えば、その通りなのだろう。

彼の本性を見たつもりだった、肌で感じたつもりだった、理解していたつもりだった、納得していたつもりだった、把握していたつもりだった。

だけど、私は彼の過負荷零君を理解しているようで理解していなかったのだ。

入学初日のふとした時に気付いたそれは、7月の中頃に彼の説明を受けてようやく理

解した。

それがオカルトやファンタジー小説に出てくるようなものだ、私はその程度の認識しかしていなかった。

しかし、彼の持つ過負荷マイナスとは、そんな特殊能力プラスのものではない。正真正銘マイナス負を濃縮したものだ。

彼の言葉に見える、人間の本質、正論の矛盾、感情の不制御。

オカルトとしての一端を見せられた以上、洗脳だと言われた方がまだ納得できるようなものだった。

だが、彼はなんでもない言葉だけで私達を打ちのめしていた。

彼の持つ人間の闇マイナスというものが、いかに根強くて、いかに受け入れ難くて、いかに見たくないものだったか。今ここにいる全員は、それを思い知ってしまった。

過負荷マイナスを事前に知っていた私でさえもだ。

時折、私と二人でいる時に垣間見せる過負荷それと、今の話し合いでの負それは濃度が全く違っていた。

それこそ、今は彼に会いたくなくなるぐらいに。

だけど、これで屈してしまうのであれば彼には到底勝てない。

私は外面を取り繕い、席を立つことにした。

彼の意図は察したが、私は彼のやり方に反対だ。

守つてばかりではいけないと言つておいて、これだけ大立ち振る舞いしてその本質は一周回つて穴熊を決め込んでいるなんて、実に彼らしいマヤスと言えばらしいのだろう。

彼の思い通りにさせないために、早急に彼と話をする必要がある。

「それでは私もこれで失礼します。葛城君、申し訳ないのですが付き添いをお願いできませんか？」

「…ああ、了解した。先に失礼する」

葛城君はそう言つて席を立つた後、私に手を貸そうというところで他の方々も退席の準備を始めました。急いでこの部屋から出ようとしている様は、一刻も早くこの場所から逃げたいと思う気持ちで溢れているようにも見えました。

彼らよりも早く私と葛城君が部屋を出ようとする、予想通り私達をそのまま返そうとしない方が私達に食い掛かってきました。

「待てよ坂柳。アレは一体なんだ？」

意外にも私達以外で真つ先に復帰したのは龍園君でした。

彼が言う『アレ』とは、恐らく零君のことを指すのでしょう。

何処か焦っているような彼の口調が、いかに零君が彼らへ悪影響をばら撒いて行つたのかが窺えます。

その証拠に彼は私達の方を見ているですが、決して零君のいた席には目線を合わせませんでした。

「アレとは零君のことでしょうか？」

「それ以外にねえだろうが。あいつは一体何なんだ？」

「本人が居ないところで彼について詳しく触れる気はありません。知りたければ自分で調べてください」

「その口ぶりからすれば、お前は知っていたってことでもいいんだな？」

「お答えする気はありません。それだけでしたら、これで失礼します」

まだ何か言いたそうにしていた彼を無視して、私は葛城君を連れ添って部屋を出た。

部屋を出た後に零君を含めた3人で話し合いをしたいと葛城君に申し出たところ、無事に許可を貰えたので私の部屋で話し合いをすることにしました。

葛城君と共に私の部屋に到着してから、葛城君を椅子に座らせて零君に私の部屋に来てもらうようにチャットを使ってお願いしました。返事は話し合い前の時とは違って直ぐにきました。

私の部屋に今から行くから暫く待つてほしいとのことで、私と葛城君の二人でそれまで待つことになりました。

今どこにいるか確認していなかったの、いつ彼が来るのかわからないまま時間だけが過ぎていく。

零君が来るまでこの沈黙が続くかと思われたが、意外にも葛城君が話しかけてきました。

「…坂柳は零のアレを知っていたのか？」

「ええ。本人があまり話したくないようなので言いませんでしたし、今回の話し合いがこうなるとは思わなかったので話しませんでした」

「正直に聞こう。アレを見てどう思った？」

「…恐怖を覚えなかったと言えば嘘になります。事前に言葉で理解していたつもりだったのですが、認識が甘かったことを思い知りました」

「俺も正直なところ同じように思った。前にも同じような雰囲気を出していたことには気づいていたが、今回の話し合いほどではなかった。理解できない、理解したくない、そして何よりも受け入れたくないことを平然と突き付けてくるような話し方に、唯々黙って震えているだけになってしまった」

そう漏らす彼の顔には、屈辱や後悔の念がありありと見て取れました。

「だからこそ、なんで零がいきなり隠していたものを出してきたのかを聞きたいと思っている」

「それについての予想はついていますよ?」

「聞いたら答えてくれるか?」

「本人から聞いた方が早いと思います」

「そう言うと思つていたから、聞き出すつもりでいる。本人の口から直接聞いた方が早い」

「そうですね。もう少ししたら来ると思いますから、それまで待ちましょう」

私がそう言つて会話を打ち切ると、彼は思案するように手を顎に当てたまま固まつていました。

私も彼が来るまで、色々と彼に聞くことを整理するために考えをまとめることにして二人で座つてまま話すことはありませんでした。

そんな静寂の中で、私は未だに彼のことで頭を埋め尽くしていました。

特に一番私が恐怖を覚えたあの瞬間が、私の頭から離れるには時間がかかることはわかりきっていました。

「……『この学校を辞めたい』つていう気にはならないかな?」

…そう言い終えた時の彼の顔が、私には顔全体が砂嵐の様なノイズで埋め尽くされ、

半月の目と口だけが弧を描いて嗤っているように見えました。

それは例えるならのつぺらぼうにも似たもので、適当に人の形を楕円形で書いたものに半月で目と口を当てはめたような、普通の人の心が消えてしまったような錯覚すら覚ええました。

……私は零君のあの顔が頭から離れませんでした。短めの漆黒の髪に何処にでもいるような顔の普段の彼とは全く違うあの顔が、もしかしたら零君の本当の顔なんじゃないかと思つてしまいました。

覚悟を決めて彼を待ち構えているまでの数分間。

私は無意識に体を震わせたままでした。

話し合いを終えてから気分よく部屋に戻ろうとして、お昼ご飯を食べていないことに気付いた。

ファストフード店に向かい歩みを進めることにした。

歩いているうちに少しづつ落ち着いてきたのか、過負荷気味な思考は少しずつ落ち着



きを見せていた。部屋を出た段階から過負荷を抑えてはいたが、思考がどうしても過負荷に轢きずられていたのは間違いない。

話し合いをしながら思い出していた『めだかボックス』の過負荷の人たち。

それを軸に話していたせいかな、過負荷に身を委ねていたせいかな、私の過負荷がより一層深いものになっているような気がした。

「あたし達は酷い目に遭って来た

だから酷いことをしてもいいんだ!!」

前に読んでいた時には深く考えていなかったが、過負荷となった今では凄くしつくりくるものに思えている。

復讐が悪いことなのか？

制裁は悪いことなのか？

報復は悪いことなのか？

人間は感情の生き物だ。

それに縛られている以上、不幸な私がエリート彼らに何をしてもいいじゃないか。

恵まれている彼らに恵まれていない私が何をやっても、僻みや八つ当たりや嫉妬にしかならないのはわかっている。

普通の視点からすれば、それが全て正しいわけではないことぐらいわかっている。屁

理屈だと言われることも理解できる。だが、納得できないものも確かにあるのだ。

正しいだけが全てなのか？

強いだけが全てなのか？

常識が全てなのか？

それに見捨てられたから、過<sup>マイナス</sup>負荷になったのだ。

それに受け入れられなかったから、今<sup>負完成</sup>の私が出来たのだ。

それを捨ててしまったから、無<sup>無冠刑</sup>関係になったのだ。

間違っ<sup>っ</sup>ていても生きていける。

弱くても生きていける。

常識がなくても生きていける。

生きていけるなら問題はない。生きていけるということは社会が黙認しているとい

うことと同義だ。だから、過<sup>マイナス</sup>負荷が生きていける現状を放置している社会が悪いんだ。

だから、私<sup>マイナス</sup>が悪いなんてことはない。

私には関係ない。

そんなことを考えながら、私は昼食を食べていた。

有栖に返信したが、話し合い前の運動と約1時間程度話しっぱなしだったことで空腹

を感じていた。これぐらいなら我慢することもできるが、無理に我慢する必要もないので素直に欲求を満たすことを優先した。

ファストフード店でハンバーガーを買って食べるなら、私の場合5分程度で終わるだろう。既に14時を回っている今、人はほとんどいないため並ばずに買うことができた。

2つ目のハンバーガーに手を伸ばしたが、まだ買ってから時間が経っていないので包み紙の奥から暖かい熱を手に感じていた。

食べれるときに急いで食べる癖は、そんなことが必要なくなってもう数年経つにも関わらず直る気配を見せない。轆き肉になった豚と牛の死骸を練って焼いたものにかぶりつきながら、鼠や鳥の味は思ったより私の脳髄に染みついていられるのかもしれないと気づき、思わず苦笑した。

---

零からすぐに返信があつたと坂柳から聞いたが、あいつはなかなか来なかつた。

とはいっても、まだ5分程度しか経っていないことに気付く。

あいつがあの気持ち悪い何かを持っていることは、無人島の特別試験の時に気付いた。いや、正確にはもつと早くからあいつが何か違うということには気づいていた。

記憶が正しければ俺と坂柳の間に入って『馬鹿なの?』と言ったときにも、あの感じは少し出ていた。

あの得体のしれない気持ち悪さが、単純に恐ろしく思った。

妹のことと蹴落とした受験生のことを言われた時、俺は今にも崩れ落ちて目と耳を塞いでしまいたかった。しかし、『Aクラスのリーダーとして』そのようなことはしなかった。

だが、あの得体のしれない気持ち悪さ、人間の負の感情を濃縮したようなあいつの言葉は、俺の頭にこびりついたままだった。

今からあいつがこの部屋に来る。

坂柳に提案された時、本当のことを言うなら断ってしまったかった。

だが、『Aクラスのリーダーとして』ここで話し合う必要があった。

だから、俺は今ここで坂柳と一緒にあいつと会う恐怖に襲われながらもあいつを待っていた。

同じ人間とはとても思えない気持ち悪さを持ったあいつを、俺はただひたすら待ち構えるしかなかった。

だが、それと同じぐらいにあいつを『信頼』していた。

初日からリーダーとしてAクラスを率いる…まではいかなくても中心になるつもりだった俺は、対等の友達というものがこのクラスにはいなかった。

仲のいい弥彦は、俺を立てようとしてくれるいいやつではある。だが、俺を真正面から否定するようなことはしないし、俺に対して反対意見を出すことも滅多にない。

坂柳派の人間は反対意見は出すが、そもそも友人としてみていないだろう。

リーダーとしてだけ見れば坂柳とは対等にも見えるが、俺の方が資質的に劣ってしまっていることはわかっている。第一、お互いに仲良く友達になれるとは思っていない。

そんな中で、『小坂零』という人物は希少だった。

どこの派閥にも属していない雲のように掴みどころのない存在にも思えるあいつは、今考えれば俺を利用するために近づいてきたのは間違いない。

それはよくあることではあったため、敵対しないのであれば交友を深めることに異論はなかった。

零が他の友人たちと違ったのは、俺にへりくだるのではなく、俺と一緒にいることで威張ることもなく、俺を立てようとするだけでもなく、俺を『ただのクラスメイト』として扱ったことだろう。

ある日、悩みの種ができた時に零に相談した。

他のクラスメイトに弱い姿を見せるつもりはなかったのだが、誰とも違う零の在り方に興味を持ったのかもしれない。

零は俺に対して失望することもなく、少し困った顔をしながら真摯に相談に乗ってくれた。

それからだ。

クラスの方針で悩んだとき。友人との付き合いで悩んだとき。Aクラス内で衝突が起こりそうなき。

愚痴も交えながら、あいつの愚痴も聞いた。

そうやって付き合いを深めていったつもりだった。

だから、『Aクラスのリーダーとして』俺はあいつから逃げるわけにはいかない。

今にも逃げ出してしまいうようなほど、あいつが来るのが怖い。

しかし、あいつにAクラスのリーダーとして振る舞ってほしいと頼み込まれた以上、友達として俺はそれに応えないといけない。

受け入れたくない。目に入れたくない。声を聴きたくない。認識したくない。匂い

を嗅ぎたくない。触れ合いたくない。視線を合わせられたくない。声を聴かせたくない。認めたくない。見られたくない。知りたくない。理解したくない。

だが、俺は『Aクラスのリーダー』だ。

逃げ出してしまいたい。吐いてしまいたい。聴覚を失ってしまいたい。忘れてしまいたい。拒絶してしまいたい。隔離してしまいたい。投獄してしまいたい。泣き喚いでしまいたい。気絶してしまいたい。死んでしまいたい。視力を失ってしまいたい。

それでも、『Aクラスのリーダー』を頼まれた以上、逃げることは許されない…。

隣にいる坂柳を意識する余裕もなく、俺は今すぐにここから逃げてしまいたい衝動を胸ポケットに入れていたボールペンを太ももに突き刺すことで抑える。

血が出るほど突き刺してはいいないが、叫び出しそうな痛みが恐怖を和らげてくれた。

俺はあいつが来るまでの僅かな時間、死刑台に上るような恐怖を味わいながら痛みを堪えて待っていた。

昼食を終えて、そのまま有栖の部屋に向かった。

返信した時から数えて、およそ10分程度で部屋に着いたが、これぐらいなら許容範囲だろう。

部屋に入ると、険しい顔をした康平と有栖が無言のまま椅子に座ることを促してきた。

私を見て思わず顔を顰めている二人を見て、大人しく促されるままに椅子に座る。

私の前に有栖、右隣に康平がいる形で机を囲んだ。

「やあ、さっきぶりだね」

「ええ、誰かさんのせいで少し取り乱してしまいましたからね」

皮肉交じりでそう切り込んだが、露骨な皮肉で返されてしまった。

そこまで時間は経っていないが、思ったよりも二人とも復帰しているように見える。

「酷いことを言うなあ。せつかく二人の意図を汲み取ってあげたんだぜ？」

むしろ感謝してほしいくらいだ」

私がそう言うのと、有栖はやつぱりという顔でこつちを見るが、康平は露骨に顔を顰めていた。



「…俺も坂柳も零にあんなことをしろと言った覚えはない」

「何を言っているんだい康平？」

二人の意図を汲み取って言っただろ？」

君たちがしようと思っていた方針を私が実践しただけさ」

私の言葉で私が話し合いの時にした演説の意味を理解したのだから。

理解してしまつたからこそ、康平は苦々しく顔を歪めていた。

「あのやり方を俺と坂柳が望んでいると思つていたのか？」

「望んでいようがいまいが、結果的には君たちの意見を折半するとああなるんだぜ？」

Aクラスのポイントを守らなくちゃいけない、他のクラスを潰さなくちゃいけない、

両方とも叶えてあげようとした友人に対して、そんな言い方はないだろう？」

『だから私は悪くない』

この二人相手にさつきみたいに過負荷マイナスを全開にするつもりは、毛頭なかった。

だが、私の中に残っていた過負荷マイナスが私の言葉に大きく影響を及ぼしていた。さつきの

空気的一端を露わにしている今、康平と有栖は私を怪物でも見るような目で見ています。

しかし、彼らの目には先ほどの怯えのようなものは薄くなつていて、決意にも似たプ

ラス向きの意思が私に抵抗しているように見えた。

「……確かに、零君が試験に關係ない話を延々と続ければ辰グループの人たちは封殺で

きるかもしれませんが。ついでに、他のクラスを潰すこともできるでしょう。

ですが、私達はそのやり方を認めません。そのやり方が卒業まで使えるわけでもなければ、そのやり方にAクラス全員がついて行くわけではありませんよ?」

「さっきの零のあれが作戦だとしても、Aクラスのやり方としては最低なものに近いだろう。他のクラスを率いていくAクラスのやり方に相応しいものを模索していくべきだ。

既に坂柳が優待者を割り出したこともある。これ以上無意味にAクラスの評価を下げるようなことをしないでくれ」

私の過負荷マイナスに気圧されてなお、二人とも強い言葉で言い切った。

ここから徹底的に折りに行くことも考えたが、開き直りにも近いものを抱いている二人を下すことは私には難しいように直感的に感じた。

だが、康平の方はゴリ押せば折れるかもしれない。少し無理をしているようにも見える彼は、過負荷マイナスを全開にしてしまえば恐らく折れるだろうと感じた。

だが、有栖はこれぐらいじゃ折れないだろうという確信にも似た何かを感じている。

それは彼女に勝負を挑んだ時と彼女に過負荷マイナスについて教えた時に、自力で立ち直ったことがあったからだろう。折れにくい心というものは折れたらそのまま落ちていきやすいと言うが、逆に言うとな折れないうちは芯を持った強さがあると言うことだ。

それを崩すことは、今の私では不可能だろう。

「……………はあ……………。わかったよ。二人に睨まれてまでやる気はないし、そういうことなら後はそつちに任せるよ。あまりやりすぎて先生たちに嚴重注意をされるのも面倒だしね。

ああ、『また勝てなかつた』」

無理に食い下がる必要もない。

元から、二人ともこういうだろうとは予想していた。

有栖は性格から、康平にはチャットでのお願いから、二人がこうなるように誘導して  
いた。

私の過負荷マイナスに屈して、そのまま落ちるなら方法を変える必要があつたが、一応友人である二人がいたからこそ過負荷マイナスの最後無冠刑をスキルとして使わないの一線を超えないように抑えていた。監視カメラの存在もあるので、その一線無冠刑を使うを越える気は元からなかつた。なかつたが、あのまま気分が昂りすぎたら、そのまま台無しにしていた可能性もあつたことはこの際置いておこう。

私の予想通り、彼らは過負荷マイナスに打ち勝つて私に物申したのだ。

私マイナスと有栖マイナスと康平マイナスである以上、彼らが私に勝つのはもはや必然である。それに、二人と

も私と近くにいたことで時折出す私の過負荷マイナスに少なからず気づいていただろう。

話し合いの時はあまりやりすぎて他のクラスの人たちごと、彼らを叩き潰してしまわなかつたか不安だったが杞憂で済んだみたいだ。

だが、今の私は彼らと勝負をつけるためにここにいるのではない。

「でさ、私を抑えたところで君たちはどうするのさ？」

私はあくまでクラスメイトであつて、君たち共通のラスボスとかじゃないんだぜ？」  
結局はこうなる。

二人ともこつちを見て呆けたような間抜けな顔を晒したが、直ぐに立ち直つて頭を悩ませていた。

私が珍しく大立ち回りをしたが、この試験で大事なことは私を黙らせておくことではなく優待者を当てる回答を送りつけることだ。

「…優待者の割り出しは既に終わっていますので、このまま試験を終わらせることもできませんが…」

本来の目的を思い出した有栖は、本当にこの試験をこの段階で終わらせていいのか悩ませていたような顔で康平の方を見ていた。

「先に約束した以上、回答を坂柳が送ると言うのであればそれには今回は従おう。

だが、Aクラスの優待者がいるグループはどうするつもりだ？」

康平としては早く終わることに大きな問題を見出さなかったのだろう。

だが、冷静に考えると少しのデメリットが思いついてしまった。

「最善は解答待ちのままそのグループが何事もなく終わってくれることだけど、露骨に3グループだけ残ってて他のクラスの人たちが自分のクラスの優待者を当てられてたら、流石に気づくと思うよ」

「私も同意です。ですので、この時点で終わらせる最善としては他のクラスに1人ずつAクラスの優待者を当ててもらおうように、Aクラスの優待者の方々に裏切ってもらおうことでしよう。」

Aクラスの各優待者の方に『私は坂柳派なので葛城派を陥れるために協力してほしい』とでも言ってもらい、メールの画面を見せて確定させれば問題なくできるかと思いません」

有栖も同じように思っていたらしく、現実的に他のクラスに当てられた時のポイントの分散を試みる案を提案する。

だが、それに難色を示したのは康平の方だった。

「Aクラスの優待者がいるところは、優待者を当てられない可能性もある。仮にまとめて当てられたとしても、Aクラスが今回の試験で得られるクラスポイントは300で、Bクラスが当てたと仮定しても150の差が付くことになる。」

優待者を当てられなければクラスポイントが減らないことを考慮すると、無理に他のクラスに優待者を明かす必要はない」

ここでまたしても意見が対立する二人。

有栖の言う通りすぐに終わらせてしまう時の最適解としては、他の各クラスにAクラスの優待者を一人ずつ当ててもらおうことだろう。欠点としては、確実に450プラスされるポイントが300になってしまうこと。メリットは一番近いBクラスとの差がこの試験だけで250も開くこと。

康平の言う通り何もなければクラスポイントが減ることはなく、仮にまとめて当てられたとしても差が開くのは確定している。最悪の状況を想定して無人島での特別試験を考慮しても、Bクラスと130の差を開けることができる。

「確かに優待者の法則に辿り着けるかも怪しいし、そのまま放置して運が良ければクラスポイントが減ることもなくなる。

ただ、Aクラスの優待者が残っているであろうグループは、Aクラスの優待者が誰かを探すことになる。Aクラスに優待者がいるということが、ヒントになって優待者の法則に辿りつかれる可能性が高くなるってどこかな?」

結局は一長一短と言ったところだ。

どっちに転んでも少しのデメリットが目に着いてしまう。

「すぐに優待者の回答を送らずに、暫く話し合いをしてみる手もありますが……」  
そう言つて有栖は言い淀む。

言うまでもないデメリットに気付いているからだろう。

「それだと時間を与えてしまう分、法則に気付く生徒が出る可能性がある。特に零があの話し合いで他のクラス全員と敵対する形になってしまったことを考えると、立ち直つていた場合他の3クラスが結束する可能性もある」

「その通りです。ですので、どうしようか少々困つてるところです」

康平が言つた通り、今の段階だからこそ優待者を全て当てることができるのだ。

私が最初の話し合いで過負荷マイナスをさらけ出したことで、各クラスのエリートたちはお互いの心理を探ることのできないまま話し合いを終えてしまつている。

時間が経つて最悪Aクラスを潰すために協力でもされようものなら、そう時間が掛からないうちに答えに辿りついてしまうかもしれない。

だから、最低でも300のc1を取りたいのならば、今すぐに回答を送りつける必要がある。

「そう簡単に立ち直ると思えないけど、時間がかかつてしまうと法則を見つける人が出る可能性は十分にあるね。Dクラスの彼とか、ヒントがあればすぐに見つけそうだし」

言ってしまったから、ミスをしたと思って思わず有栖の方を見た。

彼女は余計なことを言ってくれたと言わんばかりにこちらを睨んでおり、それに気づいていない康平は考えるように呟いた。

「Dクラスの……零が前に言っていた『怪物』のことか？」

康平の呟きを聞いた有栖は私に何とかしろと言っているように感じた。

私自身、綾小路君の活躍がどのようなものなのか詳しくは知らないため多くを語る気はない。何故有栖が頑なに私に言わせようとしなのかを考えれば、彼女の大元の目的も大体察している。

だから、私はそれについて言及するつもりはなかった。

「そんなところ。幸いなことに彼は他のクラスに友達が多くなかったはずだから、多分大丈夫だとは思うけど最悪を考えると当てちゃったほうがいいかもしれない。

個人的には待つてほしいけど、Aクラスのことを考えると二人とも納得しないでしょ？」

当初の目的では、『目覚めた運命の奴隷』がどれぐらい活躍できるのかを見たいというのが本音だった。だが、茂の強みはこの話し合いで見せることは難しい可能性が高いこと、私が少しやりすぎてしまったせいでAクラス自体が動きにくくなっていることから、今回は諦めることを視野に入れつつある。



茂の持つ『観察眼』とも言える、彼の眼の良さは彼がいる話し合いの場に居なければ評価が難しいものだろう。茂には、話し合い時間中ずっと録音していることを頼んでいるが、それと照らし合わせて「この時にどういふそぶりをしていたからおそらくこうだろう」といった程度のことしかできない。

「零の言う通りの『怪物』がいるのであれば、先に当ててしまったほうがいいだろう。150ポイントには必要経費と割り切って300ポイントだけでも確保するべきだ」

康平は私の言う『怪物』を探ろうとはしなかった。

私も有栖も、それについて触れられたくないことを察したのでだろう。それを踏まえてのまとめにもなる最終的な意見を出してきた。

「…確かにそうしたほうがいいかもしれませんが。他のクラスの出方を窺いたい気持ちはありますが、これ以上時間をかけて結末されるようなことになったら流石に面倒です。最悪、優待者の法則がわかっているのにも関わらず、クラスポイントを手に入れることができなくなります」

有栖も康平と同じ意見だった。

今の段階で優待者の回答を送ってしまえば、この試験で大幅な差を開けることができる。既にAクラスのリーダー二人がその法則を共有している以上、回答を逃すことは悪手でしかないだろう。

「Aクラスの優待者の件はどうする？」

試験そのものを終わらせてしまった方が、Aクラスに対する結束を固められずに済むが……」

「欲を出すか、最悪を想定するかどうか……」

後回しにしていた問題を、康平が切り出した。

私はその二つのデメリットを確認するかのように言葉を漏らす。

「欲を出す方はこのまま何もしないだけだから確実だ。最悪を想定した場合は、他のクラスの人たちが確実に投票してくれる保証はないから、そこを見極める必要がある」

最悪を想定した方は他のクラスの人に投票してもらう必要がある以上、どうあがいても100%の確率にはならない。そこには、人の自由意思決定権があるからだ。

有栖なら脅してやらせそうなものではあるが、それをこの場で提案するとは思えなかった。

暫く沈黙が続いたところ、有栖が結論を出した。

「……最悪を想定したところで、Aクラスがこの試験で1位を取ってしまえば他のクラス同士で手を結ぶことも考えられません。確実性が高い上に、運が良ければクラスポイントを減らさずに済む放置に私は一票を投じます」

有栖の出した結論は普段の彼女とは違い安定したモノではあるが、それが恐らく彼女

にとつて都合が良かったのだろう。

私自身はAクラスが300c1入る段階でどちらでもよかったので、彼女に便乗することにした。

「それじゃあ私もそれで。どっちにしても今回の試験に関してはそれで十分な結果になる」

康平はそれを聞いて悩むように腕を組んだが、彼が口を開くまでに時間はそう掛からなかった。

「……わかった。投票は坂柳に頼んでもいいか？」

俺の方針をクラスチャットの方で伝えている以上、俺が優待者を投票させるように頼むのは難しい」

「わかりました。それでは優待者を決め打つための指示を出しますので、二人とも退出してもらっても良いですか？」

少し忙しくなるので、結果は後で3人のチャットに回答メールのコピーと送信した時のスクリーンショット込みで報告します」

そういう有栖は、既に携帯を出して指示を送ろうとしている。

私と康平は、有栖に任せることにして部屋を出た。

康平は他のクラスメイト達のところに行き、私は自分の割り当てられた部屋に戻った。

有栖がチェックメイトをかけている以上、次の話し合いまでには回答が送られているだろう。

康平なら方針の都合上時間までに投票させることが難しいかもしれないが、有栖ならお友達<sup>手</sup><sub>下</sub>を上手く扱っているはずだ。

最終的に本来の目的だったはずの茂の力を見ることは不可能になってしまったが、Aクラスを落とさないようにすると言う意味では十分な収穫になるだろう。

それに、あのエリートどもの嵌められたと気づいた顔を想像するだけでも面白い。

そう思いながら、誰も戻っていない部屋でベッドに転がった。眠気はないが、どこか疲労が溜まっているような感じがする。折角の豪華船だし、何か面白いことでも探しに行こうと思ったところで携帯に着信が来た。

見たことのない番号から来た着信は、不思議なことに私が既に終わったものとして見えていたこの試験で最後の壁になるように感じた。

## 30話目 特別試験Ⅱ 一日目Ⅳ

見たことのない番号からの着信は、Bクラスのリーダー格の一之瀬さんからだった。図書館の時に連絡を先を渡していたものを、律儀に取っておいたらしい。

今まで一度も電話どころかメールすら送ってこなかった彼女がどうして電話をかけたのか気になったが、私には関係ないことに気付いてからどうでもよくなった。

彼女は、今すぐに二人きりで話をしたいから自分の部屋に来てほしいと、ご丁寧に部屋の番号を教えてくれた。何故私がそんなことをしなくてはいけないのか、何で呼び出してきたのか、Bクラスの総意なのか。

怯えているように消え入るような声だったことが、何か関係しているのかもしれないと思つた。

そこまで考えて面倒になつて呼び出しには応じることにした。

どうせこの試験ももう結果が見えているようなものだ。後1時間もかからないうちに有栖が優待者を決め打ちに行くだろう。

彼女が自分の派閥の人間に指示を出し、一斉に回答を送るとしても30分もあれば足りるはずだ。

早ければもつと早く終われるだろう。彼女の派閥は『ご主人様』と『従者』お友達と言つていいぐらい、上下関係がはつきりとできている。

彼女の呼び出しを断れるような人は派閥の中にいるとは思えないし、友達たちと遊んでいたとしてもそつちを切り上げることが出来る人達で構成されている。

故に、時間つぶし程度にはなるだろうというだけの理由で私は彼女の部屋に行くことにした。

この件を康平や有栖に伝えようかとも一瞬思ったが、康平は私を怖がつているようにも見えたし、有栖は今手が離せないだろう。

仮に連絡を入れたところで二人きりで話をしたいと言われた以上、他の人を連れていっても待たせるだけになってしまふそうだ。

それに、私はAクラスの奴隷ではない。

私がしたいように動く。何でもかんでも連絡をするのは小学生までだろう。

第一過負荷マイナスを完全に縛れる鎖なんて、この世には存在しない。

上から押さえつけたり、周りからがんにがらめにすることで抑えつけるようなことが可能ならば、ここまで嫌悪されるものではない。

上から押さえつけようものなら自分から押さえつけられて相手を怯えさせ、周りからがんにがらめにしようものなら周りごと全てを台無しにする。

それが過負荷<sup>私</sup>だ。

上しか見ていない連中に、下を思い出させてあげる。

ただそれだけのことなのに、他の人たちはそれを受け入れきれない。

そんなことは自分とは『無関係』だと言つて、そんなものは自分には『関係ない』と言つて、短所<sup>マイナス</sup>を欠点<sup>マイナス</sup>を弱点<sup>マイナス</sup>を直視しようとしなさい。

そんなことはないと言う人もいる。

自分は自分の短所を理解していると、欠点にきちんと向き合っていると、弱点を長所で補おうとしていると。

だが、それはあくまで幸せ者<sup>プラス</sup>の意見でしかない。

改善したつもりになって、改善しようのない欠点を見えない奴らのセリフだ。

本当にその欠点を克服しているのなら、過負荷<sup>私</sup>を受け入れることができるかもしれない。

しかし、そんな人がいない以上は改善したつもりでしかない。

本当に見たくないものというものは、無意識にでも意識的にでも見ようとはしないものを指すのだ。その集合体<sup>マイナス</sup>が負である以上、過負荷<sup>マイナス</sup>なんて普通の人が見れば気持ち悪いと思うのも当然だ。

今でこそ『負完成』になっていると自称している私だが、私が過負荷<sup>マイナス</sup>として一番最低







に振り回されていた日々。

今思えば私の人生の減点原点と、過負荷マイナスとしての目覚めはそこにあつたのかもしれない。

一般的には過負荷マイナスになつた場合、幸せになることはできないし誰かを幸せにすることもできないらしい。そうでないと負マイナスとは言えないものだと考えれば、そうならないとおかしいのだろう。

だが、それを誰が判断するんだ？

よく客観的に見て、と言うが人の人生を客観的に判断することは正しいことなのか？  
自分が幸せだと思えない幸せに何の価値があるんだ？

自分の人生はどんなにきれいごとを並べても自分の人生でしかない。

誰かを幸せに…なんて言つても、誰かを幸せにしている自分に酔いしれているだけだ。

なぜなら、その幸せとは自分から見たものでしかない。

他人から押し付けられた幸せほど面倒なものもないだろう。相手に今の自分は幸せですよ、と見てわかるように振る舞わないといけないことを加味すると、幸せの押し売りというものはやつた側の自己満足でしかない。

だから、自分が幸せだと思ふならそれがその人の幸せなのだろう。

例えそれがどんなに歪んだ幸せでも、どんなに螺子曲がった幸せでも、誰とも無関係な幸せだとしても。

主観的に見て自分が幸せだと感じたならば、その人は幸せなのだ。

仮にその幸せが屍の上に築き上げられたものだとしても、他の人から見たら幸せに見えるなくても、自分自身の体が壊れていても、本人の心が消えていても、一番最初に求めていたものを失ったとしても。

幸せだと思うのならば、それはきつと<sup>マイナス</sup>幸せなのだろう。

<sup>マイナス</sup>過負荷の在り方について自分自身がどうしていくべきかを考えて、思考が脱線していることに気付いた。

そもそもが、一之瀬さんに呼び出されたことについて考えていたはずだった。

しかし、気が付いたら自分のことばかり考えてしまい既に5分ほど浪費していることを確認してしまう。

自虐するように苦笑して、結局あの頃とあまり変わっていないことを再確認した私は頭を振って余計な思考を追い出し、割り当てられた自室を出て指定された部屋に向かった。

呼び出された部屋は女子が割り振られている4階であったことから、一之瀬さんが相部屋の人に理由を付けて空けてもらったのだと予想した。

部屋に入ると既に一之瀬さんが待ち構えていた。

他の人はその場には一人もいないため、私と彼女の二人つきりになっている。

辺りの部屋からも人の気配がしないことから、周囲の部屋がBクラスの生徒で固められていて全員に出払ってもらったのかもしれない。

監視カメラも見当たらず、録音機も録音機特有の微かなノイズ音が聞こえないことから恐らくないだろう。確信は持てないが、持っている判断材料だけだとそうなると予想した。

私が部屋に来るのを見た瞬間に、彼女は見たくないものを視界に入れてしまったかのごとく顔を歪める。

過負荷マイナスのスイッチを入れていないはずなのに、まるで私の存在そのものが汚らわしいものであるかのような反応に私は思わず苦笑した。

「やあ、一之瀬さん。急に呼び出して何のようだい？」

「…小坂君は辰グループだったよね？」

「うん、その通りだよ。Bクラスの人なんて一人も覚えていないけど、私が辰グループだったことは間違いない」

へらへらとした笑顔を張り付けることを意識して話しているが、私の言葉に彼女はますます顔を歪ませていた。

その表情からは恐怖の思いが良く感じ取れたが、その中に怒りにも似た感情が混じっていることに気付く。

「…小坂君が覚えていないとしても、Bクラスみんなあの話し合いの後どうなったか知ってほしい」

「え、嫌だよそんなの。だって私には関係ないことでしょう？」

私があっけらかんと私には関係ないと言うと、彼女の怒りの感情が爆発したかのようになり彼女は声を荒げた。

「辰グループのみんなだけ話し合いが終わった瞬間に部屋に戻って吐き戻したり、自分の目を抉り出そうとしたり、自殺しようとした人もいたんだよ？」

理由を聞いたらみんな揃って、『あの声を聴きたくない』『あの姿を見たくない』って言うって誰なのか聞いてみたら小坂君のことだったんだよ!?

小坂君の話聞いてそうなったんだよ!?

それでも『私には関係ない』って言うの!？」

彼女は言い切った後に、感情が昂っているのか肩で息をしていた。

私はそんな彼女を見て、これだからエリートブラスは嫌いなんだ、と嫌悪感を募らせながらにつこりとした笑顔を浮かべて彼女に近づいた。

「そうだよ。私の話を聞いて気持ち悪いと思ったのは彼らの勝手だ。だから私は関係ない。

第一、話し合いの場なんだから？ 話しをして何が悪いのさ。他の誰も話そうとしなかったんだから、私が一人で話していても何も問題はない。

むしろ、一人でずっと話しっぱなしで喉が痛くなつたのは私だけ？ 話すことだつて疲れることには変わりないのに、それを一人に押し付けて彼らは何も言葉を発さなかつたんだ。

だから、『私は被害者だ』

「!!」

私の言葉に、一之瀬さんは彼女の怒りの感情は引つ込み恐怖の感情が前面に押し出されているかのように怯えていた。

「それにさ、人の話を聞いてるだけで『あの声を聴きたくない』だの『あの姿を見たくない』だの言われる私のことを考えてみてよ。

ただ話をしてあげただけなのに、そんなことを言われるなんて心外だよ。誰も意見を

出してくれないせいで、私の思ったことをありのままその通りに伝えてあげただけさ。

ほら、どこを取っても私が悪い要素なんて一つもない。悪いのは、『人の話を聞いてい  
るだけで心が折れてしまうようなメンタルしかもっていない彼ら』だ。

話し合いの時間で話し合いをしようと試みて、意見が来るのを待つていながら話をし  
ていただけの私に悪い要素なんて一つもない。

だから、『私は悪くない』

さっきの話し合いで彼らがした表情と同じものを、彼女は私に向けていた。

だが、彼女の目は完全に折れておらず、私を睨みつけているところはさっきの彼らと  
Bクラスの生徒

違っていた。

「…確かに話をしていただけの小坂君がここまで言われるのは本当はよくないことなの  
かもしれない。

でも、それで傷ついている人もいたんだってことを知ってほしい」

「え、嫌だよ？ 第一君がそれを言うのかい？」

私がそう言うと、彼女は怯えていた表情からまた怒りのものへと変化し始めていた。

「…どういう意味か教えてもらってもいいかな？」

「君たちBクラスだって、Aクラスに上がりたんだろ？」

Bクラスのリーダーの一之瀬さんは、その中でも特にAクラスに上がりたいと思っ  
ているんじゃないかな？」

「…そうだよ。確かに私はAクラスに上がりたいと思っっている。Bクラスのみならず  
一緒に」

「じゃあさ、蹴落とされたAクラスの人のことは考えているかい？」

Aクラスだったのに、Bクラスに負けただけでどこの大学にも入れず、出世とは縁遠  
い人生を送ることになってしまいう可能性がある元Aクラスの生徒たちのことを考えた  
ことはあるのかい？」

彼女はあまり考えていなかった現実を目の前に突き付けられたかのように、それまで  
に見せていた怒りは鳴りを潜めてしまった。

「それは…」

「私がBクラスの生徒を潰そうとしたと仮定しても、それはAクラスに上がってこよう  
と思っっているなら対処しなくちゃいけないからだよ。」

だから悪い人が一人だけだと仮定するなら、Bクラスのリーダーである一之瀬さんこ  
そが一番悪い人じゃないかな？」

「違う！」

私はそんなつもりじゃ」



「いいや君が悪い。君がBクラスを率いて、BクラスをAクラスに上げるために扇動しなかつたら私はBクラスの人たちなんて文字通り目にしなかつた。

それに君は図書館の時に私がどういう存在か、気づいていただけろ？」

現に君は今まで連絡先を渡したのにも関わらず、私とやり取りをすることはなかつたじゃないか！

そんな危険人物一号である、私の下に彼らを送り届けたのは君自身だ。私のことなんてこれっぽっちも彼らは知らなかつたんだからね。知っていたら、自主的にこの試験から降りていたかもしれない。

その選択肢を与えることすらしなかつたのは、Bクラスのリーダーである君さ」

全てを切り落とすかのような雰囲気マイナスの過負荷マイナスが私から滲み出ていることを感じた。

やっぱりどこまでいっても過負荷マイナスである私は、エリートであるだけの彼女とは根本的に相いれないものなのだろう。

「だから私は悪くない。

君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い

君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い君が悪い

君が悪くて、いい気味だ」

心が折れるような音が聞こえた気がした。

彼女はへなへなと座り込んでしまい、私の方を睨む気力すらなくなっている。

思ったよりも持った方だと思っていたが、本性を少し出しただけで折れてしまったことに少しの寂しさを感じた。

「まあ、でもそれで君が嫌だっというんなら私が一つ提案をしてあげるよ」

「…」

「私にこの場で10万Prを振り込んでくれれば、『辰グループの話し合いで私が話すことはしない』って誓うよ」

私がそう言うと、彼女の目に光が戻った。

「…もう一度言ってもらってもいいかな？」

「私に今すぐこの場で10万Prを振り込んでくれれば、『辰グループの話し合いで私が話すことはしない』って誓うよ。」

不安なら誓約書も書いたっていい」

私が繰り返すと、彼女は蚊の鳴くような細かい声で不安をかき消すかのように呟く。

「…本当に？」

「これでも約束は守る方だよ。まあ、君が嫌だっと言って自分のポイント可愛さにクラスメイトを犠牲にするなら話は別だけど」

「…わかったよ。今から振り込むからちよつと待ってて」

そうやって彼女は携帯を出して操作を始めた。

これが通れば、デメリット一切なしにprが10万も増える。

彼女は知らないだろうが、子、酉、亥グループ以外の話し合いが行われることはもうない。

だから、これが通れば私になんのデメリットもなく、prが増えるが…。

『丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、戌グループの試験が終了いたしました。該当するグループの方は、以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないように気を付けて行動してください』

…まあ、こうなるか。

アナウンスの意味が理解できなかったのか、携帯を操作する手を止めて固まってしまっている一之瀬さんを横目に、ある意味いつも通りだと自嘲した。

もう少しで、勝てるかもしれないと思ってしまったからだろうか？

それとも、過<sup>マイナス</sup>負荷故の宿命なのか。

どつちに転んだとしても、現実はいつも悲しく私に降り注いでくるものだ。

現に彼女は冷静さを取り戻したみたいで、私の方を睨んでいる。

「あーあー、あと一步だったんだけど、残念だぜ。話し合いの機会そのものがなくなっちゃったんだから、この取引は不成立だね。」

やっぱり勝てなかった」

「…小坂君、もしかしてこうなることを知っていたの？」

「私は何も知らないよ！」

有栖が優待者を決め打ちに行こうとしていたことも、康平がそれにGOサインを出したことも、Aクラスが話し合いそのものをしようと思っていなかったことも、ゼーんぶ私は知らないよ」

「……」

目の前に蜘蛛の糸を垂らして必死になってよじ登っている時に、その蜘蛛の糸そのものがなくなかったかのようにヘリコプターからロープでも落とされたらこんな顔なんだろう。

彼女は顔を歪ませて黙ったまま何もしようとしていなかった。

助けられたと思っていた希望は、何もなくても助かることは決まっていたのだとしたら、ここでのやり取りは彼女にとって不要なものでしかない。

だって、過負荷私と関わる機会が増えるなんて、普通の人からすれば悪夢でしかないんだから。

「そんな意気消沈しないでさ、楽しくいこうよ。せつかくの高校生活だぜ？」

君だって他の受験生を蹴落としてこの学校に通う権利を勝ち取った一人じゃないか。

ちよつと嫌なことがあつたぐらゐで暗い顔して沈んでたら、落ちた人たちも浮かばれないつてものだよ」

「…」

「まあ、私がいたら寛げるものも寛げないか。私はエリート君たちは大嫌いだし、エリート君たちも私のことは嫌いだらうしね。

それじゃあ、私はこれでお暇させてもらうよ。

じゃあね。また今度」

私はその言葉を最後に部屋を出た。

突然、三つのグループを除いた全てのグループの試験が終わつたことで廊下が騒がしい。

男性である私が部屋から出てきたことに驚いている女子が何人かいたが、私を見るなり蜘蛛の子を散らすようにどこかに逃げていった。

どこかおかしいところがあつただらうか、と思ひながらも女子の奇異の視線に晒されることを嫌つた私はおとなしく自室に戻ることにした。

予定通りに終わったのなら、有栖から報告が上がっているだらう。

それと、カツコつけておいて速攻で試験を終わらせたことに茂が文句を言うかもしれない。

他人の日常を壊しておきながら自分の日常を謳歌しようとしている様は、まさしく『無<sup>無冠刑</sup>関係』の言葉通り自分本位であるということを私に再認識させるには十分だった。

## 幕間 小坂零の考察

私達の特別試験は終わった。結果発表までは日があるが、とりあえず肩の荷が下りた気分だ。

有栖からの連絡を確認し、誰がどのような回答を送ったかのスクショを康平を含めた三人のグループチャットで確認した。

その後、康平がAクラスのグループチャットの方で、Aクラスの優待者がいるグループ以外のグループの試験が終わったことから坂柳が試験を終わらせたのだろうと説明。

有栖がそれに乗っかかり、優待者の法則を説明。他のクラスの生徒たちがそれに気づかないうちにAクラスだけでポイントを独占し、前回の試験の負け分を取り戻すためにしたと主張。優待者の法則と有栖の意見に対して大きな反論がないことを確認して、康平が最後に、Aクラスのことを思って行動してくれたのだから責める気はない。だが、次からは勝手に動きすぎないでほしい、と締めた。

当然のことながら裏で打ち合わせをしてからやっている。

酷いマッチポンプだが、二人の立場的には説明の義務があつて当然だろう。表向きにAクラスのまとめ役になっている二人が、Aクラスの優待者をグループで晒してもらっ

ように指示している。

そのため、Aクラスの生徒ならば誰しもさっきのアナウンスだけでAクラスの優待者がいない全てのグループの試験が終わったことになる。

康平が下手なことをしないでほしいと言っただけのもの、それで黙っていない人がいることをAクラスの生徒は知っている。

彼女が間違っていることはないだろうが、説明義務が付くのは責任者としては当然のことだ。

故に、説明をしろと記者が政治家に問い詰めるが如く詰め寄ってくる前に、自分から康平と協力して事情説明を行う必要があった。

康平は康平で有栖の行動を黙認している。

最後には好きにしてほしいと付け加えていても、クラスの方針を提示したのは康平だ。ここまで早い段階で優待者を指定してしまった罪悪感にも似た感情もあるのだろう。

もしくは、『Aクラスのリーダーとして』頑張ってくれている結果なのかもしれない。上に立つものとして、事情説明のフリと共に説明責任の補佐を行ったのだと予想した。



私は自分が表立ってクラスの方針を決めないことを良いことに、頑張っているであろう二人を笑いながらベッドに身を投げた。ベッドに上で制服を脱ぎ捨て、Yシャツの下に着ていたTシャツと下着だけ残す。

昔から制服はあまり好きではない。制服とは学校が生徒を縛りつけている象徴だと私は思っている。

身分証明代わりにもなるそれは、この学校に所属していることを示すものでもあり、この学校の教員に師事を受けている証明にもなってしまう。

洗うのが面倒だという理由もあるが、前世では大学生だったにもかかわらず今の私は高校生でしかないと思いい知らされる。

制服とは権力の象徴であり、奴隷の証明だ。

だから私は制服が嫌いだ。

学校に通えるだけの幸せの象徴であるそれを着ている自分が、その他大勢と同一化されることを証明して自分自身を見失いそうに錯覚してしまうそれが嫌いだ。

球磨川先輩みたいに制服を着ている生徒の中で、一人だけ学ランを着るようなこともできない。

過負荷と言っておきながら、どこまでも普通の常識が残っていると再認識させられる

制服が大嫌いだ。

：いや、本当に嫌いなのはこんなことを考えてしまう自分自身なのだろう。

誰からも理解されることはない故の『無冠刑』だが、その精神性は私から生まれたものではあれ、私自身を示すものになりきれしていない。

過負荷に精神を落としきってしまえば、それになれるのかもしれない。

だが、普通でありつつ過負荷である『小坂零』という人物を生きていくためには、そこまでの変化を<sup>改造</sup>してしまっ<sup>て</sup>はいけないのではないかと思う。

前にも似たようなことを考えたが、『無冠刑』という在り方を捨てることは『小坂零』の否定に繋がる。

だが、『無冠刑』という過負荷に成りきってしまうと『小坂零』は崩壊してしまうような気がするのだ。

それこそ、普通が過負荷に耐えきれないように、『負完成』という過負荷としてはあり得ないような歪んだ在り方でないと、『小坂零』が過負荷を持ちつつ安定することは不可能だ。

なんで前世に過負荷の概念がなかったのか、なぜこの世界に私以外の過負荷が存在しないのか。

答えは簡単だ。

必要ないから。

過負荷<sup>マイナス</sup>というものは『人』の在り方というものを大きく歪める。

正確には世界が求めている人の在り方を真つ向から否定するような在り方であり、理想の人間像に唾を吐き捨てるようなものにも近い。

もつと言えば世界の癌細胞と言えるかもしれない。

人を壊すために世界に生まれ落ちた癌細胞。人を壊し、人を墮落<sup>マイナスにし</sup>させ、人を不幸<sup>マイナス</sup>にする。

だから、過負荷<sup>マイナス</sup>が許容される世界というものは、その癌細胞<sup>マイナス</sup>に立ち向かって打ち勝てるだけの抗癌剤<sup>プラス</sup>を持ちうる人間が存在する世界だ。

『めだかボックス』を読んでみるとそれがよくわかる。

『負完全』の球磨川先輩に幸せ<sup>プラス</sup>を感じさせることができる世界。

紆余曲折を経て、過負荷<sup>マイナス</sup>が受け入れられる場所を作っている世界。

相容れない一線を持ちつつも、それを超えない限り笑って済ませるようなそんな世界。

そうじゃなかったら、一人の癌細胞<sup>マイナス</sup>が世界を脅かしてしまってもおかしくはないだろう。

現に球磨川先輩は『めだかボックス』の舞台である『箱庭学園』に転入して来る以前

は、多くの高校を廃校にしてきた。球磨川先輩と同じぐらいの過負荷マイナスを私が持っていると言えるほど自惚れていないつもりだが、過負荷マイナスの性質とは元来そういうものだ。

では今私がいるこの世界には、果たして抗癌剤プラスを持っている人がいるのだろうか？

癌細胞私さえも打ち亡ぼせるぐらいの抗癌剤プラスが、この世界に存在するのだろうか？

居るとするのならはこの学校に居るはずなのだが、その可能性が既に低いものであることを薄々察している。

エリート集団を集めたはずの辰グループの話し合いの結果が、それを物語っている。参加した彼らの直後の様子だけ見ても、今の彼らでは癌細胞私に壊されるだけだ。

Bクラスの生徒がどうなったかを一之瀬さんから聞いたが、予想通り精神的にだいぶ参っていた。それでも、球磨川先輩よりはマシだったと言えてしまうのがせめてもの救いだ。

その原因は私が意図的に壊無冠刑しきらないようにしていったからなのか、あるいは彼らの精神性が普通よりもエリート優秀だったからなのかはわからない。

私を見ないようにするために、目を抉り出そうとした。

過負荷マイナスに生きる気力の全てを奪われ、何もしたくなくなつた。

果たして彼らにとつてはどっちの方が救われていたのだろうか？

一概に断定することはできないだろうが、意思を持った行動ができるだけ前者の方が

マシに思えてしまう。

正しい意味での『負としての完成負完成』を成していたら、『普通』を併せ持った『負』としての完成ではない『マイナス過負荷』として『完成』してしまっていたら、私は取り返しのつかない道を歩んでいただろう。

尤も、その頃には取り返しがつかないことをしたことに對する罪悪感なんて消え失せているだろうが。

：『普通』の要素を併せ持つているとはいえ、根本には『マイナス過負荷』を据えている私が『人』に打倒されるのは目に見えている。

だが、誰が私を打倒するのが未だにわからない。

あの話し合いで見当が付くかとも思っていたが、目を付けていた人全員が同じグループにされていたわけではなかったことも、判断を迷わせる一因になっている。

有栖ではプラス異常性が足りない。

彼女になら倒されてもいいと思うぐらい、彼女の人間性が好ましいと思っではいる。だが、悲しいことに彼女に主人公的要素はない。他人と協力することよりも、自分が勝つことにのみ焦点を置いている。

精神性が変化して仲間を作るようになったら案外あつさりマイナス過負荷を倒せるのが彼女

かもしれないが、そうなることは絶望的だろう。

何せ、今までの自分をすべて否定することにも繋がる。彼女が自分の力で勝ちたいと願う以上、私を完膚なきまで叩きのめすことは難しいのではないだろうかと思う。

彼女の人間性に惹かれているが、彼女が勝つためにはその人間性を曲げないといけないというジレンマを抱え込んでいる。

形だけの勝利なら彼女に軍配が上がるだろうが、それは私達が望むものではない。

康平は既にリーダー争いから落ちたことからわかるように、全体的にスペックが足りない。

考え方の違いといってもいいだろう。

より良くすることを求めているこの学校において、現状維持を求める康平の考え方は根本的にかみ合っていない。

特別試験の存在、リーダー当て、優待者指定。

これらのことからわかることは、この学校が停滞よりも変化を望んでいるということだ。現状維持に重点を置くのではなく、現状をより良くさせる変化の方に重点を置いている。

そういう意味では康平との相性は最悪だ。現に最初の特別試験で躓いてしまっている。

これを持ち切ってくれていれば話は別だったが、そもその問題として彼は私と事を構える気はないようにも思える。

私自身も、『愚か者』である彼のことは正直どうでもいい。どちらかと言えば味方ぐらゐの認識だ。

敵対したとしても、完膚なきまでの敗北を私に与えてくれることはないだろう。

茂は『観察眼』は優れているが、真正面から私と敵対する気がそもそもない。

『運命から解き放たれた奴隷』である彼は、私の見立てでは有栖の次に可能性が高そうに思える。

集団意識に流されづらくなつた彼ならば、私が間違っていると自分で感じた時に私を止めようとするだけの『意志の強さ』があると断言できる。

だが、彼はよりによって私に感謝の気持ちを持つている。

縛られた状態から解放したことを、『奴隷』の鎖を嘲笑いながら切つた私に感謝をしている。

鎖から解き放たれたからこそ、<sup>マイナス</sup> 圧制者を倒すことができるが、鎖を切ってくれた<sup>マイナス</sup> 圧制者に忠誠を誓っているのでは論外だ。

一之瀬さんは仲間を率いて立ち向かってくるといふ意味では、一番理想的な形で私を倒してくれるかもしれない。

背中を任せられる仲間を率いて、日常を脅かす侵略者<sup>マイナス</sup>を打ち倒す。

物語の定番であり王道だ。

だが、彼女の仲間<sup>Bクラス</sup>に私<sup>過負荷</sup>を直視できる人がいない。

本人も私を見たくないだろうが、彼女以外の人のスペックが低い。言つては悪いが力不足だ。

まだ彼女の本質に深く触れていないため、予想でしかないと一応付け加えておこう。龍園君はダークヒーロー的なポジションで少し期待していたというのが本音だ。

あの話し合いの時も、最初に噛みついてきただけであとは観察に回っていたことから、やるべきことを行うだけの冷静さと頭の回転の良さを併せ持っている。

惜しむべきところは過負荷<sup>マイナス</sup>を覗き込んでしまった後、私が退席するまでアクションを起こせなかったことだ。今どうなっているかは知らないが、最悪他のBクラスの生徒同様に潰れてしまったのかもしれない。

自力で復帰できそうではあったが、足手まといな他のCクラスのメンバーがいることも踏まえると、彼が私の目の前に相対することはかなり難しいだろう。

一之瀬さんとどっこいどっこいかもしれない。

…一番期待しているのは綾小路君だ。



だが、それと同時に彼にだけは負けたくないと思つてゐる自分もいる。

確かに彼なら私を倒してくれるだろう。非の打ちどころもなく、徹底的に、完膚なきまでに、再起不能になるまで、二度と齒向かう気を起こさないぐらいにボコボコにしてくれるだろう。

彼にはそれを成すだけの実行力、行動力、決断力、それと何よりも大切な『運命力』を持つてゐる。

しかし、彼と敵対する場合、彼のキャラクター性から考えると仲間なんて必要なく私を潰すことだけを考える。

仲間の存在を否定して、<sup>マイナス</sup>私を否定する。

そんな決着は付けたくない。

それじゃあ、<sup>マイナス</sup>過負荷の勝負の結果として認めたくない。

あの生徒会長と裸エプロン先輩の一戦のように、仲間を後ろを押しされながら<sup>過負荷</sup>打ちのめす様を見たい。

それでこそ、<sup>マイナス</sup>過負荷の敗北を飾るには相応しいものになるはずだ。

…ああ、結局私は<sup>マイナス</sup>過負荷として負けたいだけなのか。

<sup>マイナス</sup>過負荷を名乗る以上、下手な負け方をしたくない。

『負完全』を模した『負完成』を自称する以上、あの先輩みたいにカッコよく負けたい。

……そのためにはいつまでも彼の真似をするだけではやっぱり駄目だろう。

彼を意識すると過負荷マイナスとして話すときに非常に楽だったし効果的でもあった。

だが、自分らしさを作るために少しずつ変化をつけて私なりの形にする予定だった。

さっきの一之瀬さんとお話の時も、意識して少しずつセリフに変化を付けてはい

た。

だがそれだけだ。

文字にしないとわからないようなものもある。その程度の変化しかつけれないのだ。

比較対象を知らない彼らだからこそ効果が表れているが、球磨川先輩を知っている人からすれば私の発言は彼の顔に泥を塗りつけるような侮辱にもなっているのかもしれない。

だからこそ、私の個性マイナスにオリジナリティを作る必要がある。

私と彼は文字通り人が違う。キャラクター性マイナスという共通点はあれど、別人であり他人だ。

……そう思っているでも過負荷マイナスに身を委ねると自制が効かなくなる場合もある以上、どうしようもないのかもしれない。

そう自嘲し、深く考えれば考えるほど堂々巡りになりそうな気がしたので思考を切り替えることにした。

ベッドに上を横に転がり、枕に顔を埋めながら今回の試験について振り返る。

枕に顔を埋めたことで自然と視界が真っ黒く塗りつぶされる。より深く思考を潜らせられるような気がした。

本来の二回目の特別試験の目的は、新しく私の味方になったとも言える茂がどこまで使えるのかを確かめるものだった。

それと同時にAクラスのポイントを減らしすぎないようにする目的もあった。しかし、こっちは有栖がいるため、それほど重要視していなかった。

ところが、蓋を開けてみれば茂の活躍する場を奪ってまで、Aクラスのポイントを保つ結果になってしまった。

試験の都合上、茂がどうするのかを間近で見れなかったという理由言い訳がある。

試験のグループ分けでエリート集団の中に入れられてムカついたということも理由ではある。

だが、一番の理由は有栖と一対一で話し続けたことで彼女に勝ちたいとより強く思ってしまったことだろう。

彼女が負けられないようにするために、Aクラスのポイントを多く確保したいと思つてしまった。

…危ない橋ではあつた。

いや、結果が出ていない以上まだ渡っている途中なのかもしれない。

しつかりとした法則性を見出したことを踏まえると、外していることはあり得ないと思う。だが、マイナス私という要素を抱え込んでしまつているため万が一という可能性も…いや、有栖が答えを導き出して回答を送つたことを考慮すると万が一もないだろう。

彼女は思考能力に能力を全振りしたような『スペシャル特別』だ。

彼女の土俵で試験を終わらせた以上、マイナス私ぐらい呑み干してくれないと困る。

そうでなければ、私が彼女に勝負を挑んだ意味が薄れる。

彼女が過負荷マイナスに一方的に潰されるような、辰グループのBクラスの彼らみたいにならなければ、私私が彼女に勝負をする意味なんてない。

過負荷を知つてなお、真正面から立ち向かう姿に惹かれたのだ。

そんな彼女に勝ちたいと思つている自分がある。

その一方で、そんな彼女になら倒されたいとすら思つてしまう自分がある。

だから、彼女の『強さ』を汚さないために彼女に強く在ってほしい。我儘なことは理解している。

それでも、強い彼女にこそ勝ちたい。

彼女が勝つのであれば、今の在り方のまま私を潰せるぐらいの強さプラスに成長してほしい。

…今考えると、綾小路君もしかしたら有栖と似たような在り方なのかもしれない。本来の意味での仲間を作ることはなくとも、周りを利用し邪魔するものを排除する在り方。

『運命力』がある分、有栖の上位互換とも言ってしまう可能性まである。

だが、私はまだ彼を深く知らない。

話した回数は片手で足りる回数しかないし、彼の心に触れるようなことをした覚えもない。

『主人公』に目を付けられたくないという理由で避けてきたこともある。

そう考えると断定するには材料が不十分で、私が勝手に考察してる内容も大幅に異なっているものなのかもしれない。

彼のことを『原作知識』なるモノで知っていたとはいえ、私が知っているのは『1巻』

の大体の内容とアニメがあつたことぐらい。

それも友人に勧められて読んだだけで、そこまで読み込んだわけではない。

彼に対する考察も、前世での友人に聞かされた情報を基に組み立てているものが多くを占めている。

できることなら、敵対しないで彼のことを詳しく知りたい。

だが、Dクラスの彼と仲のいい堀北さんやクラスの中心の人物である櫛田さんと平田君が今どうなつてゐるかを想像すると、綾小路君と仲良くするのは難しいと容易に想像できさる。

これで彼がクラスメイトを完全に切り捨てるようなことをするのであれば話は別だが、利害関係を考慮してもそれはないだろう。

彼自身の学校生活の送り辛さにも直結することだ。

：今考えても仕方ないことか。

試験が終わつたことで状況の変化があるかもしれない。

夕食の時間には早いですが、そろそろどのクラスが優待者を当てたか調べている人が出てもおかしくない。

ふと時計を見ると、あのアナウンスから既に2時間が経過していた。

情報収集をするために船内をうろつくにはいい時間だろう。あのアナウンズで正気に戻った人もいれば、あのアナウンズのせいで混乱している人もいるはずだ。

それが落ち着きつつある時間、現状に気付いて対抗策を練ろうと動くなら、この時間あたりになるだろう。

一つ溜息を吐き、脱ぎ捨てた制服に再び袖を通す。

起き上がるついでに、ベッドの脇に転がっているペットボトルを一つ取って中身を飲み干す。

ぬるくなって炭酸ガスがほとんど抜けた甘ったるいサイダーの味が、今の私を表しているようにも思えた。

炭酸が抜けて、甘さ<sup>普通</sup>だけが残っている。しかし、何処か口の中で弾けるような感触が残ることが、これが炭酸飲料<sup>過負荷</sup>であると認識させる。これが炭酸<sup>過負荷</sup>が強すぎると飲みやすい<sup>人と接しやすい者</sup>物とはかけ離れる。

『負完成』と言っているものの、頭から尻尾まで『過負荷』と言い切れない私を表すのには相応しいように思えてしまった。

そんな思考を振り払うかのように、私は空になったペットボトルをごみ箱に投げた。

空のペットボトルがゴミ箱にぶつかる音が、虚しく響いて部屋の中で反響する。私が投げたペットボトルは当然の如くゴミ箱の縁に当たり、ゴミ箱の中に入ることなく部屋

の床とぶつかって空しくカランコロンと音を立てる。

その空虚な音が、私が忘れようとして見ていなかった『現実』を思い出させた。

今まで考えてこなかった見方の『現実』。『俺』との対話を通じた今だからこそ、考えなければならぬ『事実』が、私の深い思考の海に埋めていた『考え<sub>マ</sub>たくない<sub>イナ</sub>こと<sub>ス</sub>』を掘り返した。

それに気づいてしまった私は部屋を出ようとしていたにもかかわらず、金縛りにあつたかのように動けなくなってしまったのだ。



## 31話目 特別試験Ⅱ 二日目

竹本茂は苛立っていた。

原因は自分でわかっているが、それでも収まりがつかないのが人間の感情というものだ。

強く足を踏み鳴らして階段を下りる様が、彼が如何に苛立っているかを物語っている。

豪華客船の中とはいえ、蒸し暑い真夏の朝で否応なく汗を掻くことを強制させられていることも、イラつきの一因になっている。どちらかと言えば暑がりな彼は、移動のために船の中を歩いているだけで少しずつ汗を流していた。

だが、一番の原因は彼の友達である零が廃人になってしまったかの如く、放心状態になつたままでいることだ。

昨日、説明が正しいのであればAクラスが他クラスの優待者全てを指定する形で終了した。

それに対して前に言っていたこと余りにも違う結果になつていたことに、文句の一つでも言いに行こうと思つて部屋に戻つた。

事情が変わったのだらうということは予想していたし、完全に言ったようになるとは限らない。だが、幾ら何でも言っていたことと行動が変わりすぎていると判断した。説明していたのは葛城と坂柳の両名だが、その裏に同じグループであつたあいつの手があることは明らかだつた。

そうじゃなければ、あの二人がここまでスムーズに連携を取れるわけがない。

方向性が真逆の二人を相手の意見をすり合わせる事ができる人材は、今のAクラスには小坂零しかない。

本人は自覚していないが、Aクラスで一番危険な人物であると同時に一番厄介な人物でもあるのが正しい見解だ。

坂柳有栖 葛城康平  
最強の矛と最強の盾。

そのままではお互いに壊しあうだけだが、使い分けをしっかりと行うことでその良さが引き出される。

今それができる人は小坂零しか存在しないのだから、茂が零に文句を言いたくなるもの当然だ。

記念すべき初仕事、と思つて意気込んでいたのに仕事を頼んだ本人から水を差されたのだから。

乱暴にドアを蹴り開け、烈火の如く渦巻くこの苛立ちをぶつけようと部屋を見渡し

た。

しかし、そこで待っていたのは部屋に据え付けられているゴミ箱とその隣に落ちていたペットボトルを見つめたまま、思考の海に潜り切って戻ってこない彼の姿だった。

『小坂零』の癖として、考え事をする时无意識に生活行動をする癖がある。

考え事をしたまま買い物に出掛けたり、考え事をしたまま授業を受けたり、前に茂が彼の部屋に行った時には考え事をしたまま料理していることもあった。

この時の彼は、大抵声をかけるか体を揺ると正氣に戻るのだが、今回はそれをしても思考の海から戻ってこなかった。

戻ってこないにもかかわらず、焦点の合わない目で食事を取り、風呂に入り、着替えをして床に着く様はまるで『生きる意味を見失った奴隷が仕方なく生命活動をしているように見えた』。

それが竹本茂は気に食わなかった。

自分に『眠れる奴隷』と言っておきながら、『竹本茂』という個人を開放しておきながら、自分が畜生のようにただ生きていくだけの状態になっていることが気に食わなかった。

自分の見ようとしなかった部分を直視させて、目を覚まさせる。

自分の負の面を曝け出させて、それを受け入れてくれる。自分よりも下がいることを証明してくれる。

意識してはいないものの、その安心感こそが竹本茂の求めているものなのかもしれない。

宿題を忘れたときに他の人も忘れていることを期待するように、一人では犯罪をする気になれなくても友人たちと行動することで万引きをする子供のように、自分と一緒に墜ちてくれる存在という者は人間には甘すぎる毒だ。

だから、彼は零に対して過度な憤りを感じているし、謎の焦燥感にも駆られている。

だが、彼は自分のダチが勝手に満身創痕実質戦闘不能になつていふこと、『竹本茂』という個人を引きずり出して自分の憤りを受け止めてくれた本人が以前の自分と被つて見えてムカつている……としか思っていない。

他人を観察することに長けている彼だが、自己分析は専門外だ。

一晩すれば元に戻るだろうと思つていたが、目を覚ました小坂零は再びベッドの中に潜つて出ようとしなかつた。

その時に確認した目が昨日と同じように焦点の合っていないものだったことから、茂は零が思考の海から帰つてきていないことを察した。

それを察した時に教員を呼ぶことも考えた。しかし、彼はAクラスが試験を終わらせ

たこととBクラスの担任である星之宮先生が保険医であることを考えると下手なことをするべきではないと判断した。

相部屋の吉田にも彼は口止めをした。

下手なことに巻き込まれたくないタイプ：典型的な『眠れる奴隷』流されやすい人とも言える吉田は彼の言うとおりに頷いた。

足を踏み鳴らしながら廊下を歩くが、それを気に留める人は辺りに誰もいない。

彼は、自分でそう判断してしまったことが彼のストレスの一因になっていることに気づいていない。

友達を危険な目に合わせたくないから、自分が協力する。

以前、小坂零が大きな事故に遭って消息不明になった時にAクラスを立ち直らせたのは彼だった。立ち直らせた彼だからこそ、同じ目に遭ってほしくないと思つた。

『竹本茂』という人間に持つ善性プラスは小坂零マイナスに引つ張られていたとしても、その在り方が変わりきつてはいない。

だから、自分のダチである零を放心状態のまま放置しておく判断を下した自分自身に嫌悪を表していることを、彼は自覚していない。

頭に血が上っていること、冷房が要所要所で効いているとはいえ夏場で蒸し暑いこ

と、まだ起きて30分も経っていないことが、彼に一步引いた状態で見ることの重要性を忘却させていた。

茂は、それを重々承知していた。

自分が冷静ではないことも、頭に血が上っていることも、顔を洗った程度で冷静さを取り戻せていない事実も、もしかしたらあいつが一生このままなのかもしれないという恐怖感も、理解していた。

その上で、とりあえず落ち着くために朝食を食べることにした。

血糖値が下がっている状態では碌に思考が回らないことを知っている。

目を覚ますために、アイスコーヒーの一つでも飲みたいと思っていた。

普段はシロップとミルクを入れるが、目を覚ます意味合いを込めてブラックで飲んでみよう、そんな他愛もないことに思いを馳せることで落ち着こうとしていた。

気分を切り替えつつ足取りを軽くしながら食事に向かう彼は、だんだん本調子を取り戻しているようにも見えた。

彼にとって不幸ともいうべきことは、マイナス過負荷と仲良くしてしまったことだろう。

その在り方に多少なりとも影響を受けてしまつてゐる彼は、過負荷讓りの不運に見舞われることになる。本人が過負荷じゃなくても、小坂零と関わつてしまつたことで在り方に多少の影響を及ぼしているのだ。

端的に言うとながが朝食を食べに行つた先で、坂柳、葛城、一之瀬、神崎、龍園、伊吹、綾小路、堀北、平田といった一学年主要メンツ勢ぞろいの場面に出くわさなければ、彼はそのまゝ目的を達成できただろう。

最初はDクラスの綾小路清隆と堀北鈴音と平田洋介の3名が、朝食をとるついでに今後の特別試験について話し合うところから始まつた。

昨日のことがあり、当初塞ぎ込んでいた堀北は綾小路に挑発されるような形で触発され、かろうじて復帰することに成功していた。

過負荷の闇を主人公が晴らしたのだ。

人心掌握に長けた主人公は、メインヒロインのアイデンティティを刺激することで、

彼女らしさを取り戻させていた。

Aクラスを目指すということ、『Aクラスの1人に躓いているぐらいではどうしようもないこと』、自分がどうしたのかということ、あいつに負けたままでいいのかということ。

人間ドラマのお手本のような、喜劇笑い話がDクラスの一部でひっそりと生まれていたのだ。

それは『めだかボックス』の世界で、久しぶりに再会した球磨川禊に震える人吉善吉に黒神めだかが手を肩におき庇った時の構図にも似ているかもしれない。

竹本茂と小坂零の間にある『自分より下がいることを教えてくれること』によって得る『安心感』とは違う、『自分自身の強さを気づかせてくれること』で得る『安心感』をもたらしていた。

だが、次に真正面から相対した時に同じ状態になってしまった場合、彼女は自分自身で過負荷マイナスから抜け出す必要があるだろう。

Aクラスに上がりたいと思うのであれば、避けては通れない壁だと認識しているが故に。

昨日の話し合いで一番感じた、『この学校で一番危険な人物足る小坂零』に負けてはいけないと思っっているが故に。



仲間に背を押されたとしても、自分の力でもって勝たなければいけないことを彼女は重々承知していた。

彼女の斜め前に座っている青年も、同じく綾小路主人公によって立ち直った一人だった。相部屋だった平田洋介は、彼に関する重要なアイデンティティを共有することで立ち直らせた。

昔、いじめられていたクラスメイトを助けられなかった彼の負マイナスの側面。ある意味、人生のどん底に突き落とされた事件。誰にも言う気ナシのなかったそれを、彼は綾小路に吐き出していた。

それを受容して、受け入れて、共感した。  
それだけで彼は救われた気分になったのだ。

いい意味では誰とでも、悪い意味では深い友達が少ない彼の闇マイナス：小坂零マイナスによって引きずり返された闇マイナスを受け入れた。

声を荒げた、殴りかかった、泣き喚いた。

言葉を返した、手を掴んだ、黙って聞いていた。

それを乗り越えた先に、奇しくも小坂零マイナスのおかげで彼らの友情は深まった。

正しい意味で『友達』と言えるような関係が生まれたのだ。

そんなこんなで、立ち直った、立ち直らせた3人が頭を抱えることになったのが、昨日の試験終了のアナウンスだった。

正確には3グループだけ試験を続行しているが、どこのクラスが試験を終わらせたのかがわからない。

Dクラスで平田の元に名乗り出た優待者がいるグループは、全て試験が終了していることからDクラスの優待者が指定されたことは把握していた。名乗り出た人数は3人であったことから、これで全員だろうと判断。

試験が急に終わってしまった驚きで、Dクラスの優待者の二人は平田にその心情を漏らしていた。

彼らの振る舞いのせいで優待者だと判明するには、一回の話し合いでは難しいだろうとフォローを入れた。その後に大きな反応はなかったことから、納得してくれたと判断した。

だが、ここで一番知りたいことは試験が終了していないグループの優待者がどのクラスに所属しているかということだ。

自分のグループの優待者が同じクラスの場合、回答を送っても試験を終了させることはできない。

優待者の数が1クラス3人で4クラスだから12グループである。

これは試験の公平性を考えると当然のことだ。優待者の数が偏っていることはあり得ない。

だから、残った3グループの優待者は1つのクラスで固まっているはず。

逆に、優待者が当てられているクラスは優待者を指定して回答した『容疑者』から外れることになる。

ただでさえ、——150ポイントが確定してしまっている。

残ったクラスの優待者を全て当てても±0。

だが当てなければ、他のクラス全ての優待者を当てたであろうクラスが450ポイントを得ることになる。

残りの優待者を、少なくとも誰かが全て当ててくれれば300ポイント得られるだけで済む。

差としては450ポイントで変わらないが、何もしなければ600ポイント差をつけられることを考えると他のクラスと協力してでも残りの優待者を当てる必要があった。

問題は、優待者を当てられるのが早過ぎたことだ。

話し合いも一回しか行われず、大半の生徒は何が起こっているのか理解していない。

理解していないからこそ、試験のことを忘れるかのように振る舞っていた。

事実上既に試験を終了した他の生徒たちの大半はバカンスモードに逆戻りしている。

まるで試験なんてなかったかのように、3グループだけ試験が終わっていないことを忘れていくかのような雰囲気になっていた。

バカンスが急転し試験に変わったと思いきや、突然試験が終わったのだ。

事故に遭ったみたいなものだと、まだ期間があるのだから遊ばなければ損だと、特別試験なんて自分には関係ないと、目の前の娯楽に飛びついてしまうのも仕方ないといえ  
ば仕方ないのかもしれない。

残った3グループだけ話し合いの時間があることを、かわいそうに言う声が聞こえてくる始末だ。

「俺たちは試験が終わったから遊ぶぜ、お前まだ終わってないんだろ？ 頑張ってくれよな！」

彼らの会話の裏には、そんな言葉が見え隠れしていた。

何も事情が分かかっていないのに、現実を見ようともしないで責任だけを押し付ける。

実に人間らしくて、愚か者なのだろう。

だが、それを弾劾するのは酷だろう。

自分たちでさえ、どこのクラスが優待者を当てたのかわからないのに他の生徒たちに協力を無理やり取り付けることは不可能だ。

ふと視線をずらすと、一心不乱に友人たちと遊んでいる櫛田の姿が見える。

それは、何かを振り払うかのように、何かを忘れようとするように、何かを見ないようにするためにも見えた。

恐らく彼女は昨日のことがまだ抜けていないのだろう。

堀北と平田の二人は、彼女が化け物小坂零に真正面に立たれて話を振られていたことを思い出した。

幸いなことに主人公綾小路と話しあいの末復活できた二人とは違い、不幸にも自力で過負荷マイナスを振り笑うしかできなかつた彼女は現実逃避をしていた。

最悪、化け物小坂零のことを忘れている可能性もある。

危険な記憶と処理して、忘れ去っていたとしてもおかしくない。

それは奇しくも、化け物小坂零の過負荷マイナスとしての本質を表した結果と酷似していた。

本当ならば彼女を助けるべきなのだろうが、今無理に問題を掘り返すと最悪な結果になりかねない。

それを危惧した彼らは何もしなかつた。

強いて言うなら、目の届く範囲で小坂零と合わせないようにするぐらいだが今のところ目撃情報はない。

あれだけ動いたのにもかかわらず、何もしてこないことが返って不気味さを醸し出していた。

そこで、堀北はふと思いついた。

いや、思いついてしまったともいえるかもしれない。

「…考えたくないことだけど、辰グループの話し合いでAグループの彼が私たちを潰そうとしたのは副次的なものだったのかもしれないわね」

「副次的なこと？ 本命は違ったということかい？」

平田がそう言うと、綾小路が彼女の考え付いた可能性に辿り着いた。

「…リーダー格が集まっている辰グループ全体を叩くことで、優待者に探りを入れることを遅らせたってことか」

「Aグループが優待者を指定したという判断材料がないから説得力には欠けるけど、もしもそうだとしたら彼は相当な強敵になるわ」

「真正面から人の心をへし折りに来るあれを、戦略兵器として扱うことができるってことになる…」

「ええ。核兵器を自由な範囲で操作できる…そんな存在だとしたら、間違いなく彼を何とかしないことには私たちが上に上がることはできない」

そう言つて優雅にコーヒーを口に運ぶ彼女だが、手元をよく見ると少し震えているのがわかる。

「…だけど、葛城君と坂柳さんは小坂君の行動を予想していたようには見えなかった。どつちかつて言うのと、想定外の行動をとつていて苛めるようなことを、葛城君が言つていたよ」

「それを考えると、Aクラスでも小坂を制御出来ないのかもしれないな」

「…確かにその通りね。でも、坂柳さん…だったかしら？ 彼女は彼の行動を止めようとはしなかったわ。Aクラスのリーダー格二人が、彼を止めようとしていれば彼も一度足を止めて考え直したかもしれない」

「なるほど…坂柳さんが優待者を見つけていて小坂君と手を組んでいた。葛城君はAクラスのリーダー格ではあったけど、それを知らなかったという可能性もあるね」

「葛城と坂柳は対立しているんだつたな。それを考えると、小坂は坂柳に肩入れしているということにもなるかもしれない」

「ただ、坂柳さんも小坂君に手を拱いているような素振りも見せていたんだ。それが今引つかかつて…」

「完全に掌握しているわけではないのかもしれないわね」

「そもそも、Aクラスが優待者を指定したわけじゃない可能性もあるしな。BクラスかCクラスが小坂を見て、優待者を急いで指定した可能性もある」

「でも、それだったら辰グループだけを指定するんじゃないかな？ この短時間で優待者に法則性があることを見出して、それを裏付ける何かがないと9つのグループの優待者を指定するのは無謀だよ」

「でもCクラスの龍園なら、それをしてもおかしくはない」

「前回の特別試験でも奇抜な作戦をとっていたことを考えると、ありえなくはないわね」

「…その龍園君も、辰グループの話し合いでだいぶ参っていたみたいけどね」

あーでもないこーでもないと言いながら、コーヒを飲みつつ話し合う。

いかんせん、判断材料が少なすぎた。

話し合いが一回しか行われず、それも半ばテロにも近い事故で機会を奪われ、たった一人が話し続ける『演説』に早変わりしていた二人。

Bクラスのリーダー格である一之瀬が、話し合いの土台を作って終了した綾小路。

彼らの手札は、『Dクラスの優待者がいるグループの試験が終了したこと』ぐらいしか、明確には存在しなかった。



そんな彼らに手を差し伸べたのは、意外な人物たちだった。

「辛気臭い顔してるな鈴音、今日は金魚の糞が二人もいるのか？」

「言い方が悪いよ龍園くん。やつほー、綾小路くん。ちよつと話したいことがあるんだけどいいかな？」

そこにいたのは、龍園、伊吹、一之瀬、神崎といったBクラスとCクラスの中心ともいえる人物たちだった。

かくして、ある意味たった一人の人物の手によって『Aクラス対B、C、Dクラス連合』の構図が完成した。

この特別試験中だけのこともかもしれないが、それは理想的な構図でもあった。

追<sup>他</sup>うもの<sup>ク</sup>と追<sup>ア</sup>われる<sup>ク</sup>ものが<sup>ラ</sup>明確<sup>ス</sup>になった瞬間でもあり、頂<sup>ア</sup>点を<sup>ク</sup>引き<sup>ラ</sup>ずり降<sup>ス</sup>ろすために一時休戦を結んだ瞬間だった。

Dクラスの3人に合流した彼らは紆余曲折あつて正気を取り戻した後、アナウンスが

あったクラスを確認して自分のクラスの優待者がいるグループの試験が終わっていることを確認した。

そして、どのクラスが優待者を指定したのかを探るべく、他のクラスに探りを入れに来たところ真っ先に鉢合わせたのがBクラスの一之瀬、神崎ペアとCクラスの龍園、伊吹ペアだった。

最初は牽制しあっていたものの、小坂零<sup>レ</sup>を思い出して嫌な予感を直感的に感じ取り一時休戦。

Aクラスが怪しいと感じたものの、Dクラスの方から先に状況を見てみようと思いを一致させていたところで彼らを見つけた。

その後、3クラスそれぞれで、それぞれのクラスの優待者が選ばれたメール画面を共有。

消去法でAクラスの優待者が残っているグループだけが、試験を続行していることを確認した。

自分のクラスの優待者が誰かを明かすことはしなかったものの、Aクラスが明確な敵だと証明することには成功していた。

優待者を通知するメールはほんの少しだけだが、文面がそれぞれ異なっていることから各クラス3名優待者が存在し、どのグループに所属しているかを確認した。

偽装したメールを作っているのなら話は変わるが、昨日の辰グループの惨劇を知っている人間がAクラスの有利になるような真似をすることはないと一種の信頼の元で情報共有を行っていた。

そんな中でも、彼らを気に留める生徒は一人もいなかった。

Aクラス以外の3クラス代表者とも言える人物が集まっているにもかかわらず、自分にはそんなこと関係ないとばかりに関わろうとしない。

それは生徒である彼らにとつても、話し合いをしている彼らにとつてもこの特別試験が既に決着のついたものであることを表していた。

彼らがどんなに頑張っても、彼らがどんなに知恵を振り絞っても、彼らがどれだけ嫌な思いを抱え込んで協力関係を結んだとしても、Aクラスが送った回答を書き換えることはできない。

この場での代表格である彼らは、この試験において圧倒的に負けた者<sup>マイナス</sup>だった。

## 32 話目 特別試験Ⅱ 二日目Ⅱ

近くの机を寄せて7人全員が座った。

Dクラスの3人が固まり、残りの4人が同じ机を囲んでいるが椅子の向きはDクラスの彼らの方を向いている。既にあたりに人影はない。

先ほどまで周辺で談笑していた生徒たちは、朝食の時間にもかかわらず、カフェを出て行ってしまった。

まるで、彼らの出す異色な雰囲気呑まれたくないかのように去っていった。

それは遠回しに、どこかが終わらせてくれたことを掘り返すなよと言外に言っているようにも感じるものだった。

だが、ここにいる人間はそれが許される立場にないものが殆どだ。

Bクラスの委員長『一之瀬』、その補佐の『神崎』。

Cクラスの独裁者『龍園』、その側近とも言える『伊吹』。

Dクラスの代表格の一人である『平田』、下剋上を志す『堀北』。

約一名、乗り気ではなく逃げようと思えば逃げられるものの、それをしていない『綾小

路』。

Aクラスを打倒せんとばかりに集結した彼らだったが、明確に増えた手札は『Aクラスが優待者を指定したこと』『各グループの優待者がどのクラスか』ということぐらいだった。

前者は明確な敵ができたということ、それを打倒するために共闘することを目標に掲げるものとして十分だった。

後者は、優待者に法則があると仮定した場合にAクラスの優待者を探すことに役立つかもしれないぐらいだった。

しかし、Aクラスは良くて自分のクラスの優待者だけで、最悪自分のクラスの『自分の派閥』の優待者だけで法則性がわかっていいる可能性がある。

ここにいる者の多くは、Aクラスの内情をほとんど知らないでいる。

知っていることは、葛城派と坂柳派で対立していること、葛城が保守派で坂柳派が過激派だということ、現状での最終的な方針を決めるのは葛城派であること、Aクラス全体の方針を決めるのは葛城であるが故に今回の話し合いでほとんどのAクラスの生徒は自己紹介以外で黙り込んだこと、そして小坂零に関わってはいけないこと。

表面上からわかることは、これぐらいしかなかった。

それも、内部情報が表面化しているものを読み取っているだけで探りを入れることができていない。

これは、探りを入れようとしなかったのではなく、探りを入れたけど何の成果も得られなかったからだ。

Dクラスはそれどころではなかったため行っていないが、BクラスとCクラスは頻繁にAクラスの内情を探ろうと動いていた。

その背景には、あるAクラスの人物が図書館で起こした事件による影響がある。

龍園自身はそれほど気にしていなかったため、ちよつかいを出す程度に留めていた。

一之瀬は現場を見てしまったせいで彼を間接的に操作するためにも、Aクラスの動向を見張ることを試みた。

しかし、それぞれの代表格である人物が直接探りを入れに来た場合、どう考えても相手は警戒する。

そのため、比較的目立ちづらい人間を使って探りを入れさせたのだが、全くと言っていいほど成果は出なかった。

最終的には龍園はそれと並行してDクラスに仕掛けたため、一之瀬はそのDクラスを助けるために動き始めたせいで大したこともできないまま終わってしまった。

これの原因は、Aクラス内にて好きに動いていいと認められた坂柳派が主な原因と

なっている。

坂柳の指示により、あなたが下手なことを言うのとAクラスに被害が出るかもしれないことをわかっていますよね？ という旨を葛城派中立派のそれぞれに遠回しに伝えるということを行った。

その結果、中立派は自らが火種になりたくないがために、葛城派は坂柳派に弱みを見せて葛城を困らせたくないがために、表面上は反発しつつも結果的に坂柳の思い通りに動いていた。

そのおかげで、1—Aの生徒全員がクラスの話題が出た時に話を逸らすという技術を取得していた。

若干一名それを取得していないものもいるが、彼は他クラスとの関わりが少なかつたこと、彼の出す雰囲気が無意識に人を避けさせることから、彼を通してAクラスの内情を探ろうとする生徒は一人もいなかった。

一度釘を刺されたこともあり、普通の状態なら自分からその話題を出すようなことをすることはない。

しかし、彼が普通じゃない状態のときに漏らした言葉を、傷心の身でありながらきちんと聞き取っていた者がここにいた。

「Aクラスが優待者を指定したのはわかったが、葛城が果たしてそれを許可するのか？」  
「坂柳派の独断ということもあるだろう。坂柳が恐るべき頭脳の持ち主でAクラスを完全に掌握している前提ではあるが……」

「さてよ。そもそも前回の特別試験の結果を踏まえて、坂柳が黙っていると思うか？」  
龍園の言葉でその場にいた者の大半が考えを修正し始めた。

坂柳は表立って出てくることは少なかつたものの、彼女の派閥の言動からもAクラスのリーダーを狙っていることは明らかだった。

「今回の試験、最初からあいづらはグルだ。これは確定事項だろ」

「……葛城を矢面に立たせて、小坂を時間稼ぎに使って、坂柳が優待者を割り出して狙い撃ちした……」

「金魚の糞にしてはよくわかつたじゃねえか」

不敵に笑う彼の笑みが、普段なら周りを苛立たせるそれが今はずいぶん頼もしく思える。

そんな感想をこの場にいる全員が抱いた。

そして、彼の意見を裏付けるように積極的な話に入ってこなかった一人が口を開く。

「……龍園くんの話で多分あつてと思うよ」

その言葉の主に、彼らは驚きつつも視線を送って次の言葉を促した。



「言おうかどうか迷っていたんだけど、昨日小坂くんとちよつと話したんだ」

そういうと同時に、彼女は顔を俯かせた。

それで何があったのか容易に想像がついてしまう。

「…やろうとしたことは良くないことだつて思つてる。話し合いをする特別試験で、話し合いに参加しないでほしいって頼もうとしたんだからね。結局、彼に良いように流されて危うく10万Prを渡すことになりそうだったけど、アナウンスが入ったから中止になつたんだ。」

その時に彼が言っていたんだけど、『有栖が優待者を決め打ちに行こうとしていたことも、康平がそれにGOサインを出したことも、Aクラスが話し合いそのものをしようと思つていなかったことも、ゼーンぶ私は知らないよ』つて言っていたよ…」

言い切つた彼女は乗り切つた後にもかかわらず、思い出しただけで憔悴していた。

それだけで、彼女が言わなかった部分に何があつたのかをここに全員が察した。

直接彼の『演説』を聞いたことのない人物もいるが、彼女は龍園伊吹渚を見てそれがどれぐらいのものだったかを既に察していた。

「…その話が正しいのなら、やっぱりAクラスのトップは協力体制を築いていることになるな」

「ええ、表面上は争っているように見せかけて本命はしつかり狙い撃つ。そんな体制を

既に築いているのだとしたら相当厄介になるわね」

「いや、そういうわけじゃねえ。あくまで今回の特別試験だけか、坂柳が葛城を完全に利用しているかの二択だ。これが続くことはねえよ」

その言葉に会話を見守っていた平田と伊吹の二人は首をひねったが、残りの人間はどういうことかをそれだけで察した。

Bクラスの二名が、龍園の言いたいことを代弁するかのように口を開く。

「…葛城は前回の特別試験で失敗している」

「今回は期間が開いてなかったから前回から引き続きリーダーとして出てるけど」

「この特別試験…いえ、この旅行が終わるまでつてことね」

「そういうことだ鈴音。俺は最初、Dクラスの仕業かと疑った。前回の特別試験のことがあるからな。裏で動いていた…黒幕Xと呼称するか。そいつの仕業かとも思ったんだが、それにしても早すぎる。」

Dクラスが全体でまとまっていけないことは見てわかる。9つのグループ全部の優待者を指定するだけでも一苦労だろ?」

龍園の言葉に苦い顔をする平田と堀北。

彼の言う通り、平田は女子と仲がいいが男子に妬まれてる節もあり、女子の相談を聞くことも多く特別試験がこのまま続いていた場合、優待者どころではなかった可能性が

高い。

対して堀北は、自身の性格上女子とも男子とも仲が良いとは言えない。

「今回の特別試験の終わり方は異常だ。話し合いが終わって3時間もしないうちに大勢が決まった。俺の見立てだと、Aクラスは話し合いの前に既に優待者を見つけてるぜ」「……じゃあ、あの話し合いは本当に意味がなかったってこと？」

「いや、あの話し合いで優待者を見つけ出してあいづらよりも早く回答を送れば良かっただけだ。それができなかつた。それだけだろ？」

それだけ。

それだけのことができる人間が、果たして何人いるだろうか？

龍園の言葉は正鵠を射ていたが、それとほぼ同じことを実行できるような人物がいることに、ここにいる全員が驚きを隠せていない。

「だから坂柳は最後のご馳走に持つてくるつもりだったんだが、まさかここまで手早く動いてくるとはな」

正直予想外だったと、言外に言っている彼の様子に全員が納得したような感覚を覚えた。

龍園の推理を聞いて、BクラスとDクラスの彼らは、盲目的ではなく客観的な分析ができる上に予想よりも頭の回転が回るCクラスの独裁者に戦慄していた。

その中で、新たに登場した人物が拍手で彼を称賛する。

その拍手の音の元に彼らが視線を向けると、そこには杖を持ちながら彼らに拍手を送る坂柳の姿があつた。

彼女の付き人らしき女子生徒と、葛城もその隣に立っている。

だが、拍手をしているのは坂柳だけで、勝者である彼女からの拍手は未だに足掻き続けている彼らにとつては屈辱感を味合わせるものにも思えた。

「流石です、龍園君。答え合わせに来たわけではありませんが、素晴らしい洞察力と思考力をお持ちですと称賛しましょう」

「坂柳と葛城か。もう一人のそいつは、お前の手下か？」

「いえ、彼女は私の補助に付き合っていていただいている方です。私の体の都合上、この船旅に参加するための条件がありましたので、そのの一環ですよ」

彼女がそういうと、隣に付き添っている女子生徒は露骨に顔を歪めていた。

その様子から彼女に付き添ってはいるものの、忠誠心は欠片も持っていないということをおのずと察することになる。

そんな中で切り出したのはBクラスの一之瀬だった。

「…Aクラスの二人は何の用かな？」

「たまたま朝食を取ろうとしたところで面白い方々が集まっていたので、つい声をかけ

てしまいました」

「…できればAクラスの坂柳さんたちが一緒だと話し合い辛いから席を外してほしい。あんまり言いたくないんだけどね」

ストレートに言い放った彼女の言葉で、後ろにいる面々の一部がぎよつとする。

しかし、それに対する返答はとても穏やかなものだった。

「そう長居する気はありませんよ。お邪魔しては悪いと思つていきますので、朝食を買つたら席を外します。神室さん、申し訳ないのですが買いに行つてもらつてもいいですか？」

「…了解」

嫌々ながらもその言葉に従つた神室は、彼らの視線を無視して店に向かう。

「坂柳、あまり不用意な発言はするなよ。彼らがこうして集まつている以上、事情把握をしていることは明らかだが、Aクラスの優待者を当てられる可能性を上げることは避けなくてくれ」

「言われなくてもわかつていますよ。私が彼らにしたいことは謝罪程度ですのぞ」  
「謝罪?」

坂柳のセリフに伊吹がそう零した。

他の人物も、それこそ葛城も謝罪と聞いて首をかしげつつある。

「謝罪というのは、昨日の辰グループでの話し合いのことです」

その言葉だけで、ここにいる人物全員が理解した。

何人かは何かがフラッシュバックするかのようになり、立ち眩みを起こすが倒れる者はない。かかった。

「零君が発言した内容と行った行為によつて、他のクラスの方に迷惑をおかけしたことは既に聞いています。本人ではない私の謝罪では不服かもしれませんが、同じAクラスの一員として止めることができなかつたことを謝罪します。」

申し訳ありません。」

そう言つて彼女は杖を持つて立つたまま、腰を45度曲げる姿勢を取つて謝罪した。

その場にいた全員が息をのみ、周囲に人もいないこともあつて生まれた静寂が、ここだけ同じ船内なのに別の世界になつてしまつたかのような錯覚に襲われる。

そんな時間が2秒ほど続いて、元の位置に頭を戻した彼女は先ほどと変わらない笑顔を浮かべて彼らに微笑んだ。

「同じようなことを絶対に起こさないと断言することは難しいですが、アレを当てにした方針を取るつもりはありません」

「今回の特別試験であいつを利用しておいてか？」

「たしかにAクラスで優待者を指定するための時間稼ぎにも思われたかもしれませんが」

が、私たちにその意図はなかったと述べておきます。アレに関しては、完全に彼の独断でした」

「それに関しては俺も証言しよう。Ａクラス：他のクラスの上に立つものとして、零の」とつたやり方は褒められたものではない」

Ａクラスの二人の言葉は真に迫るものがあり、彼らはそれを嘘だと一蹴することができなかつた。

その彼らの様子に満足したのか、坂柳は既に変える姿勢を見せ始める。

「それではこれで失礼します。今回の試験では接点が少なくなつてしまいましたが、何時か話し合う時を楽しみにしていますよ」

そう言つて彼女が彼らに背中を向けると、珍しく新たに朝食を食べに来た男子生徒が正面に立っていた。

彼女はその人物が同じクラスの『竹本茂』であることを確認すると、笑顔を浮かべて立ち去ろうとする。

坂柳と竹本の仲はただのクラスメイトで収まつたままで、小坂經由で話し合うこともなかつた。

だから、何も言わずに歩を進めようとしたのだが、目の前の彼は道を譲ろうとしなかつた。

「そこをどいていただけませんか？」 竹本君

「…この集まりが何なのかとかはどうでもいいんだが、ちよつと坂柳さんと葛城君に聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「今ここでですか？」

少し言葉に棘があるように聞こえる彼の言葉は、他の人たちを心底どうでもいいと思っっているように思わせた。

彼に対して坂柳がそう言うのと、彼女の後ろにいる生徒を一瞥した竹本は首を横に振る。

「…いいや、朝食を取りに来た後に連絡を入れて話そうと思っていたから、別にここじゃなくてもいい。他のクラスの主要人物も揃っているから、あまり話す場所には向いていないだろうしな」

「理解が早くて助かります。私の部屋で葛城君とお話する予定でしたので、ご一緒によければ」

「じゃあそれで頼むことにする。葛城君、坂柳さんの部屋番号個人チャットで送って置いてほしいんだが、いいか？」

「了解した。今のうちに済ましておこう」

そう言って葛城が携帯を取り出して、直ぐに慣れた手つきで操作をする。



その指が止まったあたりで、二人分の朝食を買った神室が戻った。

彼女が来ると同時に、再度残った生徒に一礼して坂柳と神室と葛城の三名はその場を後にした。

残った彼らの間で気まずい沈黙が生まれる。

だが生まれたのは一瞬で、竹本は彼らを見下ろすかのように一人一人の顔を確認してから、朝食を買いにその場を去った。

Aクラスの全員がいなくなったところで、話し合いが再開する。

しかし、彼らは最後に去っていったAクラスの竹本と呼ばれた青年のことがどうしても気になっていた。

彼と視線を交わしたとき、まるで自分の全てを観終ったかのように俯瞰していた彼の眼差しが、ありえることのないはずなのに、どうしても例のAクラスの人物と同じ色をしているように思えた。

だが、彼の情報は『小坂零』よりも圧倒的に少なく、同じグループだった綾小路も一之瀬も彼が話し合いのときには仮面を被って自己紹介以外で話をしていなかったことに気づいた。表立って葛城の言うことを忠実に守ろうとしていた町田とは違い、周囲に気を配るそぶりすら見せずに、自分が注目されることを避けながら彼らを観察していた

のだと考察する。

思わぬ伏兵に再度頭を悩ませながらも、優待者の法則をAクラスが積極的に隠そうとしてゐるわけではないことに救いを見出し、彼らは特別試験の時間を少しづつ、しかし確実に消費しながら考え続けた。

そんな彼らの秘密とは到底言えない会合の存在も、他の生徒たちは一切知らない。既に終わった特別試験とみなした彼らの雰囲気は、まだ特別試験が残っている生徒にまで伝染していた。

特別試験があつたことを忘れようとするかのように、船内での遊戯に勤しむ者たち。そんな彼らをずっと見て、自分たちだけ我慢しろというのも酷な話ではある。

ましてや、豪華船旅行甘い餌に釣られた生徒で、それに抗うことができずものごとく僅かだろう。試験2日目午前10時前、昨日のアナウンスがあつてから24時間も経っていない。それなのに、残り3日もある特別試験に真剣な態度で臨もうとするものは、ここに集まつた7人のみ。

彼らの誰かが協力を願えば、該当するクラスメイトは体面上協力はするだろう。

彼らにそう頼まれたから、本当はもつと遊びたいけど仕方ないか。このように、頼ま

れた場合は恨み言を零したりはすれど、クラスの中心である彼らに協力するだろう。

だが、自分から動こうとする意思はない。

まさしく、『集団意識運命に縛られた愚者奴隷』と化した彼らを止めようとするものは、もはや誰もいない。

各クラスの代表者も、覆しようのない結果に全体の協力を仰ぐことは難しい。

何よりも、残りを当てたところで形成が有利になるわけではないことも、他の生徒たちのやる気を削ぐには十分すぎる理由だった。

倍率が高いところに一転掛けしたところで、掛け金が少ない上にゲーム数が少ないのでは大した金額にならない。

勝って多少良くなったところで、大勢が変わるわけではない。

それだけのわかり切った情報が、ここに残って話し合いをしている彼らにとって、何よりも重い足枷で何よりも重い鎖となっていた。

## 33 話目 特別試験Ⅱ 二日目Ⅲ

結局、私は昨日あれから何もしなかった。

いや、何もできなかったという方が正しい。

あの後、茂から色々話しかけてきたような気がするが、考え事をずつとしていたので上の空で話を聞いていた。そんなことよりも重要なことが、私の中にあつたからだ。

気が付いたらベッドの中にいて、朝日で目が覚めて自分が眠っていたことに気付いた。その後もベッドの中でずつと思考を巡らせていた結果、再び眠ってしまったらしい。

時刻を見ると既に昼頃を指していて、部屋には誰もいなかった。

今の今まで、私は思い起こしてしまったことについて考え続けていた。

昨日無意味に捨てた空の炭酸飲料のペットボトルが、私に根本から間違っていることを思い起こさせた。

『小坂零』は既に死んでいる。

容器身体を捨てて、中身魂を他のペットボトルに移した。

それが今の『私』だということに気付いてしまった。

今名乗っている「小坂零」という名前は、物心ついたときに自分で決めた名前だ。

前世からの名前そのまま通したつもりだった。

誕生日である6月6日は私が一番古く居たときの記録から取ったものだが、名前に關しては自分でそう名乗ったら周りの人は何の疑問も持たずに納得していた。

自己紹介した次の日には忘れてしまうのだから、捨てられた本人が名前を知っているかも怪しいことなんて忘れてしまうのだろう。0歳で捨てられたのだ。言葉を理解できていると思っているほうがおかしい。

もしくは、過負荷私が単純に気持ち悪かったから名前の本質なんてどうでもよかつたのかもしれない。

それに気づいてしまったことで、全てが意味のないものなのではないかという虚脱感に襲われた。

『小坂零』でいようとしたことそのものが無意味なことだったのではないかと、「小坂零と名乗っている何か」が『小坂零』の真似をしようとしているだけなのではないかと思ってしまった。

死んだ者が生き返った場合、果たしてそれは同一人物だといえるのだろうか？

一度燃えた紙を灰から復元させたとして同じ紙になるだろうか？

そもそも、この体はこの世界のもので『前の世界』のものではない。

入れ物体が違うものの中身魂が同じという……これは全く同じものだと言えるのだろうか？

いいや、缶コーヒーとボトルコーヒーぐらい違うものになる。

最後に、クレイジー壊れたもの・ダイヤモンドのを治す能力でも死者の蘇りはできない。

これらを踏まえた結果、『私』というパーソナリティーを『小坂零』に継りつくことで『固定』しようとしていただけだという事実気づいてしまった。

『無冠刑』ナッシングオールは確実に『私』が手にしたものだ。

それだけは胸を張って断言できる。

ルーツが『小坂零』にあっただとしても、『小坂零』が死ぬ直前に発現したとしても、『無冠刑』ナッシングオールを『スキル』という形で発現させたのは『私』だ。

今思考を巡らせているのは『私』だ。

『小坂零』ではない。

彼はもう死んだのだ。

記憶を引き継いだ、性質を引き継いだ、感性を引き継いだ、性格を受け継いだ、思考を受け継いだ。

そうだとしても、『小坂零』は既に死んだのだ。

この世界よという知識がある。『転生』したという実感がある。その二つだけで、『小坂零』が死んだことを証明するには十分だった。

それは、私が『小坂零』を模した『クローン』だったかもしれないと、『小坂零』を基盤とした『スワンプマン』だったのではないかと、『小坂零』の記憶を引き継いだだけの『他人』だったのではないかと、思わせるには十分すぎた。

昔読んだ漫画で、自分以外の周りにいる人たちは中に別の生物が入っていて、常に自分の前では人の皮を被って中の人を隠しているのかもしれないと考えている場面があった。

もしかしたら自分だけ違う生命体なのではないかという恐怖。

他の人物たちは全て宇宙人のような偽りだったのかもしれない恐怖。

そして、その思い込みは本人のみの現実になり、日常生活を蝕んでいく。

それを人は偏執病パラノイアと呼んだ。

『俺』という人格も、『小坂零』の記憶から引きずり出しただけの『作り物』である可能性もあれば、『小坂零』という『転生前の』残骸だったのかもしれない。

『俺』自身がどう思っているのかは知らないが、ここまで強く意識や記憶を引き継がせることができるのであれば、作られた歪な人格ぐらいの指向性を操作するぐらい造作も

ないだろう。

わかりやすく言うと、『俺』がただのNPCだったという可能性だ。

若しくは、私が作り出してしまった人格にも似たものなのかもしれない。

これらに関しては転生させた存在がいたと仮定したもので、もしそれができるのであれば『私』も『俺』も『小坂零』も思考操作をされている可能性がある。

そうであれば、考えたところで好転することはないだろう。結論に達しそうになったら、記憶を消される可能性まである。

少し脱線したところで思考を戻すことにした。

『小坂零』は死人である。

そんな簡単な事実から、『私』は目を逸らしていた。

単純に『小坂零が死んだ』という事実を認めたくなかった。

通っていた大学を卒業して独り立ちしなかった。表面上の付き合いしかしていなかった友人に別れを告げるぐらいしてもよかった。母親に最後に一言ぐらい何か言えればよかった。

そして、それを為すことがもうできないという単純な事実は今更気づいた。



結局、何もできなかつたのが『小坂零』の人生の結果だ。  
そんな事実から、今まで目を背けていた。

だからこそ、『私』は私として今を生きなくてはいけない。

『小坂零』の形に拘る必要性はないのだ。

『小坂零』ではない、『私』としての在り方を作り出さないといけない。

そんな思いが、私の中に木霊している。

だがそれだけだ。

そのためにどうすればいいのか、何をすればいいのか、全く分からない。

目を背けていたものに目を向けた、受け入れた、認識した、理解した。

そこからどうすればいいのか、がまるで分らない。

.....結論はそう難しいことではなかった。

既に意識は浮上しており、日光を感じられる感覚を得ている。

つまり、私は『答え』を出していた。

なんでこんな簡単なことに気づかなかつたのだろうか？

結論なんて既に分かり切っていたのに。

『小坂零』に綴るのがダメなのなら、『小坂零』との『縁』を切れればよかつただけの話だ。

『私』として生きていくのならば、『前世の小坂零』なんていらぬ。

『何かが』それを止めようとしているが、そんなことはどうでもいい。

どんなに考えたところで、私は『私』でしかないんだから。

コギト・エルゴ・スムの彼方へ踏み出すことにしよう。

そうしないと、『私』として生きていくことができなくなる。

「.....この世界はどこまでも主観で回っている。

どれだけ言葉を紡いだところで、どれだけ死者を弔ったところで自分が他人になるこ

とはできない。どんなに他の人のことを思ったところで、その人の視点を共有することは不可能だ。

『相手のことを考えて』ってよく言うけどさ、立場も環境も状態も条件も違う他人のことを、理解することもできないくせに考えて行動することができるって本当に思っているのかい？」

「同じ10Vの電気を受けたところで、人によって感じるものは違うんだぜ？」

すぐく痛かった、結構痛かった、それなりに痛かった、我慢できる程度の痛み、痛いというよりは熱かった、痛くも熱くもなかった、帰って寝たい。

パツと考えられるところだとこんなものかな？」

『おなか痛いです』って訴えたところで、本当に痛かったとしても顔が笑顔なら信用されないし、欠片も痛くなかったとしても演技力が高ければ相手に信じ込ませることができる。

信じたなら信じた人の中ではそれが真実さ。本人がどう思っていたとしてもね。

同じ腹痛：まるつきり同じ病状の急性腸閉塞になった患者がいたとして、二人の痛みまでまるつきり同じである証拠はどこにもないだろ？」

「痛みなんて電気信号なんだから、同じ電気信号を送れば同じ痛みを味合わせることができるっていう人はさ、人間の感覚が全員まるつきり同じ尺度を持っているっていうこ

とだぜ？

痛がり、我慢強い、暑がり、寒がり、こういうのは個性だろ？

人によって違うに決まってるじゃないか。

それをまるつきり同じ状態だから同じって言いきるのは、人間の個性を否定することと同じだぜ？」

「よく正義の味方がさ、『俺とお前は分かり合える』っていうじゃん？

あれ嫌いなんだよね。分かり合った結果お前のがどうしても嫌いってなることを度外視して、分かり合ったんだから俺のこと好きになれよって言うてるみたいで気に入らない。

分かり合うっていうことは、お互いを理解するってことさ。

その後にどう思うかは個人の自由のはずなのに、『自称正義の味方』は助けた恩を押し出して懐柔しようとする。

そんな風に見えているのは、私が捻くれてるからなのかもしれないけどね！」

「人間が本当に分かり合いたいなら、その人の人生をまるつきり同じ状態でなぞるのが大前提さ。

痛覚も味覚も視覚も嗅覚も聴覚も条件も状態も環境も立場も価値観も、呼吸の回数から思考した内容、お風呂に入ってから洗うか、何分何秒に出るか、何時に起きよう

として5分早く起きちゃったとか、拳句の果てには第六感まで、そういうことも全て踏まえて相手の人生をなぞる。

そんなこともしないで分かり合ったなんて言うのはただの傲慢だと思うよ」

「ま、そんなことできる人がいるとは思えないけどね。

そんなことができる人がいるなら、それはもう『人』を超えた何かさ。

私の過負荷マイナスを用いれば、もしかしたらできるかもしれないけど、先に『私』の精神が持たなくなると思うよ」

「だからさ、私は『私』がよければそれでいいんだ。

他の人がどうなろうと、『私』には関係ない」

「だって、『私』には関係ないんだから！」

「だから、『小坂零』がどうなろうと、『私』が生きているのなら関係ないんだ！」

「というわけで、これにて『小坂零』の物語は終わりを迎えます」

「では、最後にみなさんご唱和ください」

「It's Nothing All!!」

観客が誰もいない狂った舞台の上で、一人の道化沼男の出番が終わった。

竹本茂と葛城康平と坂柳有栖の話し合いは、比較的穩便に終わった。

葛城、坂柳の両名は竹本が来るまでの間に済ませることは済ませて、竹本が来た段階で彼の話を書く形になった。

Aクラスのリーダーとしての話を、Aクラスの生徒に聞かれないのは仕方ないことだと竹本自身理解していたので、そこには深くかかわろうとしなかった。

聞いたところで意見を求められても困るし、自分の意見でAクラスをどうしようという気は全くなかった。

それは、良い方向にすることも悪い方向にすることも、どっちだろうがどうでもいいということをも本人以外は理解していない。

竹本が聞きたいことは、昨日の辰グループの話し合いで小坂零が何をしたのかということだった。

その言葉を聞いて、一瞬膠着した二人を見逃さずに追い打ちをかけ、畳みかけるようにグループの話し合い後にも彼らだけで話し合いをしたことを聞いた。

最初は言い澱んでいた二人だったが、食い下がる気配を見せない彼の様子を見て渋々昨日小坂零がやった『演説』について話した。

それだけではないだろう、という竹本のセリフに再び硬直という反応を返してしまつた二人は、仕方なく話し合いの後に3人だけで話し合いをしたことを話した。

正確には坂柳は何とか話題を変えようと試みたが、葛城が最終決定を含めて話し合いをしたことを言ってしまったためにもうどうしようもなかった。

また、このセリフによって竹本の評価はこの二人の中で大きく変わることになる。

この件は誰にも言う気はないと宣言した竹本は、それらを踏まえて今の小坂がどうなつてしまったかを考え始める。

だが、そのどれもが小坂零の現状と結びつくことはなくて、一人頭を悩ませることになる。

話し合いでやらかしてしまつた自責の念という可能性はないだろうし。

そして、話させていた兩名に何故それを聞くのか問い詰められて、仕方なく小坂零が今どうなっているのかも説明した。

それを聞いて本気で心配する様子を見せた坂柳と、心配はしているが裏でほつとした感情と何かに不安を感じている瞳をした葛城を観察していた。

小坂零と話し合つてから、彼は自分の観察眼を養い、伸ばすためによく見ることを意識していた。

相手の表情、瞳の奥の色、瞳の虹彩の大きさ、沈黙、雰囲気 e t c : 彼は自分で知覚できる範囲の相手の反応を細かく観察することを意識していた。

これまでの彼の人生経験も後押しし、自分の観察眼に確信めいた何かを持ち始めていた。

相手の表情の変化から、相手の抱いてる感情を察する。

相手の沈黙の長さから、相手の思考を辿る。

竹本茂は、自分が最終的にこの学校内での闘争に生き残るためには、それぐらいできなければいけないと思つたから自分の長所を伸ばすことにした。

先ほど、彼が他のクラスの集まつた集団を一人一人眺めていたのも、それが大きな理由だ。



自分の成長のために、他人の心情を覗き見する。

自分が生き残るために、他人を踏み台にする。

自分が勝ち残るために、他の人を利用する。

それは、どこかの誰かの精神構造に近いものもあるが、方向性が伸ばす<sup>プラス</sup>向きである点が正反対のようにも見えた。

坂柳が様子を見に行こうと提案するが、竹本は小坂がペットボトルをそこらへんに投げ捨てている惨状を思い出して、やんわりと断った。同室の吉田は真正銘の事なかれ主義なので口出ししていないが、ベッドの脇にペットボトルが散乱している様はお世辞でも綺麗とは言えない。しかも、その大半が半分ぐらい残っている有様だ。飲み散らかすという言葉がそのままではまっている状況だった。

彼自身、片付けるのが面倒で放置したままにしておいたのが仇になるとは思っていない。うわあ、と言わんばかりに頭を捻る始末だ。

竹本の断りを聞いてなお、自分だけでも様子を見に行こうとした彼女だったが、本人が弱っている姿を見せびらかすことは友達としてしたくないとの言葉で少し考え直し始めた。

止めとなったのは、夕食の時間になっても同じ様子だったら教員を呼ぶと宣言したことで、その場は落ち着いた。

その後は話したいことも特になかったので、部屋を後にしようとした竹本だったが、部屋を出る前に坂柳に質問を投げかけた。

「綾小路清隆……あいつは何だ？」

不意を突くような一言で、彼女の笑みが一瞬だけ凍った。即座に何か返していたが、彼はそれを流してドアの方に振り返る。

彼女の表情を見て答えを察した彼は、そのまま何も言わずに部屋を出て行った。

ついでのようなものだった、小坂零が気にしているDクラスの人物が気になっていたということもあるだろう。

だが、一番彼が注視したところは『見ようとすればするほどわからなくなっていく感覚』を齎す人物が、誰からもマークされていないことなんてありえないと判断したからだ。

昨日の話し合いの中で、彼のグループの中の優待者候補は3人までに絞っていた。

1人は一之瀬、もう一人は軽井沢という女子生徒、そして最後に綾小路だった。

一之瀬の裏を読み切れることは今の彼には難しいと判断し、方針を持っていく方向を考慮すると確率としては低いものになるが、彼女が優待者ではないと棄却しきる要素を見つけることができなかった。

軽井沢は最後のいざこざがあったから注目されたものの、彼の見た範囲内だと何かを

知られたくないように携帯で顔を隠しているようにも見えたので確率としては、それなりにありえそうだと判断。

他の生徒たちの大半が、自分が何をしてもどうせ変わることは何もないからどうでもいいという、彼が嫌いになった『長い物には巻かれろ』といった人間が多く、本心から興味を持つている人を省いた。残った人物も、何かを隠さないといけない使命感に近いものを持つているものも、話の流れで顔を隠そうともしないものが殆どだったので彼らは違うだろうと判断した。

問題は最後の一人だった。

振られたときに返すぐらいのことしかしていない彼だったが、何回見ても『底』が知れない。

いや、『底』というよりは『天井知らず』といった方がいだろうか。

それぐらい、小坂零と正反対の何かを持つているように見えたと同時に、彼が何を思考しているのが全く分からなかった。

表面上の話の流れに感心したり、懐疑的になつていいる部分は察した。

だが、表面上の表情は変われど本心とも言うべきものに変化は見えなかった。いや、変化したかどうかを確認することさえできなかったのだ。

そして極めつけに、さっきのBCDクラス連合ともいべき集まりで彼がいた時だ。

上に立つものとしての違和感はあれど、その場の誰とも格を落としていない。

言うなれば、彼の偽装はクラスメイト以外に露見していなかった。

それこそ、パツと見た限りだけでは場違いだろうと思うほどに。

だけど、彼はそこに溶け込んでいる。Dクラスにいる『怪物』が彼じゃなければ、Dクラスは魔窟になってしまう。

廊下を歩きながら携帯でクラスメイト達と連絡を取る彼は、大きなため息をついた。

Aクラスがいずれ墜ちると言っていたことは、こういふことなのだろうと察してしまつたからだ。

『怪物』とは言いえて妙だったと、感嘆の呟きを漏らすことになった。

少なくとも、今の坂柳だと勝てるか怪しい。クラス単位の総合力では勝っていたとしても、個人で彼を抜ける人材は今の処存在しないというのが彼の結論だった。

それは当然、小坂零も含めている。

方向性の違いもあるが、勝てるビジョンが全く思い浮かばなかった。

それこそ、いつまでAクラスでいられるかなーと打算するぐらいに、綾小路の規格が自分たちとはまるで違うと理解してしまつた。

何か手を打たなければいけないだろうと思うと同時に、今はどうしようもないことを自覚した彼は、昼食まで他のクラスメイト達とこの船を満喫することにした。

自室に戻ろうかとも思ったが、戻ったところで小坂の様子を見るか寝るぐらいしかやることがなかったためだ。

それに、今更綾小路という『怪物』を見てもなお、平常でいられるほどメンタルが強くないことも理解していた。

だから、気分転換がてらこの船を満喫することに決めたのだ。

それが自分の嫌っていた彼らと「一般生徒」同じ行動を、自分の意思で選択した事実気づきながらも。

∴『敗北』との縁『切除』

- ∴ 『圧死』との縁『切除』
- ∴ 『気配』との縁『切除』
- ∴ 『餓死』との縁『切除』
- ∴ 『苦痛』との縁『切除』
- ∴ 『事故』との縁『切除』
- ∴ 『嫌悪』との縁『切除』
- ∴ 『即死』との縁『切除』
- ∴ 『憎悪』との縁『切除』
- ∴ 『自壊』との縁『切除』
- ∴ 『病気』との縁『切除』
- ∴ 『忘却』との縁『切除』
- ∴ 『運命』との縁『切除』
- ∴ 『溺死』との縁『切除』
- ∴ 『恐怖』との縁『切除』
- ∴ 『死』との縁『切除』
- ∴ 『』との縁『切除』
- ∴ 』との縁『切除』

…の縁『切除』

…縁『切除』

…『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

『切除』

切除

切除







### 34 話目 特別試験Ⅱ 最終日

『子、酉、亥グループの試験が終了いたしました。以上をもって全てのグループの試験が終了しました。試験結果発表まで暫くお待ちください』

そのアナウンスは試験結果発表がある今日、船内に流れた。

それを聞いていた生徒たちの反応は様々だった。

終わるのが遅いと遊ぶ時間を奪われ続けたことに文句を言う者、今更終わって何の意味があるのかと憤慨する者、どこかのクラスの一人勝ちにならなくてよかったと現状を理解していながらも何もできなかった者、あと一步でわかりそうだったが他のクラスに先を越されて憤る者、今回の試験の目的がかなり変更になったが最低限のことはしたと割り切った者、自分が当てることはできなかったが他の誰かがやり遂げてくれたと安心した者、優待者を指定されたことに当然と思いつつも遅かったと少し残念に思う者、優待者を指定されたことに仕方ないと諦めた者、そんなこと関係なしに友人と共に船の設備を満喫している者と様々だ。

■ ■ ■ は、そのどれにも当てはまらなかった。

友人と遊ぶわけでもなく、クラス間の争いに興味を示すわけでもなく、特別試験の実

情を知らないわけでもない。

正しい形歪んだで自我を確立させた彼は、自分の思うがままに今を生きていた。

彼との間に壁があつた人の隣を歩いて反応を確認したり、自分のクラスのリリーダークの近くを歩いてみたり、確実に目をつけられているであろう各クラスのリーダー格をストーキングしたり、教師の隣に座つて酒を嗜んだりと様々だった。

彼が行つた結果は、反応はなく、気づかれることもなく、ばれることもなく、指導されることもなかった。

まるでそこには誰もいないかのように人々は振る舞う。自分から行動を起こさなければ誰も自分を認識することはなかった。

その背景に何があつたのかは本人しか知る由はない。

だが、それを疑問に思うことができる人間は、この船の中に乗船していなかった。

驚異的な主人補正によって■■■■の視線を感じ取る人間が一人いた。しかし、彼がそれに気づいて視線を向けた先には誰も見つけることはできなかった。

まさしく、絶負調とも言えるべき彼の自由不幸を知ることができる者は誰もいない。

それはあたかも、読者観客がライト演ノベル劇を読見んでいるように見えた。

二次元と三次元が交差することがないように、登場人物スと負人間マイナスが交わつてはいけなものだと暗示しているようにも思わせた。

夜の船内で、楽し気に鼻歌を歌いながら歩く人影があつた。

だが、それに気づくものは誰一人としていない。

教師も、生徒も、スタッフも、誰一人として彼に気づく者はいなかつた。

気分が良い、それこそ歌の一つでも歌いたくなるくらいに。

この数日を振り返つた彼の感想がまさしくそれだつた。

誰からも干渉されることはなく、誰もが彼がいなことに違和感を感じることもなく、彼をいるものとして扱っている始末。

同じ部屋のクラスメイトでさえ、彼がいなことに疑問を感じることも違和感を感じることもない。

同じクラスの彼に付き添いを頼んだ彼女でさえ、何の疑問を感じることもなく他の二人を自然と午前午後で割り振つていた。

付き添いの二人も話と変わっていることに違和感を感じることもなく、それに応じる。そんな彼らを見ながら嘲笑っている彼。

邪魔なものを取っ払ってしまつた結果、存在してはいけない人にまで退化してしまつた彼に気づく人は誰もいない。

とは言つても、彼が幽霊のような存在になつてしまつたわけではない。

声をかければ返事は返ってくる、物を触ることもできれば、食事をとることもできる。自分から行動しなければ相手に気づかれないだけで。

どこかの『負完全』が行つた、『気配をなかつたことにした』のと同じだ。

いや、『負』の量で劣っている分か暴走気味だつたかは不確かだが他にも色々切つた結果でもある。

『気配』『憎悪』『嫌悪』、ついでに『違和感』との『縁』を切つた。

彼の過負荷<sup>マイナス</sup>足る気配は消え、彼に向く憎悪もなくなり、彼に嫌悪を抱くこともなくなり、彼がいけないことに違和感を覚えることもない。

それが、■■■■のやつたことである。

たつたそれだけのことで、この船に存在するのにも関わらず存在感を察することができなくなつた。正しい意味での主人公<sup>綾小路</sup>でさえ、その『運命力』を以てしても気づけなかつたのだから

相当なものだと断言できる。

本来勝つはずの主人公が過負荷■に気づくことすらできないのだ。

このまま暗殺しようと思えばすることもできるかもしれない。

しかし、その結果がどうなるかは理解しているうえに、それではつまらないから実行する気を持たないだろう。

根本的なことは変わっていないことを彼は理解している。

『小坂零』との『縁』を切った彼は、『小坂零』の記憶を保持している。

以前と変わったところとして、『小坂零』ではなくなつたという部分があげられる。

スワンプマンが自我を持った、クローンが生きたいと願った、ホムンクルスが死にたくないと望んだ、その結果生まれたのが■■という存在だ。

アリシア・テスタロッサという人間のクローン、フェイト・テスタロッサ。

ミュウを基に作られたミュウツー。

聖杯大戦の魔力供給のために作られた名もなきホムンクルス。

最後は少し違うかもしれないが、彼らと同じく『小坂零』を基に誕生した存在

『名前はまだない』

そう認識し、定義した。

だからこそ、彼は以前までと違い今を謳歌している。

完全に定着していた自我を切り離すために行ったそれは、彼の今まで生きてきた人生を否定すると同時に彼の自我を確固たるものに変質させていた。

そして彼はこの船旅の、特別試験の終幕を確認するべく、とある場所に向かっていた。時刻は午後10時55分。

カフェテラスには人が徐々に増え、既に満員に近い状態になっている。

どこかのクラスが終わらせたとしても、それがどこかわかっている人間は少ない。

また、他のクラスがどうあがいたのかを見物しに来たAクラスの生徒も少なくない。

そんな中、彼は自然と空いている葛城と坂柳の両名が座っている席に座り、違和感なく注意されることもなく時間を待っていた。

各クラスの代表格は既に各クラスごとに固まっており、話し合いや雑談をしている。当然、勝ち逃げを確定させているAクラスも他のクラスの情勢を見る意味も込めてここに来ていた。

だが、彼の対面に座っている坂柳も、右にいる葛城も、左にいる橋本も誰も彼について言及することはない。まるでそこに誰かが座っていることを知らないかのように振る舞っていた。さらに、彼の席に近づく者もいなかった。

そうして携帯を弄りながら待つこと5分、一斉にメールが届き、当然の如く全員がそれを確認する。

『子（鼠）——裏切り者の正解により結果3とする

丑（牛）——裏切り者の正解により結果3とする

寅（虎）——裏切り者の正解により結果3とする

卯（兎）——裏切り者の正解により結果3とする

辰（竜）——裏切り者の正解により結果3とする

巳（蛇）——裏切り者の正解により結果3とする

午（馬）——裏切り者の正解により結果3とする

未（羊）——裏切り者の正解により結果3とする

申（猿）——裏切り者の正解により結果3とする

酉（鳥）——裏切り者の正解により結果3とする

戌（犬）——裏切り者の正解により結果3とする

亥（猪）——裏切り者の正解により結果3とする

Aクラス……プラス300cl プラス450万pr

Bクラス……マイナス150cl 変動なし



Cクラス……変動なし

プラス150万pr

Dクラス……マイナス150c1 変動なし』

予定調和とも言える結果……だがそれは実情を知っていた者たちのみに限る。

何も知らなかったDクラス及びBクラスの生徒たちは愕然とし、Cクラスの生徒たちは害虫を噛み潰したようにAクラスが固まっている方向を睨んでいた。

対するAクラスの面々は、最善ではないものの予定通り終わったことに安堵しつつ他のクラスを見下すように見下ろしている。

自分が正解者を知らせたわけでもないのに、まるで鬼の首を取ったように彼らを下に見ていた。

各クラスの代表者の反応は様々だった。

Dクラスの面々は居心地が悪そうに、龍園は次は潰すとばかりにAクラスを睨みつけ、一之瀬と神崎はBクラスの生徒たちに情報開示を迫られていた。

そして、Aクラスのリーダー両名はクラスメイト達に持て囃されることになる。

静寂で包まれていた夜の船上から、徐々に騒々しさが増しつつある。

そんな中で、既に興味をなくしたと言わんばかりに彼は再び歩き出した。

人々は無意識的に彼に道を譲っているように見えるが、それを認知することはできない。

表舞台から去った彼を追う者は誰もいない。  
それは、主人公でさえ例外ではなかった。